

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集

中 谷 遺 跡

山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書

1996. 3

山梨県教育委員会
日本鉄道建設公団

中 谷 遺 跡

山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書

1996. 3

山 梨 県 教 育 委 員 会
日 本 鉄 道 建 設 公 団

序

本報告書は、山梨リニア実験線建設に先立ち、平成4年度～6年度にかけて発掘調査された都留市中谷遺跡についてその成果をまとめたものであります。

山梨リニア実験線は南都留郡秋山村から東八代郡塊川村までの48.2kmが計画され、先行実験区間として、秋山一大月間の18.4kmが工事着手されました。この区間はほぼ直線であり、ほとんどがトンネルとなりますが、地上走行区間に都留市九鬼Ⅱ遺跡、同中溝遺跡、同揚久保遺跡、同中谷遺跡、大月市外ガイド遺跡の5カ所の遺跡が確認されております。

本報告書でまとめた中谷遺跡は、リニア本線だけでなく関連施設部分も含めての調査を行ったため、5カ所の遺跡の中でも最大規模の発掘面積となりました。本遺跡はこの調査以前にも過去数度の調査が行われ、本県を代表する後・晩期の遺跡としてよく知られておりますが、なかでも晩期の耳飾りを着けた土偶は全国的にも希有な例として多くの書物に取り上げられております。

今回の調査では、縄文時代中期から後期にかけての敷石住居の集落や祭りにかかるると考えられる配石遺構、また、晩期前半の清水天王山式土器が大量に出土するなどの成果が得られました。とくに後期前半の堀之内式期の遺構や遺物は、これまで山梨県内ではほとんどまとまった資料が無かつただけに貴重な資料と言えるものであります。また、清水天王山式土器は、本県東部域を中心に周辺に展開するとされており、今回の調査では一万点にもおよぶ大量の土器が集中して出土し、土器の変遷やバリエーションなどにおいて新たな問題も提起されております。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1996年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例　　言

- 1 本報告書は平成5年度・6年度に山梨リニア実験線建設に先立ち発掘調査された、都留市中谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名は、今回の調査区が小形山地区であるものの、小字名が中谷ではなく瀬木であることから当初は瀬木遺跡とすべきとした。しかし、試掘の結果、遺跡の内容はこれまで行われた中谷遺跡と同じで、しかも中谷遺跡として既調査の中央自動車道部分まで続くことが予想されたため、中谷遺跡の継続であると判断し、この遺跡名で調査を実施した。したがって報告にも中谷遺跡の名称を用いる。
- 3 調査は、日本鉄道建設公団の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査および出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌・笠原みゆきが担当した。
- 5 本報告書の編集は長沢・笠原が行い、第1章～第3章および第4章第7節～第9節を長沢が、第4章第6節を笠原が執筆した。また、微細遺物について東京大学総合研究資料館・松谷暁子・獸骨について国立歴史民俗博物館・西本豊弘・火山灰について都留文科大学・上杉陽、土器付着顔料について宮内庁正倉院事務所・成瀬正和の先生方にご執筆いただいた。なお、樹種同定と年代測定及びリン分析は(株)パリノサーヴェイに委託した。
- 6 写真撮影は遺構を長沢・笠原・大谷満水・吉岡弘樹が、遺物を長沢が行った。なお、遺物写真の一部は小川忠博氏による。
- 7 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘調査および本報告書の作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

松谷暁子（東京大学総合研究資料館）
西本豊弘（国立歴史民俗博物館）
上杉　陽（都留文科大学）
成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）
石井　寛（横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター）
都築恵美子（練馬区教育委員会）
百瀬長秀（長野県埋蔵文化財センター）
奈良泰史（都留市教育委員会）
柳原功一（帝京大学山梨文化財研究所）
小俣清毅（地元）

目 次

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1

第2章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置	2
第2節 地理的・歴史的環境	2
第3節 調査方法	3
第4節 基本層序	3

第3章 遺構と遺物

第1節 住居跡と出土遺物	4
第2節 土坑と出土遺物	10
第3節 集石土坑と出土遺物	14
第4節 屋外炉	17
第5節 単独埋甕	17
第6節 配石と出土遺物	18
第7節 遺物集中区と出土遺物	22
第8節 溝と出土遺物	28
第9節 近世墓	29
第10節 遺構外出土遺物	29

第4章 考察

第1節 中谷遺跡出土炭化種子について	177
第2節 中谷遺跡における自然科学分析	180
第3節 中谷遺跡出土の漆関係試料	184
第4節 中谷遺跡出土の動物遺体	186
第5節 都留市小形中山谷遺跡のチフラ層序	187
第6節 県内における敷石住居跡の分布について	208
第7節 曽利V式土器と加曾利E IV式土器について	212
第8節 堀之内I式土器について	216
第9節 清水天王山式土器について	220

挿図目次

第1図 遺跡位置図	第40図 21号配石埋甕
第2図 調査位置図及び全体図	第41図 配石9(23号・24号)
第3図 1号住居跡	第42図 第1遺物集中区平面図・接合図
第4図 1号住居跡下部	第43図 第1遺物集中区埋甕
第5図 2号住居跡	第44図 第2遺物集中区平面図・接合図
第6図 3号住居跡	第45図 第3遺物集中区平面図・接合図
第7図 4号住居跡	第46図 第3遺物集中区微細図
第8図 5号住居跡	第47図 遺物集中区4(第4～第6遺物集中区)
第9図 6号・7号住居跡	第48図 遺物集中区5(第7遺物集中区)
第10図 9号住居跡	第49図 中世石組
第11図 10号住居跡	第50図 中世溝
第12図 11号住居跡	第51図 近世墓
第13図 12号住居跡	第52図 土器1
第14図 12号住居跡微細図	第53図 土器2
第15図 13号住居跡	第54図 土器3
第16図 13号住居跡微細図	第55図 土器4
第17図 15号住居跡	第56図 土器5
第18図 16号・17号住居跡	第57図 土器6
第19図 土坑1(1号～6号)	第58図 土器7
第20図 土坑2(8号～11号)	第59図 土器8
第21図 土坑3(12号～19号)	第60図 土器9
第22図 土坑4(20号～27号)	第61図 土器10
第23図 土坑5(28号～36号)	第62図 土器11
第24図 土坑6(37号～42号)	第63図 土器12
第25図 集石土坑1(1号～3号)	第64図 土器13
第26図 集石土坑2(4号～7号)	第65図 土器14
第27図 集石土坑3(8号～11号)	第66図 土器15
第28図 集石土坑4(12号～16号)	第67図 土器16
第29図 屋外炉	第68図 土器17
第30図 単独埋甕	第69図 土器18
第31図 1号・2号配石と自然礫	第70図 土器19
第32図 配石1(1号)	第71図 土器20
第33図 配石2(2号)	第72図 土器21
第34図 配石3(4号)	第73図 土器22
第35図 配石4(3号・5号～7号)	第74図 土器23
第36図 配石5(8号～11号)	第75図 土器24
第37図 配石6(14号・15号)	第76図 土器25
第38図 配石7(12・13・16～18・20・22号)	第77図 土器26
第39図 配石8(21号)	第78図 土器27

- 第79図 土器28
第80図 土器29
第81図 土器30
第82図 土器31
第83図 土器32
第84図 土器33
第85図 土器34
第86図 土器35
第87図 土器36
第88図 土器37
第89図 土器38
第90図 土器39
第91図 土器40
第92図 土器41
第93図 土器42
第94図 土器43
第95図 土器44
第96図 土器45
第97図 土器46
第98図 土器47
第99図 土器48
第100図 土器49
第101図 土器50
第102図 土製品
第103図 土師器・須恵器・中近世陶磁器類
第104図 石器1（石鎌）
第105図 石器2（石鎌）
第106図 石器3（石鎌）
第107図 石器4（石鎌）
第108図 石器5（ドリル・搔器等）
第109図 石器6（加工痕ある剥片）
第110図 石器7（打製石斧）
第111図 石器8（打製石斧）
第112図 石器9（打製石斧）
第113図 石器10（打製石斧・磨製石斧）
第114図 石器11（磨製石斧）
第115図 石器12（磨石）
第116図 石器13（磨石）
第117図 石器14（磨石）
第118図 石器15（磨石）
第119図 石器16（磨石）
第120図 石器17（磨石）
第121図 石器18（磨石）
第122図 石器19（磨石）
第123図 石器20（磨石）
第124図 石器21（磨石）
第125図 石器22（磨石・石皿）
第126図 石器23（石皿）
第127図 石器24（多孔石）
第128図 石器25（多孔石・砾石）
第129図 石器26（石棒）
第130図 石器27（石棒）
第131図 石器28（石匙・石鎌・特殊磨石）
第132図 石器29（加工痕ある剥片）
第133図 石器30（加工痕ある剥片）
第134図 石器31（加工痕ある剥片）
第135図 石器32（加工痕ある剥片）
第136図 石製品
第137図 遺跡周辺の地層分布図
第138図 中谷遺跡標準土層柱状図
第139図 富士山東方地域のチカラ標準柱状図
第140図 敷石住居跡検出遺跡位置図
第141図 曽利V式・加曾利EIV式対比図
第142図 堀之内I式土器変遷図
第143図 清水天王山式土器変遷図

図版目次

- 図版1 上・中 調査前遺跡近景 下 1号住居跡
図版2 1号住居跡
図版3 上・中 2号住居跡 下 3号住居跡
図版4 上 3号住居跡 中・下 4号住居跡
図版5 4号住居跡
図版6 上・中 5号住居跡 下 6号・7号住居跡
図版7 上 6号・7号住居跡 中・下 10号住居跡
図版8 上・中 11号住居跡 下 12号住居跡
図版9 12号住居跡
図版10 上・中 13号住居跡 下 20号土坑
図版11 上 24~26号土坑 中・下 1号集石土坑
図版12 上 2号集石土坑 中 3号集石土坑
下 5号集石土坑
図版13 上 7号・8号集石土坑 中 9号集石土坑
下 1号・2号配石と背景の自然礫
図版14 4号配石
図版15 21号配石
図版16 第1遺物集中区
図版17 第3遺物集中区注口土器出土状況
図版18 土器(1住・12住・13住・15住)
図版19 土器(1土・32土・21配・1集中)
図版20 土器(1集中・2集中)
- 図版21 土器(3集中)
図版22 土器(4集中・グリッド・注口土器集合)
図版23 土器(1集中)
図版24 土器(1集中)
図版25 土器(グリッド・早期)
図版26 土器(グリッド・前期)
図版27 須恵器・中世陶磁器
図版28 石器(局部磨製石鎌・尖頭器・石鏃)
図版29 石器(石鎌・ドリル・スクレイバー他)
図版30 石器(打製石斧・加工痕ある剥片)
図版31 石器(磨製石斧・たたき石)
図版32 石器(石匙・加工痕ある剥片・石錐)
図版33 石器(磨石)
図版34 石器(磨石・凹石)
図版35 石器(石皿・多孔石)
図版36 石器(石棒)
図版37 三角柱形土製品・軽石製垂飾品・注口土器展開
図版38 炭化種子
図版39 炭化材
図版40 塗膜断面
図版41 スコリア その1
図版42 スコリア その2

表目次

- 石器・石製品観察表.....169
炭化物一覧表.....179
年代測定一覧表.....180
リン分析一覧表.....182
赤色顔料分析一覧表.....184
敷石住居跡一覧表.....210

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

現在の新幹線に代わる次世代高速交通として期待されるリニアモーターカー（以下、リニアと称する）は、これまで宮崎県の実験線で各種基本実験が行われてきたが、カーブや高低差という具体的な問題を解決するため、新たな実験線を山梨県内に建設することが決定された。これに伴い、山梨県では路線予定地域内の埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

調査は平成4年度～6年度にかけて実施され、大月市内および都留市内に確認された5遺跡が対象となった（第1図）。本遺跡はこのうちの一つで、平成5年4月20日～12月27日、および平成6年4月14日～8月24日までの約12ヶ月にわたって実施された。一連のリニア関連の調査では調査期間、面積とも最大である。なお、整理作業は平成7年1月～平成8年3月までの約14ヵ月実施された。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 平成5年度 長沢宏昌（県文化財主事） 平成6年度 長沢

大谷満水（〃）

笠原

吉岡弘樹（〃）

笠原みゆき（〃）

調査員 小林安典（前都留市史編纂委員）

平 重蔵（山梨県埋蔵文化財センター調査員）

調査補助員 岡田憲一（奈良大学学生：現奈良大学大学院）

矢野晴代（〃：現白根町教育委員会）

作業員 佐藤美須子・小林好子・佐藤昌枝・小林久子・木下安江・天野紀子・熊坂順子・田代光男・田代久子・杉田イトエ・大野吉江・天野美津子・日向照子・佐藤芳子・鈴木八重子・伊藤晃子・山本寿・中村九二・天野恵二・天野武子・渡辺經彦・奥秋仁男・中並章子・船津宏昭・由木正博・今野毅・増田洋喜・大居敬子・石橋啓太・高橋正道・北野左近・大木健・池ノ谷基樹・日向隆行・森脇隆光・坂本征子・小俣英彦・大町かよ・田代源次・平井大三・大森知佳・吉村公子・吉村雄治・蒂津まさ子・水越町子・佐藤あさ子・佐野洋介・小俣吉広・藤田利行・浜田実・天野昭次・永田勤昭・志村恵子・石塚義弘・松井基幸・遠藤照雄・大野千恵子・谷内弘道・大木定夫・小林武・和田弘行・田辺信孝

整理作業員 永田勤昭・小林武・長田富子・長田純子・内藤由紀子・名取洋子・伊藤純子・清水真弓・長田久江・斎藤律子・富永明・沢豊俊雄・渡部さつみ・志嶋紀子・望月厚子・鈴木みつ子・飯室菊美・渡部洋子・平出恭代・若菜永子・依田成美・矢崎悦子・長田和子・土橋園子・池谷幸子・今沢美代・志沢美香・梅林はな乃・桜林豊・佐々木富士子・中込みち子・中澤美恵子・平美与枝・矢崎米子・望月芳郎・小林よ志子・鈴木由香・柄沢真路・佐野香織・森本陽二郎・堀内まき・有賀ひろ子・志村君子・中込星子・渡辺麗子・小野恵・網倉邦生・石原史

第2章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置

本遺跡は都留市小形山瀬木2335-1番地外に所在する。

第2節 地理的・歴史的環境

山梨県東部域を流れる桂川は大月市内で東流する笛子川と合流し、神奈川県域で相模川となって相模湾へと注いでいる。桂川中流域である都留市内においては河岸段丘の発達が見られるが、その中でも最も大きな段丘の一つが、東西約600m・南北約700mを計る大原台地である。この大原台地の北西部は、桂川の支流の一つである高川によって開拓された細長い谷と接している。本遺跡はこの開拓谷から台地にかけて展開している。この谷は、開口部での幅約100mを計るが、長さ約400mで一度非常に幅狭くなり、さらに高川上流に続き再び幅広となり、そこは現在古宿集落となっている。つまり谷の平坦部は、底辺100m・高さ400mの二等辺三角形状に展開している。現在、高川は谷平坦部の右端を東流、言い換えれば高川左岸に谷の平坦部が存在し、右岸は急傾斜の尾根となっている。また、現状では、中央自動車道により台地部分と谷部分が分けられる状況となっているが、少なくとも、谷頭から中央道部分までは遺跡が存在している。しかし、左岸でこの先どこまでの広がりを見せるか、また右岸の台地部分でどのようにになっているのかはこれまでのところ不明である。

このように遺跡は谷頭から大原台地方向に展開しているが、谷部での標高は420m前後を計る。ちなみに現在の高川との比高は約2mである。谷部から大原台地に向かう傾斜は緩い。しかし、二等辺三角形の斜辺に相当する尾根が急峻で、とくに南側の尾根により日照時間が非常に制限される。発掘調査中の体験でも現地に日が当たるのが10時頃、また、15時には全く日が当たらない状況であった。

都留市内ではこれまで70ちかい遺跡が確認されているが、本遺跡周辺にも多くの遺跡が集中している。本遺跡に近接して縄文時代前期～中期の松葉遺跡、また、大原台地上には縄文時代早期・中期と平安時代の集落跡である中溝遺跡が展開している。特に中溝遺跡は、國場整備事業に伴う調査で中期の良好な資料が得られていたが、今回のリニア実験線関連の調査で別地点が調査され遺跡の規模や内容がこれまでと全く違う状況が明らかになった。さらに、本遺跡の南側尾根の緩斜面には縄文時代及び平安時代の居住の痕跡が確認された攝久保遺跡がある。中央自動車道建設時には北側尾根の先端部にある宮脇遺跡も調査されている。そのほか、桂川の右岸では縄文時代・平安時代の集落である九鬼Ⅱ遺跡がやはり今回のリニア実験線関連で調査されている。

このように多くの遺跡が知られているが、大原台地近辺では縄文時代早期から居住の痕跡が確認でき、中期以降の遺構・遺物が特に多いことから、この地域がこの時期の拠点のひとつであったことが窺われる。また、平安時代においても、台地上や桂川対岸の九鬼Ⅱ遺跡などで集落の存在が確認され、さらにその縁辺部で居住の痕跡が確認されているなど、大原台地周辺での活発な活動をかいま見ることができる。

本遺跡の存在は、少なくとも大正年間には確認されていた。地元の尾崎小学校の校庭拡張工事の際、竪穴住居跡が発見されたとの事である。また、付近の畑でも敷石住居跡が確認されたと伝えられるなど、この地域では土中からの遺物や遺構の出土はかなり強く意識され続けている。このような状況ではあるが、本遺跡で正式な発掘調査が行われたのは意外なことに昭和39年になってからである。この調査は中央自動車道建設に伴う事前調査として実施され、配石造構や縄文後・晚期の遺物などが得られた。昭和47年には農道拡幅工事に伴う事前調査として実施され、配石造構や住居跡とともに石組造構から耳飾りを装着した土偶が出土し注目を浴びた。さらに、昭和54年には中央自動車道の四車線化工事に伴う事前調査が行われ、清水天王山式期の住居跡と復元可能な土器

を多数得た（第2図）。これらの資料によって、清水天王山式土器の研究が飛躍的に進み、晩期初頭への編年的位置づけと、それが山梨県東部地域を中心に周辺部へ展開している状況等が明らかになるなど、多大な成果を得た。

第3節 調査方法

今回の調査は、リニア実験線建設に伴う事前調査として行われるものであり、一連の調査で他遺跡では本線部分の調査（調査幅約20m）だけが行われたが、本遺跡は、付帯施設が設置される状況から、第2図に示すように細長い台形状に調査区を設定し、全面調査を行った。幅20～45m、長さ約100m、調査面積約4,000m²が対象である。調査は谷頭部分から谷幅方向にA B C……、谷開口部に向かって1 2 3……と番号を振りグリッド設定を行い、全面調査を行った。

第4節 基本層序

本遺跡は、調査前は畠地であった。調査区中央部に小さな谷が形成されているがその部分での断面観察によれば、20cmの表土下に20～30cmの黒色土があり、炭化物や2～5mm程度の赤色スコリアを含んでいる。さらに10～20cmの厚さで暗褐色粘質土がみられ、その下部にも同様ではあるがやや明るい粘質土がある。これらにはいずれも炭化材とスコリアが含まれている。この下部は疊もしくはローム層となり、遺構はこの上面で確認される。遺物は表土から最下層の暗褐色粘質土までのすべての層から出土するが、表土下の黒色土中からの出土が最も多い。層序ならびに火山灰については第4章第5節で詳述する。

第3章 遺構と遺物

第1節 住居跡と出土遺物

• 1号住居跡（第3・4図）

G・H-10・11グリッド。本住居跡は調査区西側に確認された浅い谷の内側に確認された、柄鏡形敷石住居跡である。住居跡のすぐ後ろは1m程高くなっている。掘り込みの壁面に石を巡らしているため、住居形態が柄鏡形であることははっきりしている。南方向に入り口があり、住居の主軸は南々東-北々西である。

居住部、入り口部とともに10~50cm大の平石が所々に散乱しており、内部が敷石であったことが窺われる。この状況からは、住居廃棄時に床石を剥がしたことも考えられる。入り口部は長さ2.5m、幅0.9mを計るが、胴張り形態であり最大幅1.3m程度と推定される。入り口部は周石の頂部から内部底面の敷石までは約40cmの高さがあり、20cmの高さに石を組み入れ階段としている。入り口部と居住部は間仕切りの石によって分けられる。確認された石は1個だけであり、長さ約60cmを計るが、2個の石によって仕切っていたものと推定される。

居住部は小判形を呈し、内法で長径4.3m、短径3.2mを計る。床は踏み固められた様子がなく、その意味からも床石が剥ぎとられた可能性が強い。炉は中央にあり、石囲炉である。石囲炉の内面は60×80cm程度と推定されるが、炉石は抜かれたようであり数も少なく、また、原位置をとどめていない。

本住居跡は火災住居であり、そのために柱材が残っていた。居住部内部には柱穴は全く確認されず、柱材は周石の外側もしくは壁面に確認されている。さらに特徴的なことは柱材が半割り材を用いていることで、四分の一分割と思われるものもある。丸太材は1本だけであった。

本住居跡の構築は特徴的であり、まず床面よりさらに10~60cm深く粗掘りしたのち、20~50cm大の礫を掘り込み内に充填し、粘質土をいれて床面としている。あたかも土の入れ替えを行ったかのようである。

本住居跡からは入り口部と居住部の境付近から堀之内I式土器1個体（1：遺物は本来図面番号を示したうえで遺物固有番号を示すべきであるが、通し番号にしてあるため図面番号は省略する）が漬れて出土しているが、住居内のほとんどの土器（2~12、215~219）も該期に位置付けられるものである。石器の出土量は多くない。打製石斧（1583）、石皿（1814・1815）、石匙（1882）、ドリル（1479）、石棒（1852）などが出土している。

• 2号住居跡（第5図）

I・J-11・12グリッド。本住居跡も谷内部の低地に確認されたもので、柄鏡形敷石住居跡である。しかし、1号住居跡と違い、掘り込みは確認できなかった。やはり南方向に入り口があり主軸は南々東-北々西である。

入り口部の最大幅1.5m、長さ2.5mを計り、居住部は不正円形を呈し、長径3.9m、短径3.2mを計る。

炉は、石囲炉であるが、炉石は引き抜かれていたようであり、一部が残存していたに過ぎなかった。内面の径は50cm程度と推定される。

住居内の敷石は、居住部奥壁側と入り口部の一部に良好に残っている。それによれば、敷石は40cm大の平石を用い、その隙間に10cm大の小石を詰め込む方法で、居住部周囲は平石を立てて区切りとした丁寧な作りである。炉の周辺には敷石が全く確認されていないが、特に踏み固められた様子もないことから、本来敷石があったものが、剥ぎ取られたかもしれない。

入り口部の主軸線上には埋甕が確認されている。深鉢の副部下半だけが正位で埋められていたもので、この部分のみ石は敷かれていなかった。

埋甕（13）からは時期を判断し得ないが、住居跡内からは破片資料（220~225）が出土しており曾利V式期に位置づけられる。石器は埋甕内から石鎌（1207）が出土しただけである。

• 3号住居跡（第6図）

G・H-18グリッド。これも柄鏡形敷石住居跡と思われる。入り口部がはっきりしないが、居住部の周石及び炉から考えられる軸の方向性さらに平石の散乱状況などから、入り口部は南で南々東-北々西の主軸となると推定される。本住居跡も掘り込みは確認されておらず、平地式住居と考えられる。入り口部の埋甕は確認されていない。

入り口部は幅1m程度と思われるが、長さは不明である。居住部の奥側半分に縁石が巡り、居住部の長径3.7m、短径3.2m程度と推定される。敷石は奥側に若干残っているだけで、居住部の前半分には小石が散乱している。中央やや奥側に石畠炉があるが、この作りは特殊である。この炉は内法で長径60cm、短径40cmの長方形を呈するが、奥壁側には石の埋め込みを行わず、敷石の端を炉石の一部として利用している。掘り込みの深さ30cmを計り、内部に焼土が厚く堆積していた。炉内からは、鉢（14）が潰れて出土している。なお、本住居跡でも縁石や敷石を外して調査したが、柱穴は確認されなかった。

土器は、さらに別の破片が炉内から出土（229）し、さらに住居内から復元資料（15・16）や破片（226～231）が出土しており、その帰属時期は曾利V式期である。なお、注口土器（15）は堀之内II式期に位置づけられる。

石器の出土量は多い。石鎚（1208・1209）、打製石斧（1584・1585）、磨製石斧（1659）、磨石・凹石（1692～1697）等が出土しており、このほかに加工痕ある剥片（1508・1509、1940～1943）がある。

• 4号住居跡（第7図）

J・K-22・23グリッド。本住居跡は掘り込みの確認される柄鏡形敷石住居跡である。ほぼ円形の居住部に石棺状の入り口部が付く。緩斜面に構築された住居跡であるため、傾斜に沿って南側に住居全体が緩やかに傾いている。主軸は、やはり南々東-北々西で、前述した3軒と全く同じである。

入り口部は両サイドに40cm～70cm大の平石をほぼ垂直に立てたもので、その幅は内法で50cmと極端に狭い。なお、入り口部の敷石は大きな平石2枚と間仕切り石の合計3枚から成る。

居住部は、これも奥側の半分に縁石を巡らすもので、縁石は40～80cm大の平石を立てたもので、非常にしっかりした造りである。掘り込みの直径4mの不整円形を呈す。敷石は20～60cm大の平石を詰め込んでいるが、本住居跡でも壁沿いにのみ確認されている。

炉は石畠炉で、10～40cm大の石をホームベース状に配したもので、主軸に沿っており頂部が奥壁側となる。内法で長さ80cm、幅50cm、深さ25cmを計り、この時期の炉としては比較的大型である。この炉の特徴は、溶岩を炉石に用いていることである。本遺跡では、後述するように他の住居跡でも炉石に溶岩を用いた例が複数確認されている。また、周辺の遺跡でも同様な例はあり、山梨県東部域の地域的特色と言えるものであろう。なお、この溶岩は当地域に流れ込んだ溶岩のうち強熱溶岩と呼ばれるもので、桂川の断崖にはこの露頭が各所に見られ、採取し易い状況である。また、露頭部分には多くのクラックが入っており、適当な厚さ、大きさに分割し易いことも事実である。

本住居跡では、居住部内に柱穴が5本確認されている。柱穴の配置は炉の形状と同様ホームベース状となり、奥壁寄りに1本が配置される。なお、柱穴の掘り込みは上部で40～50cmであるが、底部では10～20cmと細くなり、柱の太さもその程度と推定される。

奥壁付近から鹿角が集中して出土している。鹿角は2～6cmの細片となっており、しかも被熱しているため、表面は脆くなっていた。この部分は、本住居跡で最も縁石と敷石がしっかりした所であり、住居内祭祀の一端を示すものであるかもしれない。

土器は炉内からの1点（17）の他、4点（18～21）が復元でき、このほかに破片（232～235）もわずかながら出土している。曾利V式および加曾利EIV式が混ざっている。

石器では石鎚（1210～1213）、磨石・凹石（1698～1702）、石皿（1816）があり、加工痕ある剥片（1954）もみられる。

• 5号住居跡（第8図）

O・P-14・15グリッド。本住居跡も柄鏡形敷石住居跡であるが、掘り込みのない平地式住居である。前述の4軒の住居跡と違い調査区南側に位置し、住居の向きも全く逆である。北側に入り口を持ち、主軸も南北東一南北西である。

入り口部は4号住居跡のそれに似て、50~70cm大の平石を石棺状に組み合わせたものである。内法で幅60cmと狭い。入り口部の周辺にも平石が配されており一連の施設と考えられる。居住部は30~60cm大の平石を縁石として巡らし、直径3.5mの円形を呈す。敷石は居住部の入り口部側を中心として見られ、40cm前後の平石を敷き詰めたものである。なお、敷石は部分的にしか確認できないものの、平石は間仕切り方向に向かって収束する規則性を持って敷かれている。

炉は50cm大の平石4枚を組み合わせた石囲炉で、深さ40cmを計る。炉石は強い火熱によりひび割れている。

本住居跡でも柱穴が確認されている。しかし、4号住居跡と違い縁石の外側を全周するもので、それは居住部だけでなく入り口部にまで及んでいた。全部で22基の柱穴が確認されているが、直径・深さとともに15~30cmとばらつきがある。なお、居住部では縁石から30~70cm離れているが、入り口部では側壁石に接して確認された。

土器は炉内からの1点(22)の他、4個体(23~26)と破片(236~240)があり、曾利V式を主体とし加曾利EIV式が客体となっている。

石器は僅かで、磨石(1703)と石皿(1817)が1点づつ出土しただけである。

• 6・7号住居跡（第9図）

O・P-18・19グリッド。いずれも堅穴住居跡で、重複している。床面レベルが同一であることから、住居の平面がはっきりしない。2基の炉が確認されているが、方向に規則性がないことから2軒の住居跡と判断した。セクションから判断する限り、7号住居跡は6号住居跡に切られている。

床面は全体に軟弱で、炉の付近も同様である。住居内には25基の小ピットが確認されているが、通常見られるような、しっかりとした柱穴は確認されていない。掘り込みの深さ20cm以上のものについて図中に番号を付してみたが、住居入り口を南とした場合、1~8が6号住居跡の柱穴と考えられ、そのうちの1~6が主柱穴となろう。また、9~13が7号住居跡の柱穴と考えられる。この想定では、いずれの住居跡も本来の整った状況とはやや様相を異にすることになる。

6号住居跡では埋甕は確認されていないが、14のピットが主軸上で入り口部に位置付けられる事から、埋甕の掘り込みとすることも可能であろう。なお、柱穴2は周溝内に位置したことになる。本住居跡の炉は50cm大の平石4枚を組み合わせた石囲炉で、組み合わせの接点には拳大の石を埋め込む丁寧な造りである。

7号住居跡には埋甕が確認された。柱穴の位置や住居の主軸からはややズレる事になるが、炉の方向からすれば、7号住居跡の埋甕と判断せざるを得ない。正位の埋設ではあるが、掘り込みは小さく、埋設土器ギリギリの大きさとなっている。炉は6号住居跡のそれに比べ一回り小型であるが、これもしっかりした石囲炉である。

両住居内から出土した土器に時期差は見られない。前述したようにセクションからは6号住居跡が新しいはずであるが、7号住居跡の埋甕(27)が曾利IV式であり、6号住居跡内の出土資料(28~33・241~244)も曾利IV式期であることから、2軒の時期差はほとんどないものと思われる。

石器は2軒合わせても非常に少ない。磨石(1704)と石皿(1818)が出土しただけである。

• 8号住居跡（第10図）

G・H-19グリッド。3号住居跡に隣接している。本住居跡は、確認段階では円形の浅い落ち込みが確認されただけで住居跡とは考えられなかったが、その後南側に平石の組み合わせが確認され、また、落ち込み内に埋甕が確認されたことで、柄鏡形住居跡と判断したものである。主軸は南北東一南北西で南側が入り口となる。

入り口部は最大70cmの平石を敷き底面としている。入り口の端は幅30cm、長さ25cmの平石を立て、両サイドに

は20~30cm大の石を立て、石棺状を呈していたと推定される。

住居部は径2.7mの不整円形を呈しているが、他の住居に比べ小型である。住居内外に炉や柱穴などの施設は全く確認されなかった。

埋甕は入り口部ではなく住居部で確認された。底部を欠損した鉢で正位に埋設されていた。

遺物は少ない。土器は、埋甕(34)は無文であるが、その他(35~37・245~250)は曾利V式と加曾利EIV式が混ざっている。

石器では、打製石斧(1586・1587)、磨製石斧(1660)があり、さらに加工痕ある剥片(1510)もある。

• 10号住居跡（第11図）

Q-18グリッド。本住居跡は炉を中心として、その周りに小ビットが確認されたことから、住居跡と判断した。平面形や規模などは不明であるが、ビットの位置からは、掘り込みがあるとすれば長径4.7m、短径4.2m程度の椭円形と推定される。また、これらのビットが掘込みの外側にくくるとすれば3~3.5m程度となる。いずれにしても主軸は南西-北東と考えられ、他の住居跡と大きく違っている。小ビットは、掘り込みの浅いものが多く、深さが20cmを超えるものは、図中に番号を付した1~3のみである。

本住居跡は敷石住居跡である。炉石を中心とした半径1.5mの南半分に平石が敷かれている。30~50cm大の平石が用いられ、隙間に小石が充填されていることから、敷石住居跡の一部と考えられる。住居跡の入り口を南東方向と推定したが、敷石住居跡であれば柄鏡形敷石住居跡の可能性が考えられる。しかし、この方向には石の集中も埋甕も確認されていない。

炉は本遺跡の他のあらゆる住居跡と違い、非常に丁寧な作りの石敷炉である。大型の平石数枚で掘り込みを囲い、その下部は10~30cm大の平石を底面及び壁面に張り付けたものである。掘り込みの深さは30cmを計る。

遺物は少なく、土器は破片(251~259)が出土しただけであるが、曾利V式期に位置付けられる。石器では石鎌(1214)が出土しただけである。

• 11号住居跡（第12図）

L・M-21・22グリッド。直径約4mの円形を呈する堅穴住居跡である。本住居跡も縁石を巡らしていた可能性が強い。縁石は、傾斜面の上部に当たる、壁の北側-西側にかけて部分的に残っているだけであるが、全周していたものか、傾斜を意識し斜面上部側にのみ設置したものは不明である。住居内部には20~40cm大の平石が散見され、部分的に敷石であった可能性もある。なお、柱穴や周溝などの施設は確認されていない。

炉は長径70cm、短径50cm、深さ20cmの楕円形の掘り込みを持ち、周囲に小石を配した石圓炉である。他の住居跡の炉に比べ作りが雑で、明らかに異質である。

本住居跡からの出土遺物は少ない。北壁近くの床直面上から土器1個体(38)が潰れて出土している。この土器は後期前半に北陸地方に展開する三十稻場式土器である。住居や炉の形状の違いからしても、この住居跡が系統を異なるものである可能性が強い。他の破片(260~262)は堀之内式併行期に位置付けられよう。また、環状土製品(1166)が出土している。小破片であるが内径6cm程と推定され、腕輪の可能性が強い。

石器では、石鎌(1215・1216)、磨製石斧(1661)、磨石(1706)、多孔石(1833)、石棒(1853・1854)等豊富な種類がある。この他、加工痕ある剥片(1511・1944)もある。

• 12号住居跡（第13・14図）

L・M-24・25グリッド。掘り込みを有する柄鏡形敷石住居跡である。主軸はほぼ南北で、南に入り口部がある。

入り口部は40~80cm大の平石を垂直に立て、石棺状に組み合わせたものである。入り口で最も外側に位置する一枚は平石ではなく、幅70cm、厚さ20cm程で、入り口階段を兼ねたものと考えられる。この縁から入り口底面ま

では約30cmである。底面には20~40cmの中・小型の平石を敷いている。なお、側壁の外側にも平石が敷き詰められており、入り口に付属する施設と考えられる。埋甕は存在しない。居住部との境は、長さ30cm、幅15cm程の間仕切り石によって仕切られている。現存する間仕切り石は3枚であるが、明らかにもう一枚が置かれていたと考えられる。

居住部は直径約5mの円形を呈する。掘り込みが前述した他の住居跡に見られるような急角度の立ち上がりではなく、30度程の緩やかな傾斜で、グラダラと立ち上がっている。壁面には、一部失われているものの30~50cm大の平石が張り付けられている。また、壁と床の間は縁石ふうに10cm程の幅の石を埋め込み境としている。床面は、全面に石が敷き詰められていたと考えられるが、規則性を持って配置されている。間仕切りの中央部を頂点とした扇形の配置が意識され、平石も細長いものと幅広のものをうまく組み合わせている。しかも、扇の外側は一回り小型の平石を用いた組み合わせを行っており、非常に丁寧な作りである。炉の南辺に接して幅50cm、長さ60cmのホームベース状の平石が配されるが、これが住居の中心を表すものであろう。

炉は4枚の石を組み合わせた石囲炉であるが、すべて溶岩を用いている。炉石は火熱により赤変が著しい。内部の最下層には5cmほどの厚さで焼土が確認され、その上部には最大10cmの灰層が認められた。

柱穴は、居住部の外側まで含め精査したが確認されなかった。

本住居跡では石棒の出土が特異である。本住居跡からは3本（1855~1857）の石棒が出土している。このうちの2本（1856・1857：図中黒丸添付）は床面に倒れていたが、前述した住居の中心を示す平石から150cmと等距離でしかも一直線上に並ぶ。すなわち、中心の石を軸に線対称の位置に置かれていたと想定されるのである。石棒祭祀は住居の奥壁付近に場が設定される例が多いようであるが、本住居跡では入り口に近い部分までもが祭祀の場となっている。このことや本住居跡が本遺跡の他のどの住居跡よりもしっかりと構築されていることなどからすると、この住居跡全体が祭祀場であった可能性さえ想定される。ただし、この住居跡が恒常的な祭祀の場であったのか、廐棄直前段階で住居内全体での祭祀を行っていたのかは不明である。

出土遺物も多い。土器（39~59、263~267）のうち39・40は居住部の入り口近くに潰れていた。その他、41も床面直上であり、他の土器も時期的な差は認められない。曾利V式が主体であり、加曾利EIV式土器も混ざっている。その他、土製円盤が2点（1169・1170）出土した。

石器も豊富である。石鎚（1217~1228）、打製石斧（1588）、磨製石斧（1662・1663）、磨石・凹石（1707~1716）、石皿（1819・1820）、多孔石（1834・1835）、石棒（1855~1857）、特殊磨石（1895）などが出土した。この他に加工痕ある剥片が多量に出土している（1512・1513・1900・1901・1908~1910・1935・1946~1950）が、このうち1908~1911は定型化されていないものの縁辺部に調整が施されており、スクレイパーとして使用されたものであろう。また、1935はコアと思われる。

• 13号住居跡（第15・16図）

K・L-23・24グリッド。南々東一北々西に主軸を持つ竪穴住居跡である。本住居跡は火災にあってる。小判型を呈し、長径5.1m、短径4.6mを計る。床面の精査を行ったが、柱穴は確認されなかった。

炉は50cm大の石を組み合わせた石囲炉で、組み合わせのコーナーには小石を埋め込んだ丁寧な作りである。内法で主軸方向に45cm、直交方向に60cm、深さ20cmを計る。この時期の炉は最も堅固に構築され、通常、平石を埋め込み炉の壁面が石の平面になるように作られるが、本住居跡では壁面の保護はなされず平石の平面を床面側に向いている。このことは縁の保護を優先したこととも考えられるが、それにも増して、炉辺の石幅を広く取ることによって、炉石を作業台としても利用することを目的としたものと思われる。

住居入り口部分に埋甕と伏甕各一基が確認された。図に示したように、炉の中心を通る主軸に対し埋甕と伏甕は1.1mづつ離れた対称的な位置関係にある。埋甕は正位埋設で、底部を欠損している。また、伏甕としたものは、確認されたのは口縁部だけであるが、逆位で床面直上に伏せてあった。通常の床面直上の遺物と区別したのは、住居主軸及び埋甕との位置関係からである。

さて、本住居跡は、前述したように火災住居である。図に示したように住居の奥側を中心に焼土やカーボンが濃く飛散しており、炭化材も確認されている。炭化材は、エレベーション図 c - c'・d - d'・g - g' に見られるごとく壁から床面にかけて板材が確認されている。特に c - d では壁から床に張り付いた状態であり使用方法を示唆するものであろう。また、b - b'・e - e' では柱と思われる材が立った状態で確認された。特に b は良好に残存していた。平面で年輪も確認できるが、それからすると半割りの材であった可能性が強く、また、その部分には柱穴は確認されていない。柱穴に関しては e でも同様で、この住居全体を見ても一基も確認されていないのである。この事例からは、恐らく半割り材を 5 ないし 7 本直接床に立てて主柱にしたものと考えられる。なお、カーボン等が多く飛散していた炉の付近を中心に 50cm メッシュを設定し、土壤のサンプリング及び水洗選別を行った。その結果については第 4 章に示してある。

遺物は多く出土しているが、土器では前記の埋甕及び伏甕 (60・61) をはじめそれ以外の土器 (62~65・268) は、曾利 II 式を主体とし、加曾利 E II 式が若干混ざる。その他、土製円盤 (1171) が出土した。

石器は多くない。石鎌 (1229)、磨石 (1717・1718)、多孔石 (1836)、特殊磨石 (1896) が出土している。

• 15号住居跡（第17図）

N・O-25・26グリッド。掘り込みの浅い、縁石を巡らす柄鏡形敷石住居跡と推定される。

本造構を含めた周辺には平石が飛散しており、それらを含めた造構を想定したが、規則性あるいは方向性などが全く認められず判断に苦慮していた。図には周辺の平石まで示すが、掘り下げの途中で縁石が一部認められたことから、そこから推定される部分だけを住居跡と判断し、報告する。居住部と想定される部分は、直径 3m の円形を呈し、その内部にも平石が飛散している。炉は確認されなかった。

本造構が柄鏡形を呈すると判断したのは、想定される居住部ラインより外側に平石が伸びており、しかもその平石が三角形でさらに外側を向き、その方向には想定される主軸と直交する方向に平石一枚が立ててあったことを理由とする。のことから、入り口部は幅 60cm、長さ 1.2m 程度と推定した。図に示した破線を住居範囲と想定しているが、南東-北西が主軸ラインと考えられる。

縁石の内外で約 20cm の高低差があることから、掘り込みがあったと考えられるが、壁の傾斜は緩やかである。

遺物も少ないが、口縁部が長楕円形を呈する注口土器 (66) が出土している。その他の破片 (269・270) も堀之内 I 式期に位置付けられる。

石器では、石鎌 (1230)、磨製石斧 (1664)、磨石 (1719・1720)、多孔石 (1837) 等が出土している。

• 16号住居跡（第18図）

M・N-23・24グリッド。小判型を呈する堅穴住居跡と思われる。掘り方は全く確認されず、炉と埋甕だけが確認された。炉の中心ラインと埋甕の位置はややズレる。炉の中心ラインは南々東-北々西である。柱穴も全く確認されなかった。

炉は、四枚の平石を組み合わせた石囲炉で、しっかりした造りである。内法で長径 45cm、短径 35cm、深さ 25cm を計る。

埋甕は胴部下半を正位に埋設したもので、底部も欠損している。確認部分では掘り込みも 15cm 程度と非常に浅いため、削平された可能性が強い。したがって、土器も構築時には上半部が存在した可能性がある。

遺物は少なく、埋甕 (67) の他、小破片 (271・272) があるだけで、曾利 III 式～曾利 IV 式期に位置付けられる。石器は出土していない。

• 17号住居跡（第18図）

M-25グリッド。12号住居跡の敷石を剥がしたところ、炉が確認されたため住居跡とした。浅い掘り込みのある堅穴住居跡である。

本住居跡の炉は12号住居跡の炉の20cm南にあり、四枚の石を組み合わせた石團炉であるが、南辺と西辺の炉石に、やはり溶岩を用いている。内法で径30cm、深さ30cmを計り、小型ではあるがしっかりした造りである。

遺物はわずかである。土器片（273～276）は曾利IV式～曾利V式期である。曾利V式期の時間幅も想定されようが、当然のことながら本住居跡がやや先行する。

石器は、石鐵（1231・1232）、磨製石斧（1665）、磨石（1721）、多孔石（1838）がみられる。また、加工痕ある剥片（1911・1951）も出土している。

第2節 土坑と出土遺物

• 1号土坑（第19図）

D-7グリッド。直径0.9mの円形を呈し、確認面からの深さ約0.1mを計る。掘り込み中心部に10～20cm大の礫3個と土器1個体が浮いて出土している。土器（68）は全面繩文の施された円筒形深鉢である。薄手で無繊維であることから、諸礫a式期に位置付けられよう。

• 2号土坑（第19図）

D-8グリッド。長径1.1m、短径0.6mの梢円形を呈し、深さ0.2mを計る。内部からは何も出土していない。

• 3号土坑（第19図）

E-8グリッド。長径1.1m、短径0.9mの梢円形を呈し、深さ0.2mを計る。内部からは何も出土していない。

• 4号土坑（第19図）

E-9グリッド。直径1.1mの円形を呈し、深さ0.95mを計る。この土坑には長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.2mの張り出し部が確認されたが、別の浅い土坑が重なっていた可能性もある。内部からは土器（69・277～281・861）が出土しており、861を除いて堀之内式期に位置付けられる。861は無繊維であるが、繩文およびループ文から黒浜式併行期に位置付けられる。石器では磨製石斧（1666）が1点出土した。

• 5号土坑（第19図）

D-9グリッド。本土坑もテラス状の張り出し部が付く。全体としては長梢円形を呈し、長径1.95m、短径0.9m、深さ0.5mを計る。張り出し部の深さは0.2mである。土器は小破片2点（282・283）が出土したに過ぎない。横杉状の沈線がみられることから後期に位置付けられよう。

• 6号土坑（第19図）

E-10グリッド。長径1.3mの梢円形を呈し、深さ1.6mを計る。今回確認された土坑中で最も深い掘り込みを有する。内部からは20～30cm大の礫が多く確認され、土器も細片となって出土しているが、礫・土器とともに上下二層に大きく分かれる。土器（284～288）に時期差は認められず、堀之内式である。なお、1点（941）だけ中期初頭に位置付けられるものが混ざっていた。

• 8～10号土坑（第20図）

G-H-10グリッド。1号住居跡入り口部のすぐ脇に確認された土坑で、3基が重複している。8号土坑は最も大きく長径3.1m、短径2mの梢円形を呈し、深さ0.4mを計る。9号・10号土坑を切っている。本土坑の内部には礫が確認されるが、とくに中央部付近に幅30cm、高さ50cmの平石が立てられていた。9号土坑は、部分的な確認であるが、確認部分での最大幅2m、深さ0.4mを計る。ここでも内部に礫が確認されている。10号土坑も一

部の残存であるが、確認部分での最大幅1.8mを計る。ここでも大小の礫が確認された。

遺物は少なく、土器（8号：289、9号：290～291、10号：292～294）はすべて堀之内式である。

• 11号土坑（第20図）

I-11グリッド。2号住居跡のすぐ西に確認された土坑で、長楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.2m、深さ0.3mを計る。内部からは礫3個が出土しており。また、北側壁の一部に焼土が確認された。土器（295～300）はすべて堀之内式である。

• 12号土坑（第21図）

N-13グリッド。楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.2m、深さ0.5mを計る。本土坑の土堆積状況は特徴的である。上層はスコリアの単純層で、中層は暗褐色粘質土でスコリアは含まれず、カーボン・骨片が目立つ。下層は中層と同じであるが、カーボンも骨片も含まれない。さらに特徴的なことは、スコリア層の上部の土器片と中層の破片とが接合していることであり、そのことから、スコリア層は自然堆積でなく人為的に集められ入れ込まれた可能性が強く考えられる。

土器（70～72・301～305）はすべて中期最終末に位置付けられるものであるが、70がスコリア層の上下にわたって接合したものである。

• 13号土坑（第21図）

L-14グリッド。隅丸長方形を呈する。長径1.65m、短径0.55m、深さ0.3mを計る。非常に整った形態であるが、内部に何らの施設も認められない。また、遺物も出土していない。

• 14号土坑（第21図）

L-14・15グリッド。不整楕円形を呈し、長径1.5m、短径0.7m、深さ0.1mを計る。土坑縁及び内部に30cm大の平石5個が確認された。ほとんどが縁や壁面に倒れていることや、大きさが一様であることなどから縁に立てられていた可能性が強い。遺物は何も出土していない。

• 15号土坑（第21図）

L-15グリッド。楕円形を呈し、長径1.3m、短径1m、深さ0.2mを計る。土坑内部端に最大幅20cm、長さ60cmの柱状の石が倒れており、そのまわりに10cm程度の礫6個が確認されている。この状況からは、柱状石が立てられ、その支えとして小石が置かれていたことが想定される。遺物は土器2点（73・306）が出土しており、堀之内式期に位置付けられよう。石器は凹石（1722）1点が出土した。

• 16号土坑（第21図）

K-15グリッド。楕円形を呈し、長径1.2m、短径1m、深さ0.1mを計る。壁面に接して凹石が出土した。

• 17号土坑（第21図）

H-20グリッド。楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.25mを計る。上部に幅20cm、長さ30cm、厚さ5cmの平石が確認された。内部からは掌大の礫数個が出土している。土器（307・308）は、いずれも曾利V式である。

• 18号土坑（第21図）

P-15グリッド。楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.75m、深さ0.2mを計る。内部に20～40cm大の石8個がまとまって確認されている。とくに最大の石は、主軸に対し直交しており、枕石とも考えられる。土器（309・310）

は石の上部から隙間にかけての出土である。

• 19号土坑（第21図）

Q-16グリッド。梢円形を呈し、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.2mを計る。中央部に10~20cm大の礫5個が確認された。土器（311）は上部からの出土であるが、繊維を多く含んだ野島式である。また、凹石（1723）が出土している。

• 20号土坑（第22図）

I-21グリッド。10号配石横に確認された不整円形を呈する土坑で、長径0.75m、短径0.7m、深さ0.3mを計る。本土坑は坑縁を溶岩で囲んでいる。炉石に用いるものと同様に平らに剥離した（あるいは加工した）溶岩を用い、それを縁に立てたものである。内部からは土器（74・312~315）が出土しているが、とくに土坑中央部から出土した74の大破片の上部には焼土が集中していた。石囲いの土坑墓である可能性が非常に強い。

• 21号土坑（第22図）

L-26グリッド。23号土坑を切っている。不整円形を呈し、長径0.7m、短径0.55m、深さ0.2mを計る。内部に20cm大の柱状の石が、また、坑縁にも礫が確認された。遺物は少なく土器2点（316・317）である。堀之内式期であろう。

• 22号土坑（第22図）

M-27グリッド。半分は擾乱によって失われているが、円形を呈すると思われ、径0.65m、深さ0.2mを計る。遺物は出土していない。

• 23号土坑（第22図）

L-26号グリッド。不整円形を呈し、長径0.9m、短径0.65m、深さ0.3mを計る。出土遺物はない。

• 24号~26号土坑（第22図）

O-P-24グリッド。形態的にも同じ隅丸長方形を呈する土坑が、主軸方向も同じにしてL字状に並んで確認された。

24号土坑は長径1.35m、短径0.8m、深さ0.6mを計る。内部に礫数個が確認され、底面付近から土器（318~320）が出土している。いずれも普利IV式期である。石器では石鎚（1234）が出土した。

25号土坑は長径1.8m、短径0.95m、深さ0.5mを計る。内部には何の施設もなく、土器小破片（321）が出土しただけである。

26号土坑は長径1.45m、短径0.85m、深さ0.5mを計る。北側半分の壁面から底面にかけて礫が集中しているが、これは人為的なものではない。何も出土していない。

主軸は南々東~北々西で、住居跡で最も多い主軸と一致する。時期の確定できる遺物はわずかに24号土坑にみられるだけであるが、主軸及び形態の同一性から同時期の所産としてよいであろう。

• 27号土坑（第22図）

K-22グリッド。不整円形を呈し、径0.95m、深さ0.15mを計る。掘り込みの壁面や底面に自然の礫が見えているがさらに入為的にも拳大から20cm大の礫を入れている。礫は上部から底面にまで確認されている。土器は両耳壺（75）の他、小破片（322~330）が出土している。土坑にしては石器が多く、石鎚（1235・1236）、石皿（1821）、石棒（1858）が出土し、他に加工痕ある剥片（1514・1952）もある。石皿と石棒が同じ土坑から出土したのは今

回の調査では本例だけであるが、石皿は壁上部に接し、石棒は底面中央からの出土であった。

• 28号土坑（第23図）

P-24グリッド。不整円形を呈する土坑で、長径1.9m、幅1.5m、深さ0.95mを計る。東壁及び南壁の立ち上がりはきついが、それ以外の部分では緩やかである。底面は平坦でなく北側半分はテラス状に一段上がっている。北壁に接して40cm大の平石と拳大の礫が確認された。土器は（76・331・332）は中央部から浮いて出土している。76は中期終末に位置付けられる。石器では打製石斧（1589）が出土した。

• 29号土坑（第23図）

P-24グリッド。長椭円形を呈する土坑で、長径1.55m、短径1m、深さ0.45mを計る。

本土坑は、前述した24号～26号土坑に近く、また、24号土坑を中心26号土坑と対称的な位置にある。当初前述した3基の土坑は一度に存在が確認され、位置関係や形態的類似性などが考慮されたが、本土坑はさらに周辺を掘り下げていく過程で確認されたため、これらとの類似性などについては検討もされなかった。改めて位置についてみると、ちょうど24号土坑を中心にT字形に位置している。また形態的にも長方形ではないが、長椭円形であり、深さや壁の立ち上がりの状況なども極めて類似している。おそらく24号～26号土坑と関連するものであろう。

内部からは、北側に集中して中層より拳大から30cm大の石がまとまって確認されている。土器は（333～336）時期がはっきりしないが、中期終末～後期前半に位置づけられよう。

• 30号土坑（第23図）

N-25グリッド。不整円形を呈する土坑で、長径0.65m、短径0.55m、深さ0.15mを計る。極めて小さな掘り込み中に拳大～20cmの石が入れられ、その付近には土器が散乱していた。土器（77・337～341）は細片となって出土しているが、いずれも中期最終末に位置づけられよう。

• 31号土坑（第23図）

O-23グリッド。不整椭円形を呈する土坑で、長径1.25m、短径0.95m、深さ0.2mを計る。本土坑には底面端に小ピットが確認されている。円柱状を呈し、底面からの深さ35cm、径10cmである。土器（342～345）は中期末に位置づけられる。

• 32号土坑（第23図）

N-24グリッド。不整円形を呈する土坑で、径0.5m、深さ0.1mを計る。掘り込みは小さいが土器1個体（78）が潰れて中央部から出土した。堀之内I式期に位置づけられる。また、唯一の土鍬（1167）が出土している。土鍬には長短両軸に切り込みがある。

• 33号土坑（第23図）

N-26グリッド。円形を呈する土坑で、径0.95m、深さ0.1mを計る。本土坑も底面端に小ピットを有する。遺物は全く出土していない。

• 34号土坑（第23図）

M-27グリッド。椭円形を呈する土坑で、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.15mを計る。中央部に拳大の礫が確認されている。遺物の出土はない。

• 36号土坑（第23図）

L-21グリッド。楕円形を呈する土坑で、長径1.5m、短径1.25m、深さ0.5mを計る。本土坑は北西にテラス状の張り出し部が付く。張り出し部の掘り込みは浅く、10cm程である。張り出し部を除くとほぼ円形の掘り込みとなる。本土坑では底面に接して、中央部に長さ約35cmの円柱状の石が確認されている。土器（346～350）は普利Ⅱ式期に位置づけられる。石器では打製石斧（1590）が出土した。

• 37号土坑（第24図）

O-26グリッド。楕円形を呈する土坑で、長径1.25m、短径1.05m、深さ0.3mを計る。内部からは掌大～30cm以上の石が多く確認されているが、すべて上部に集中している。土器（351・352）は細片となって出土しており、加曾利EⅡ式平行期に位置づけられよう。

• 38号土坑（第24図）

M-21グリッド。長楕円形を呈する土坑で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4mを計る。これもテラス状の張り出し部が付くもので、深さ25cmを計る。張り出し部を除くとやはり円形を呈する。張り出し部の縁に掌大の石が確認された。遺物は土坑本体からも張り出し部からも出土している。土器（353～356）のうち、353はテラス部分から、354は土坑本体からの出土で、ともに中期末で時期差は認められない。石器では磨石（1725）が出土した。

• 39号土坑（第24図）

O-26グリッド。15号住居跡内に確認された土坑で、不整楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3mを計る。坑縁には、長さ70cm、最大幅25cmの自然石が額を見せており、人為的なものではないものの縁石となっていいる。さらに20～40cm大の石数個が縁に置かれている。内部のところどころに焼土ブロックやカーボンの集中が確認されている。土器（80・357～360）のうち、大破片の80は中央部より浮いて出土している。石器では打製石斧（1591）が出土した。

• 40号土坑（第24図）

N-25グリッド。楕円形を呈し、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.1mを計る。掘り込みの小さい土坑であるが内部には10～30cm大の礫が詰め込まれていた。これらの礫には表面に一様にクラックが入っており、火熱を受けたものと思われる。厚手で繩文の施された土器小破片（361）が出土したにすぎない。中期末であろうか。

• 41号土坑（第24図）

P-25グリッド。楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.15m、深さ0.45mを計る。掘り込みはしっかりとしており、壁の立ち上がりは急である。土器（362～364）は中期末に位置づけられよう。石器では打製石斧（1592）、磨石（1724）、加工痕ある剥片（1912・1953）などが出土した。

• 42号土坑（第24図）

O-26・27グリッド。24号配石下に確認された土坑で、瓢箪形を呈し、長径1.5m、短径1.1m、深さ0.1mを計る。内部には掌大～30cm大の石が集中して確認されている。遺物は全く出土していない。

第3節 集石土坑と出土遺物

• 1号集石土坑（第25図）

C-8グリッド。楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.3m、深さ0.5mを計る。掘り方はすり鉢状を呈し、内部に

は掌大～20cmを超える礫が充填されている。礫は焼けている。壁面の所々が焼土化しており、また、底面にはカーボンの集中がみられることから、内部で火が燃やされたとするよりも、有機物を下面に敷いてその上に焼礫を入れ込んだ可能性が強く考えられる。なお、焼土化は掘り込みの中段より上部に確認された。遺物は全く出土していない。内部の炭化材を用いて放射性炭素年代測定を実施した（第4章第2節参照）。

• 2号集石土坑（第25図）

H-21グリッド。不整円形を呈し、径1m、深さ0.3mを計る。掘り込みは1号集石土坑に比べ緩やかである。礫はやはり掌大～20cm大のものまでみられるが、1号集石土坑ほど密ではない。中層部にカーボンや炭化材が広範に存在する面が確認されている。なお、焼土粒子やカーボン片は最上部から最下部にまでまばらに存在する。遺物は出土していない。

• 3号集石土坑（第25図）

L-17グリッド。トレンチ調査の際一部が破壊されたため全容は不明であるが、円形を呈すると思われ、径1.9m、深さ0.5mを計る。1号集石土坑同様すり鉢状の掘り方を有し、底面はさらに一段掘り進められている。礫はやはり掌大～20cm大のものまでみられ、被熱している。これらの礫のうち、底面および下部壁面では平石が選別され張り付けられている。また、この部分に特にカーボンが集中している。なお、壁面の一部に深さ10cm、幅4cm程度の小ピット数個が確認されており何らかの施設があった可能性があるが、遺物は全く出土していない。本土坑でも最下層のカーボンを用いて年代測定を行っている。

• 4号集石土坑（第26図）

H-20・21グリッド。椭円形を呈し、長径1.5m、短径1.35m、深さ0.35mを計る。皿状の掘り方で、壁の立ち上がりは緩い。礫には掌大～30cm大のものがある。底面には平石が敷かれ、また、壁面にも一部張られている。本土坑も中層部にカーボンが集中して確認されており、図中のIV層はほぼ炭化材だけの層となっている。やはり遺物は全く出土していない。本土坑でも年代測定を行っている。

• 5号集石土坑（第26図）

K-17グリッド。不整椭円形を呈し、長径1.6m、短径1.3m、深さ0.5mを計る。掘り方はすり鉢状を呈するが、本土坑は中心部分には礫が少なく、テラス状の張り出し部分が多い。カーボンはほぼ壁面に接して確認されており、中央部のカーボンは底面に接している。いずれも最下層からの出土である。本土坑からは上層から諸磧式土器(886)片が出土しており、カーボンによる年代測定結果とほぼ一致する。また、打製石斧(1593)が出土している。

• 6号集石土坑（第26図）

M-17グリッド。不整円形を呈し、径0.9m、深さ0.2mを計る。掘り方は皿状を呈する。礫はやはり掌大～20cm大のものまでみられるが、密ではない。また、底面や壁面への張り付けもみられない。上部から下部まで焼土粒子やカーボン片がまばらに確認される。出土遺物はなく、これも年代測定を行っている。

• 7号集石土坑（第26図）

I-20グリッド。不整椭円形を呈し、長径1.2m、短径1m、深さ0.5mを計る。すり鉢状の掘り方を呈し、掌大～20cm大の礫が密に充填されている。底面及び一部の壁面には平石が張り付けられている。本土坑も底面がさらに一段掘り進められているが、底面の平石は土に密着する状況ではなく、やや浮いて石窯炉風の面を構成している。その石窯炉風に構築された石組みの上下にカーボンが集中しているが、その付近の壁面はやはり所々焼土

化している。遺物は石鐵 3 点 (1237~1239) が出土しただけである。これも年代測定を行った。

• 8号集石土坑 (第27図)

I-29グリッド。円形を呈し、径1.3m、深さ0.4mを計る。すり鉢状を呈するが、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。礫は密に充填されているが、よく焼けている。底面及び一部の壁面には平石が張り付けられている。とくに底面は大きめの平石を隙間なく組み合わせた丁寧な造りとなっている。7号集石土坑同様、平石は掘り方の底に密着してはおらず、その隙間にカーボンが詰まっている。また、3号集石土坑にみられたのと同様な小ピットが一基だけではあるが確認されている。やはり何らかの施設があったのであろう。また、やはり底面・壁面の所々が焼土化している。遺物は全く出土していない。これも年代測定を行った。

• 9号集石土坑 (第27図)

K-21グリッド。梢円形を呈し、長径1.45m、短径1.3m、深さ0.45mを計る。これも壁の立ち上がりは比較的緩やかである。礫は草大～20cm大で焼けしており、密に充填されている。底面と一部の壁には礫の敷き詰めがみられる。とくに底面は平石を組み合わせた丁寧な造りになっている。カーボンは中層部にもみられるが、底面や壁に密着している。礫中より石器が出土している。年代測定を実施した。

• 11号集石土坑 (第27図)

O-24グリッド。不整円形を呈し、径1.6m、深さ0.15mを計る。浅い皿状の掘り込みで、壁の立ち上がりは緩やかである。礫は草大のものもみられるが、他の土坑に比べ大きいものが多く、40cm以上のものも含まれている。底面や壁面への平石の張り付けはない。これも遺物の出土はない。焼土化やカーボンの集中もみられず、他の集石土坑とは用途が違うのかもしれない。

• 12号集石土坑 (第28図)

M-17・18グリッド。梢円形を呈し、長径1.5m、短径1.35m、深さ0.45mを計る。これもすり鉢状の掘り込みである。礫は草大～20cm大のものがほとんどで、やはり底面や一部壁面に張り付けがみられる。底面に用いられる平石はこれまでのものに比べやや小ぶりではあるが、しっかり構築されている。底面にはカーボンの集中がみられた。遺物は出土していない。年代測定を行った。

• 14号集石土坑 (第28図)

O-22グリッド。不整梢円形を呈し、径2.1m、深さ0.35mを計る。皿状の掘り込みに、やはり草大～20cm大の礫が充填されている。掘り方も大きいため、礫が非常に多い。底面や壁面への張り付けはみられない。カーボンは礫中にわずかに確認されている。遺物は出土していない。年代測定を行った。

• 15号集石土坑 (第28図)

O-22グリッド。不整梢円形を呈し、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.1mを計る。これも皿状の掘り込みを有し、草大～20cm大の礫が充填されているが、密度は粗である。礫も焼けおらず、焼土・カーボンもみられない。これも11号集石土坑と同様、他と用途が別であろう。遺物は出土していない。

• 16号集石土坑 (第28図)

R-21グリッド。不整梢円形を呈し、長径1.1m、短径1m、深さ0.35mを計る。本体部分の掘り込みは深いが、テラス状の張り出しがみられ、そこにも礫は確認される。やはり礫は草大～20cm大であるが、とくに小礫が多い。カーボンはわずかではあるが、礫中から確認された。遺物は全く出土していない。年代測定を行った。

第4節 屋外炉

・ 1号炉（第29図）

H-7グリッド。谷部の自然礫集中部分で確認された炉であり、周辺部を精査したが、ピット等は確認されなかったため、屋外炉と判断した。掘り方は不整円形を呈し、径80cmを計る。底面及び壁面に30cm大の平石を張り付けたもので、内部には小礫が確認された。堆積土には焼土は全く確認されなかつたが、上部にはカーボンの集中がみられた。

・ 2号炉（第29図）

N-14グリッド。本炉から1m離れて7号単独埋甕が確認されているが、距離があまりに近いため、それぞれ別の遺構として報告する。本炉周辺にはピットは確認されていない。長径70cm、短径60cm、深さ35cmを計る。30cm大の平石を壁に張り付け、底面にも一回り小振りの平石や小石を敷いている。焼土は全体にまばらにみられる程度である。

・ 3号炉（第29図）

O-23グリッド。掌大～30cm大の平石を壁面から底面に敷いている。掘り方は不整円形を呈し、径60cm、深さ20cmを計る。本炉も焼土・カーボンはまばらである。

・ 4号炉（第29図）

N-26グリッド。40cm大の平石4枚を組み合わせた石圓炉である。各コーナーには5～10cm大の小石を埋め込んだ丁寧な造りとなっている。1～3号炉が通常の住居の炉と造りも違っているのに対し、本炉は住居の炉と同じ造りであるため、当初14号住居跡として調査した。しかし周辺部を精査したが、掘り方やピット・埋甕・周溝などが全く確認されなかつたことから屋外炉としたものである。掘り込みの深さは最大40cmを計るが、炉石下部分を中心に焼土化がみられる。

・ 5号炉（第29図）

N-27グリッド。30～50cm大の平石4枚を組み合わせた石圓炉である。4号炉同様、住居のそれと同じ造りであることから、当初18号住居跡として調査したが、周辺部に何らの施設も確認されなかつたため屋外炉とした。4号炉がほぼ正方形であるのに対し、こちらは長方形を呈する。内法で長径55cm、短径45cm程度と推定される。上層部に焼土が確認される程度であるが、炉石は被熱によるものかクラックが激しく、剥離している。

第5節 単独埋甕

・ 4号単独埋甕（第30図）

H-15グリッド。直径55cmの円形の掘り方に、口縁部及び底部を欠損した鉢を、正位に埋設したものである。内部から30cm大の石3個が出土している。これらの石は埋設時に蓋として上部に乗せられていた可能性もある。土器(81)は無文でよく磨かれており、また薄手であることから後期中葉以降に位置づけられよう。

さて、本埋甕は単独埋甕として報告するが、後述する4号配石の外側であるものの、ほぼ接して確認されている。配石は加曾利B式期に位置づけられるが、本埋甕の帰属時期と一致する可能性もある。確認時点では本埋甕が配石の外側に位置することや配石そのものの時期が決定できずにいたことなどから単独埋甕として扱ったが、土器と配石に時期差がないとすれば、4号配石に伴う埋甕である可能性が強い、としておきたい。

• 5号単独埋甕（第30図）

I-14グリッド。長径55cm、短径45cmの梢円形の掘り方に、上半部を欠損した深鉢を正位で埋設したものである。掘り方の割に土器が小さく、埋設時にはさらに胴部が存在していた可能性もある。小破片が内部から折り重なるように出土しており、当初から内部にいたものと考えられる。土器(82)は沈線間に縄文が充填されており、加曾利B式期に位置付けられよう。

• 6号単独埋甕（第30図）

Q-18グリッド。長径50cm、短径45cmの梢円形の掘り方に、大型深鉢の胴部下半を正位で埋設したものである。土器内部からは20cm大の石1個が出土している。この砾も蓋代わりに上部に乗せられていた可能性がある。土器(83)は曾利Ⅲ式～IV式期に位置付けられる。

• 7号単独埋甕（第30図）

N-14グリッド。2号炉のすぐ脇に確認された。直径・深さともに15cmの極めて小さな掘り方に小型台付深鉢を正位に埋設したものである。深鉢は台部を打ち欠いているが、底部にまでは及んでいない。しかし、台部を欠損させることによって仮器であることを意識したものと考えられる。土器(84)は加曾利E IV式系統である。

• 10号単独埋甕（第30図）

H-19グリッド。長径60cm、短径45cmの長梢円形の掘り方に上半部及び底部を打ち欠いた深鉢を逆位に埋設している。土器(85)は連弧文土器であり加曾利E II式期に位置付けられる。

第6節 配石と出土遺物

• 1号・2号配石（第31～33図）

1号配石と2号配石とは中心部分の距離で約9m離れているが、第31図に示したようにこの二基の配石は自然礫を背景に結び付いていると考えられる。円あるいは方形といったようなはっきりした配石の場合、その範囲も具体的になるが、1号・2号配石のような形態がはっきりしない、言い換れば礫がまばらながらも続いている場合はその範囲を決定するのは非常に困難である。第31図のラインはあくまでおおむねの範囲を示したものである。したがって、時期差がない場合は、これらの配石をひとまとめにして考えることも可能であろう。ともかく、傾斜を考えた場合、背景の自然礫が視界に入っていたことは十分想定され、それはまた意識されていたことと思われる。

1号配石：D-E-2・3グリッド。50cm程度の石を中心に、最大90cm大の石が見られる。石は重なっている部分もあり、当然それは高低差ということになるが、概ね30cm程度である。石の配列に特に規則性は認められないが、中心部分では50cm大の石を方形に配置して、1～1.5m程度の平面を作っているようにも見受けられる。

2号配石：D-E-4・5グリッド。これも50cm大前後の石が中心であり、最大90cmの石も見られる。北側には拳大程度の礫の集中が見られるが、中心部分には50cm大の石が用いられている。東西2.5m、南北1.5mの範囲が本配石の中心部分と思われ、石組み中には方形に組み合わせて内部に空間を作り出した部分も確認されている。なお、本配石の前面（傾斜下部側）には、調査段階で7号土坑とした部分（掘り込み）があり、多量の土器とともに骨片やカーボンが出土している。整理時には7号土坑出土の土器すべてが清水天王山式及びそれに併行する時期の資料であることが確認されたため7号土坑を欠番とし、すべての資料を遺物集中区資料として扱う事としたが、あらためて本配石の前面に骨片やカーボンが飛散していたことをここで記しておく。

この二基の配石を含んだ広範囲を第1遺物集中区として後述する。遺物、特に土器は配石の間及び下部から多量に出土しており、清水天王山式が主体である。2号配石中からは多孔石（1839）が出土している。

• 3号配石（第35図）

F・G-9・10グリッド。長さ4.6m、幅1.8mの範囲に20~50cm大の石がまばらに確認された。レベル差は約30cmである。石の配列に特に規則性は認められない。本配石の位置は後述する第2遺物集中区の上部に当たる。第2遺物集中区が堀之内式期であることから、本配石はそれと同時期かそれ以降に帰属する。

• 4号配石（第34図）

E~G-14~17グリッド。今回調査された配石中で、最も形態のはっきりしたものである。東南-北西が主軸ラインと思われる。主軸ラインで9m、それに直交するラインで11mを計る隅丸方形にちかい環状配石である。20~80cm大の石を1~1.5mの幅に置き、環状に巡らせている。石はほぼ平坦に並べられているが、20cm程のレベル差がある。

北西辺の中央やや西寄りに環状内部に向かって張り出した施設が確認された。2m×3mの範囲に平坦に平石を並べたもので、祭壇状である。その部分からさらに中心部分には30cmの深さで掘り込みが確認され、そこからは碎片となった焼骨やカーボンが多量に出土している。この状況からは、祭壇を設えた環状配石の中心部分での祭りもしくは儀式が想定される。なお、主軸ラインの延長上、配石の外側約1.5mのところに埋甕（図中矢印：4号単独埋甕として既報告）が確認されているが、前述したようにこの配石に伴うものである可能性が強い。

遺物は環状の内部や石の間から出土している。土器（86・87、365~372）は加曾利B式である。石器では、石棒（1859・1864）と加工痕ある剥片（1955）が出土している。

• 5号配石（第35図）

J-14グリッド。長さ3.5m、幅1.5mの範囲に拳大~50cm大の石を集中させたものである。配列に規則性は認められない。石の間からは土器（373~376）も出土しているが、古銭（種類不明）も出土しており、中世以降の可能性が強い。

• 6号配石（第35図）

P・Q-19~20グリッド。2.5m×3mの範囲に拳大~50cm大の石を組み合わせたものである。配列の規則性は認められない。上部から下部までのレベル差は約30cmである。

本配石からは図中に矢印で示したように、三角柱形土製品（1178）が4つに割れて出土している。土器（377~384）は曾利系も加曾利E系も出土しているが、中期末に位置付けられる。石器では、石鎌（1240）、ドリル（1480）、磨製石斧（1667）、凹石（1727）、多孔石（1840・1841）、加工痕ある剥片（1956）が出土している。

• 7号配石（第35図）

H・I-18・19グリッド。長さ5.2m、幅2.5mの範囲に20~70cm大の石をまばらに配している。石の密集度は3号配石に類似しているが、本配石には20cm以下程度の溶岩片が含まれるのを特徴とする。溶岩を用いていることから、本配石も縄文時代の所産と考えられる。土器（385）は堀之内式であるが、石器は全く出土していない。

• 8号配石（第36図）

L・M-17グリッド。長さ5.5m、幅1.5mの範囲に20~40cm大の石を配している。石列全体の方向は5号配石と同一で、しかも両者は一直線上に並ぶ。本配石からも古銭が2枚出土しており、1枚は元豊通宝である。石の間からは縄文土器（386）及び常滑破片（1188）が出土しているが、本配石は古銭や常滑から中世前半の位置付けが妥当で、5号配石と同じ性格であろう。なお、磨石・凹石（1705・1728）が配石の隣として用いられている。

• 9号配石（第36図）

I-16・17グリッド。長さ6m、幅3mの範囲に30~60cm大の平石を並べたもので、高低差はほとんど無い。本配石中にも溶岩片がみられる。本配石の石列に付属するように10cm大の小礫を長方形に組んだ部分が確認されている。断面観察を行ったが、明確な掘り方や遺物等は確認できず結果として礫の配置が石組み風に見えるだけであった。本配石は5号・8号配石と平行するように見受けられる。また、主軸方向も同一であるかのようであるが、中世資料は皆無で、縄文時代に位置付けるべきであろう。土器(88、387~389)は石列中からの出土で、すべて堀之内式である。石器では、磨製石斧(1668)が出土している。

• 10号配石(第36図)

I-20・21グリッド。長さ4.5m、幅3mの範囲に30~60cm大の平石を並べている。敷石住居跡の平石の並べに類似するが、明確な住居の痕跡も確認されなかったため、配石として報告する。本配石でも大型平石の間隙に小礫を詰め込むが、それには溶岩片も含まれている。平石には高低差もほとんどなく、平坦な敷き詰めとなっている。土器(390)は加曾利EIV式期である。石器では、石鎌(1241)、磨石(1729)、石匙(1883)が出土している。

• 11号配石(第36図)

L-19・20グリッド。長さ6m、幅2mの範囲に20~50cm大の石を用いて石列としたもので、石列は二条あるかのようである。二条であれば溝の可能性も考えられるが、溝の掘り込みや壁の面の合わせなどが全くなく、溝ではない。本配石からは時期を決定付ける資料は出土していないが、石列が8号配石と平行しており、その間隔は約8mである。おそらく中世に位置付けられるものであろう。なお、打製石斧(1594)が本配石下から出土している。

• 12号配石(第38図)

M-19グリッド。11号配石のすぐ脇に確認された配石で、1.5×1mの範囲に20~40cm大の石を集中させたもので、ほぼ平坦に構築されている。遺物は出土していない。

• 13号配石(第38図)

N-21グリッド。長さ2.5m、幅1.5mの範囲に拳大~50cm大の石を配したもので、集中の度合いは粗である。また、規則性も認められない。遺物は出土していない。

• 14・15号配石(第37図)

N~R-21~25グリッド。広範囲にわたって確認された配石で礫が敷き詰められた面と石列とから成る。調査段階ではそれぞれ別個の配石として調査を行ったが、礫のレベル差がないことや位置的にも繋がることが確認されたため一基の配石遺構として報告する。

第37図では、左下が傾斜上部に当たり、右中方向に緩やかに下ることになる。エレベーションにみられるように、傾斜上部側であるD~Fラインなどでは礫の重なりはほとんどなく、下部側のA~Cラインなどでは、礫の重複が著しく層を成しているかのようである。この部分は石列ではなく礫の敷き詰めによる面を構成している訳であるが、エレベーション図での最上面と傾斜上部側とが結び付くことになろう。すなわち傾斜下部側の重複した礫は面の土台と考えられる。15号配石は部分的に21号配石と重なっているため、あるいは21号配石の礫の一部を誤認した可能性もあるが、この部分には著しい重複があった。

この配石の延長上には5号・8号配石があり、本配石はそれらとの関連が強く考えられる。本配石の下部からは多くの縄文土器・石器が出土している。土器は中期末~後期前半のものが多く、その一部を図示(391~409、1179)した。石器では、石鎌(1242~1245)、打製石斧(1595~1596)、磨製石斧(1669~1671)、磨石・凹石(1730~1741)、石皿(1824~1825)、多孔石(1842)、石錐(1891)、加工度ある剥片(1516~1913、1957~1959)等が出土した。

以上のように縄文時代の土器・石器が非常に多く、とくに配石の下部からそれらが多く出土しているが、配石の礫中からは常滑片(1192)が出土しており、また周辺からも常滑(1194)、瀬戸(1201)などの破片が出土している。配石そのものは5号・8号と同様中世に位置付けられよう。

• 16号配石（第38図）

M・N-22・23グリッド。長さ4.5m、幅1.5mの範囲に20~60cm大の石を集中させたものである。石は列を成すような状況ではなく1.5m×1.2mの範囲に平石を組んだ部分が中心で、そこからさらに石列風にまばらに礫が配されている。なお、ここには溶岩片も含まれている。全体としてレベル差はない。やはり遺物は出土していない。

• 17号配石（第38図）

P・Q-23・24グリッド。直径1mの範囲に30~40cm大の平石を集中させたもので、間隙には小礫を充填した丁寧な造りである。敷石住居跡の一部である可能性もあるが、積極的にそれを支持する根拠もないことから配石とした。なお、石面にはレベル差はない。遺物は出土していない。

• 18号配石（第38図）

P-24グリッド。本配石の両脇には28号、29号土坑が掘り込まれている。30~50cm大の平石を組んだもので、レベル差は約20cmである。遺物は出土していない。

• 20号配石（第38図）

N-23・24グリッド。1mの範囲に20~30cm大の石8個をまとめたもので、ほぼ平坦な面が構成されている。石は最も小さな石を中心に長方形に配されているように見える。遺物は全く出土していない。

• 21号配石（第39・40図）

P~S-21~25グリッド。調査区東端に確認された大型の配石遺構である。長さ19m、幅4mの範囲に20~80cm大の石を集中させたもので、配石に伴う埋甕が二基確認されている。

本配石は、図中のエレベーションHライン～Kラインにかけてが中心部分で、その両サイドがそれに付属する施設であると考えられる。中心部分は、ほぼ3.5mの方形に石を組んだもので、石は非常に密集し上部においてほぼ平坦面を構成している。平石は横にして平坦面を構成するものばかりではなく、立てた状態で一部を埋め込んだものも見られる。配石を祭壇と関連づけるならば、この部分が祭壇と考えられよう。

付属施設と考えられる石列は南北に延びるが、南側4m、北側11mであり、中心部分からみて左右対称とはなっていない。また、南側も北側も石列とはいっても明確に列として捉えられる部分ではなく、石の集中が見られるだけである。ただ、北側では端の部分で特に石の集中がはっきりしており、そこでは長さ4m、幅1.3mの範囲が一つの平坦面を構成しているようにも見える。あるいは別個の配石として捉えることも可能であるかもしれないが、中心部分との間も（他部分と比べやや密集度が粗であるが）石が統一していることは確かに一連の遺構と考えるべきであろう。

今回調査された配石のうち、形がはっきりしているという点では、形態や湯廻時期こそ違う環状を呈する4号配石と本配石が双璧である。しかし、4号配石では祭壇と考えられた部分の前面から焼けた獸骨が碎片となって出土しているのに対し、本配石には獸骨はおろか焼土もカーボンも確認されていない。祭壇の形態に大きな違いがあることが想定される。

埋甕は二基、いずれも北側付属施設部分での確認である。配石北端に近い部分で確認された埋甕は、長径95cm、短径70cmの橢円形の掘り込み内に底部穿孔の深鉢が横倒しとなっていた。本資料は、正位もしくは逆位といった

通常の埋甕の概念からははずれることになるが、底面に直径2cmの穿孔が丁寧に行われており、仮器であることをはっきり意識していることから埋甕として報告する。もう一基の埋甕は前述の埋甕から配石中心側に向かって6.5mの距離をおいて確認された。これは長径40cm、短径35cmの梢円形の掘り込み内に底部を打ち欠いた深鉢の下半部を正位で埋設したもので、縁には拵大の円礫が置かれていた。この二基の埋甕はいずれも4単位のX字状把手を有する大型深鉢で、曾利Ⅲ式～IV式に位置付けられる。

遺物は多くはない。二基の埋甕(89・90)のほか3個体(91～93)が復元されたが、これらは曾利IV式～V式に位置付けられ、中期末という大枠では捉えられても、埋甕と他の資料との間には若干の時期差が認められる。石器では、磨製石斧(1672)、磨石・凹石(1743～1746)、石皿(1826～1828)、多孔石(1843～1845)、石棒(1862・1863)、加工痕ある剥片(1914・1960)等が出土している。

• 22号配石(第38図)

N-18・19グリッド。長さ6m、幅1.5mの範囲に20～60cm大の石をまばらに配したもので、石の配列に規則性は認められない。遺物もほとんど出土していない。

• 23号配石(第41図)

O-26グリッド。長さ2m、幅1.5mの範囲に拵大～60cm大の石を配したもので、石は密集している。石は部分的に重なっている。遺物は石皿(1822)が出土した。

• 24号配石(第41図)

O-26・27グリッド。長さ3.5m、幅1.5mの範囲に20～60cm大の石を配したもので、2×1.2mの範囲で石の集中が見られる。その部分では重なっており、レベル差は約20cmである。遺物は石皿(1823)が出土した。

第7節 遺物集中区と出土遺物

ここで述べる“遺物集中区”とはいわゆる“土器捨て場”に類似するものであるが、土器捨て場と呼称した場合集落の一部で傾斜面や谷に向かって生活廃棄物を捨てる場所が第一義的に想定される。しかし、後述する第1遺物集中区は明らかに自らの生活域よりも川筋で言えば上流に位置し、谷頭に相当する部分で配石も伴うという事からすると土器捨て場という呼称は全く不適切であることから、遺物集中区と呼ぶこととする。

• 第1遺物集中区(第42・43図)

D～F-2～5グリッド。冒頭述べたように、本遺跡は高川によって解析された小谷の谷頭から開口部、さらには大原台地にかけて展開する遺跡である。その中で最も谷頭に近い部分で確認された遺構が、本遺構である。しかも本遺構は二基の配石を伴い、そのうちの一基からは骨片やカーボンが飛散している状況が確認されている。また、遺物集中区の土壤は黒色で有機物が多く含まれていたことが窺われる。これらの配石を含む80m程度の部分から掌大以下となった土器片が多量に折り重なって出土した。

平面図作成にかなりの時間がかかることが予想されたため、当初は写真による実測を行った。4×4mのグリッド内に水糸を張り、1×1mの小グリッドを16個設定した。小グリッド4個(4m²)を1単位として、3.6mの脚立上にカメラを固定し4つの小グリッドの中心部上にレンズが位置するようにセットし、スケールを入れて撮影した。別にポラロイドカメラで小グリッド毎に撮影し、遺物の固有番号をポラロイド写真に書き入れ、図面作成時の番号確認資料とした。レベル測量後1点づつ取り上げた。この方法を数回繰り返し全面を掘り下げを試みたが、遺物量があまりに多いため、中途より光波測量機に切り替えドットの作成のみとした。したがって、ここに報告する平面図は光波測量機への切り替え前までの図である。なお、接合関係では平面図をとったものとドット

化したものとの接合も当然のことながらあるので、それらについてのみ示すこととした。ちなみに、本集中区として光波測量機でドット化したものは7,639点である。調査段階では、まさに“足の踏み場もない”という表現が当てはまる状態であった。土器は復元資料を観察すると内外面にオコゲや様の付着が認められることから、日常生活に用いられていたものである。

埋甕が三基まとまって確認されている。二基の配石の中間付近に並んでいたもので、いずれも掘り方を有し、埋め込んだ状態であったため埋甕と判断した。1号（94）は深鉢の胴部を輪切り状態にしたもので、正位である。2号（95）は深鉢胴部下半で底面は存在する。これも正位である。3号は、やはり胴部が浅い掘り込み内に収められていたが、復元できる状況ではなく、図示していない。このほかに、耳飾り（1165）が1点出土しているが、土偶や石棒といった通常見られる祭祀遺物が全く出土していないことも特徴と言えよう。配石や遺物集中の下部には土坑も確認されないことから、墓にかかる儀礼は想像しにくい。接合図に示したごとく、土器はこの集中区域ほぼ全体で接合している。1～2m程度の範囲内での接合が多いが、117のように8m×9m×11mの三角形の各頂点に分散していたものが接合した例もある。

以上のような状況から本集中区は細片にした土器を撒くという行為を主体とした祭祀を行った場であると考えられる。これからすれば“物送り”的儀式を想定することは可能であろう。

遺物は非常に多く、ごく一部に他時期が混ざるもののが晩期初頭がほとんどである。土器では、復元資料29点（94～122）のほか、破片256点（410～765）を示したが、清水天王山式土器を主体として、それに併行する時期の土器も多く確認されている。土器は以下のように分類される。

I類（410～412）

縄文を地文とし、沈線による入り組み文が施され、瘤が貼付される。東北地方後期後半の新地式に極めて類似する。瘤は文様内に施文されることから新地式でも後半段階に位置付けられよう。

II類（413～414）

口縁部に刺突文を施し、直下に併行沈線とその間隙に矢羽状沈線を施文するもので、後期後半曾谷式併行に位置付けられよう。

III類（415～426）

指頭圧痕もしくは工具による刻みを有する凸帯を口縁部に巡らすもので、凸帯以下は無文となる。加曾利B式期頃からこのような口縁部下の凸帯がみられるようになるが、その段階では縄文地文となり、無文のものは一般的ではないようである。晩期の清水天王山式期には確実にこの施文が存在する。したがって、この一群はやや幅広く捉え、後期後半～晩期初頭の位置付けとしておきたい。

IV類（100～107、427～610）

晩期初頭の清水天王山式土器である。清水天王山式土器は、沈線による入り組み文や三叉文の施された口縁部文様帯と胴部の綾杉文を主文様とするが、口縁部有刻凸帯の有無により大きく二分類され、さらに入り組み文や三叉文の状況により細分される。今回出土したものについて、口縁部文様帯での概要を示すと以下のようになる。

- a 有刻凸帯+弧状沈線 →
- b 有刻凸帯+S字状文もしくは巴文 →107
- c 有刻凸帯+左下がり入り組み文 →
- d 有刻凸帯+右下がり入り組み文 →523～526
- e 有刻凸帯+左下がり連続入り組み文 →
- f 有刻凸帯+右下がり入り組み文 →
- g 有刻凸帯+左下がり三叉入り組み文 →106
- h 有刻凸帯+右下がり三叉入り組み文 →104・105・527～534
- i 弧状沈線 →427
- j S字状文もしくは巴文 →100・101・428

k	左下がり入り組み文	→429
l	右下がり入り組み文	→433～496
m	左下がり連結入り組み文	→103
n	右下がり連結入り組み文	→497～505
o	左下がり三叉入り組み文	→517
p	右下がり三叉入り組み文	→102・506～516・518～522等多数

107は多段化、427は弧線(対弧ではない)、428は大きな巴で鉤の手文類似

V類 (96・108～115・611～700)

清水天王山式土器に伴う鍵の手文土器である。この一群は、すべて口縁部が外反する深鉢で、口唇部には小突起が付く。また、小突起ではなく、小さな波状口縁となるものも存在する。口縁直下に二条の縄文帯があり、その間に沈線による入り組みのクラシック文様帯となる。クラシック文様帯には沈線の太さ、クラシック文様そのものの状況や文様帯内の列点文の有無などバリエーションがある。今回の調査で確認されたものを、クラシック文様帯の状況で整理すると以下のようなになる。

a	太線入り組みクラシック文様帯	→108・109・111・112ほか大多数
b	細線入り組みクラシック文様帯	→613～620・626
c	太線入り組みクラシック文様帯(列点)	→621～625
d	細線入り組みクラシック文様帯(列点)	→
e	太線入り組みクラシック文様帯(曲線)	→96・611・630・643・658
f	細線入り組みクラシック文様帯(曲線)	→
g	太線クラシック文様帯	→
h	細線クラシック文様帯	→692・693
i	縄文帯のみ	→115

96はクラシックであるが沈線は連続

VI類 (119・120、701～736)

口縁部に縄文帯を設け、その内部もしくは直下に、弧線を向かい合わせにズラして配置したものである。縄文帯に施される場合は、向かい合わせた弧線により囲まれた部分の縄文が磨り消される。口唇部には小突起が付くものが多い。弧線は連結したり入り組み化する場合もあるようであり、また、709や727のように三叉文化したものもある。119は鍵の手文の変形であろう。120は口縁部の状況から本類に含めることとしたもので、胴部の文様帯は入り組み文に対峙するように三叉文が施されている。本資料は三叉文状況からは安行3a式類似といえようが、列点文が施文されていることから、さらに安行b式、同c式、中屋式などと関連する可能性も否定できない。

これらは丁寧なつくりの土器であるが、出土量からみても当地方の一般的な資料とは言えない。周辺地域では前述の安行3a式(大洞B式併行)にも類似資料が無くはないが、口縁部の縄文帯に弧線による区画を作り出す手法からすれば、むしろ北陸地方で大洞B C式～C式併行期に位置付けられる中屋式が、より類似していると言えるかもしれない。

VII類 (116・737～755)

網目状撚糸文の施文された一群である。これまで数次にわたる本遺跡の発掘調査では全く確認されなかったもので、また、周辺の遺跡でも未確認である。清水天王山式に混ざっての出土であり、晩期初頭へ位置付けられることは確実である。

VIII類 (756～760)

無文土器を一括する。口唇部に列点が施されるものもある。760は薄手の精製土器で、胴部には縦方向の磨き痕がはっきりしている。

IX類 (761～765)

その他の土器をまとめた。761～763は列点文の施されるもので、あるいは後期に遡るかもしれない。764・765は三叉文や弧線、入り組み文などの状況から晩期前半に位置付けられよう。

なお、わずかではあるが、加曾利B式(121)、堀之内I式(122)も出土している。石器は、意外なことに本集中区からは全く出土していない。

• 第2遺物集中区(第44図)

G・H-10・11グリッド。本集中区の上部には3号配石が確認され、また、下部には1号住居跡が存在する。1号住居跡が堀之内式期であることから、本集中区は同時期以降に形成されたことになる。

接合関係をみてみると、1号住居跡として取り上げた土器と本集中区として取り上げた土器との接合も何点か確認されていることから、住居廃棄後の短期間に本集中区が形成されたと考えられる。やはり数m以内での接合が多いが、133が最も広範囲での接合が確認された例で、接合資料の集中する部分から半径5mの円内に散っていた。下部の1号住居跡は小谷の低地に位置し、居住部の大きさは巡石間で4.5m×3.5mである。床面から谷上までは約1mの高低差があり、上部での掘り込みの幅は当然一回り大きいものと考えられる。意識の有無はともかく、火災を受けた住居が廃棄されて凹地となった部分に集中的に遺物を投棄したものと推定される。

本集中区も出土遺物が多い。土器(123～138、766～776)のうち、123・124は加曾利E IV式期に位置付けられる。また、776は本県ではほとんど出土例のない異形台付土器で加曾利B式期に位置付けられる。それら以外の本集中区で主体を成すのは堀之内式土器である。今回の調査では、本集中区以外から多くの該期資料が得られているが、特に本集中区と下部の1号住居跡資料とは接合関係も確認されており、覆土資料と本集中区資料とを厳密に区別することが非常に困難であるため、ここではこれらをまとめて分類することとする。

ここで確認された堀之内式土器にはI式とII式の両者がみられる。それらは以下のように分類される。

I類(3～5、127・128・131・215～218・774)

下北原式と呼ばれる一群。口縁部に一条の沈線を巡らすものがほとんどである。胴部の沈線は間隔が広く、二ないし三条の懸垂文で器面を分割する。懸垂文間は斜行沈線が施されるもの(127・216)、J字文の崩れらしき曲線文(3・4・128・131)および無文(215)の3種類が確認されている。5・774は文様の上半部のみの確認であるため、下部がどのような連続状況であるか不明であるがJ字状を呈する可能性はある。これらは堀之内I式でも新しい部分に位置付けられるものである。なお、石井寛によれば216にみられる文様の上端を区切る沈線は古い段階の資料とされる。

II類(1・7・129～131・135・768)

口縁部が外反する深鉢もしくは鉢で、頸部屈曲部までは無文帯となる。胴部に文様を集中させる。胴部文様により、さらに二分類される。

a 漪巻き文あるいは弧線文を文様の中心とするもの。そこから左右に斜行沈線を施すもの(7)と沈線を垂下させるもの(1)、その両方を備えるもの(132)などバラエティーが豊富である。

b 斜行沈線だけのもの(130・135)。結果としてこれが連続して三角形区画となる。

これらも堀之内I式の新しい部分に位置付けられるものであろう。

III類(2・133・134・767)

朝顔形深鉢と呼ばれる一群である。3点だけの確認であるが、いずれも縄文が地文である。口縁部から刻目隆帯を垂下させ、胴中部に巡らせた同様の隆帯に連結させ、文様帯を作り出している。文様帯は垂下させた隆帯により区画され、その区画内は弧線及び直線の沈線により満たされている。767は破片資料であるが、多条の弧線を網状に組み合わせている。おそらく、刻目隆帯による区画内の施文と思われ、文様構成は134に類似するであろう。いずれも堀之内I式新段階であろう。

IV類(766・770～772)

平行沈線間に縄文を充填した、帶縄文の施文された一群である。770～772は同一個体と思われるが、帶縄文に

よる三角文が表されている。これらは堀之内Ⅱ式である。

V類 (9・136~138)

蓋と注口土器を一括した。136は紐掛けと思われる溝を有し、上・下端でブリッジ状に連結する。溝の下端の両サイドには径2mmほどの孔が穿たれている。溝と直行する方向には刻目隆脊が垂下し、器面を4分割している。分割された区画内には沈線による渦巻きが施文されている。外面には赤色顔料が塗布されていた痕跡がある。本資料の頂部は破損しているがさらに外反しているようであり、さらに何らかの突起等が付いていた可能性が強い。注口土器は3点出土しているが、すべて口縁部の把手が連結している。また、胴部はほぼ円形であるのに対し、口縁部は極端な橢円形であることにも特徴がある。いずれも堀之内Ⅰ式である。

石器は、わずかに打製石斧(1604)が出土しているに過ぎない。

• 第3遺物集中区 (第45・46図)

I~J-11・12グリッド。小谷の斜面に形成された土器捨て場と思われる。土器は早期末~後期前半までが確認されているが、圧倒的に多いのは中期末である。本集中区の主たる形成時期はこの時期である。土器は傾斜面に張り付くように出土しており、あたかも投棄されたかのごとくである。接合関係では1~2m以内がほとんどであるが、141や143のように10m以上の距離をおいて接合した例もある。

本集中区に接して曾利V式期の2号住居跡が確認されている。谷部への遺物廃棄ということからすれば台上からの廃棄になるが、台上にも曾利V式期の住居跡は数軒確認されている。しかし、同時期の住居が一段下った谷部に存在するにもかかわらず、その住居が存在する時期にその周辺を廃棄場とすることはあり得ないため、住居廃絶後に土器捨て場が形成開始されたことになる。とすれば、住居廃棄から土器捨て場の形成開始さらには終了までが極めて短時間のうちに行われたことが想定される。

本集中区のはば中央部分で、注口土器の極めて特殊な出土例が確認された。中期末に位置付けられる157の最も大きな破片に乗るかたちで、堀之内Ⅰ式期である174の注口土器が175の蓋を乗せたまま、完形で出土した(第46図)。注口土器は緩斜面にやや斜めになって置かれ、注口部をほぼ真に向いていた。特筆されるのは、蓋が口縁部に密着していたことである。ただ、本来の蓋の向きとは逆に、逆さまに蓋をされていた。ここで、“置かれ”と表現したのは、以下の理由による。

- 1 注口土器が完形であること。
- 2 斜面であるにもかかわらず、やや傾いているものの、底部を下に、注口部を真上にしていること。
- 3 蓋が口縁部に被せられたままであること。

以上の3点である。堀之内式期の住居跡等の遺構は台上にももちろん存在する。注口土器が単独で谷の斜面に置かれていたことは、該期の台上の住人達が何らかの意志をもって置いたことを意味するものであろう。供獻の一形態を示すものであろうか。注口土器内部は空間が保たれており、わずかに土が入っていただけであった。この土は1mmメッシュで水洗選別を実施したが、何も検出できなかった。

土器(139~179・777~818・852)は多く出土しているが、前述したように中期末の資料が圧倒的である。852は早期末の条痕文系織維土器、139は諸磯C式土器である。これら以外は以下のようにまとめられる。

I類 (140~142・154)

曾利IV式土器を一括した。出土量は豊富ではないが3分類される。

- a (140) X字状把手を有する大型深鉢である。ただ、本質は胴部主文様が列点であるが、ハの字文の萌芽とも考えられ、曾利V式期に下る可能性もある。
- b (141・142) 沈線による縦割り区画が行われ、懸垂文が施文される。
- c (154) 地文が繩文であるもので、懸垂文が施される。

II類 (143~153・178・780~788・801~803・805)

曾利V式土器を一括した。施文・器形等により細分される。

a (143~153・780~788・801~803・805) ハの字文をもつ深鉢で出土量も多い。曾利IV式期にみられる、沈線による器面の区画が行われるものと行われないものとがある。後者は、懸垂文もみられないくなっており、曾利V式期のなかでも新しく位置付けられよう。また、ハの字文には沈線による施文以外にも、櫛状工具による刺突や引っ掛けなどのバリエーションがある。

b (178) 広口壺である。ヘラ状工具による細い沈線でハの字文を施文している。

III類 (155~173・789~800・804)

加曾利E IV式土器である。本集中区中で、最も多く出土した。これも施文・器形等により細分される。

a (158・160・161・163・165・790・793) 平縁で器面の縱割り区画もしくは懸垂文を有する一群である。161は沈線による区画はないものの、懸垂文により区画されることになる。地文は繩文である。

b (159・162・164・794) 平縁でU字状モチーフをもつ一群である。この一群には懸垂文はみられない。162はU字状モチーフが2段施される可能性が強い。

c (166~168) 口縁部が波状を呈するか、もしくは突起により波状類似となる一群で、渦巻きが表現される。なお、文様は沈線と微隆起線の両者がある。

d (169・170) c群と同様の形態ではあるが、主文様が渦巻きとはならず、繩文施文部を木の葉状の区画で限定するものである。169と170では、繩文施文部位が木の葉の内と外と全く逆になっている。

e (789・791・792・795~800・804) c群と同様の形態で、沈線または微隆起線によりU字もしくはJ字状モチーフを表現するものである。

f (171) 台付深鉢である。

g (155~157・172・173) 広口壺である。中期終末期における広口壺形態の土器は、曾利V式土器と加曾利E IV式土器の区別が難しい。地文に繩文の施文されていることや区画が低い隆帯であることなどから、これらを加曾利E IV式に帰属させた。曾利V式期の広口壺にも繩文が施文されるものもあり、すべてをここにまとめることには危険があるが、積極的に曾利V式とする根拠もないためここに一括する。

IV類 (176・177・179・806~813・817・818)

堀之内I式土器を一括する。文様により細分される。

a (177・808~810・813・817) 第2遺物集中区で行った分類のI類と同じである。177・809は平行沈線間に列点が施されており堀之内I式でも古手であろう。また、810は二条の沈線で崩れたJ字状のモチーフを表現しており、キャリバー形や口唇部の状況からI式としたものである。I式であるとすれば、これも古手に位置付けられよう。

b (179・807・811・812) 第2遺物集中区での分類のII類と同じである。179はa種(渦巻き文)である。807・811・812については胴部下半を欠損しており主文様は不明である。堀之内II式にも同形態の深鉢が多いが、口縁部に沈線や刻み目隆帯を巡らせている状況から、これらをI式に位置付けたものである。

c (176) 口縁部に刻み目隆帯を巡らせ、胴部には斜行沈線を施文したものである。第2遺物集中区出土資料の130に類似する。

d (818) 口縁部に刺突や沈線による文様帯が形成され、胴部は二条の沈線を垂下及び斜行させ、部分的に繩文を充填している。

e (806) 口唇部に刻みを有する小型の鉢である。二条の沈線により渦巻きもしくは円形区画を表現し、沈線間にヘラ状工具により細い刻みを施している。時期は新しくなるかもしれない。

V類 (814~816)

堀之内II式土器である。同一個体であろう。朝顔形の深鉢で菱形区画の帶繩文が施される。菱形区画内は沈線

で充填される。

- 第4遺物集中区（第47図）

F-16・17グリッド。環状配石である4号配石のすぐ北側に確認された遺物集中区で、1.7m×1.3mの範囲に中期末の遺物がまとまっていた。遺物集中区としての規模も小さいものである。

土器（180～182、819～825）はすべて中期末である。曾利V式（180・820・821・823・824）と加曾利EIV式（181・182・819・822・825）の両者がみられる。

- 第5遺物集中区（第47図）

H-18グリッド。3号住居跡、9号住居跡、7号配石に囲まれた部分に見られた遺物の集中である。3m×1.5mの遺物のまとまりの中に、拳大～40cmまでの石が散見される。土器（183・184・826～828）は中期後葉に位置付けられる。183を除いて、曾利II～III式期に位置付けられる。183は低い隆起を蛇行させ、さらに同様の弧線を加え円文としたもので、曾利式にみられる一般的な施文とはやや趣を異にする。しかし、胎土等は特に違いないことから、該期のバリエーションとしておきたい。石器は少なく、磨石（1764・1765）、加工痕ある剝片（1904・1962）があるだけである。

- 第6遺物集中区（第47図）

N-24・25グリッド。1.5m×1.3mの範囲に遺物は集中しており、拳大から40cm大の石が散見される。本集中区は当初35号土坑として調査したものであるが、遺物の集中はあるものの、掘り込みが全く確認されていなかったことから遺物集中区に変更した。土器は（79）は大型の深鉢で曾利III式である。

- 第7遺物集中区（第48図）

M-23・24グリッド。12号住居跡、13号住居跡、20号配石に囲まれた部分に位置する。6m×4.5mの範囲に遺物が分布しているが、範囲内には80cm大の巨石を始め、拳大から30cm大の石が確認されている。平面図では非常に多くの遺物が破片となって分布するが、遺物の高低差が30cm程ある。

土器は多いが、時期はすべて曾利V式期であり、図示したもの（185・829）以外は省略した。本集中区を囲む遺構のうち、敷石住居跡である12号住居跡が同時期であり、本集中区の石の存在や時期的整合性から関連が予想される。

石器では石鎚（1246～1257）、打製石斧（1597）、磨石（1751）、石皿（1832）、多孔石（1846・1847）、加工痕ある剝片（1517～1519・1937）等が出土している。

第8節 溝と出土遺物

中世以降の溝が2条確認された。以下に概要を示す。

- 1号溝（第49図）

I～K-11・12グリッド。2号住居跡や第3遺物集中区の上に確認された石組みの溝である。溝周辺には、少なくとも幅6m・長さ12mの範囲に拳大から50cm大の石が集中して平坦面を構成しており、その中心部分に石組みの溝が確認されている。確認された部分は直線で、主軸は北々西～南々東である。北から南に向かって緩やかに傾斜している。

溝は幅約30cmで、両サイドに30～50cm大の石を積み、平面を内側にあわせて側壁としている。なお、石積が2段になっている部分も確認された。底面には石敷き等の施設はなく、土がそのままである。長さ5mまでは溝が

確認できるが、北側では石の崩れが激しく、溝が続いているかどうか確認できない。ただ、平面を有する大石が全く確認されていないことから、真っすぐに北に伸びた可能性は低い。

本溝は、周辺の石がほぼ平坦におかれている状況から、屋敷の一部であった可能性も考えられる。第6節で述べた配石のうちの何基かは、明らかに中世以降に帰属するもので、それらとの関連がますます考えられよう。

遺物は、石組み中から石臼（1196）が、また、溝中から寛永通宝が出土している。

• 2号溝（第50図）

M～Q-25・28グリッド。調査区東端に確認された溝で、1号とは全く性格の違う溝である。20m以上の長さが確認されたが、調査区域の制約から調査は一部に限られており、幅は不明である。調査の状況からは、少なくとも幅3m以上はあるものと推定される。

北から南に向かって急激に傾斜している。北端と南端との比高差は約1.8mである。溝内には拳大から50cm大の石が集中しているが、ほとんどが浮いており、後に投げ込まれたものと考えられる。なお、南端は21号配石に接しており、そこから先は確認できなかった。21号配石の上には14・15号配石が重なっており、その形態はL字形を呈し、さらにその場所が本溝が確認できなくなった部分に極めて近くかつ方向も一致することから、本溝と14・15号配石が関連する可能性が強い。ただし、傾斜は東南方向に傾いていることからすると、溝が続くとすれば確認不可能となった部分から直角に東側に曲がる（14・15号配石ラインの延長上）のかもしれない。

本溝からも陶磁器類が出土している。1186は須恵器長頸壺で奈良～平安時代に、1195は温謐の袈裟襷壺で12世紀代、1189・1190は常滑の壺で13世紀代に、1198は瀬戸の印花文瓶子で14世紀代に位置付けられよう。なお、绳文時代の石器も多く出土している。石錐（1473）、打製石斧（1598）、磨石・凹石（1747～1750）、石棒（1861）、加工痕ある剥片（1520・1521・1902）等がある。

第9節 近世墓

二基の近世墓が確認された（第51図）。

M-25グリッドの1号墓は50cm×40cmの楕円形の掘り込み内に頭骸が確認された。棺や副葬品は確認できなかった。

P-22グリッドの2号墓は掘り込みもはっきりせず、これも頭骸のみの確認である。顎面を下にしている。これも副葬品等は確認できなかった。

第10節 遺構外出土遺物

これまで各遺構およびそれに伴う遺物を概観してきたが、遺構外からも非常に多くの遺物が出土している。それらのうち復元資料を第65・66図（186～214）、破片資料を第89図～第101図（830～1164）に示した。

復元資料はグリッド毎に並べてあるため、時期は不統一である。おもなものについて以下に述べる。

189は諸説あり式期の浅鉢で、口縁部下に小孔が全周する。本資料は肩部が屈曲していない。すなわち極端に内湾した口縁部を有していないことから浅鉢であり、これこそが有孔浅鉢と呼ばれるべき資料である。同じように小孔を全周させてはいても有孔鉢付土器の祖形である有孔土器は壺の系譜である。一部に有孔土器までも含めて有孔浅鉢と呼称するむきもあるようだが、これらは明らかに区別されるべきものである。

中期終末の資料が多く、曾利V式（185・199）と加曾利E IV式（190～193・202・204・208・209・211）の両者がみられる。加曾利E IV式のうち192や211などは平行沈線による木の葉状あるいはV字状モチーフが表出され、終末期に位置付けられよう。

後期では、称名寺式期の資料が全く確認されないのが特徴である。前述したように加曾利E IV式終末の資料があり、これまで述べてきたように堀之内式でもとくに下北原式と呼ばれる一群のなかでも最も古く位置付けられ

る資料（78）などがありながら、称名寺式期がすっぽりと抜けている。本県全体でも称名寺式期の資料はほとんど確認されておらず、この時期があらためて大きな空白期であることが浮かび上がった。

堀之内式では胸部が丸く口縁部が開く器形（187・194・205・207）が目立つ。これらはいずれも口縁部は大きく開き、頸部がすばまり、その下に球形もしくは卵形の胸部が付くという形態である。頸部には沈線又は隆蒂が巡り、口縁部の無文帯と胸部文様帯を分けている。頸部には8の字または円形の貼付文が付き、それが胸部文様の起点となる。したがって、文様単位は貼付文と同数となる。文様起点部分からは、いずれも沈線を直線もしくは弧線で垂下させ、その間隙を斜線や渦巻きで満たすものである。いずれも繩文が地文となる。

破片資料は非常に量が多く、主なものについてのみ掲載した。第89図～第101図（830～1164）は図版作成階段で時期の古いものから並べることとしたが、作成後の破片の再確認によって、明らかに時期を誤認していたものや遺構出土のものが混ざっていたことなどがあって若干並びに不揃いが生じたことを記しておく。以下に概要を記す。

早期では押型文土器と撚糸文土器、貝殻腹縁文土器、条痕文土器が見られる。押型文土器（830～839）は山形押型文と楕円押型文の二種類が確認されるが、830は山形押型文を縦横の両方に押捺している。楕円押型文のうち838・839の2点は纖維を含んでいる。押型文土器でもやや新しく位置付けられようか。撚糸文土器は1点だけの確認である。840は条に対する筋が右傾し、しかもその筋が間延びしていることから一段の撚糸Rを軸にR捲きしたものである。纖維は含んでおらず、口唇部にも同様な施文が見られる。口縁部破片であり、口縁部形態は波状を呈することから、草創期の撚糸文土器とは明らかに別種としてここでは押型文土器併行期に位置付けたい。貝殻腹縁文（841～846）は6点だけであるが、いずれも纖維を含んでおり貝殻沈線文系土器群の後半に位置付けられるよう。条痕文土器（847～860）は、条痕だけのものと断面が锐角三角形の刺突具による連続刺突の施されるものとがあるが、あるいは部位の違いなのかもしれない。内面は条痕と指頭圧痕の二種類がみられる。いずれも纖維を含んでいる。これらは貝殻条痕文系土器群に位置付けられる。

前期では、861～862にコンバス文がみられる。胎土やコンバス文の施文方法などが類似しており、同一個体の可能性が強い。胎土に纖維を含んでおり、関山式～黒浜式に位置付けられよう。863～865は、一段の撚糸を2条1単位として撚糸文としたもので、胎土に纖維を含んでいる。黒浜式期に位置付けられよう。866～869は半截竹管による連続刺突を口縁部に有する一群で、半截竹管以下は纖維が施されている。いずれも纖維を含んでおり、黒浜式併行期に位置付けられよう。870～877は纖維もしくは無文で、これも胎土に纖維を含んでいる。やはり黒浜式併行期であろう。878は無纖維であり、口縁部の連続刺突から諸磧a式への位置付けが妥当だろう。879～894は諸磧b式、895～934は諸磧c式である。諸磧c式では、やはり結節状浮線文や小型のボタン状貼付文あるいは綾杉状沈線文がほとんどで、下島式にみられるような大型の貼付文は皆無である。935・936は半截竹管による連続刺突と三角形印刻の施されるもので、中部高地の前期末に位置付けられる。龍巣式あるいは晴ヶ峯式と呼ばれる一群である。937・938は沈線による斜格子が特徴的で、かつて踊場式と呼ばれた一群である。やはり前期末に位置付けられよう。

中期以降の資料は、非常に豊富であり、遺構からの出土資料も多いため、ごく一部をかいつまんで記述する。曾利式以前の資料は極端に少なく、五領ヶ台式（939～941）が僅か3片、井戸尻式（942）が1片出土したに過ぎない。なお、79は当初35号土坑として調査したが、整理段階で土坑ではないと判断されたため遺構外遺物として報告する。

曾利式土器（943～971）ではIV式以降の量が多くなり、V式が圧倒的に多い。への字文には太線・細線・櫛状工具による多条線などのバリエーションがみられる。加曾利E IV式（972～992）でも終末併行期の資料が多い。微隆起線や沈線によるU字状モチーフや逆U字状区画などが目立つ。遺構外資料でも、称名寺式と呼べる資料はない。堀之内式期（993～1061）ではI式、II式の両者がみられるが、前者がほとんどである。なかでも、遺構での傾向と同様に下北原式と呼ばれる一群が多い。加曾利B式（1062～1068）は非常に出土量が少ない。

晩期ではやはり清水天王山式（1073～1080）が非常に多く、それに併行する刻目凸蒂文（1069～1072）、雷文

(1081～1085) や北陸系 (1086・1087)、中部高地系 (1088) 等、遺構からの出土状況と同じである。

注口土器の出土量が非常に多いことも、本遺跡の特徴である。復元不可能な資料を一括して掲載 (1089～1164) したが、そのほとんどが堀之内式である。1089は唯一の深鉢形注口土器で、中期終末に位置付けられるものであろう。注口部の破片では、多くの資料が把手と連結しており、これは堀之内式でも古い方にみられる傾向だといふ。また、成形法では、胴部に穴を空け、そこに円筒を付けることになるが、接着後のナデが不十分であるために円筒の先端がそのまま残っているものが 4 点 (1099・1109・1114・1118) 認められる。また、1114は円筒の外側にさらに粘土を張り付けたもので、あたかも二重の注口部であるかのようである。1154・1159は加曾利 B 式である。

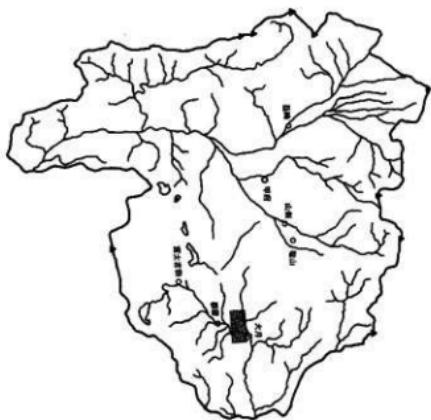
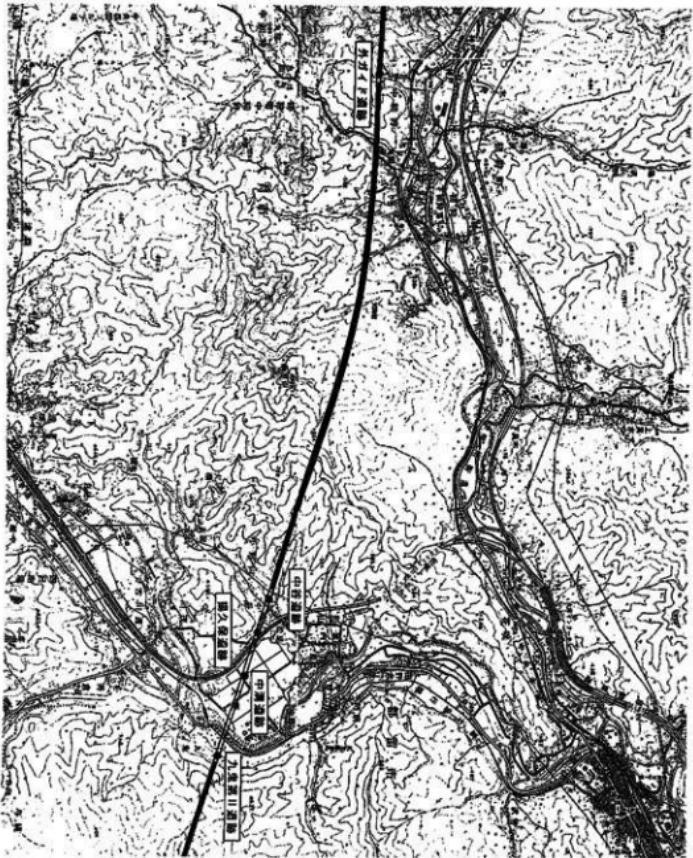
その他、土製品がある。1168は唯一の有孔球状土製品である。土製円盤 (1169～1177) はいずれも土器片を擦って円形に整形したものである。蓋も 2 点 (1180・1181) 確認されている。土製円盤以外は後期に位置付けられるものであろう。1179は14・15号配石からの出土であるが、円筒状を呈し現存部で 2 ヶ所に穿孔がある。容器とは考えにくい。

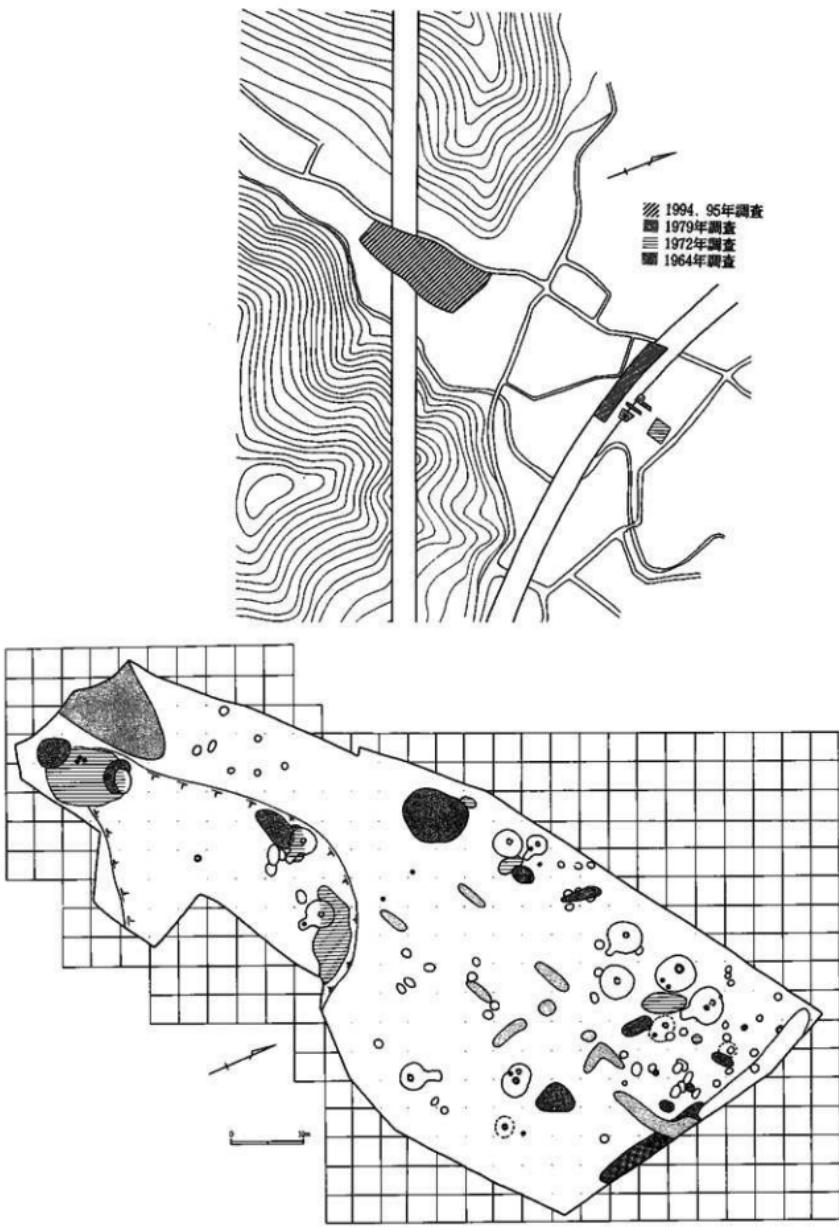
古代以降の遺物も僅かながら出土している。溝や配石と関連付けられるものであろう。須恵器 (1182～1186) のうち、1184は奈良時代である。土師器 (1187) は11世紀代であろう。1191は常滑で13世紀代への位置付け、1197は瀬戸美濃系で江戸時代後半であろう。また、溝出土 (1198) と同様な古瀬戸が目立つ。1199～1204はいずれも印花文瓶子の破片であり14世紀代であろう。1205・1206は伊万里染付であり、とくに1206は底部からの立ち上がりの角度が特徴的で、筒挽と呼ばれる小型挽である。幕末期の所産か。

石器は非常に多い。器種には石鎌、ドリル、搔器、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石・凹石、石皿、多孔石、石棒、たたき石、石鍤、特殊磨石、砥石、加工痕ある剥片等がみられる。これらの多くは遺構外からの出土である。石器の場合、器種毎に主に使用される場所が違うと想像される。石皿と石鎌とではおのずから使用場所が違つてこようが、石鎌の保管は遺構内でも行われるだろうし、石皿を住居外に出して使用することもある。とすれば、出土した場所（遺構の内外）のもつ意味の重要性には疑問を感じないこともないが、器種毎の遺構外からの出土比率を参考までに記しておく。石鎌71%、ドリル89%、搔器 100%、打製石斧78%、磨製石斧58%、磨石・凹石49%、石皿21%、多孔石17%、石棒50%、たたき石 0%、石匙78%、石鍤75%、特殊磨石60%、加工痕ある剥片69%である。

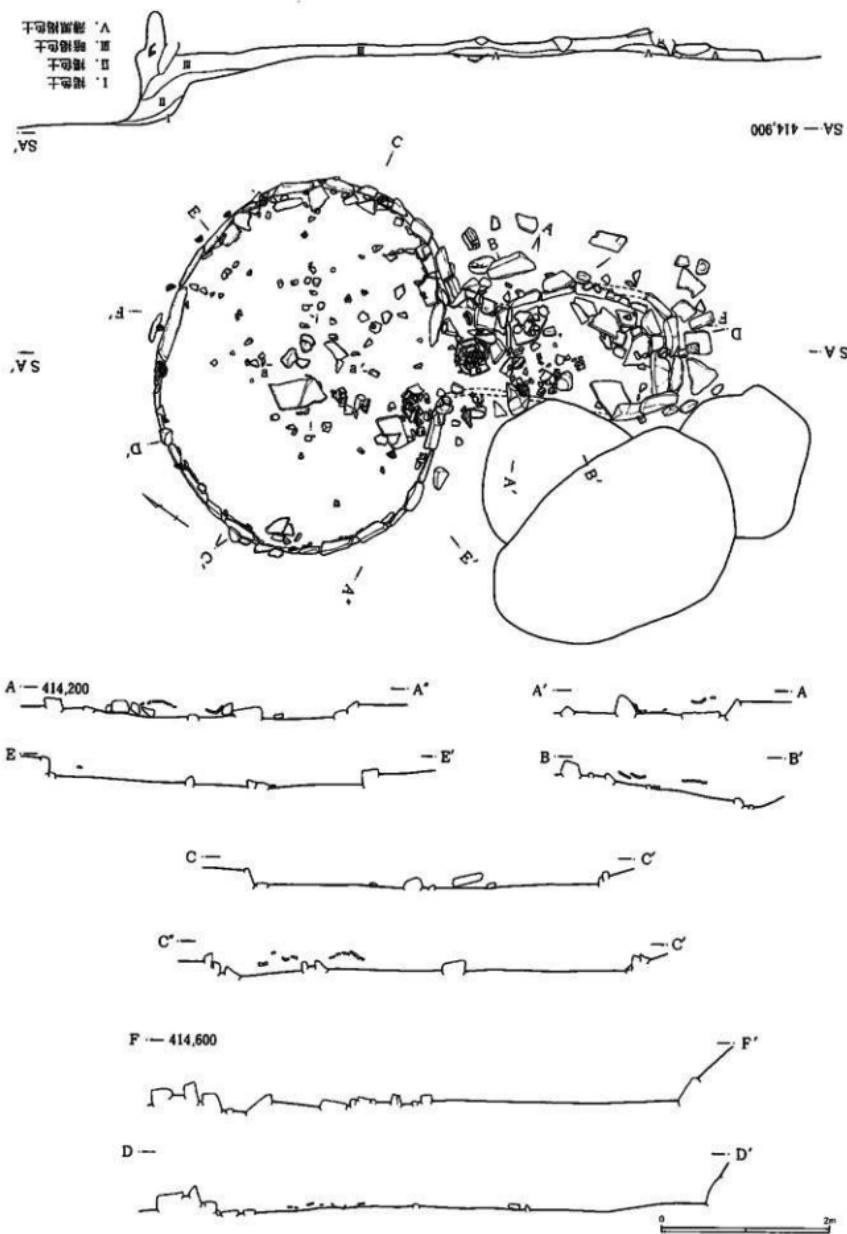
なお、1368はK24グリッドから出土した局部磨製石鎌で、1点だけの出土である。831、834～836などが同じグリッドあるいは周辺からの出土であり、押型文土器に伴うものと考えられる。

図11 遊樂施設

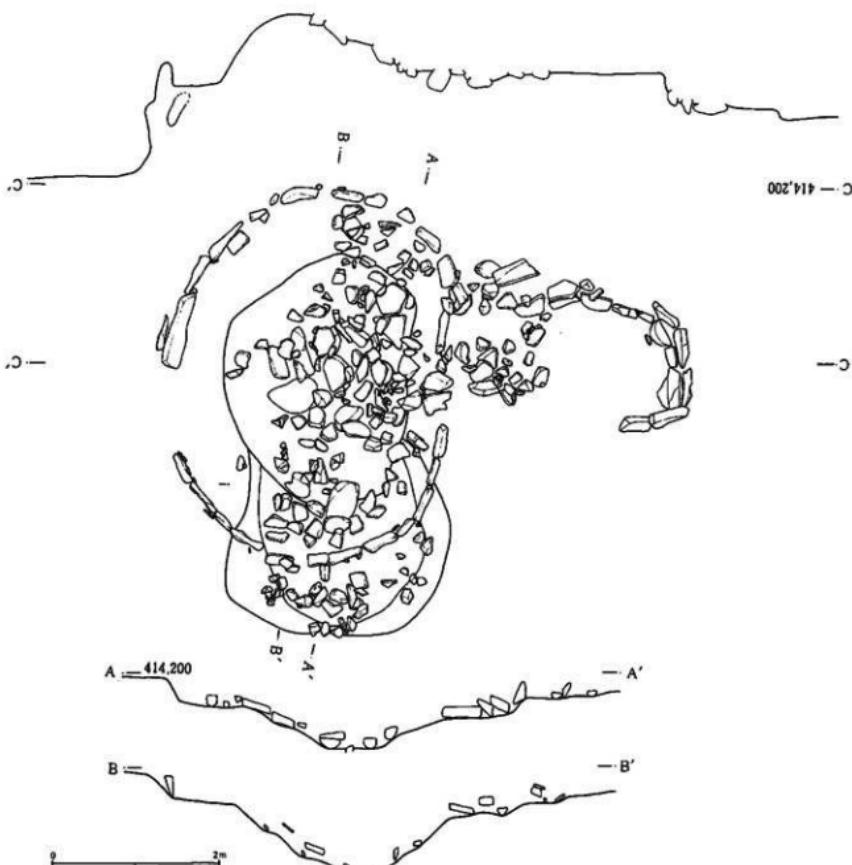




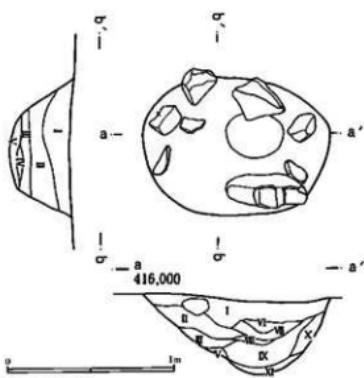
第2図 調査位置図及び全体図



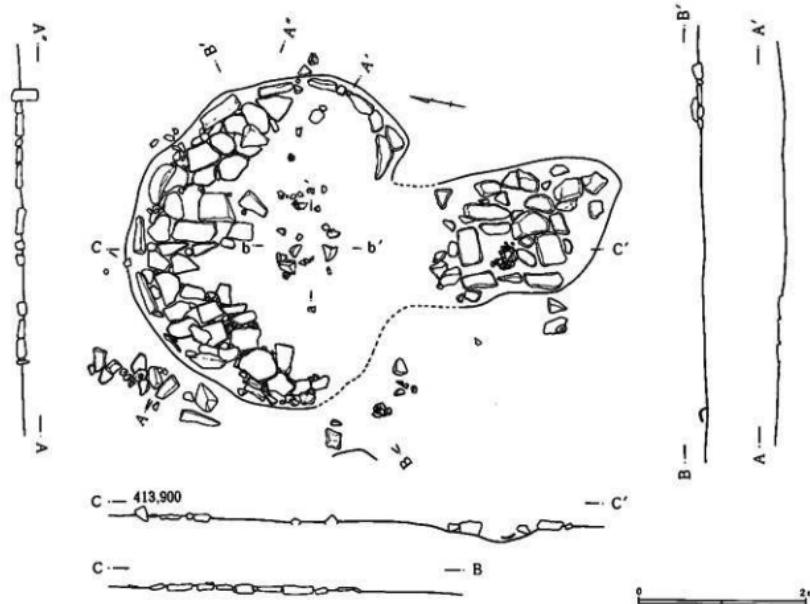
第3図 1号住居跡



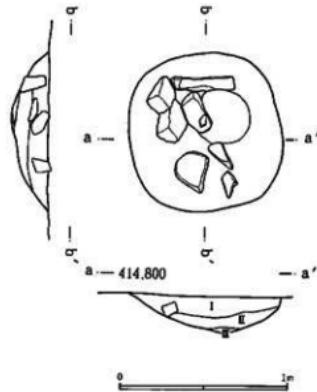
- I …暗褐色粘質土+わずかにカーボン
- II …暗褐色粘質土+焼土粒+カーボン
- III …黒色土+わずかな焼土
- IV …燒土
- V …黒色土
- VI …黒色粘質土
- IX …燒土+灰
- X …黒色粘質土
- XI …粘質土+カーボン



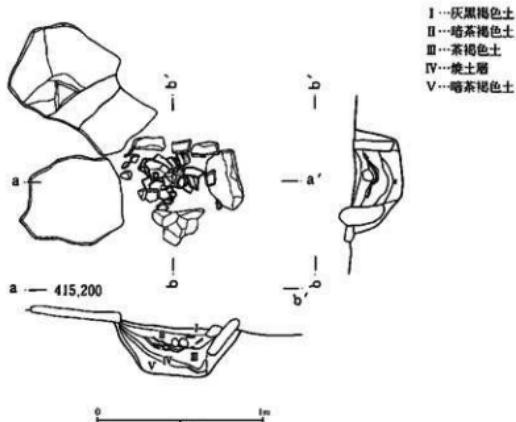
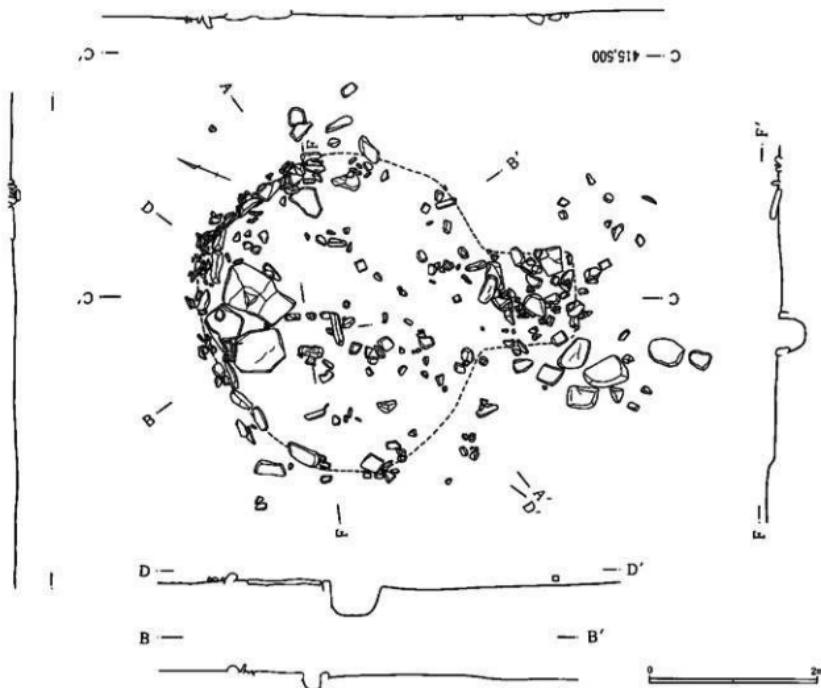
第4図 1号住居跡下部



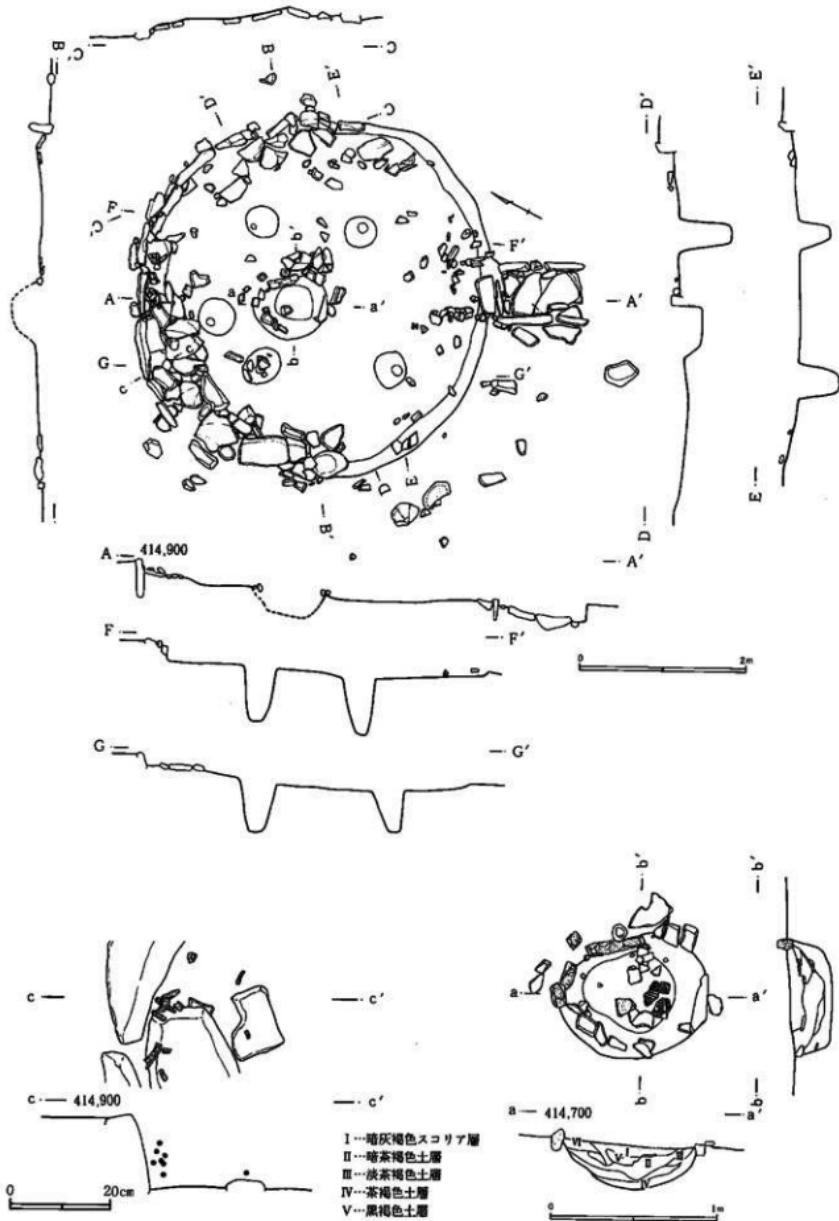
I … 増褐色粘質土
 (スコリア大粒含む)
 II … 増褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土
 (わずかに焼土粒子含む)
 III … 焼土層



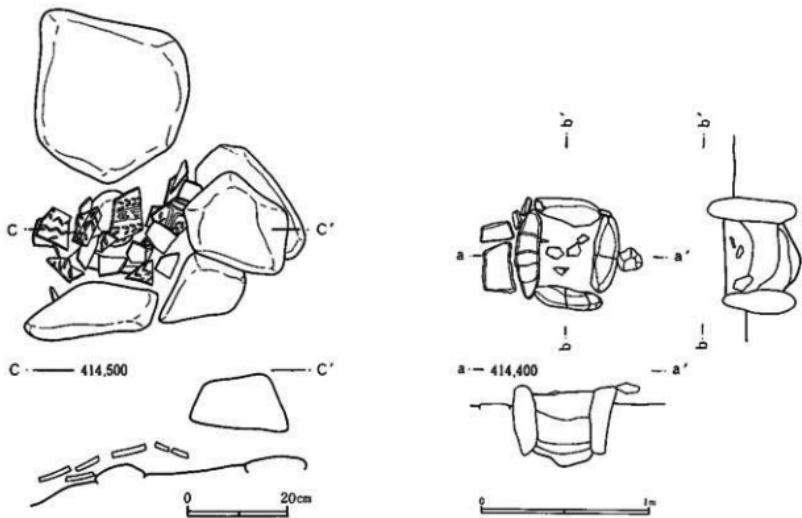
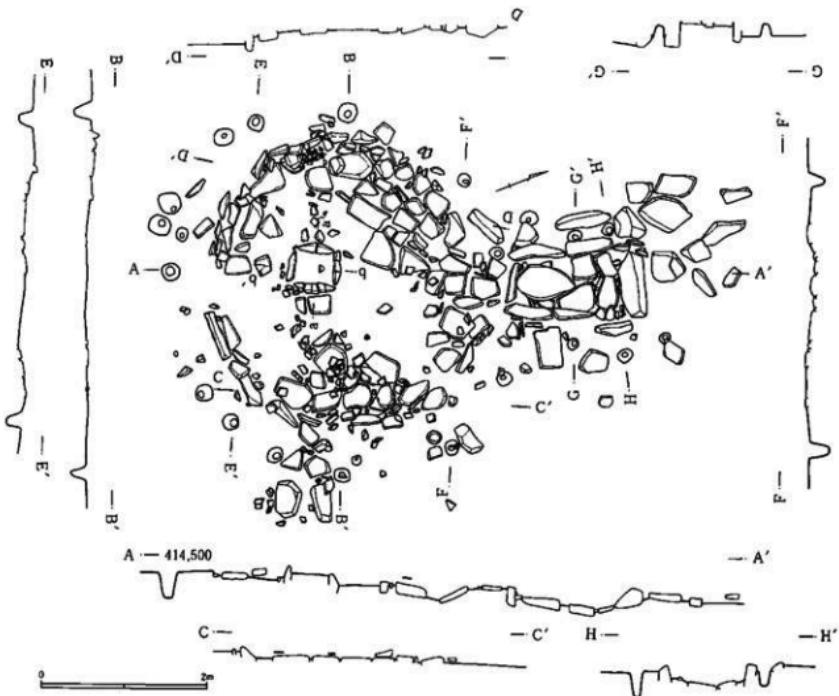
第5図 2号住居跡



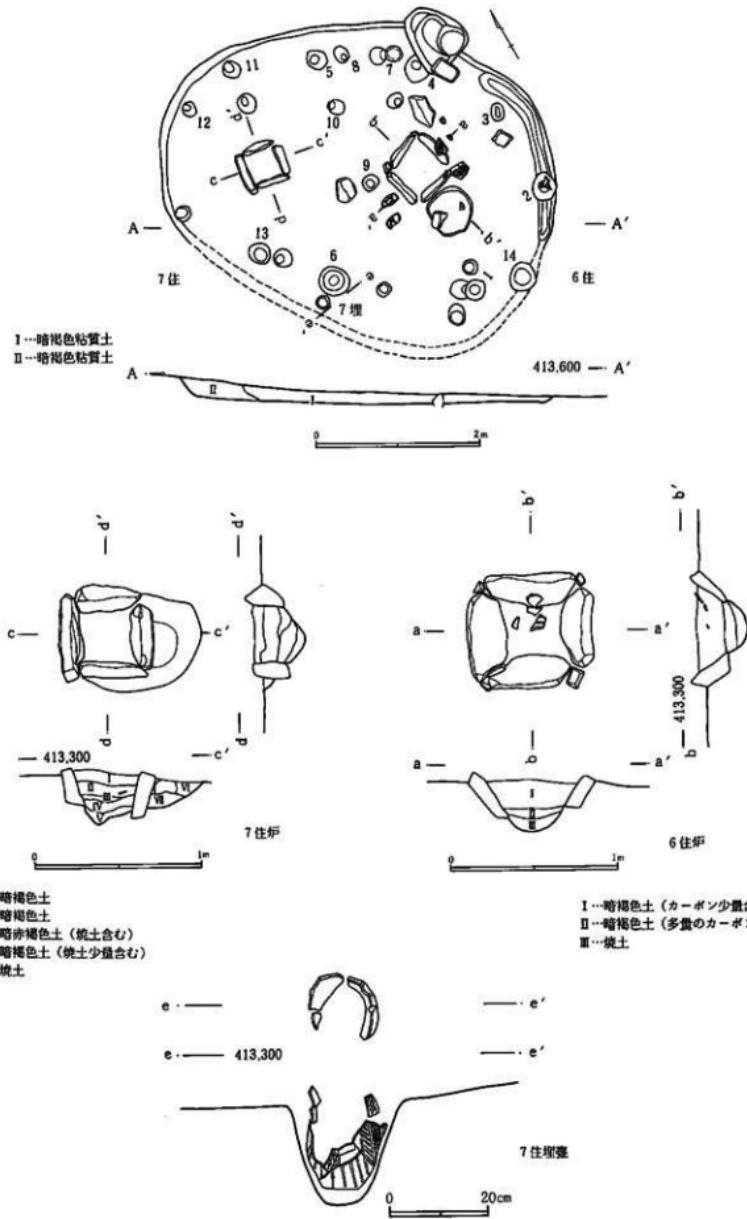
第6図 3号住居跡



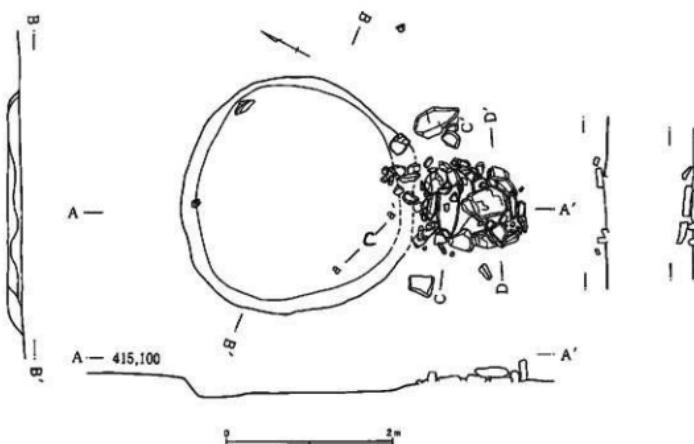
第7図 4号住居跡



第8図 5号住居跡



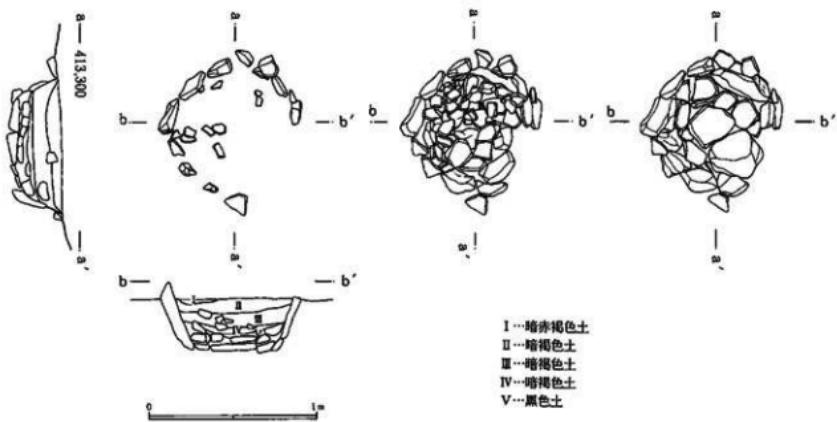
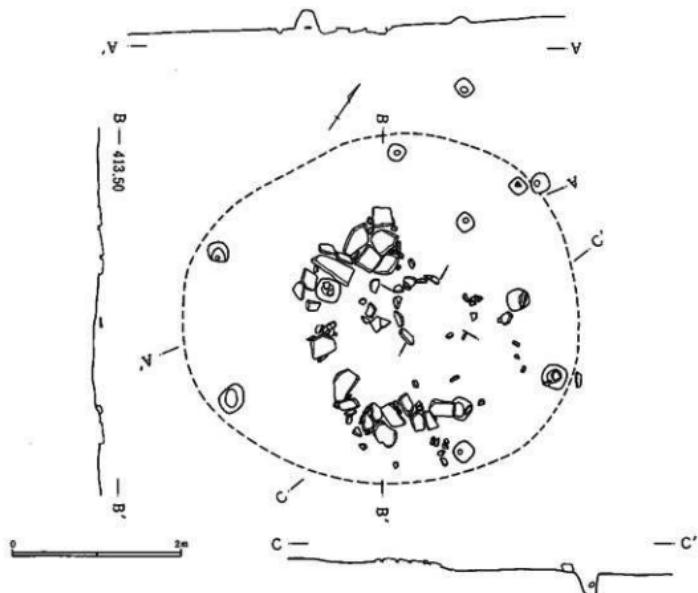
第9図 6号・7号住居跡



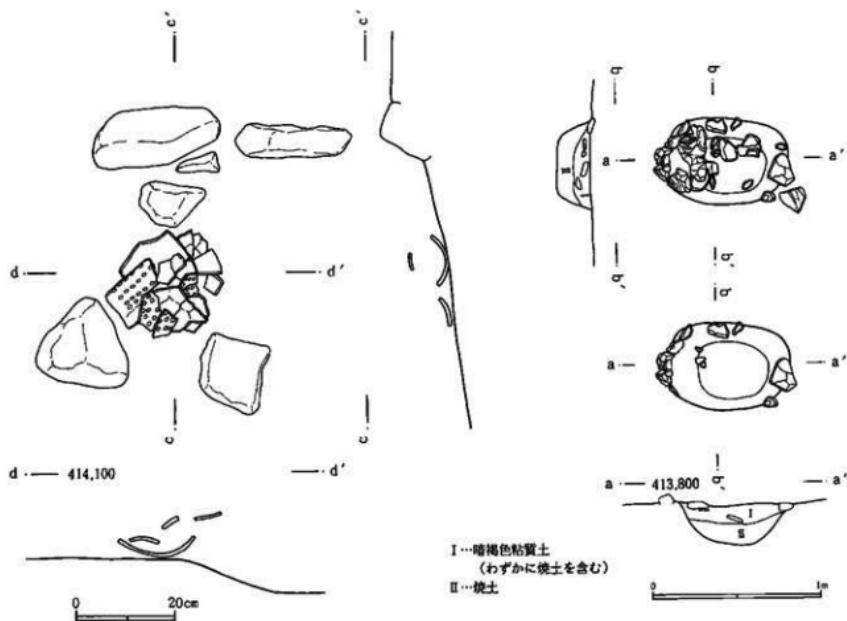
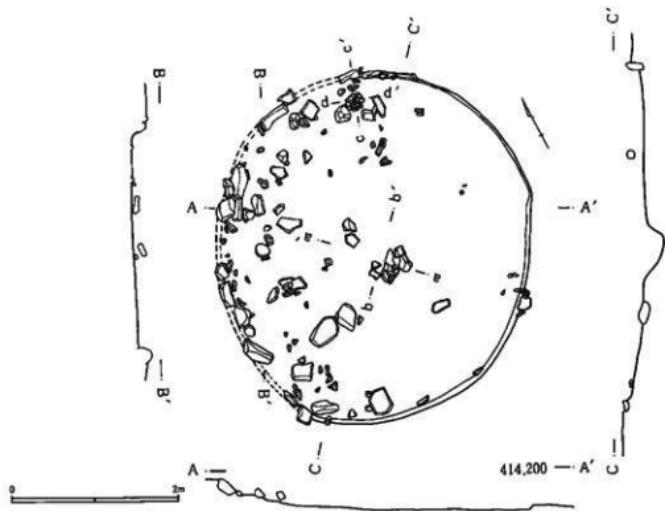
a · —— 414,800 —— · a'



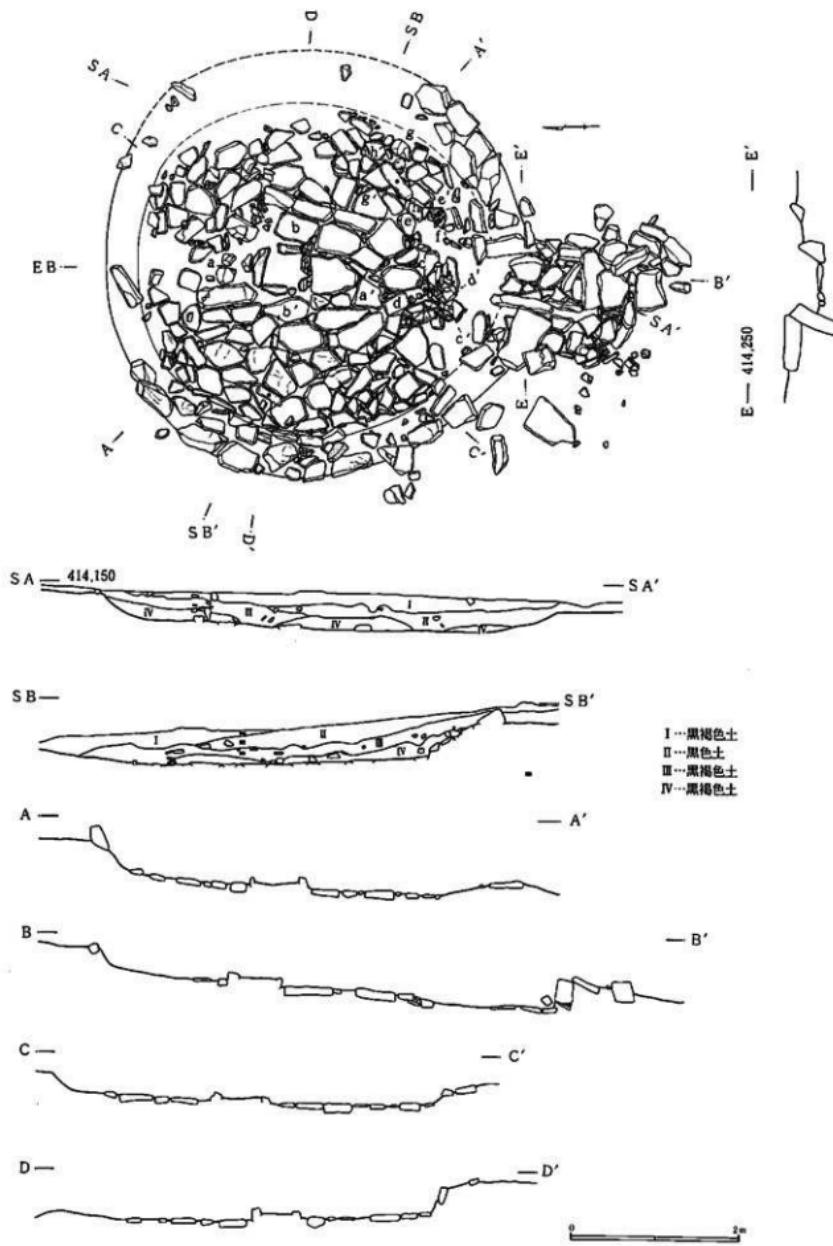
第10図 9号住居跡



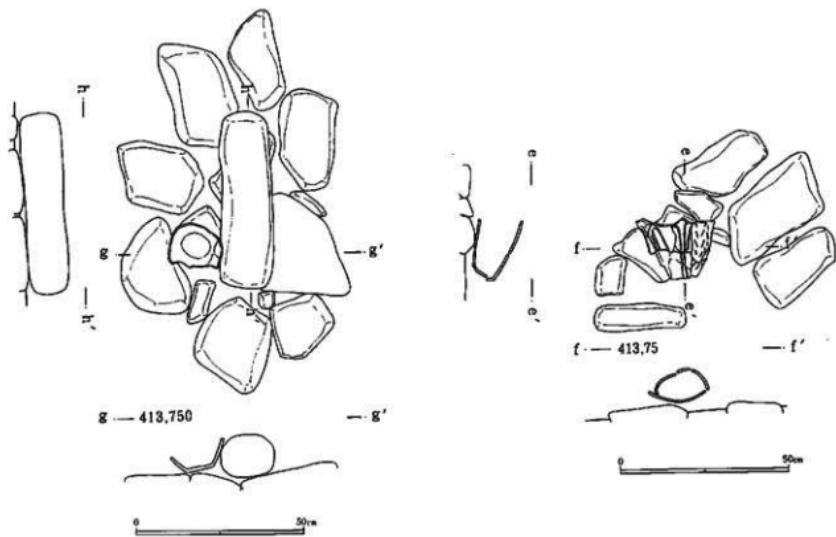
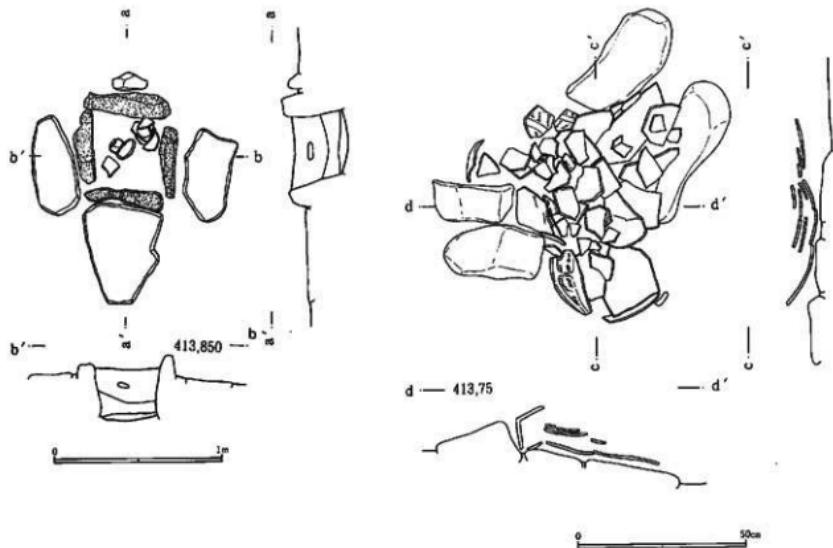
第11図 10号住居跡



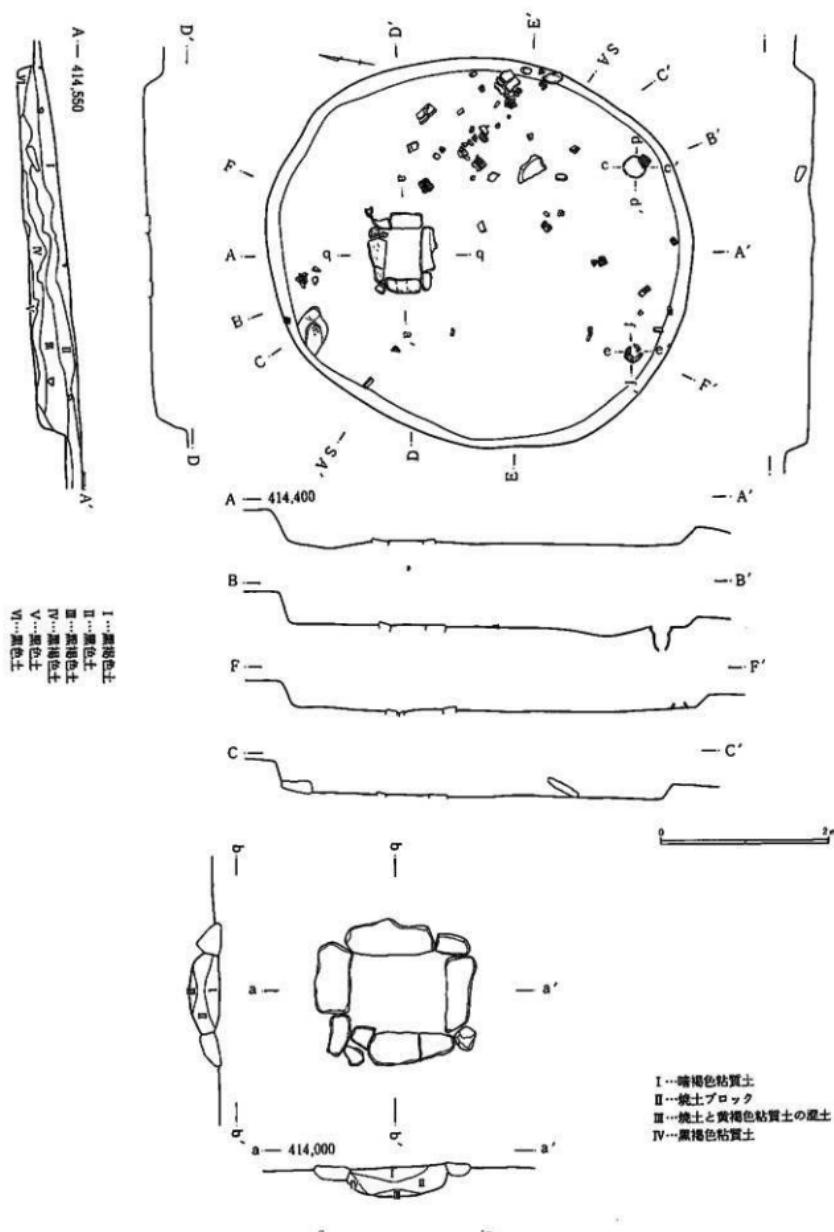
第12図 11号住居跡



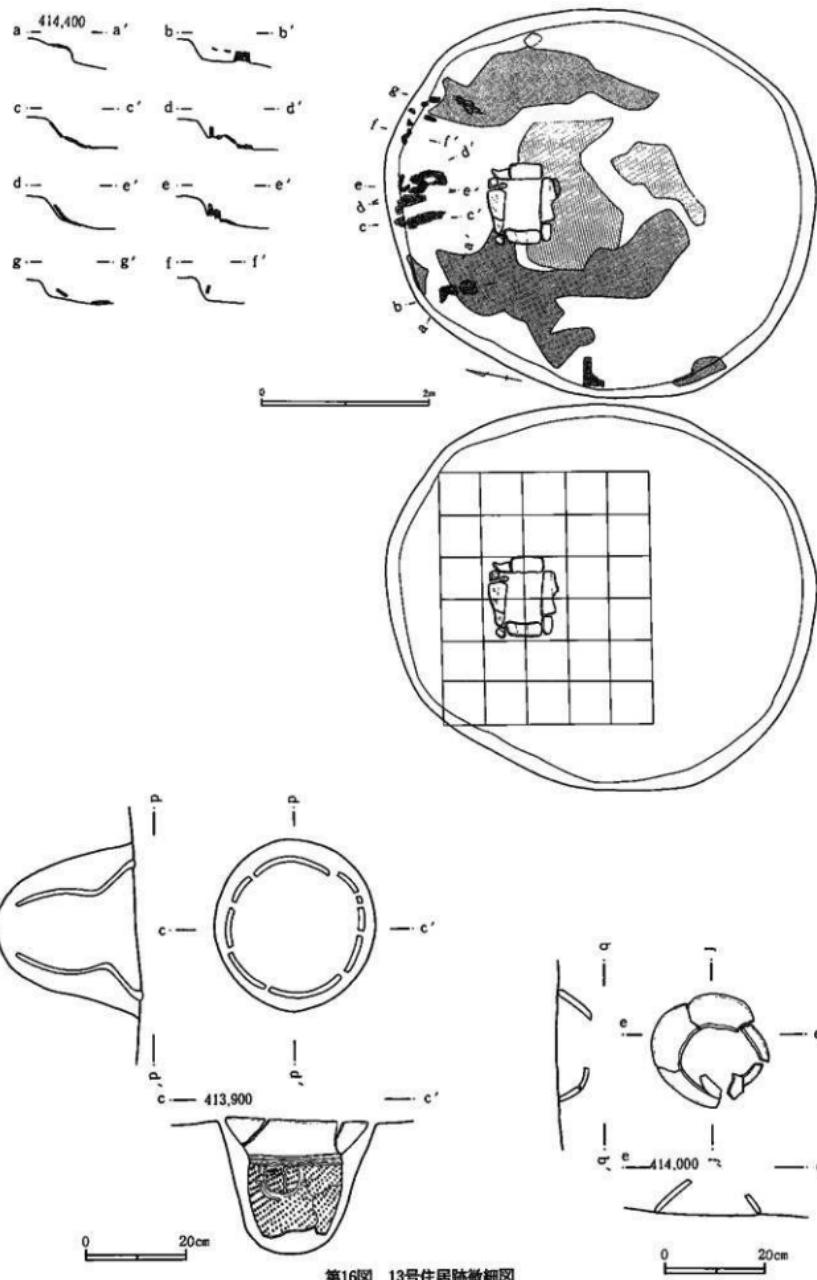
第13図 12号住居跡



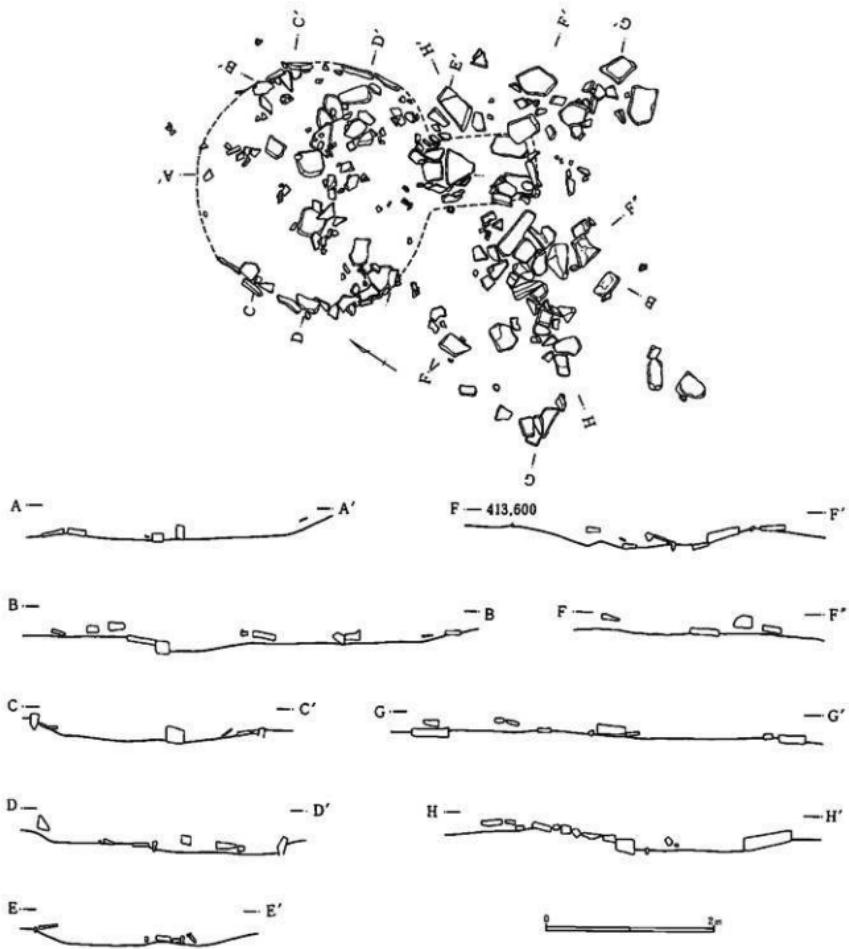
第14圖 12號住居跡徵細圖



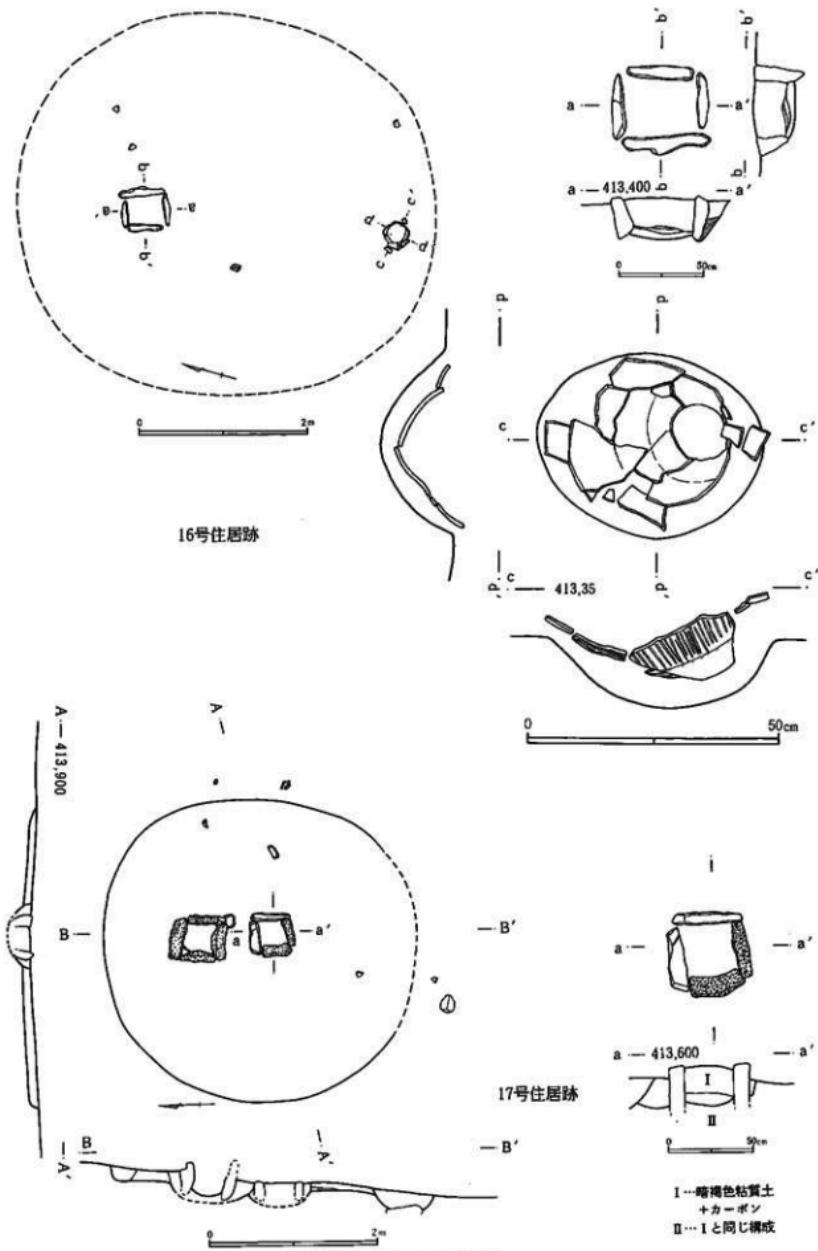
第15図 13号住居跡



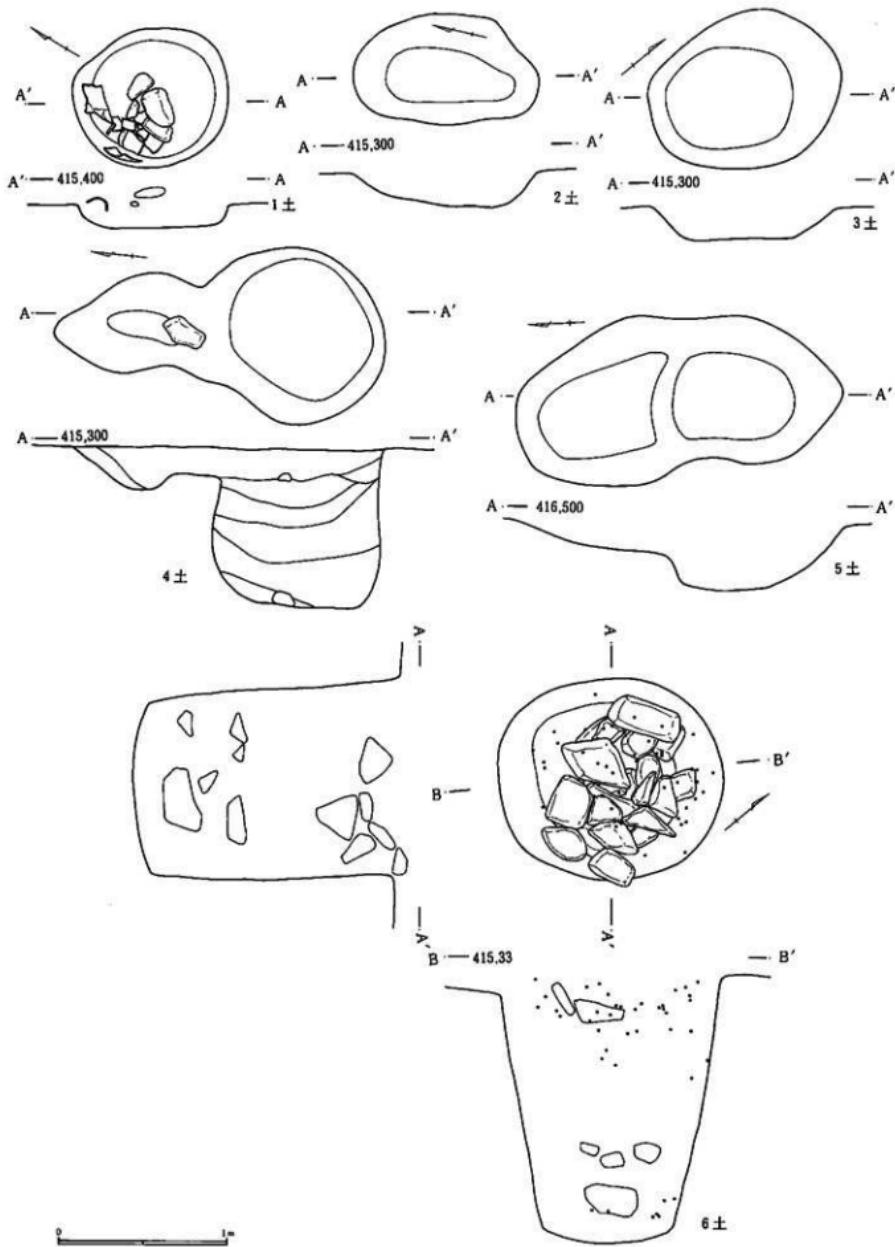
第16図 13号住居跡概細図



第17図 15号住居跡

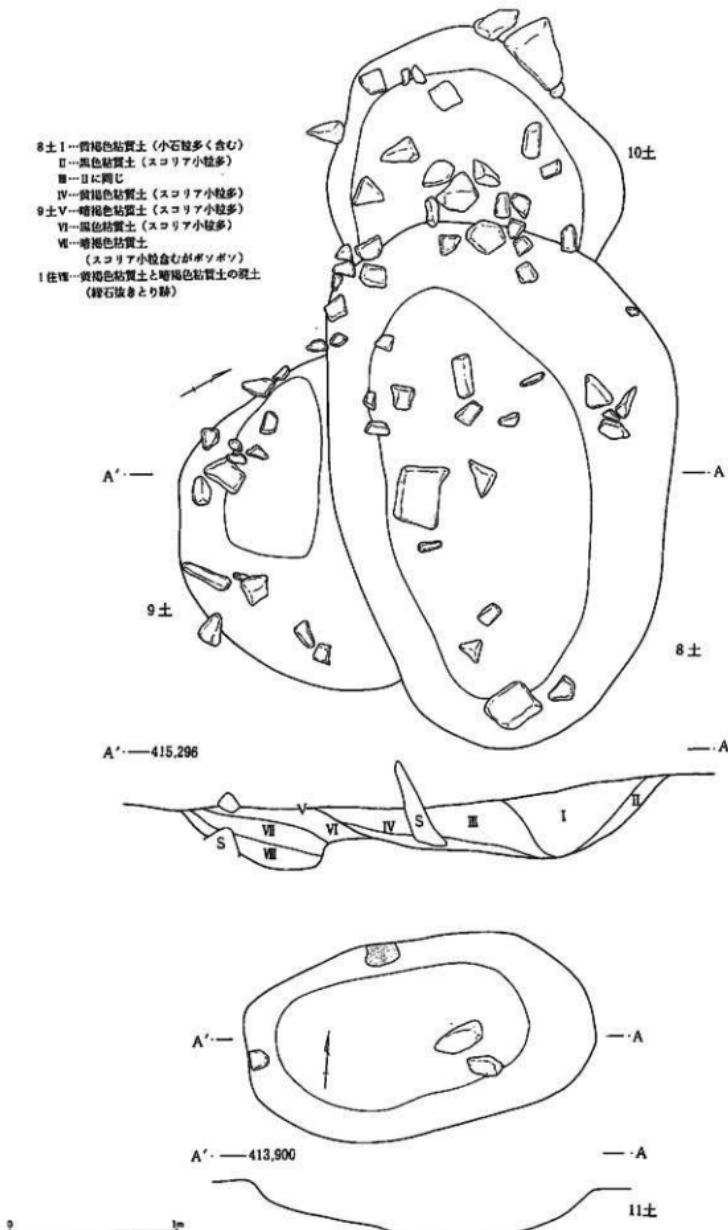


第18図 16号・17号住居跡

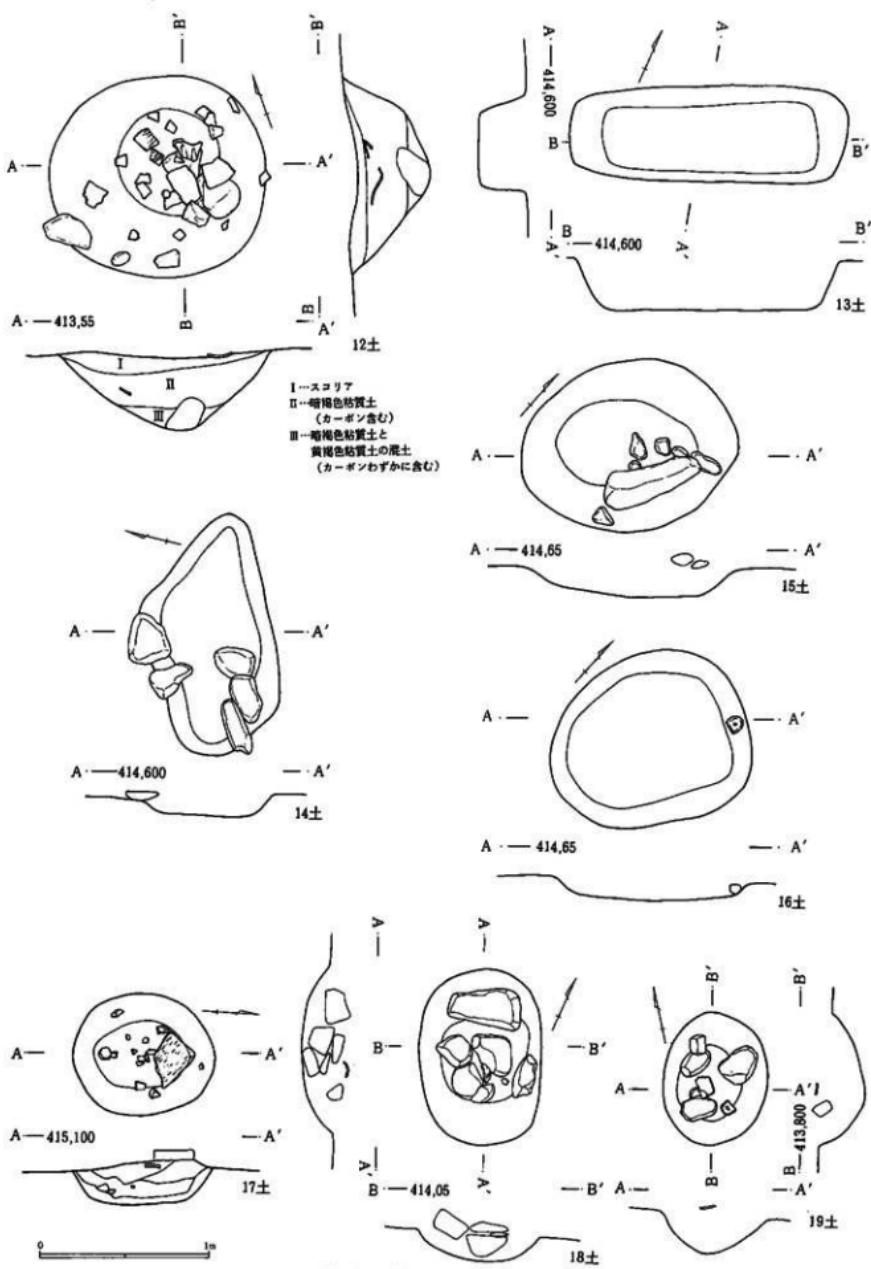


第19図 土坑1（1号～6号）

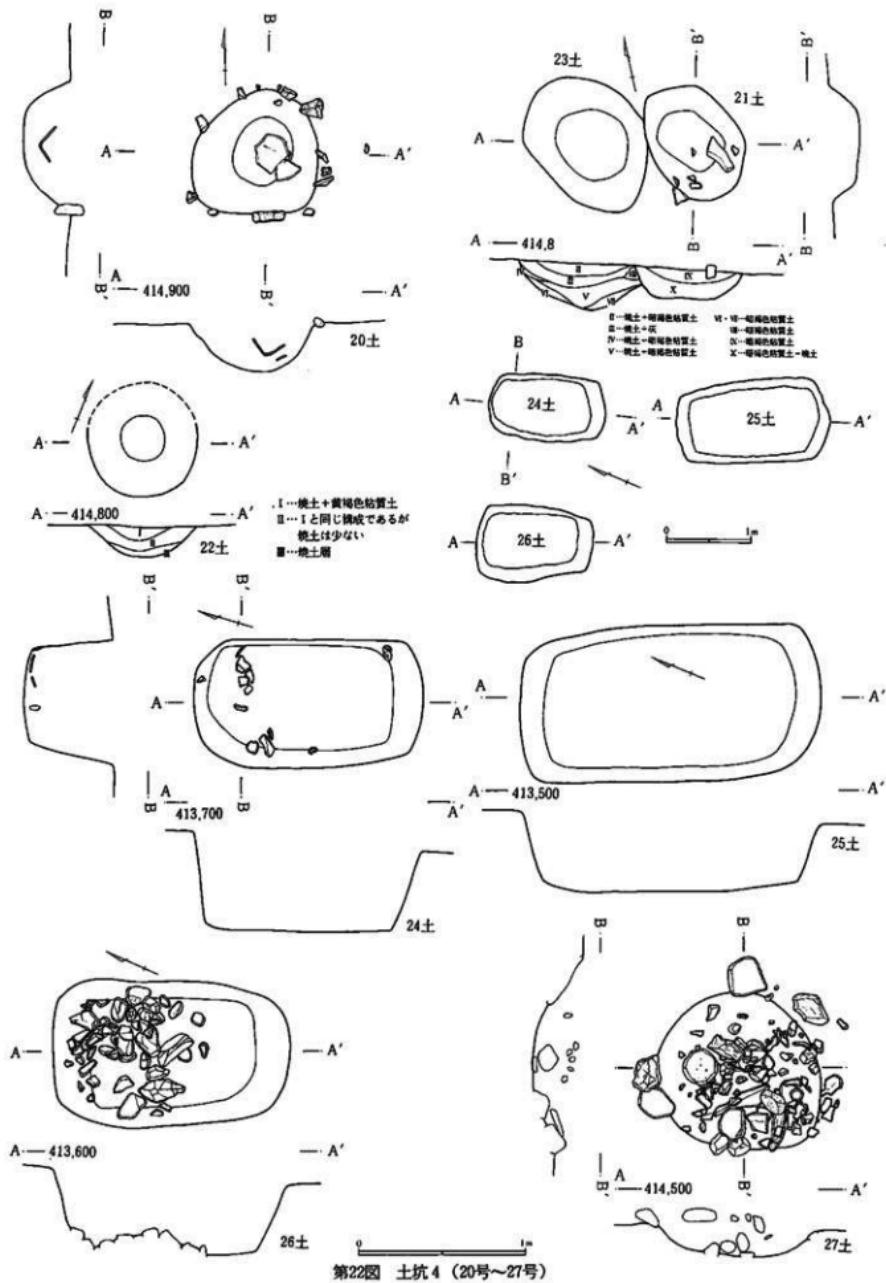
8土 I…黄褐色粘質土（小石粒多く含む）
 II…黒色粘質土（スコリア小粒多）
 III…IIに同じ
 IV…黄褐色粘質土（スコリア小粒多）
 9土 V…黄褐色粘質土（スコリア小粒多）
 VI…黑色粘質土（スコリア小粒多）
 VII…暗褐色粘質土
 （スコリア小粒含むがボソボソ）
 1往復…黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混土
 （鉄石抜きとり跡）



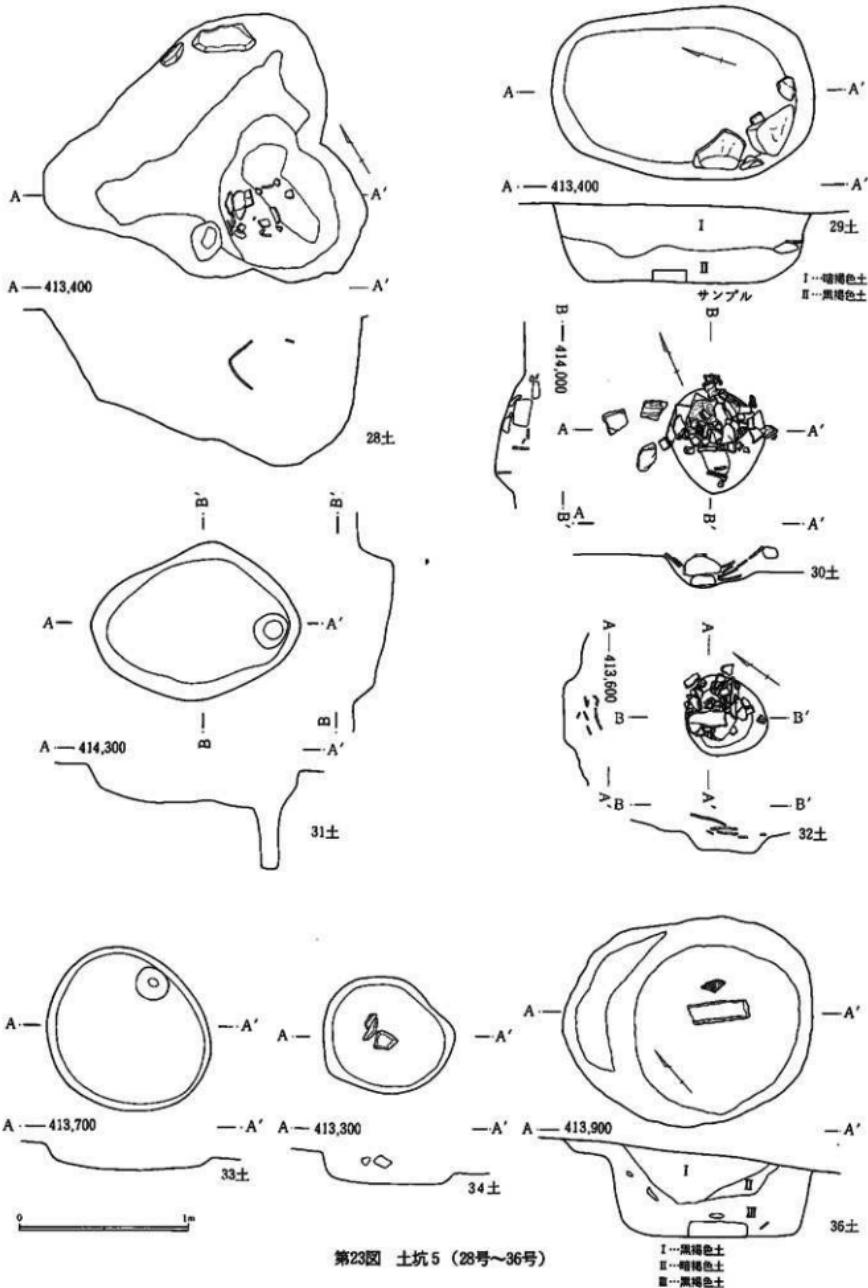
第20図 土坑2（8号～11号）



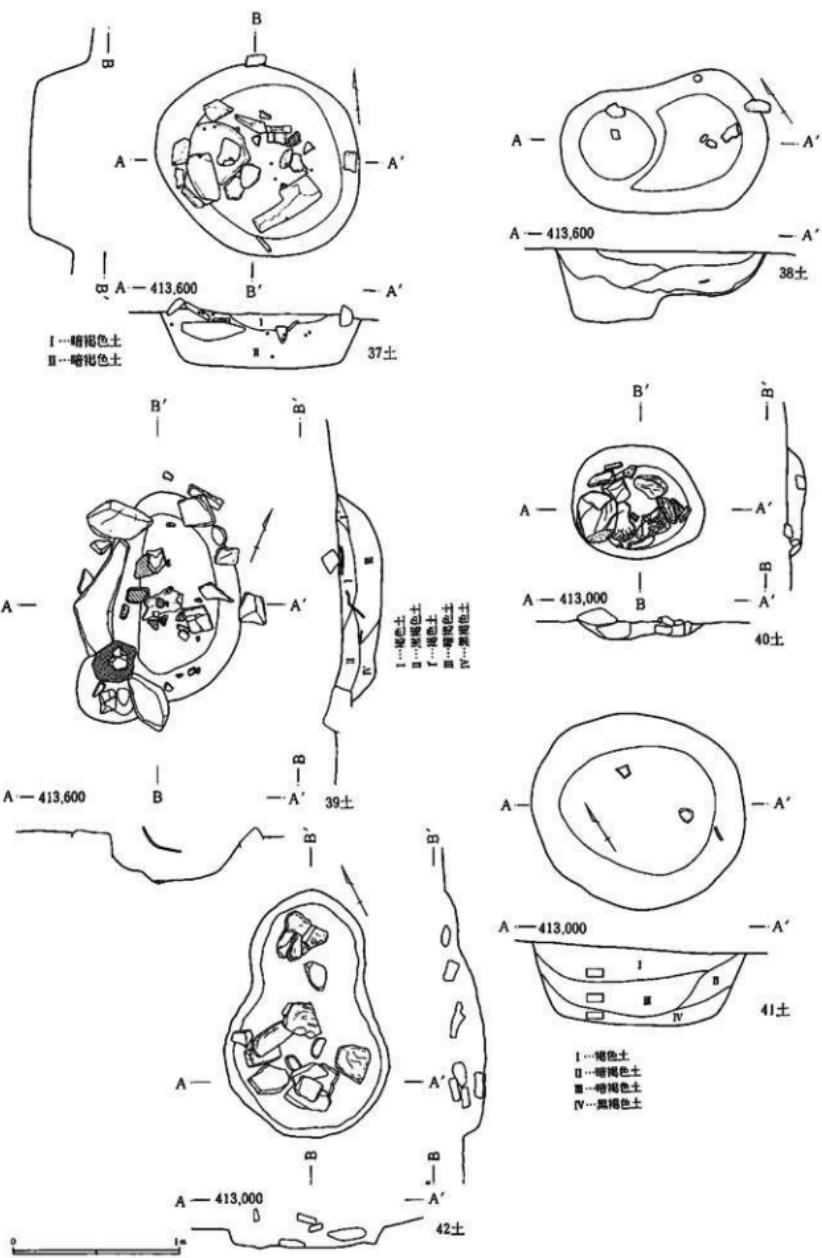
第21図 土坑3 (12号～19号)



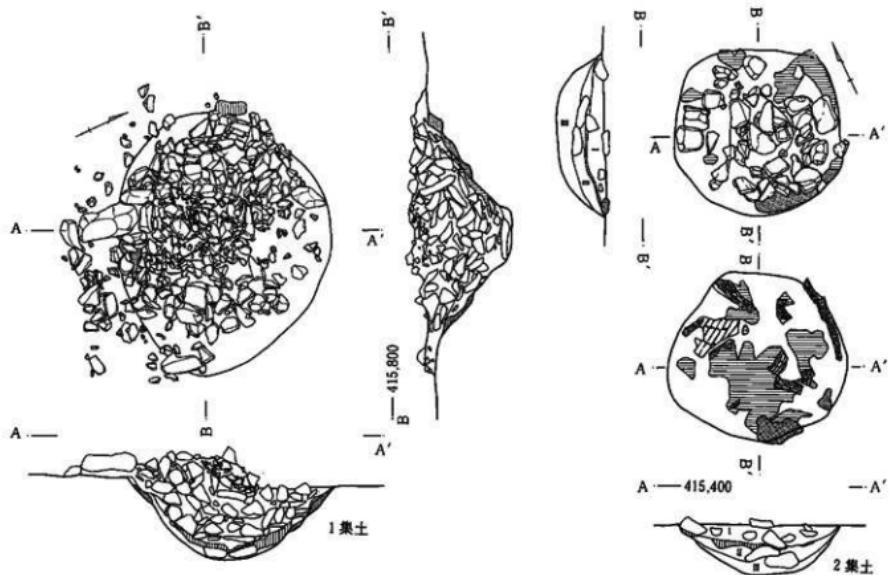
第22図 土坑4 (20号～27号)



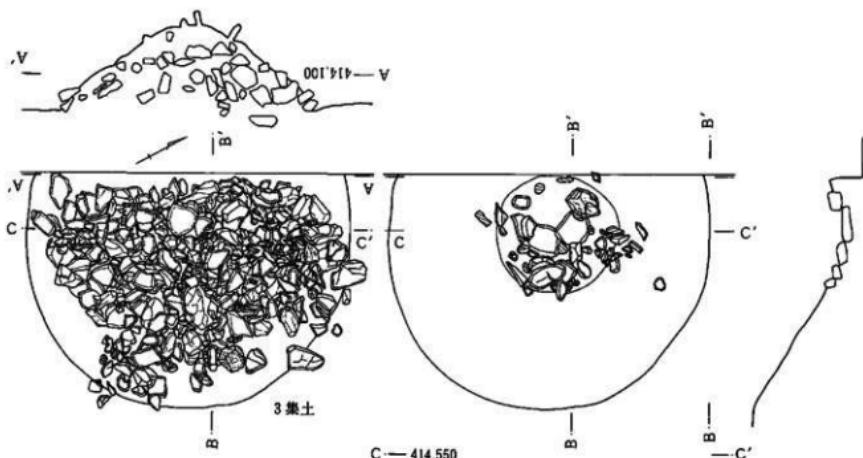
第23図 土坑5 (28号～36号)



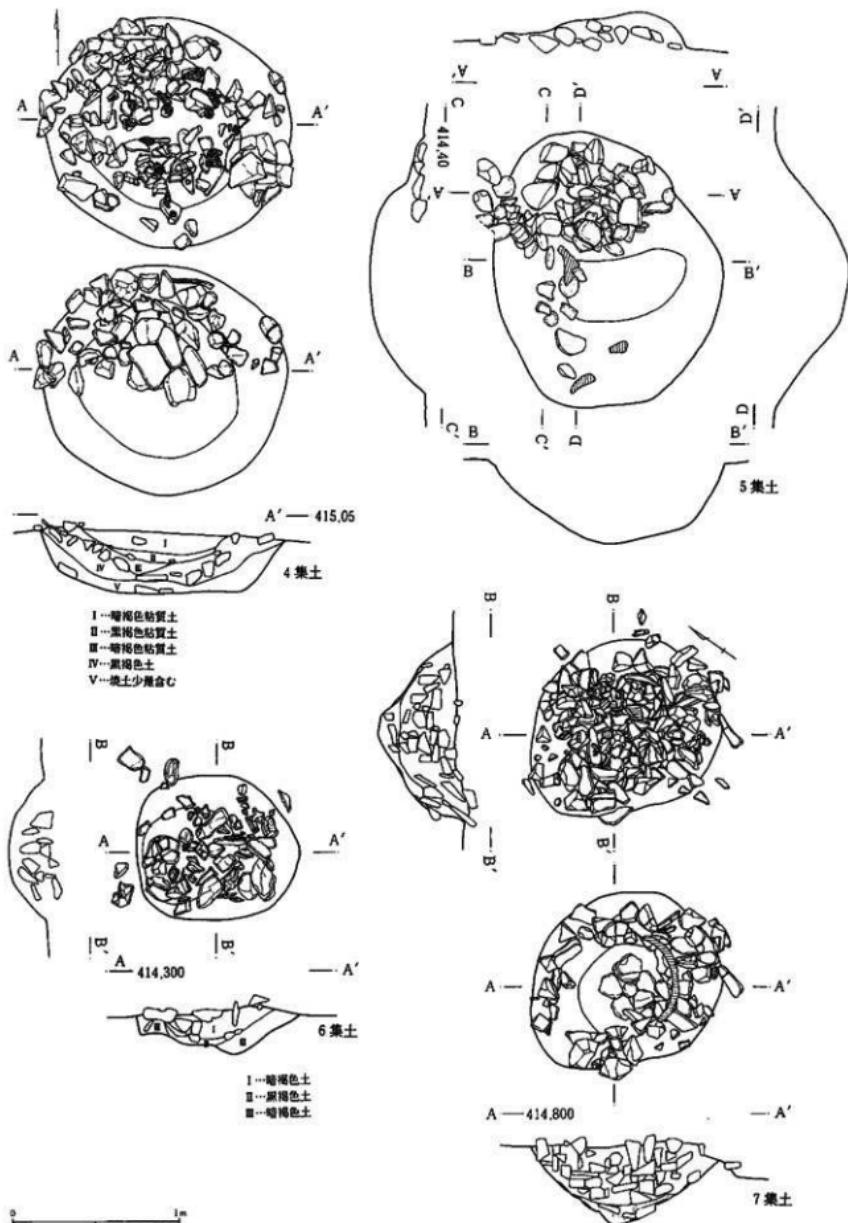
第24図 土坑6 (37号~42号)



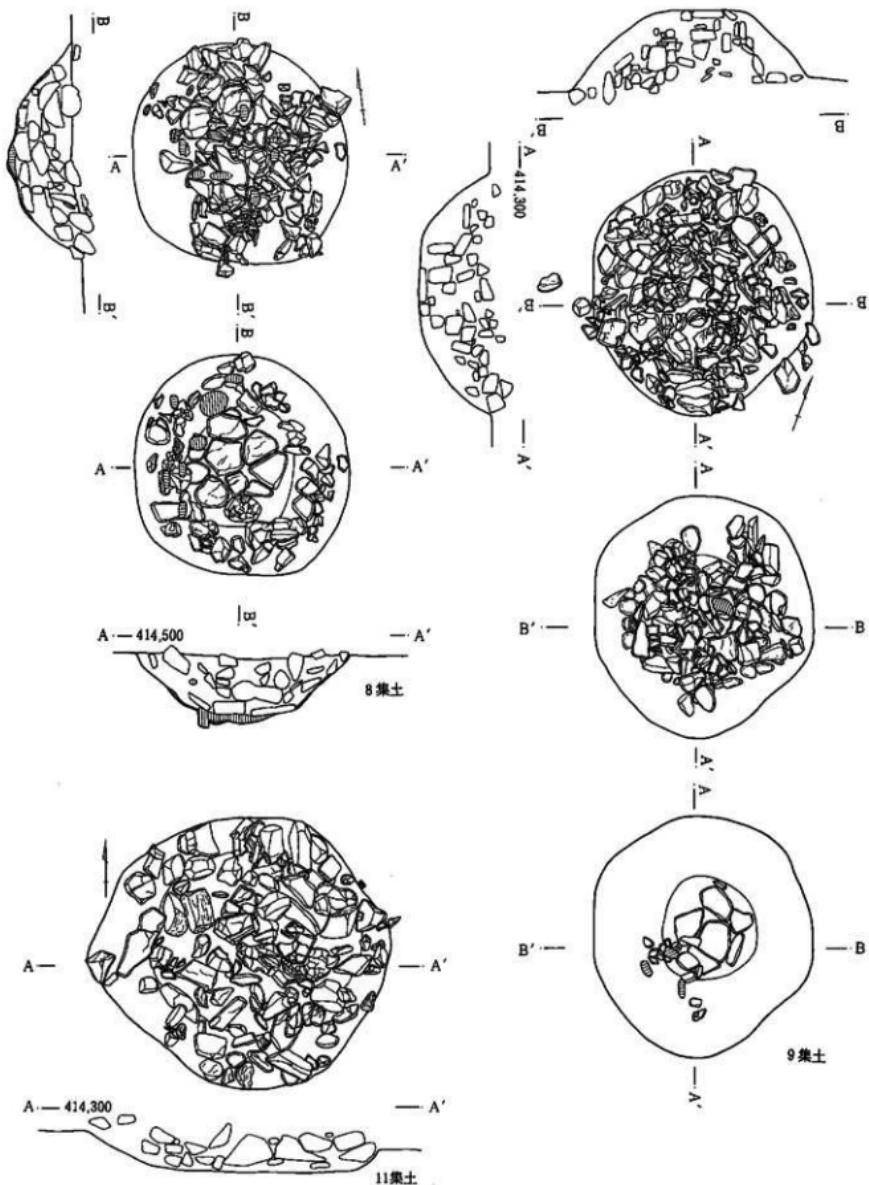
I…暗茶褐色土層
II…淡茶褐色土層
III…暗茶褐色土層



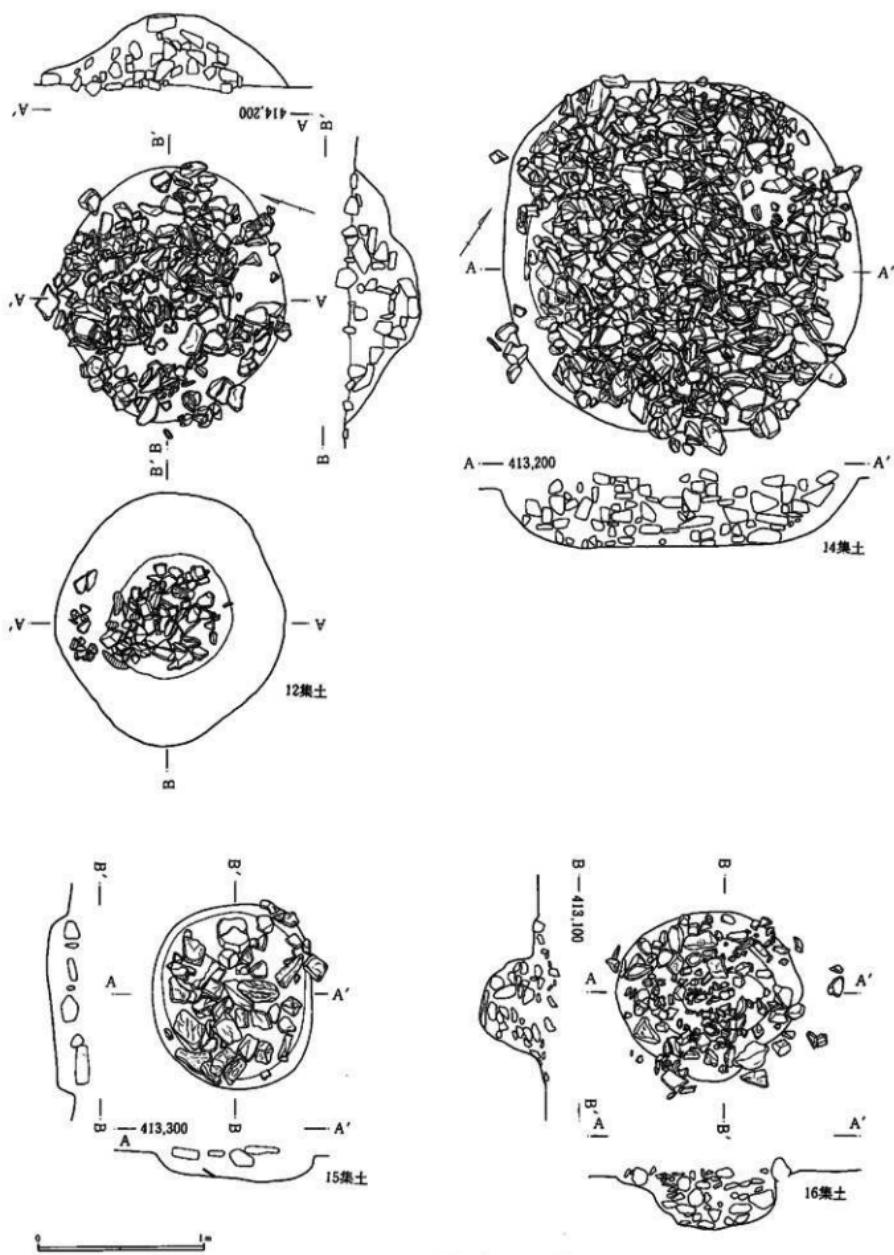
第25図 集石土坑1（1号～3号）



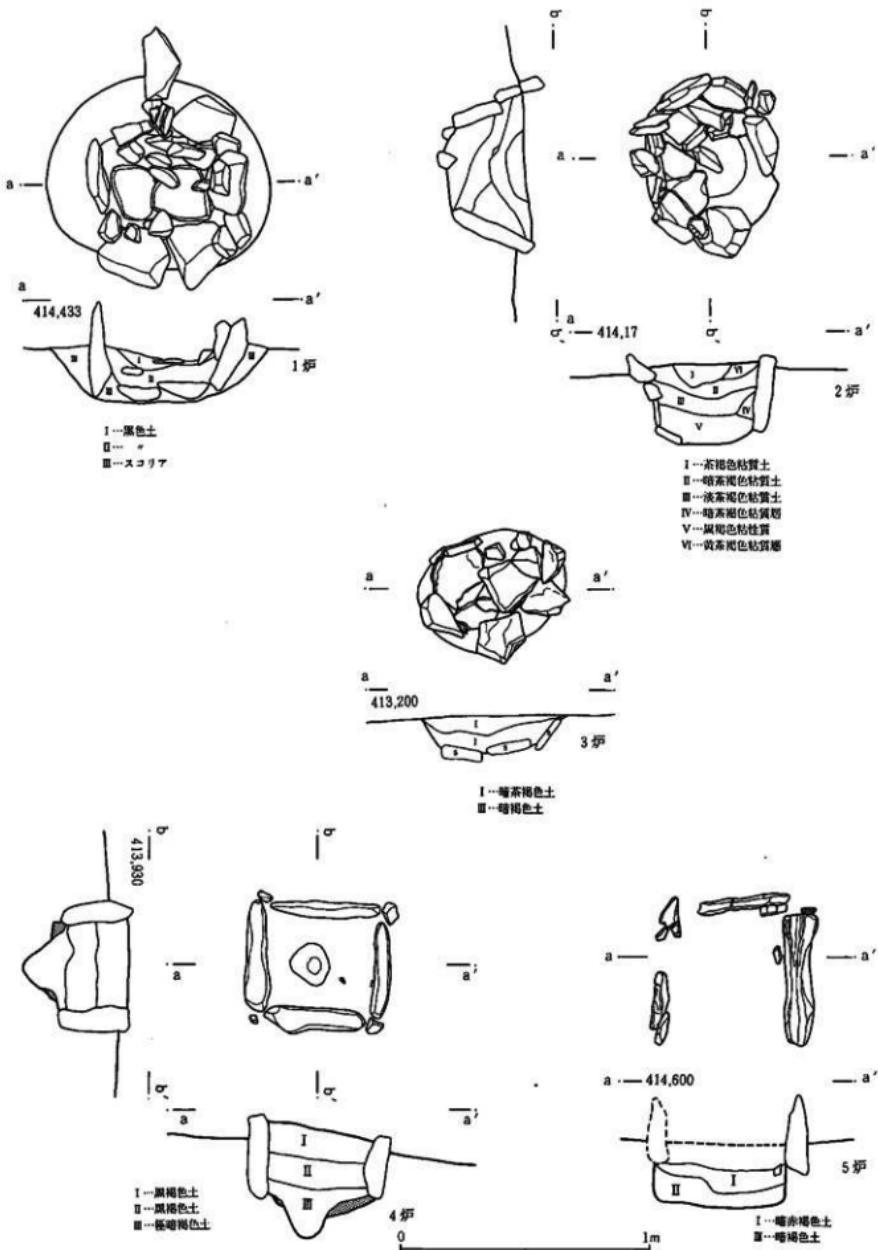
第26図 集石土坑2（4号～7号）



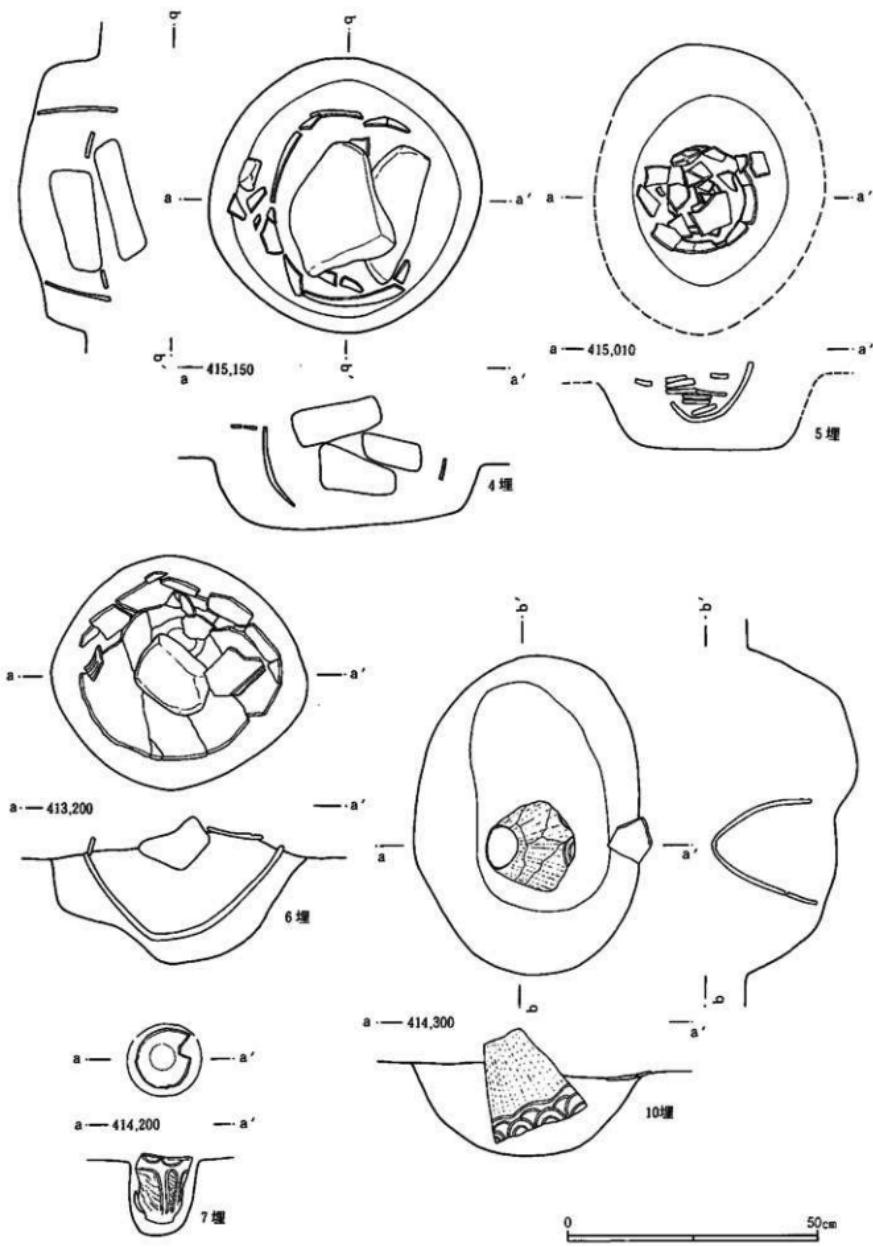
第27図 集石土坑3（8号～11号）



第28図 集石土坑4（12号～16号）



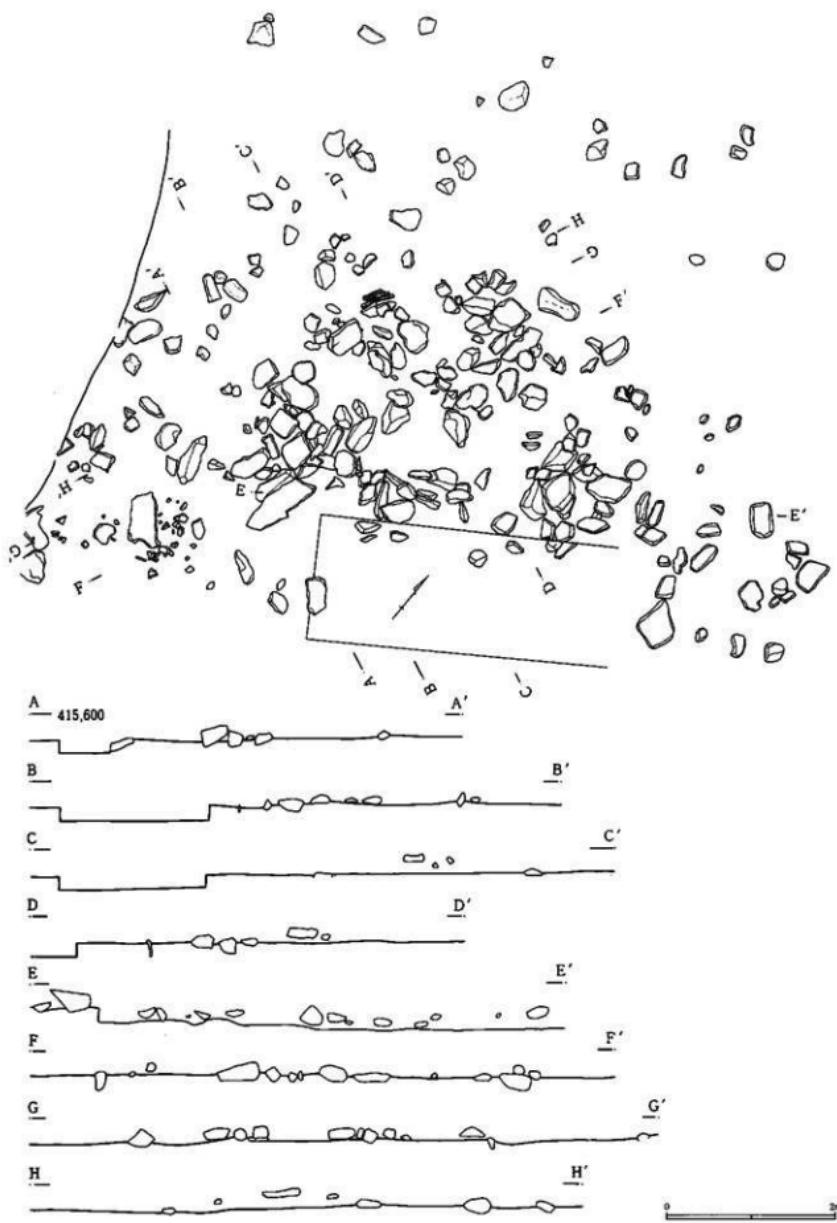
第29図 屋外炉



第30図 単独埋葬

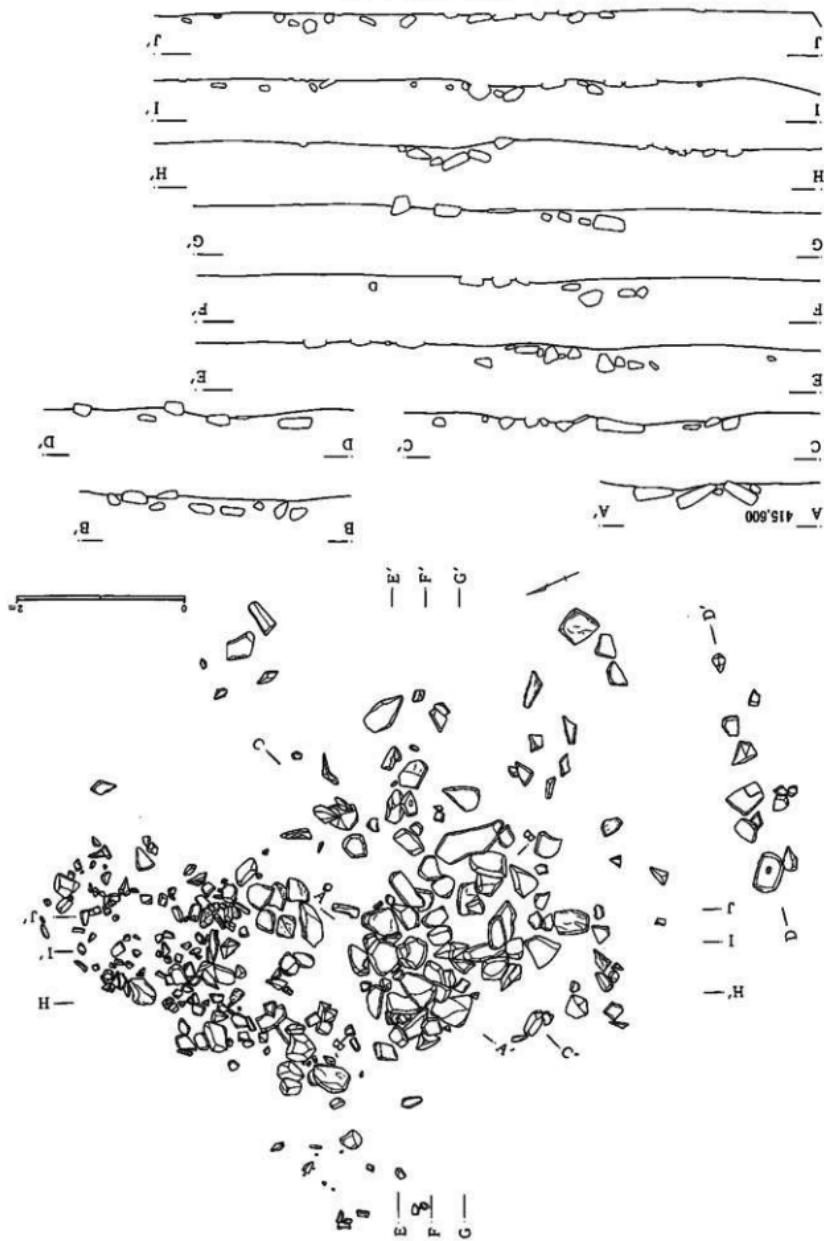


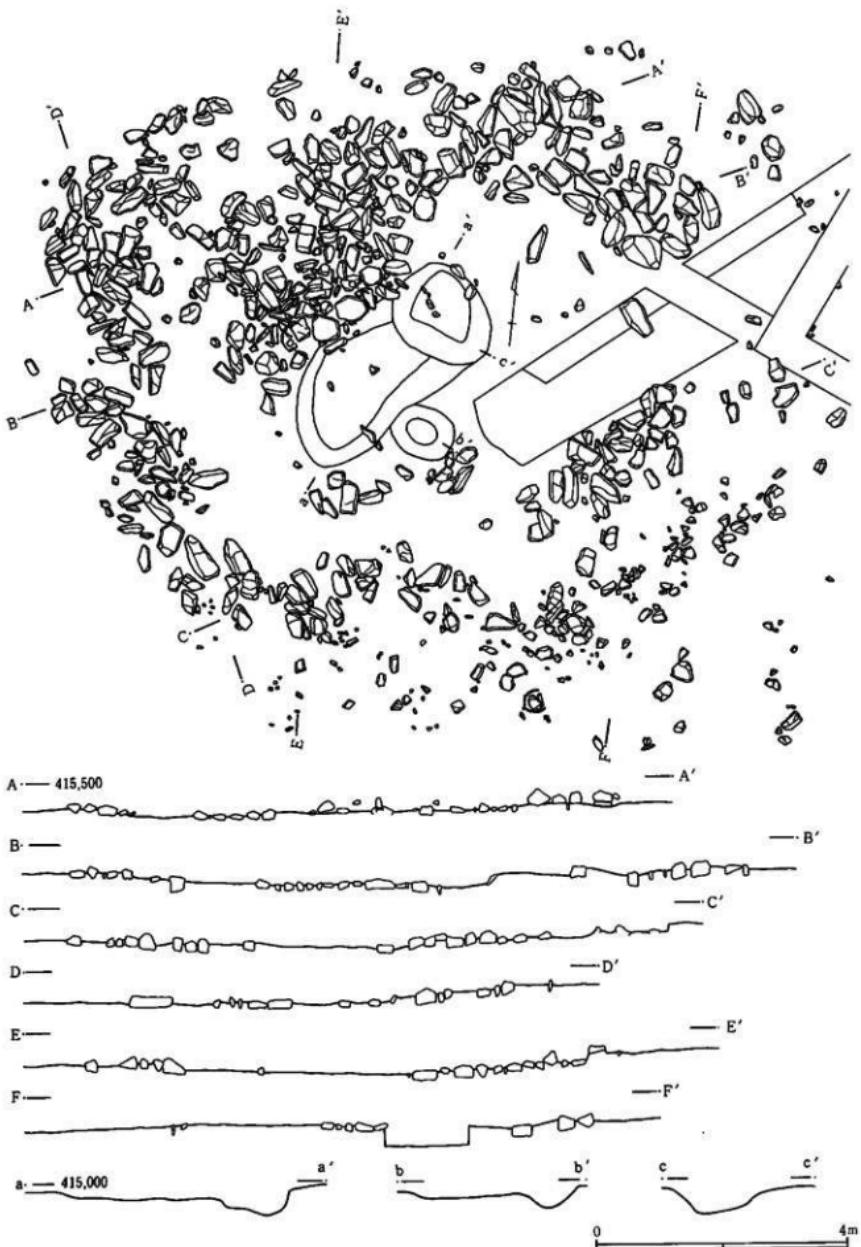
第31図 1号・2号配石と自然縫



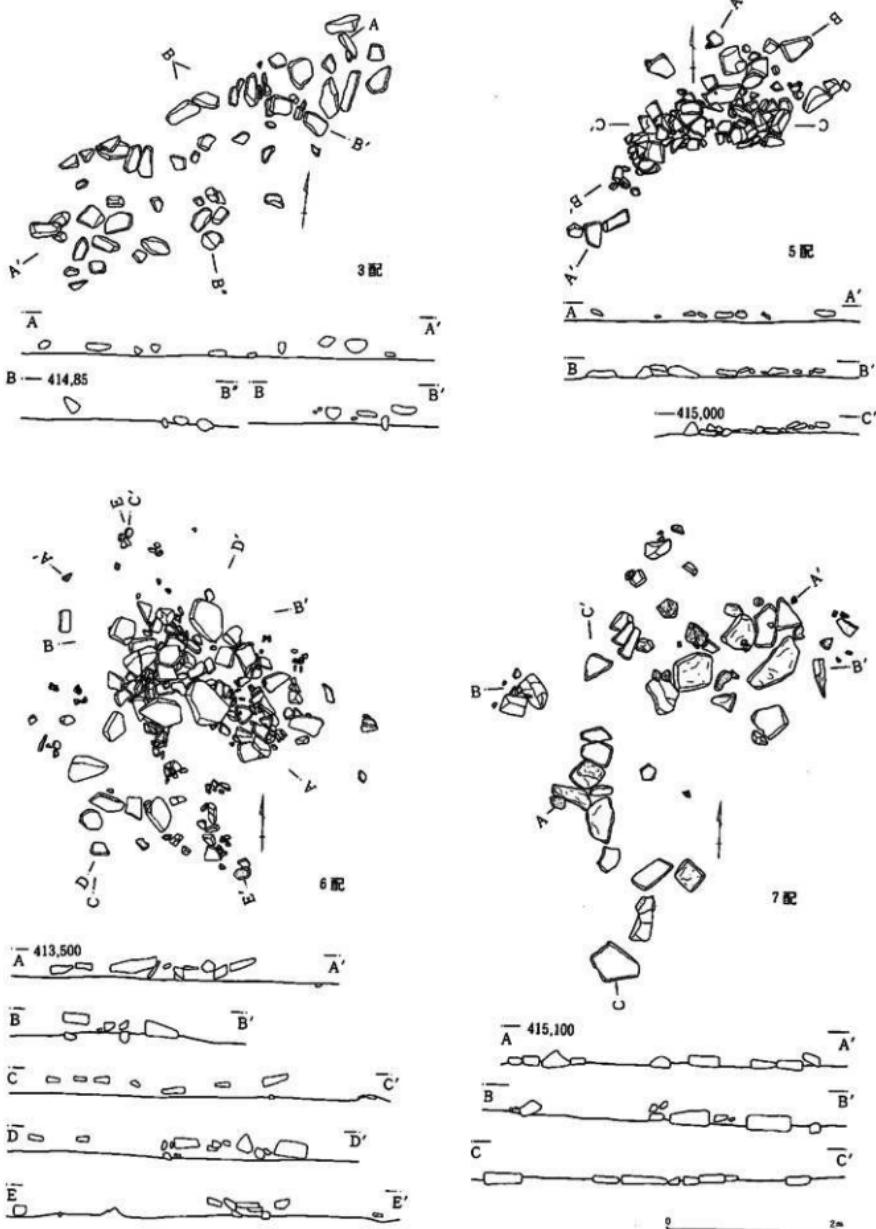
第32図 配石1(1号)

第33圖 鋸石2(2号)

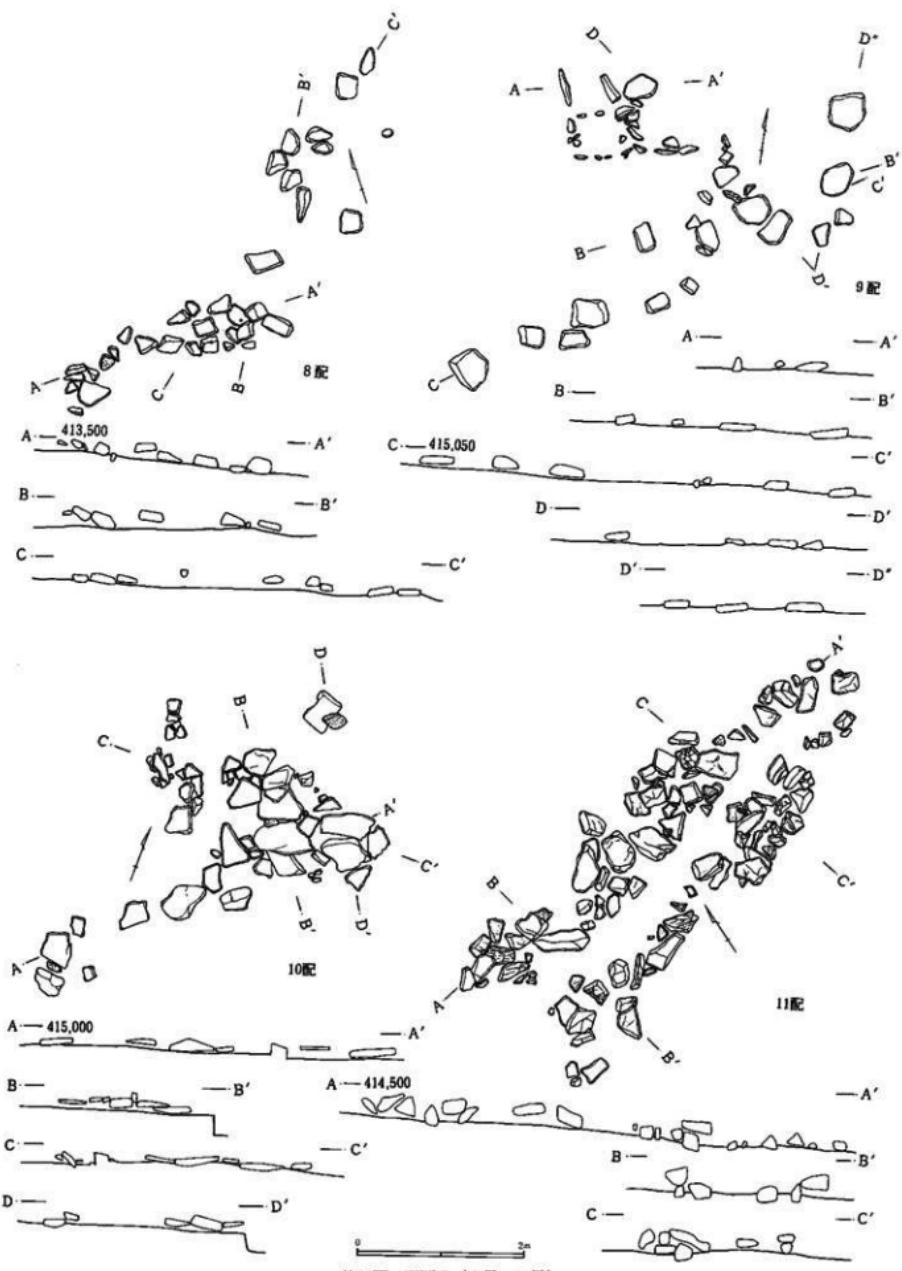




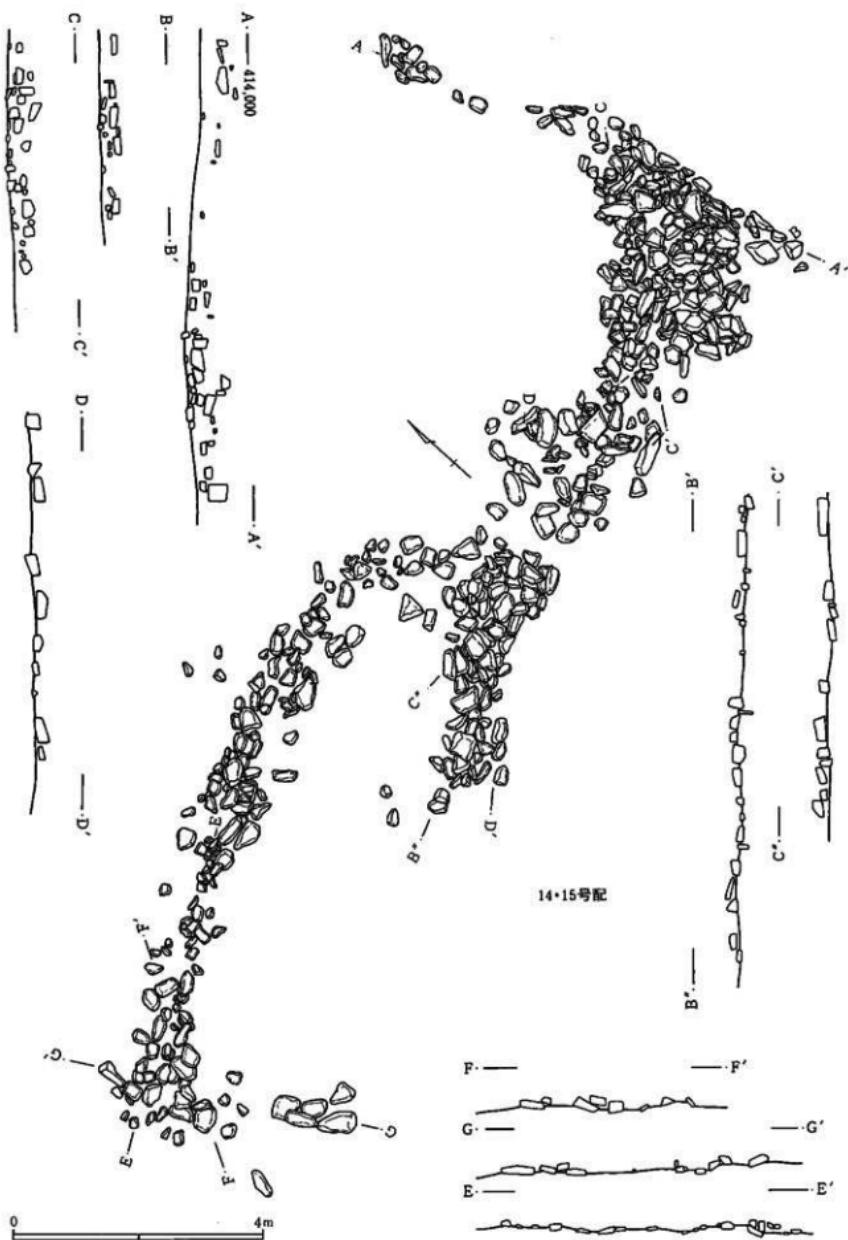
第34図 配石3(4号)



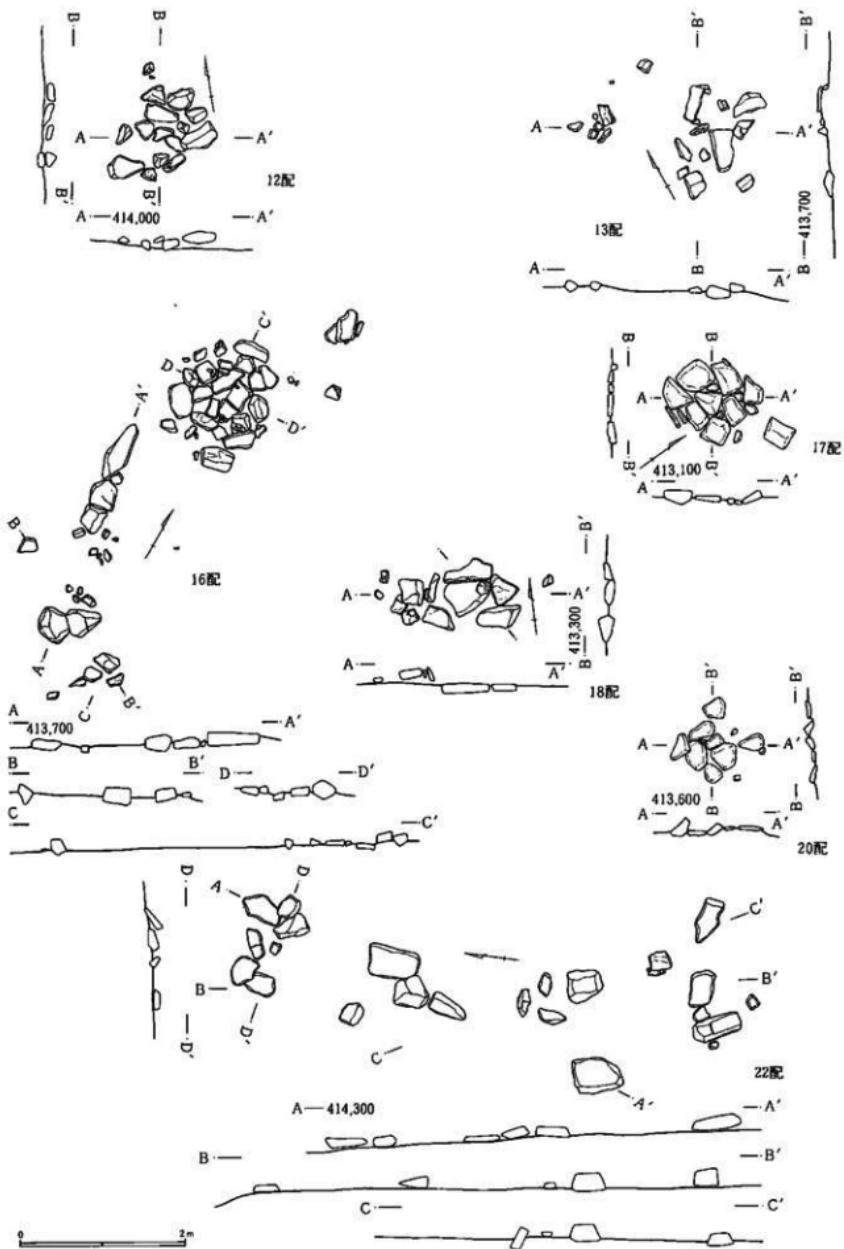
第35図 配石4（3号・5号～7号）



第36図 配石5（8号～11号）



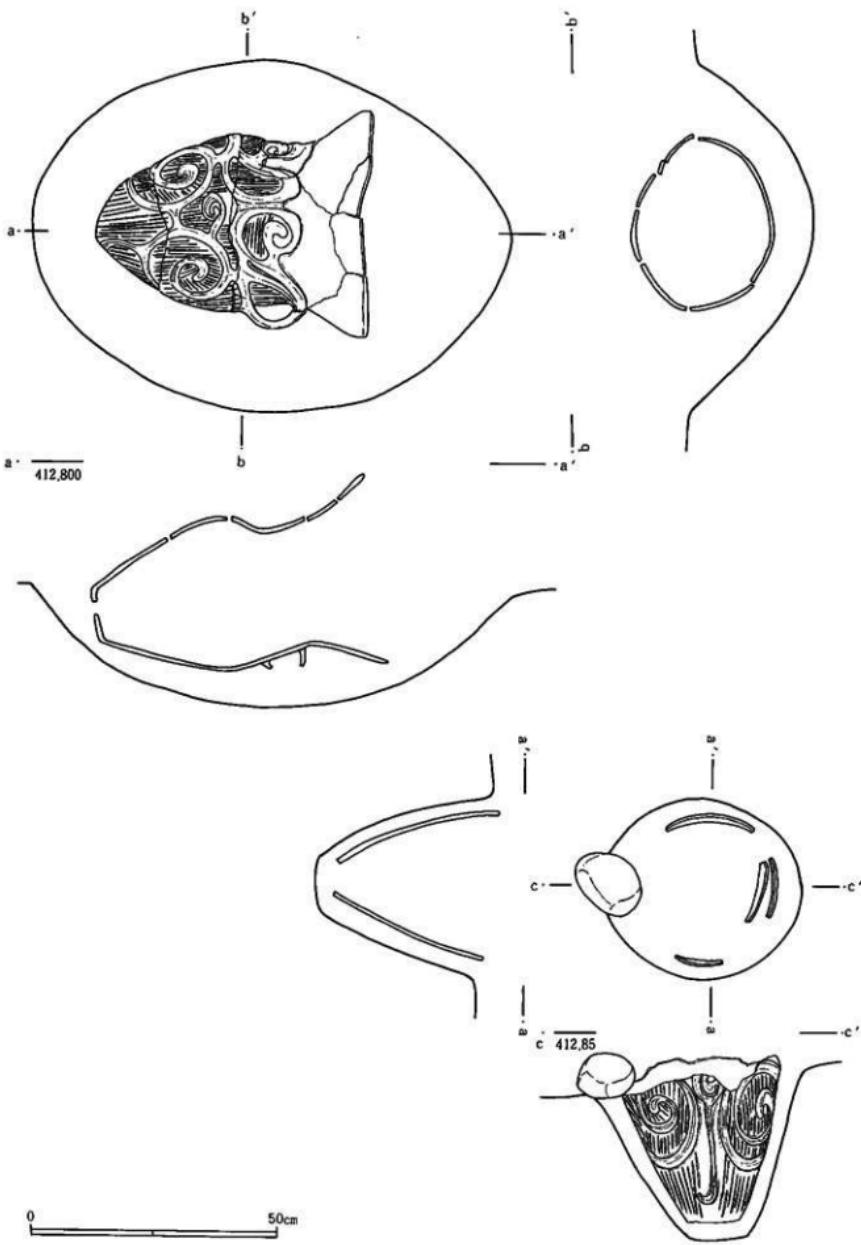
第37図 配石6(14+15号)



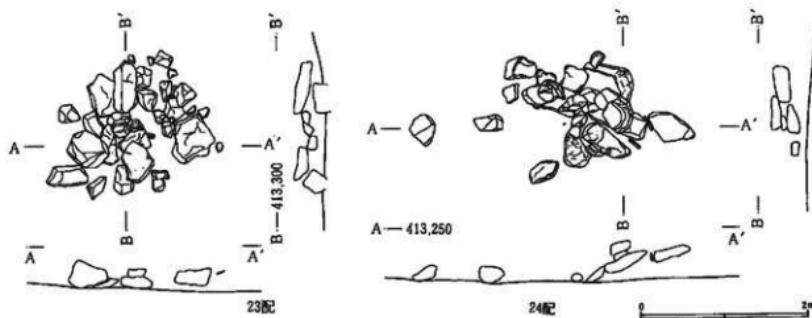
第38図 配石7 (12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22号)



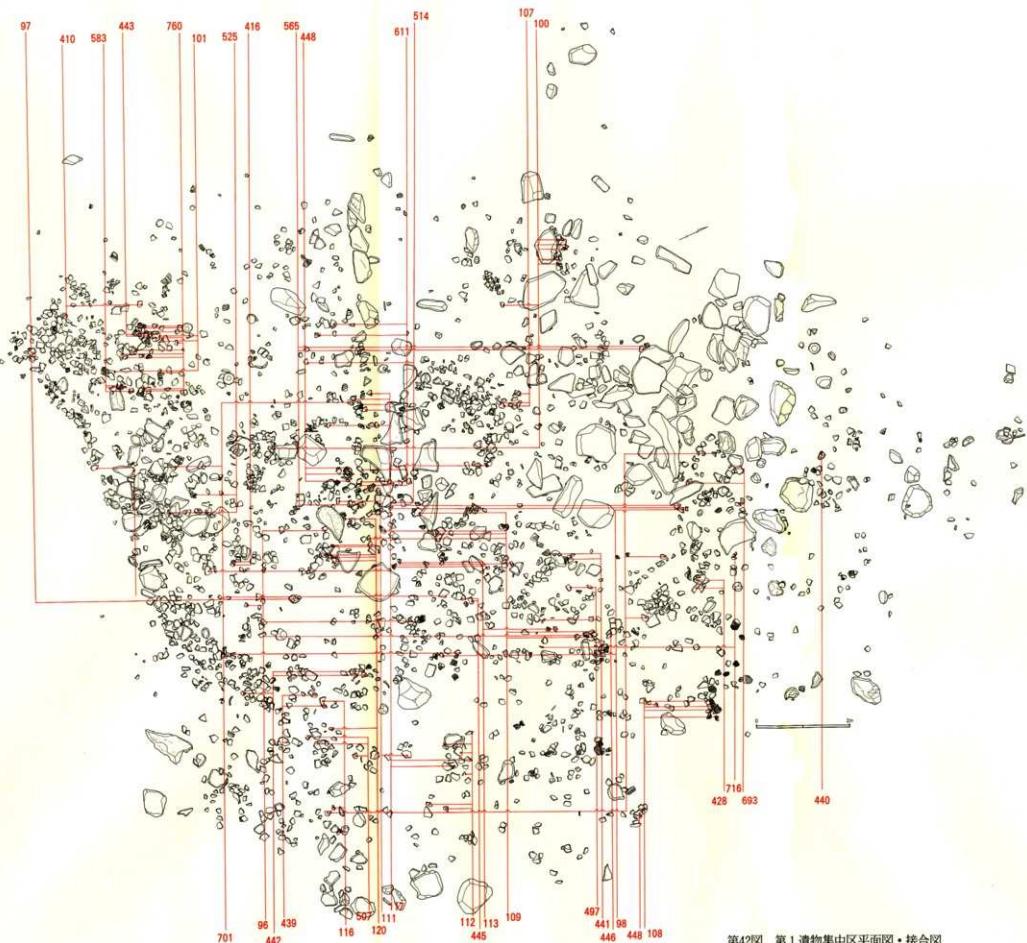
第39図 配石 8 (21号)



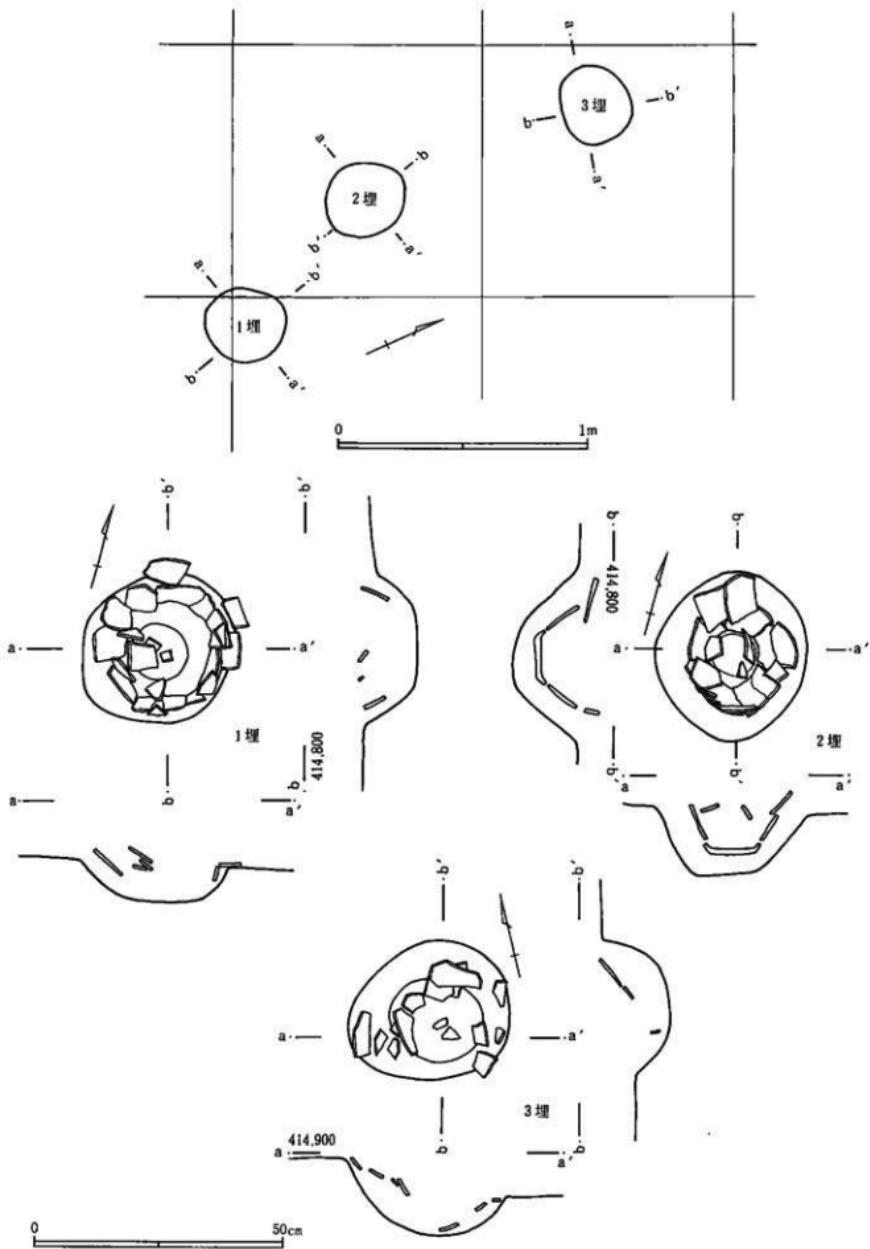
第40図 21号配石埋甕



第41図 配石9 (23・24号)



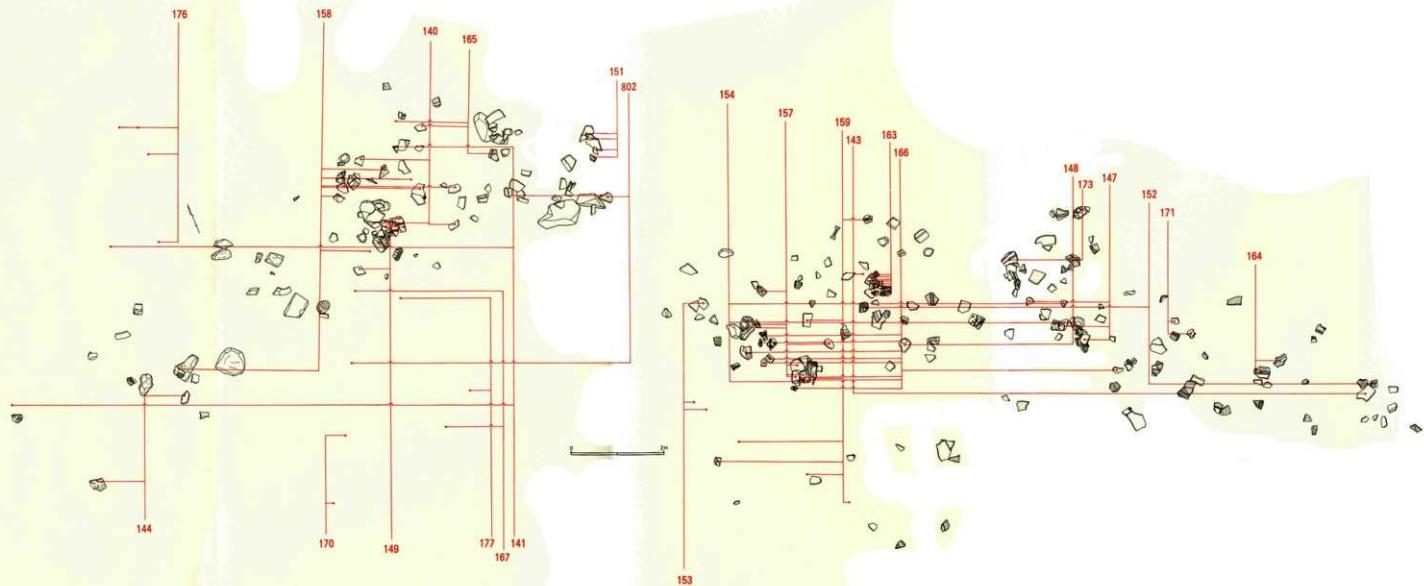
第42図 第1遺物集中区平面図・接合図



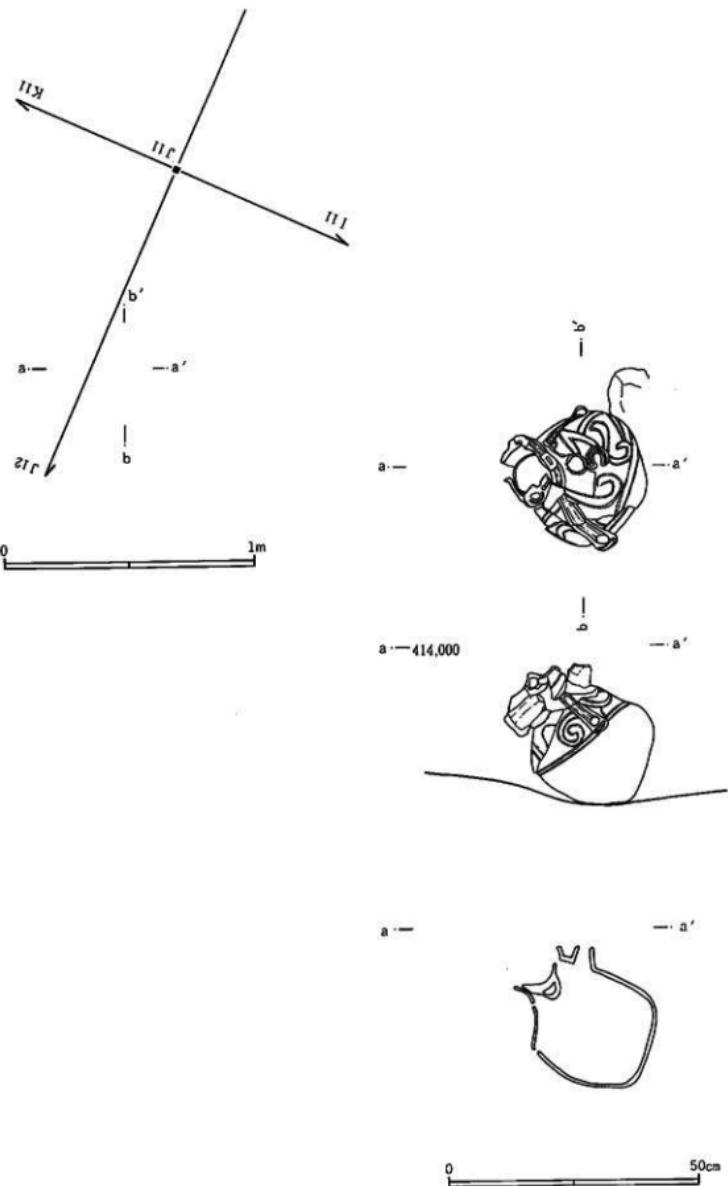
第43図 第1遺物集中区埋甕

第44図 第2遺物集中区平面図・接合図

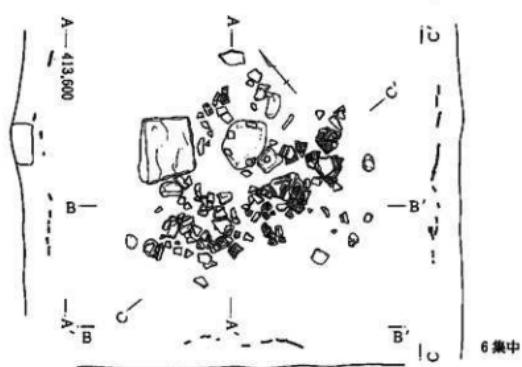
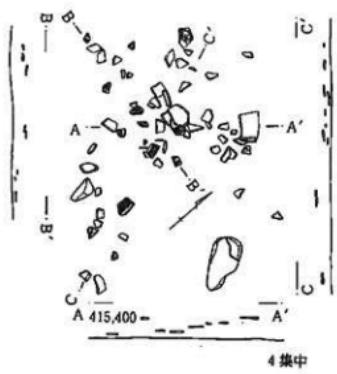




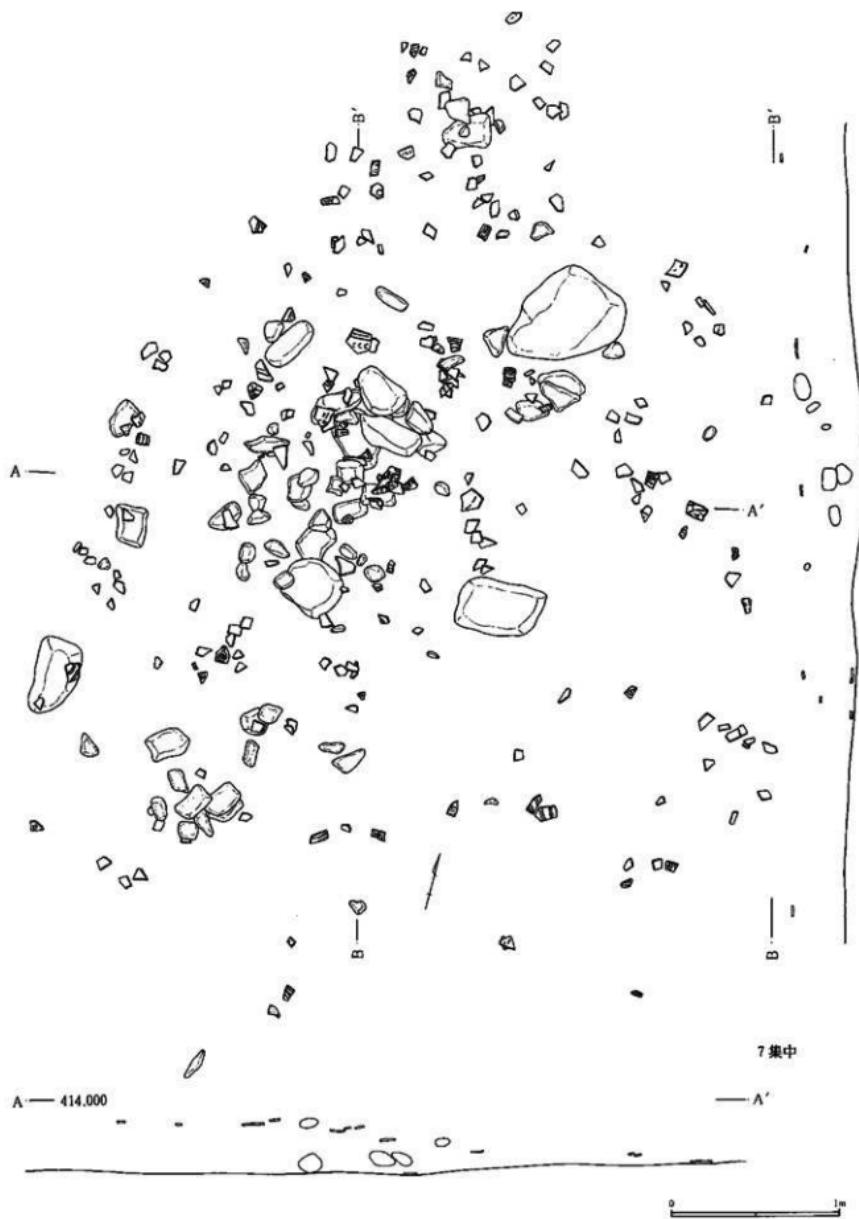
第45図 第3遺物集中区平面図・接合図



第46図 第3遺物集中区微細図



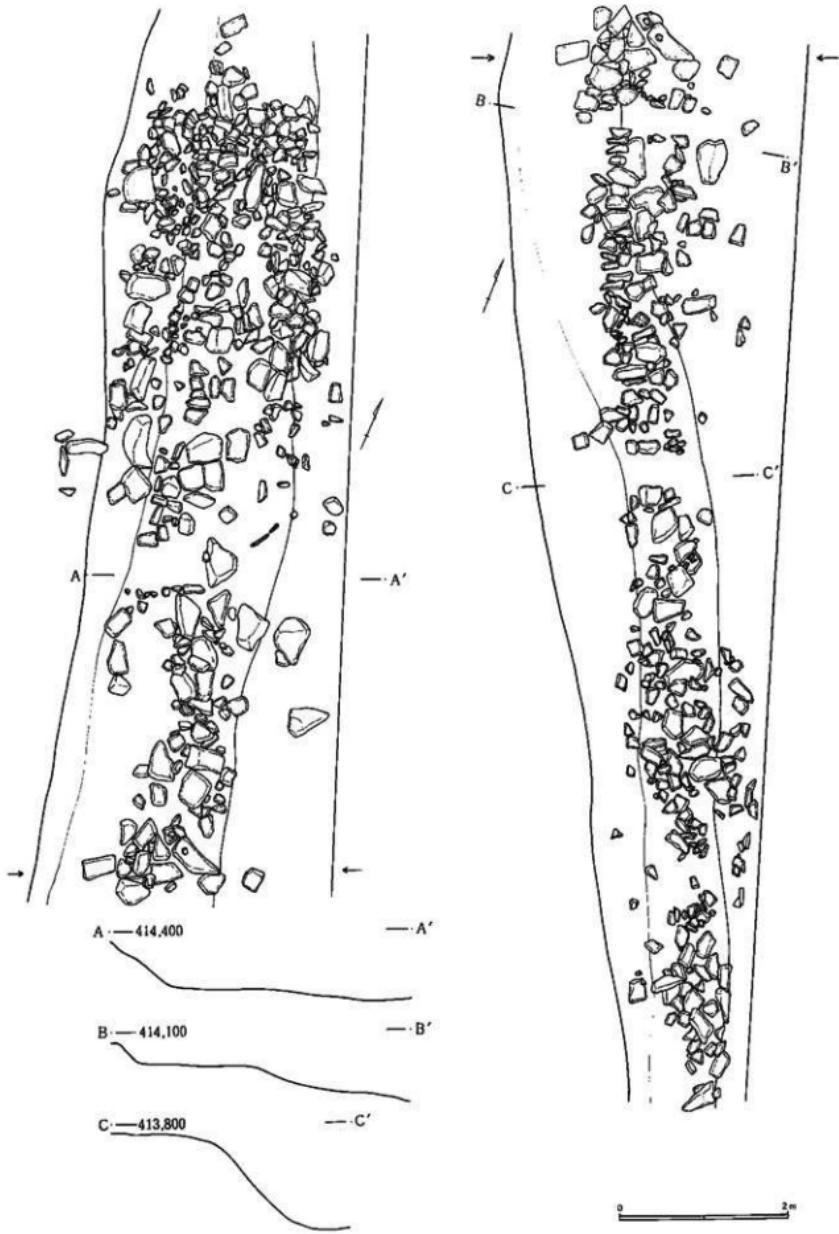
第47図 遺物集中区4(第4～第6遺物集中区)



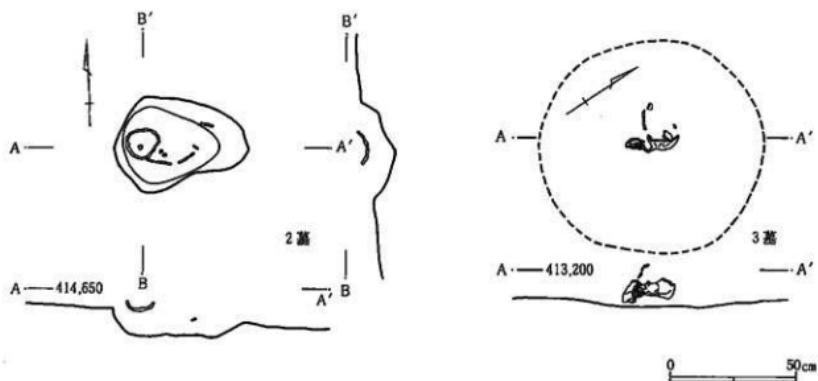
第48図 遺物集中区5（第7遺物集中区）



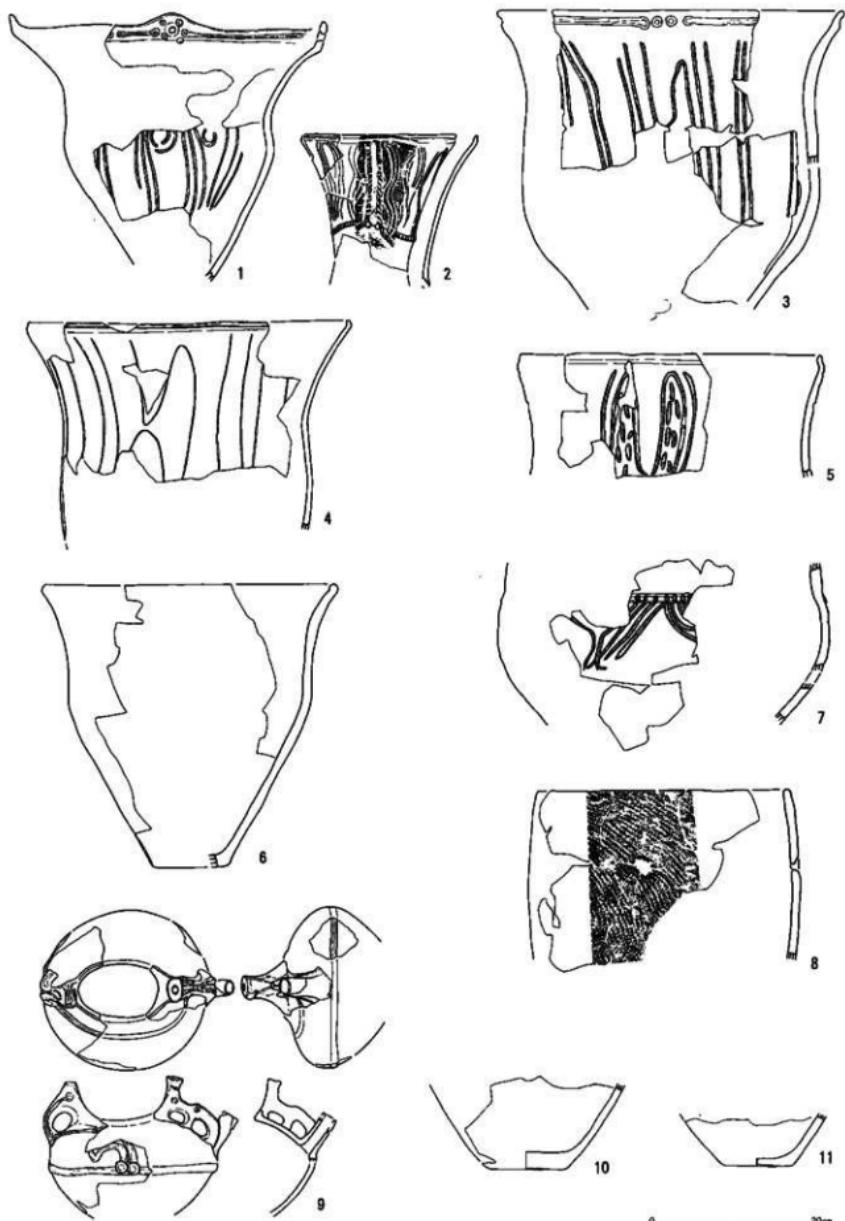
第49図 中世石組



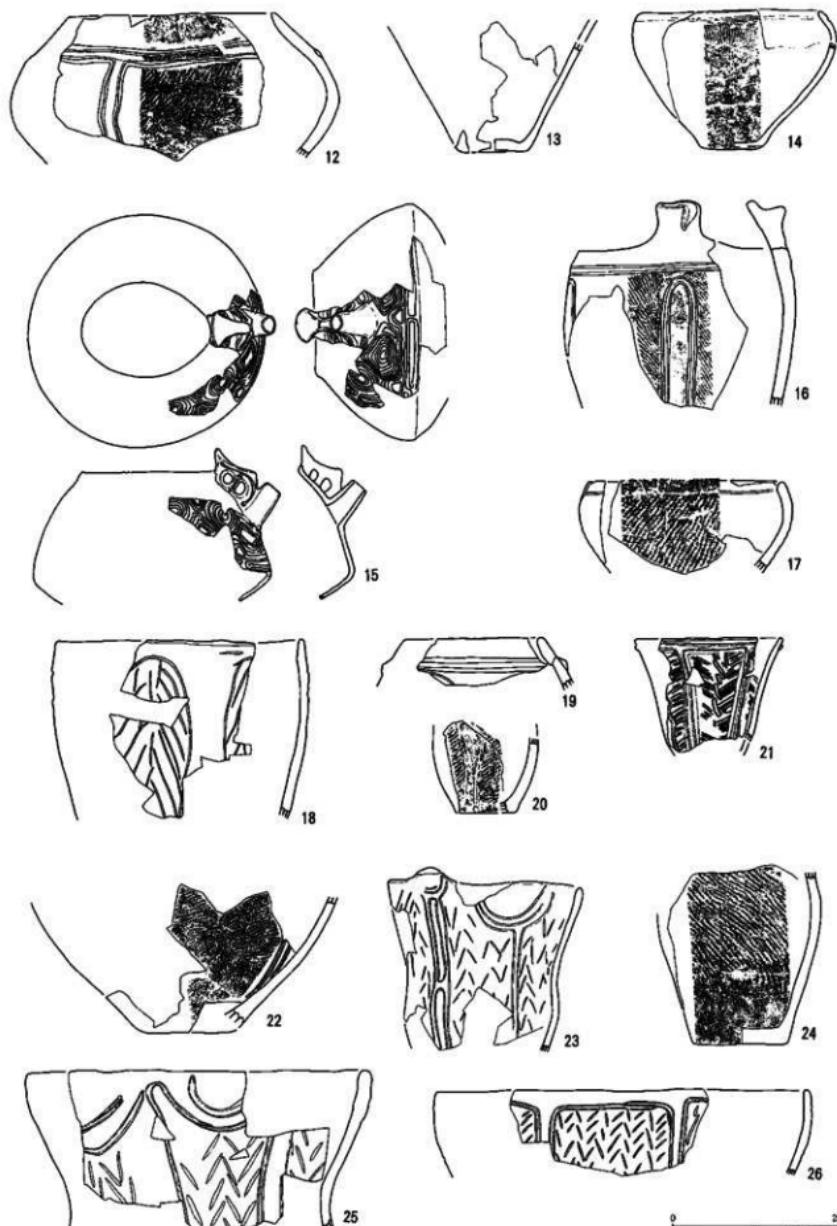
第50図 中世溝



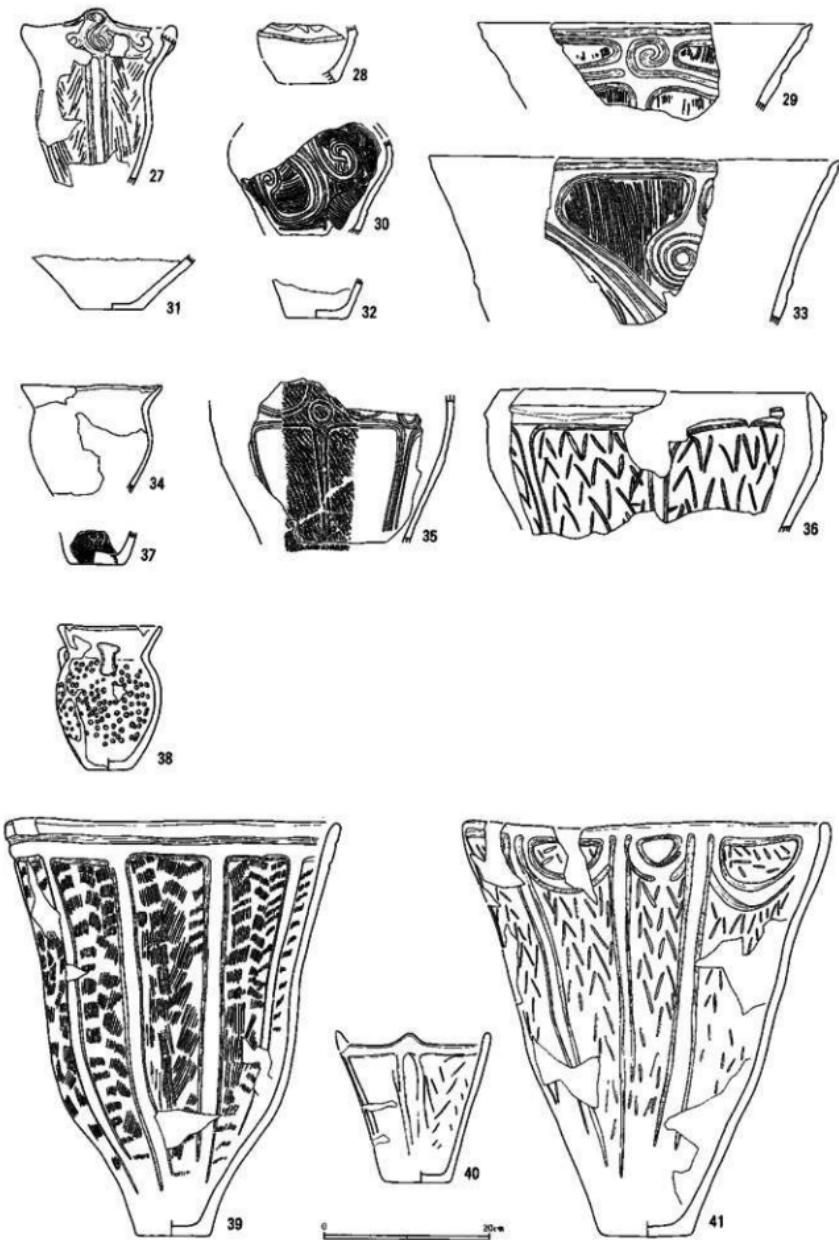
第51図 近世墓



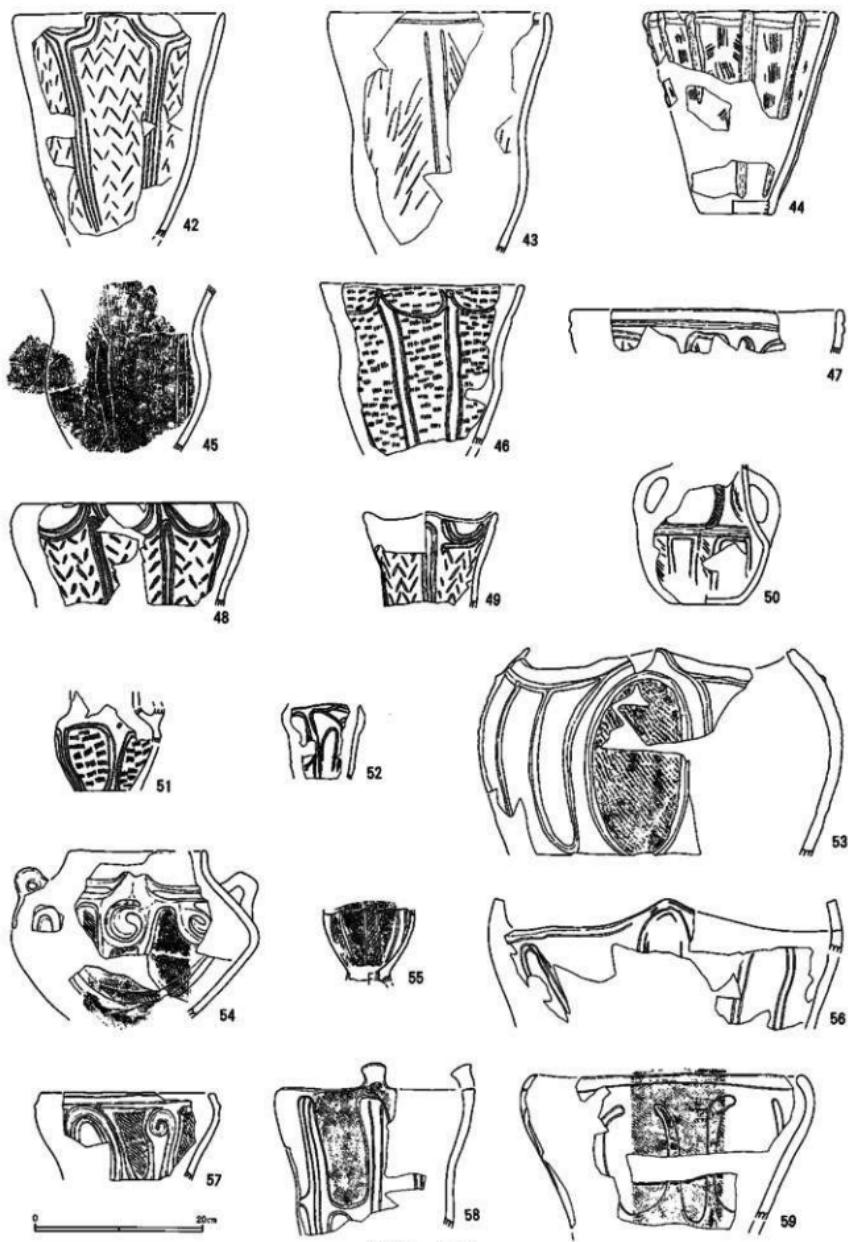
第52図 土器1



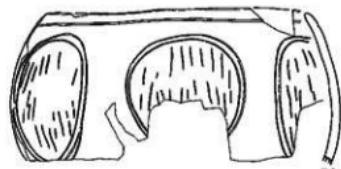
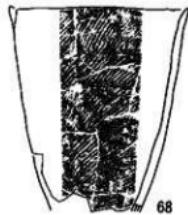
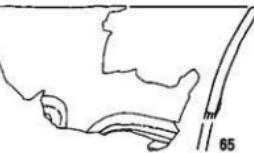
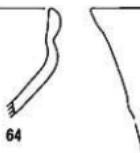
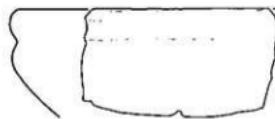
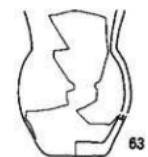
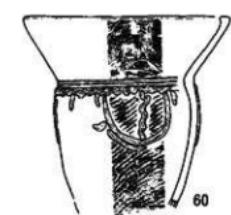
第53図 土器2



第54図 土器 3

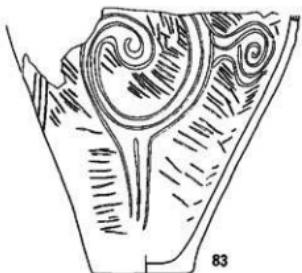
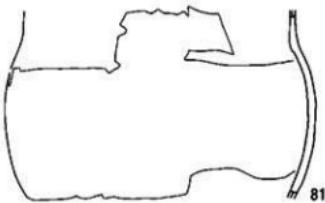
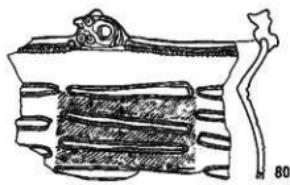
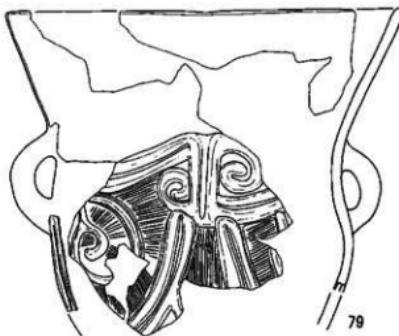
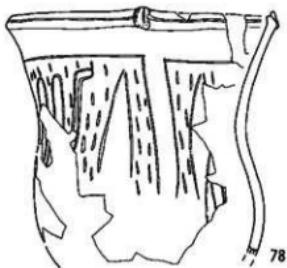
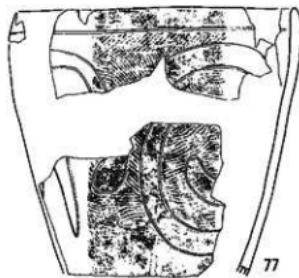
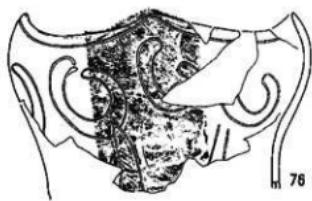


第55図 土器 4



— 20cm —

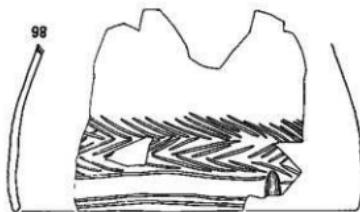
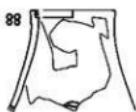
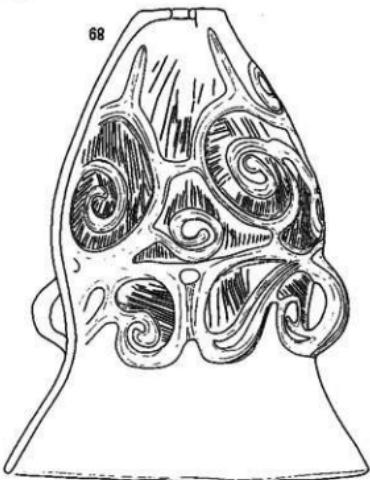
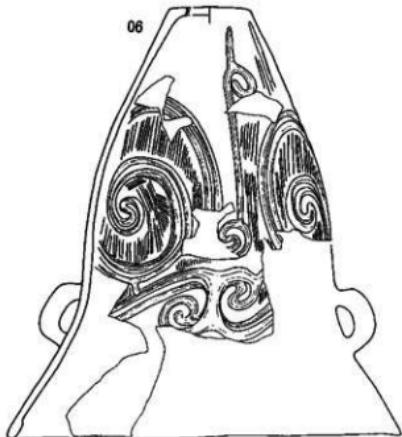
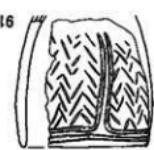
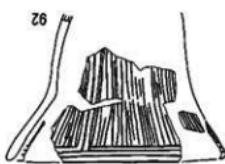
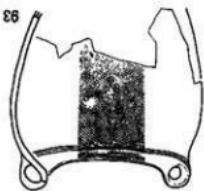
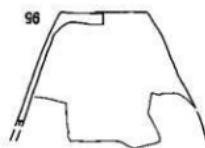
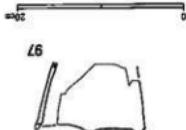
第56図 土器 5

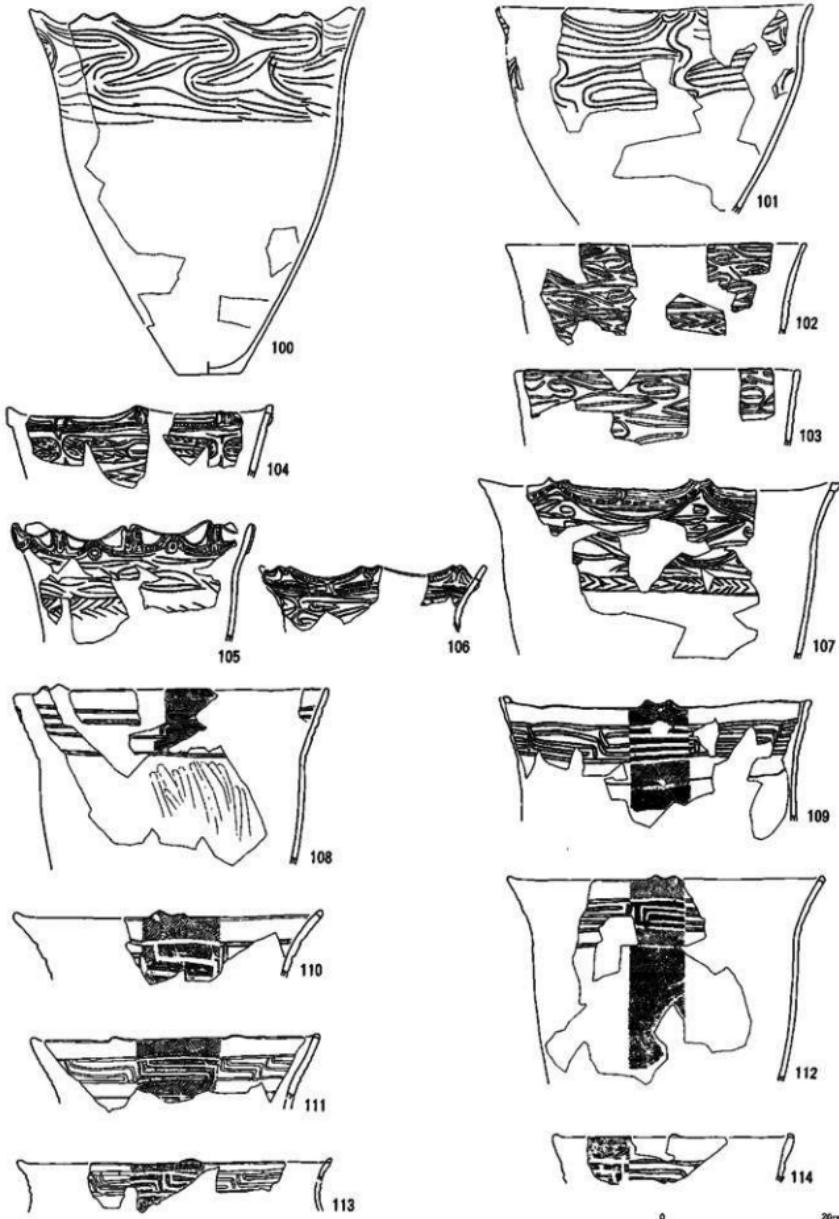


第57図 土器6

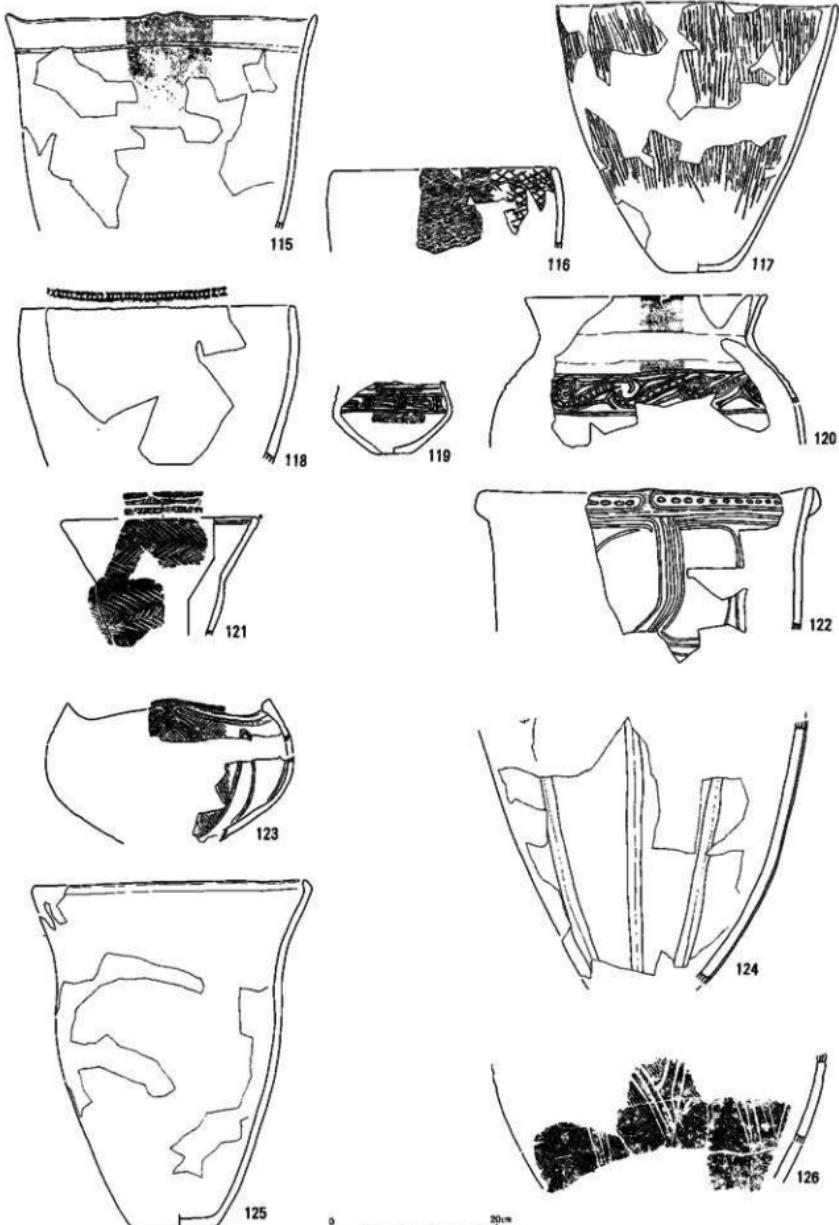
0 20cm

L 鏽 瓶 89號

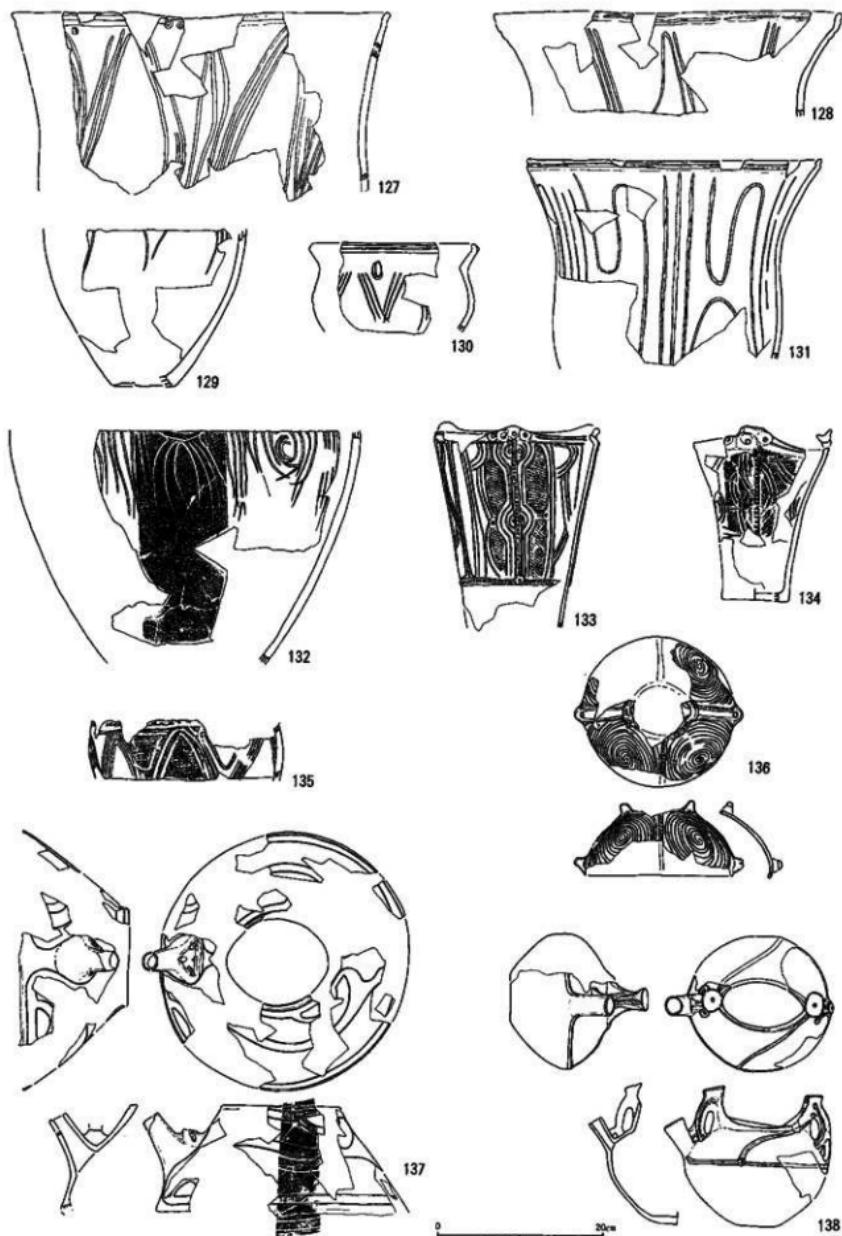




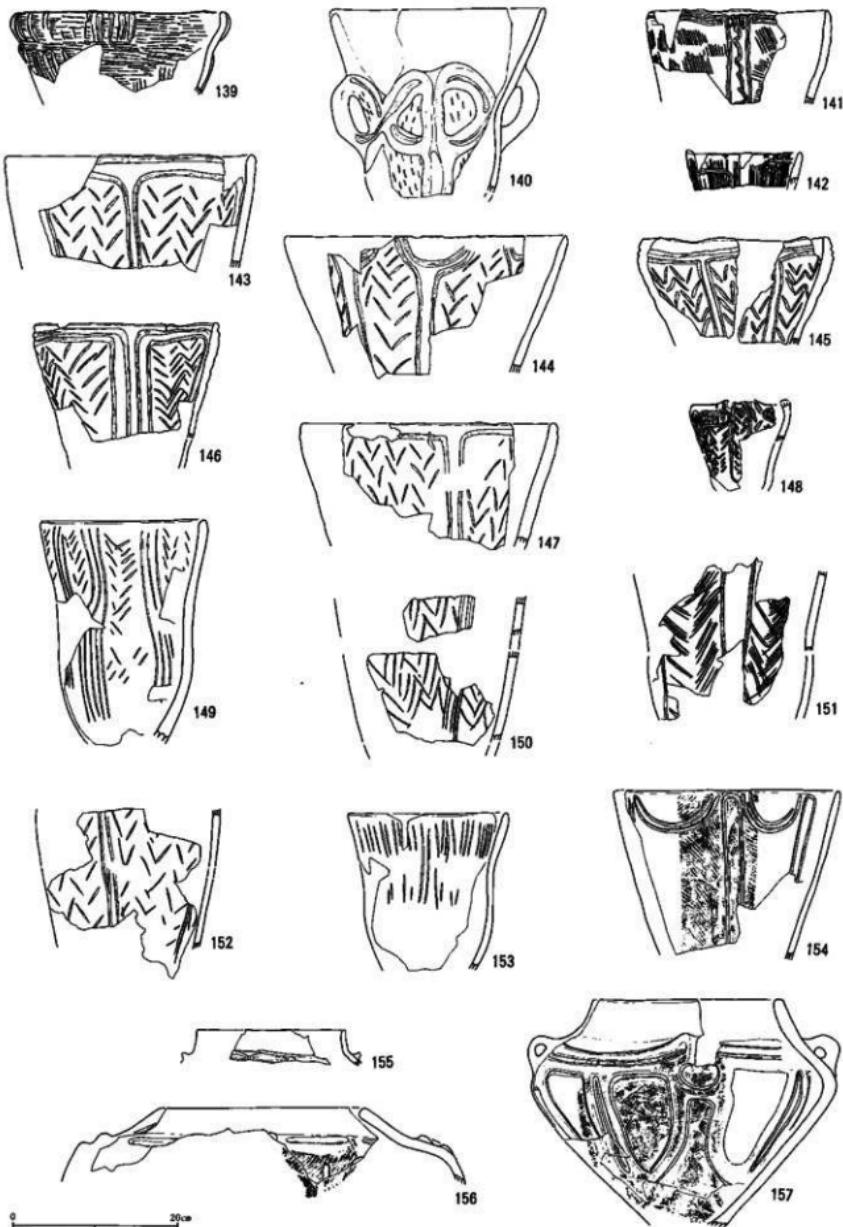
第59図 土器8



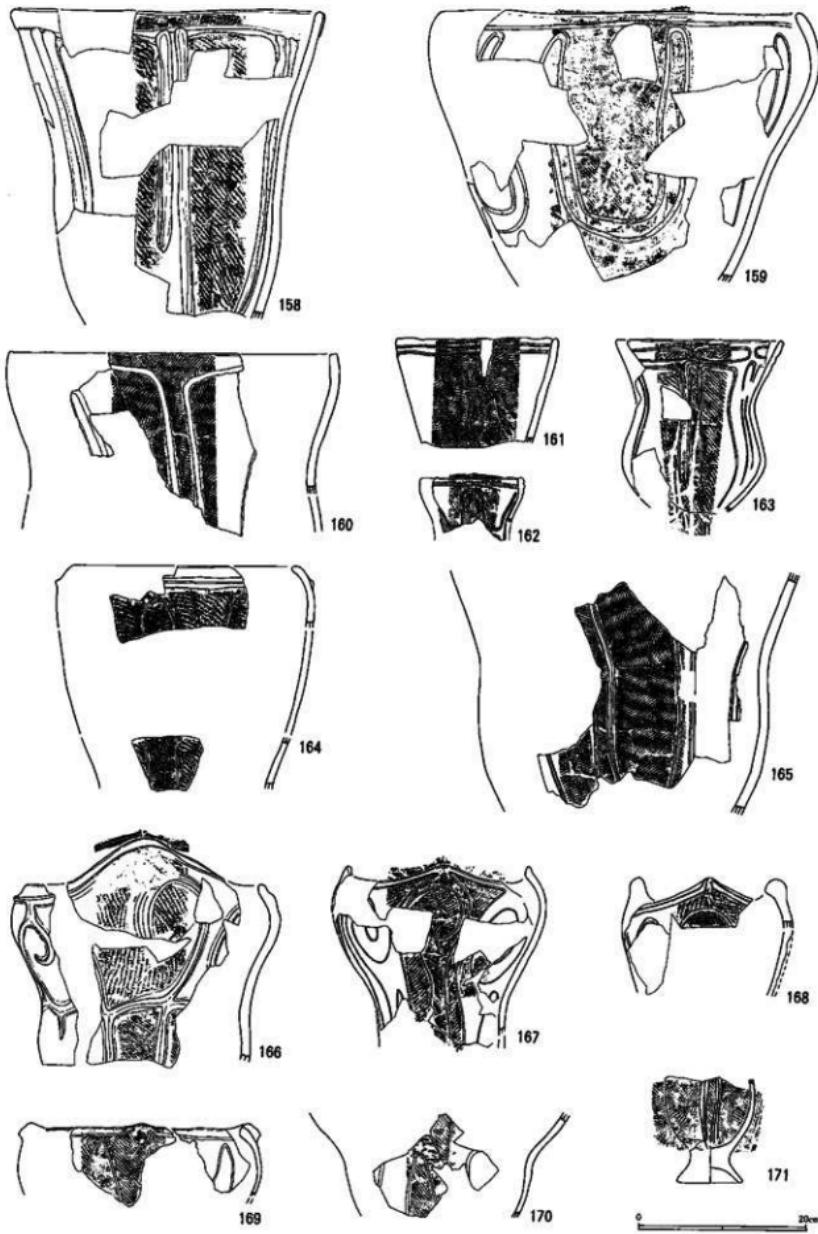
第60図 土器9



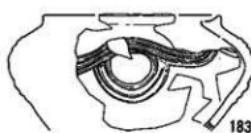
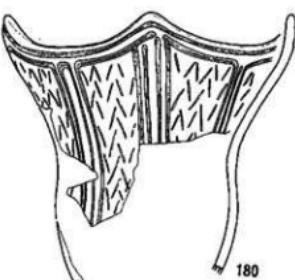
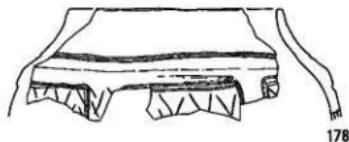
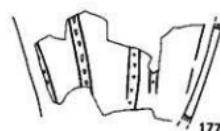
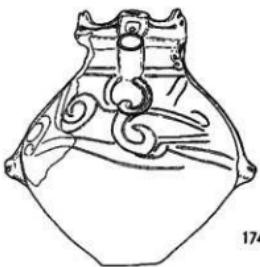
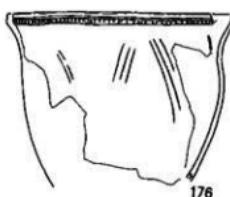
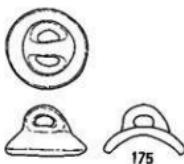
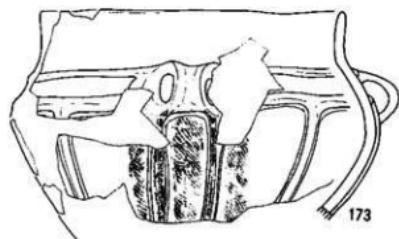
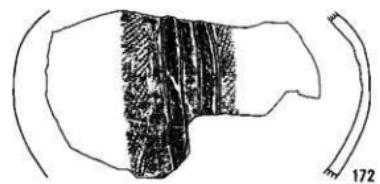
第61図 土器10



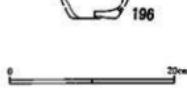
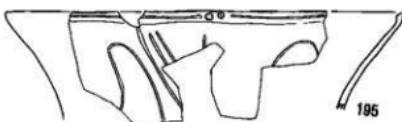
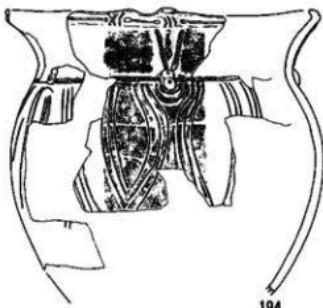
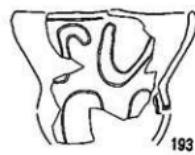
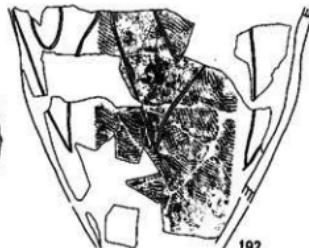
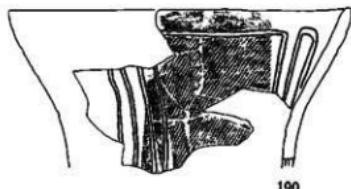
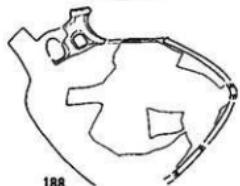
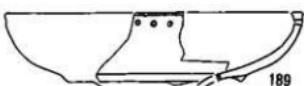
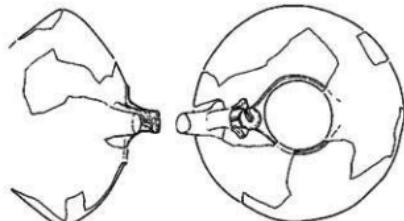
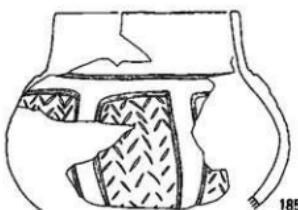
第62図 土器11



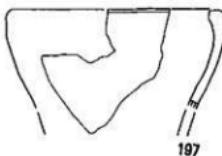
第63図 土器12



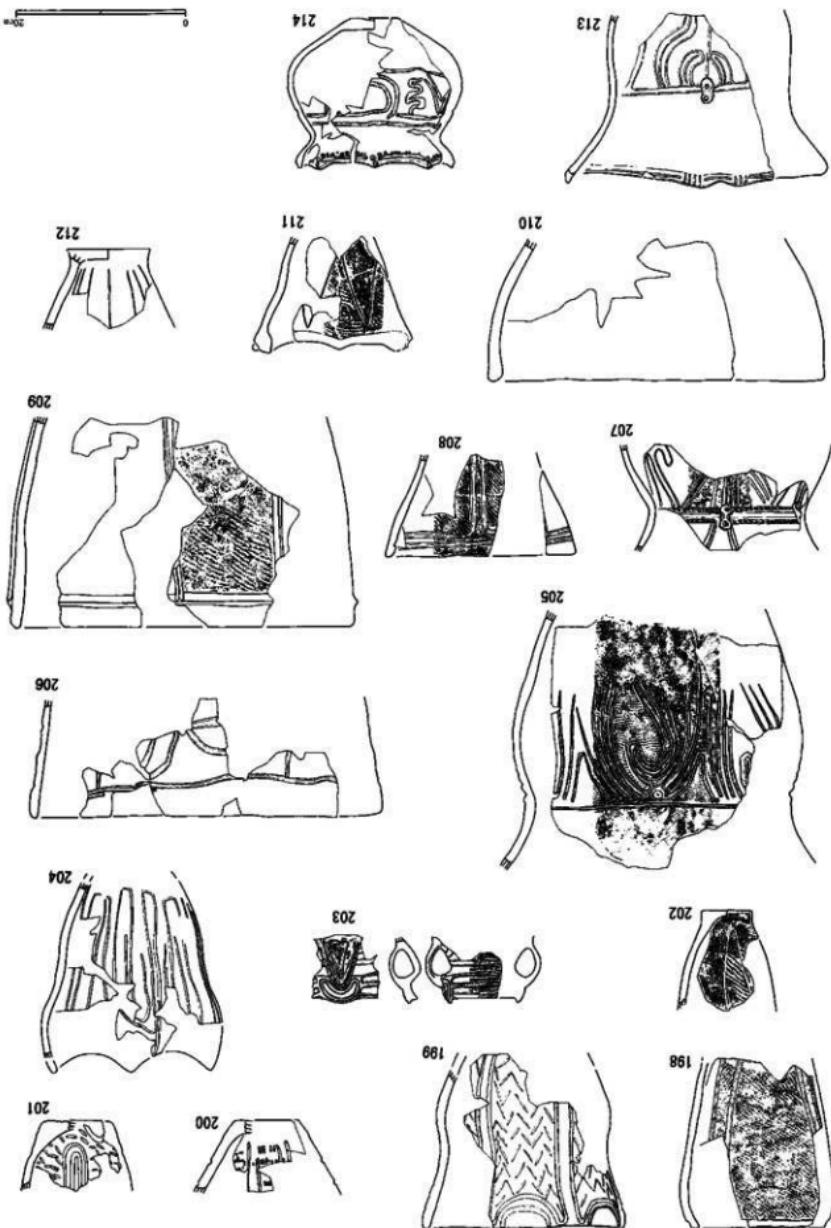
第64図 土器13

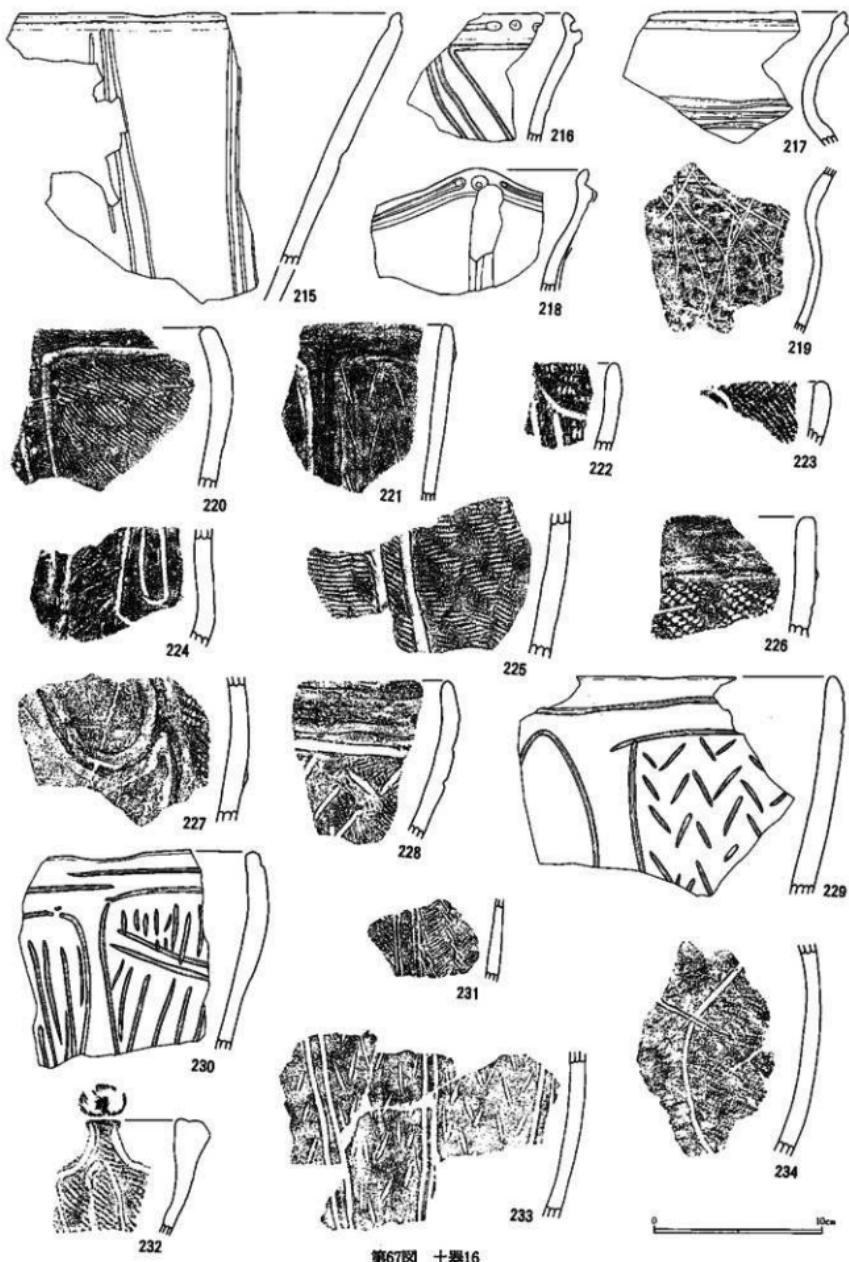


第65図 土器14

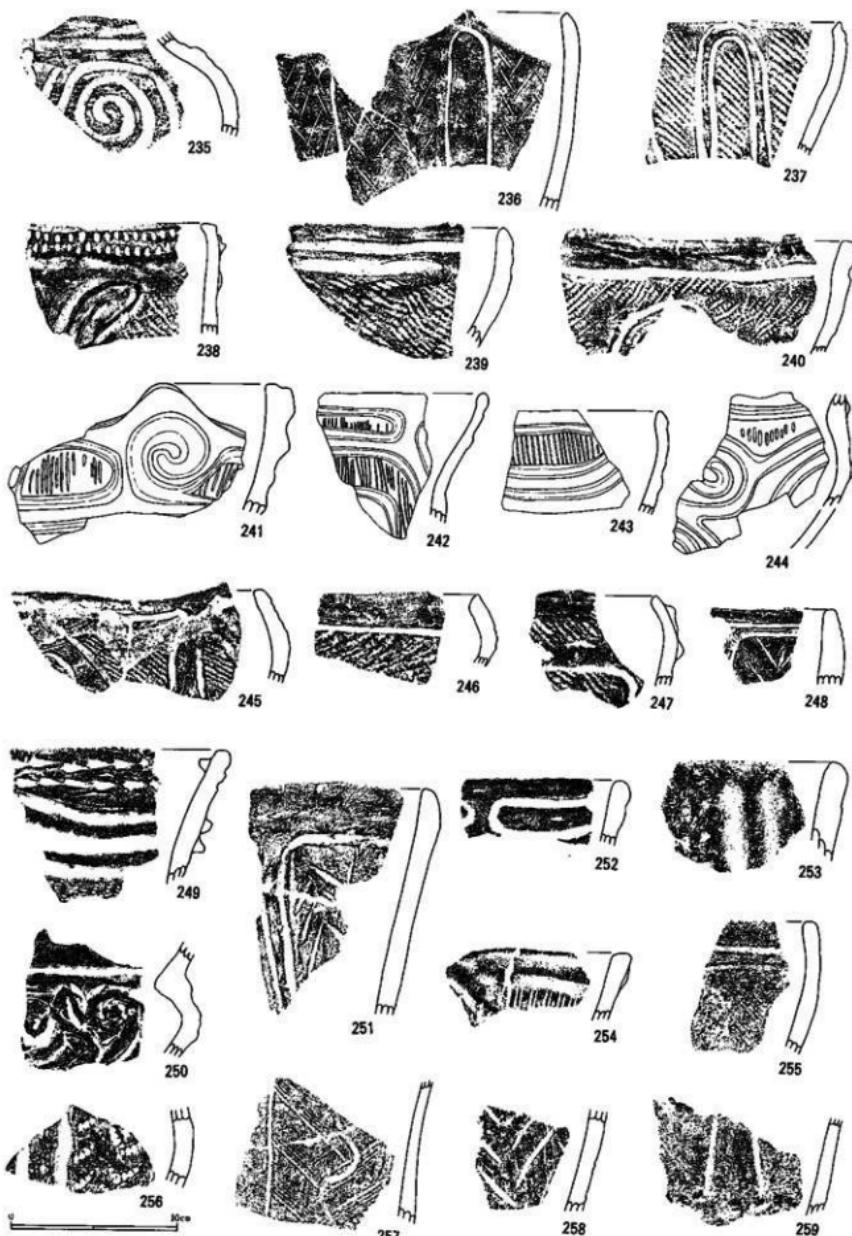


第66图 土器15

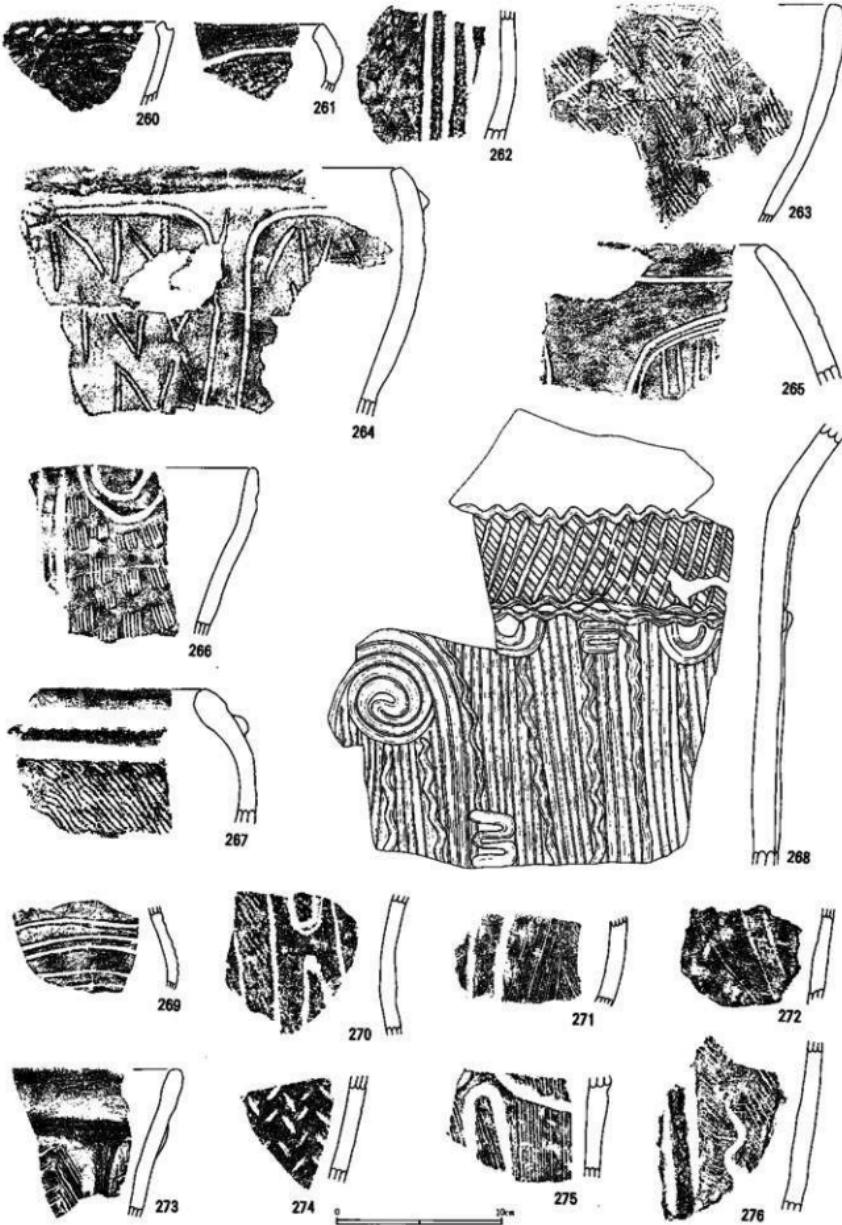




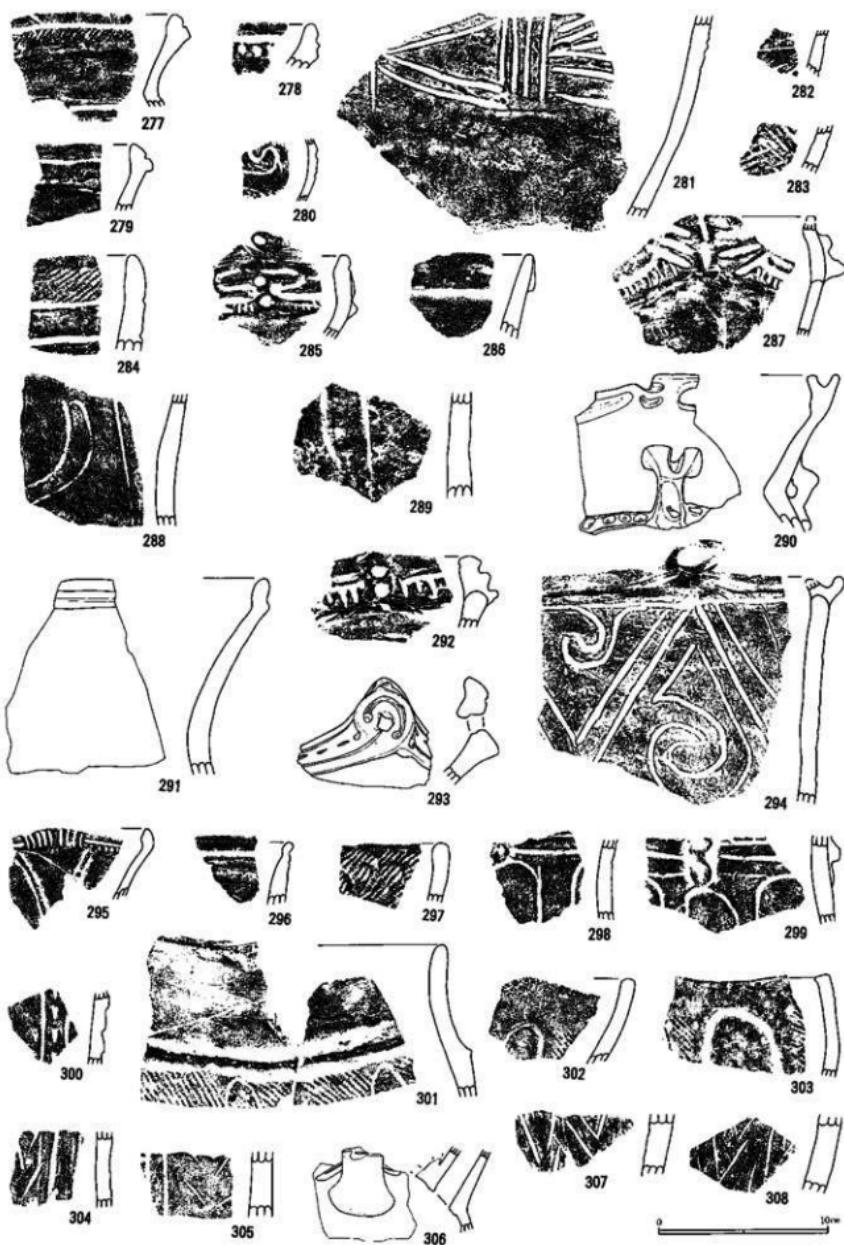
第67図 土器16



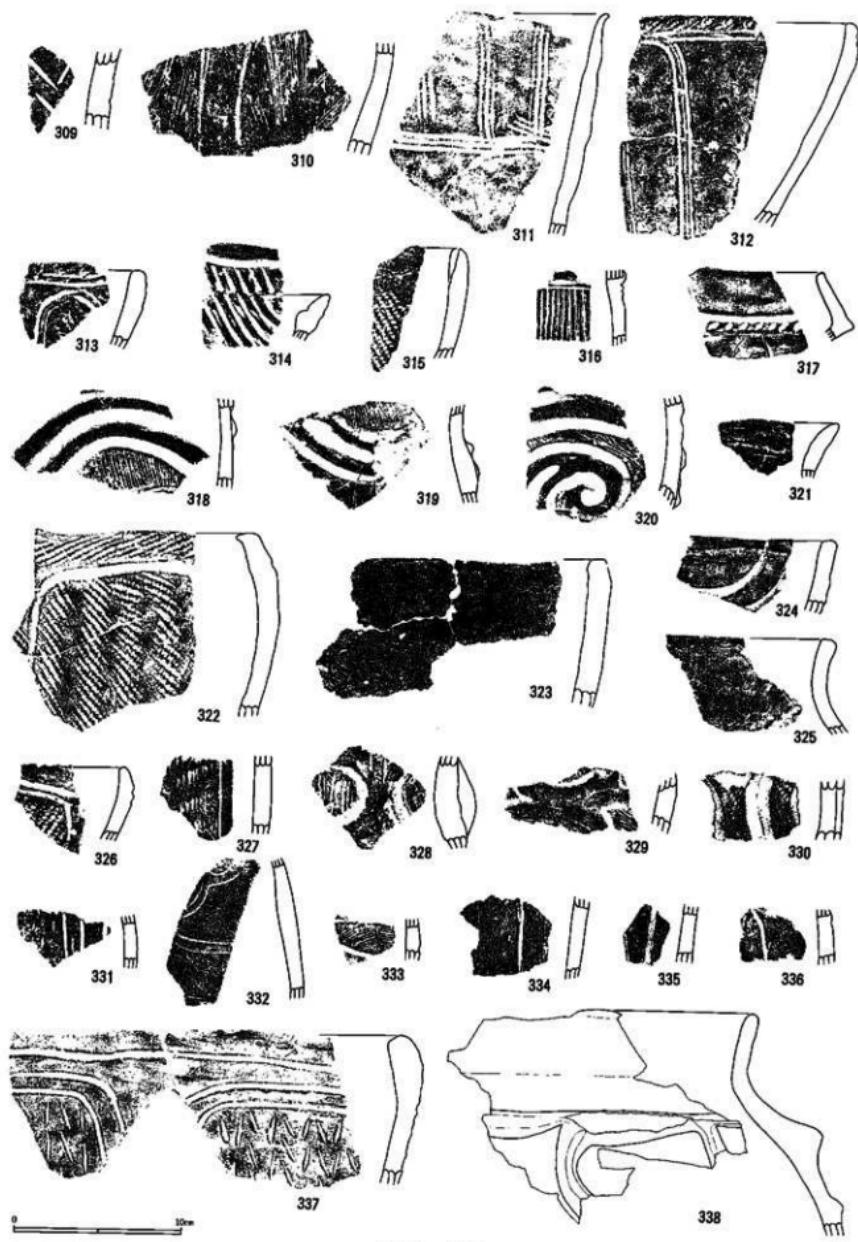
第68図 土器17



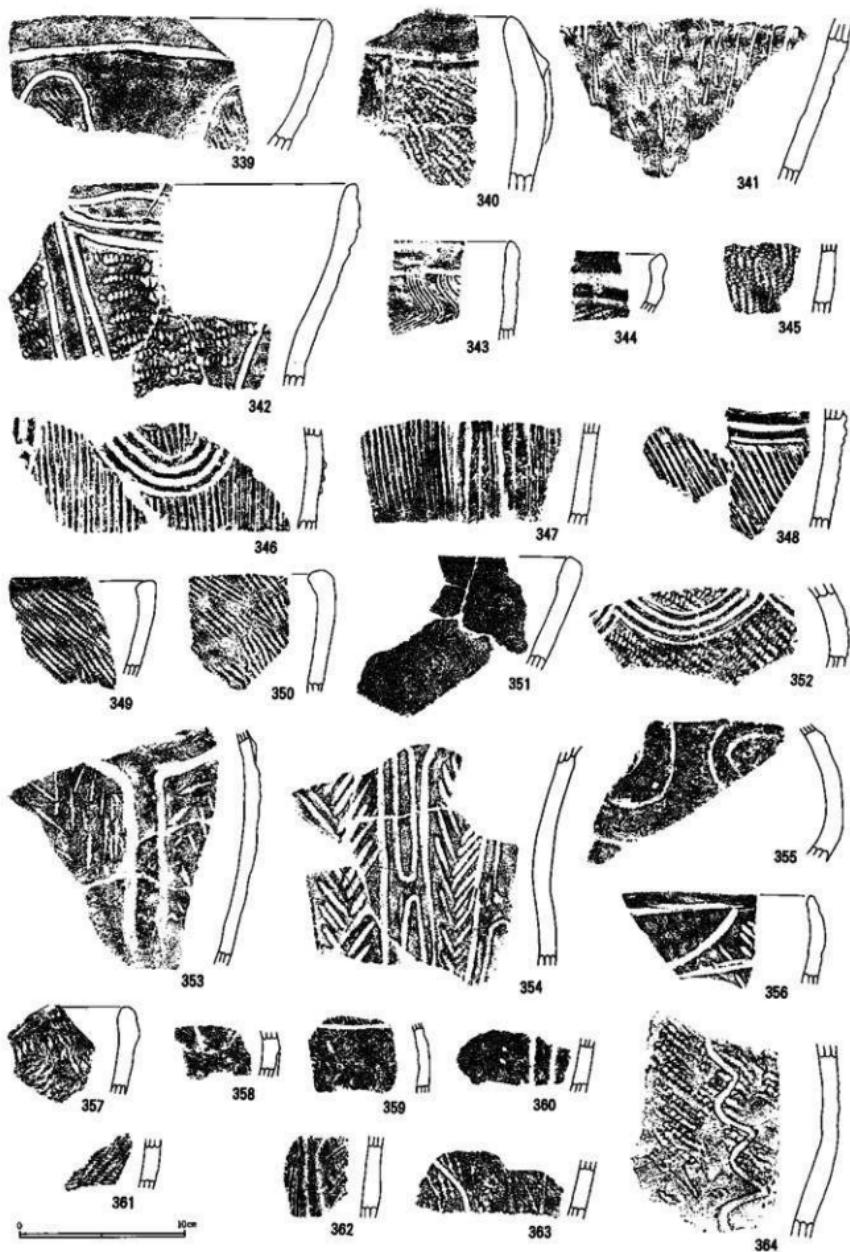
第69図 土器18



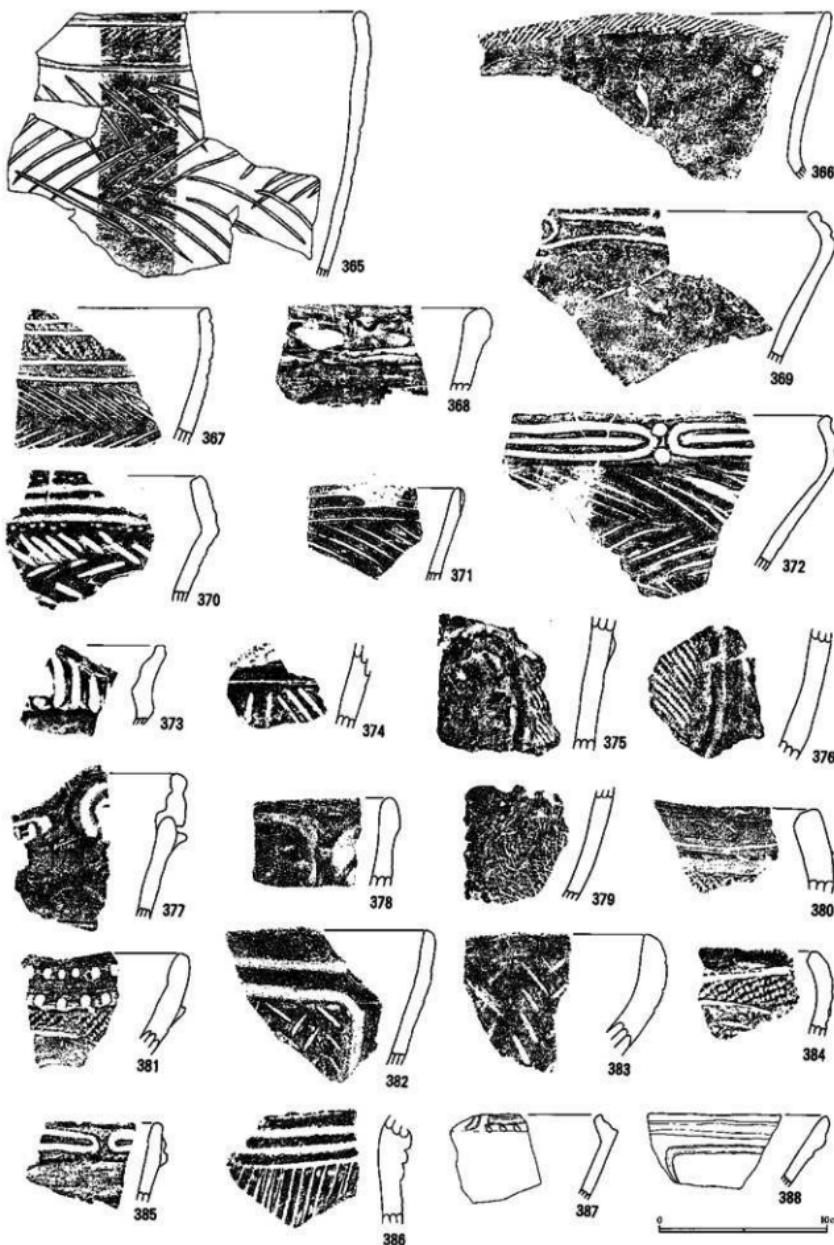
第70図 土器19



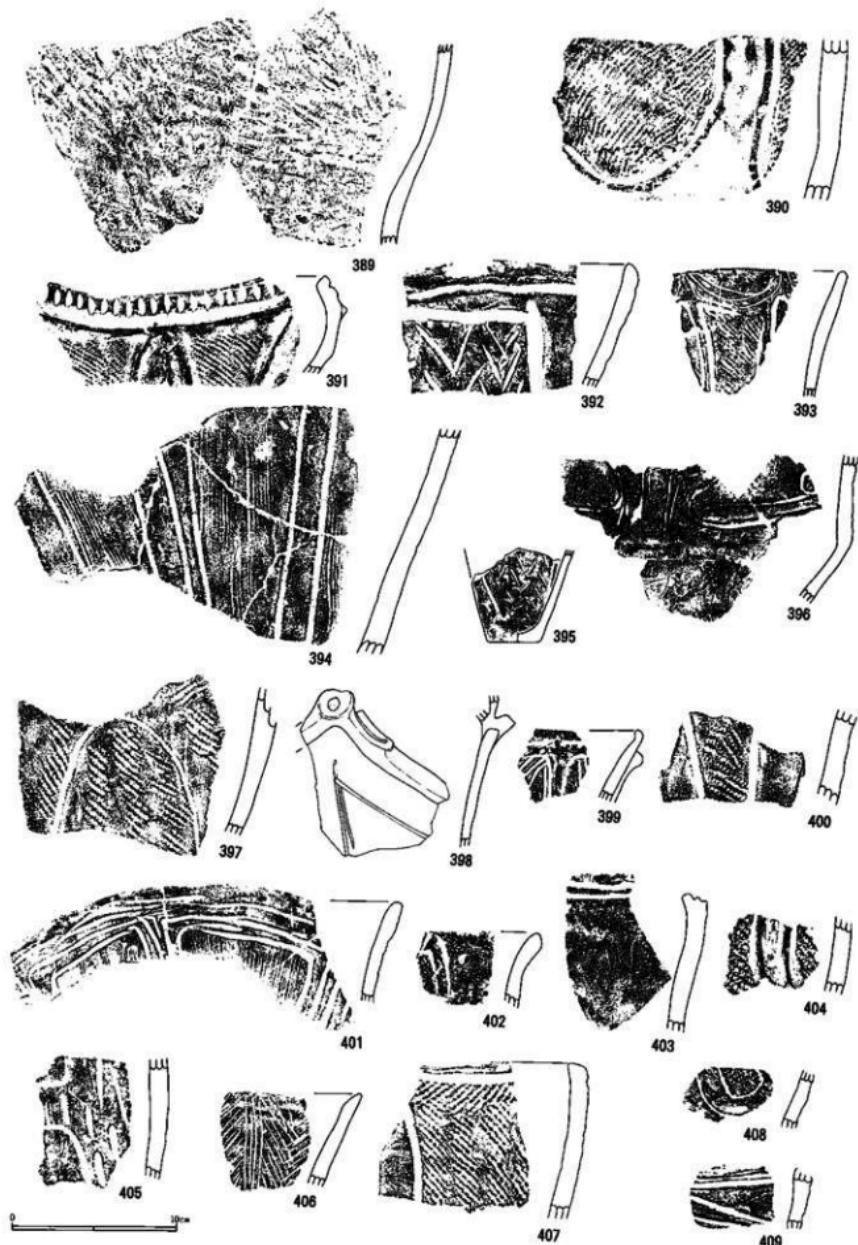
第71図 土器20



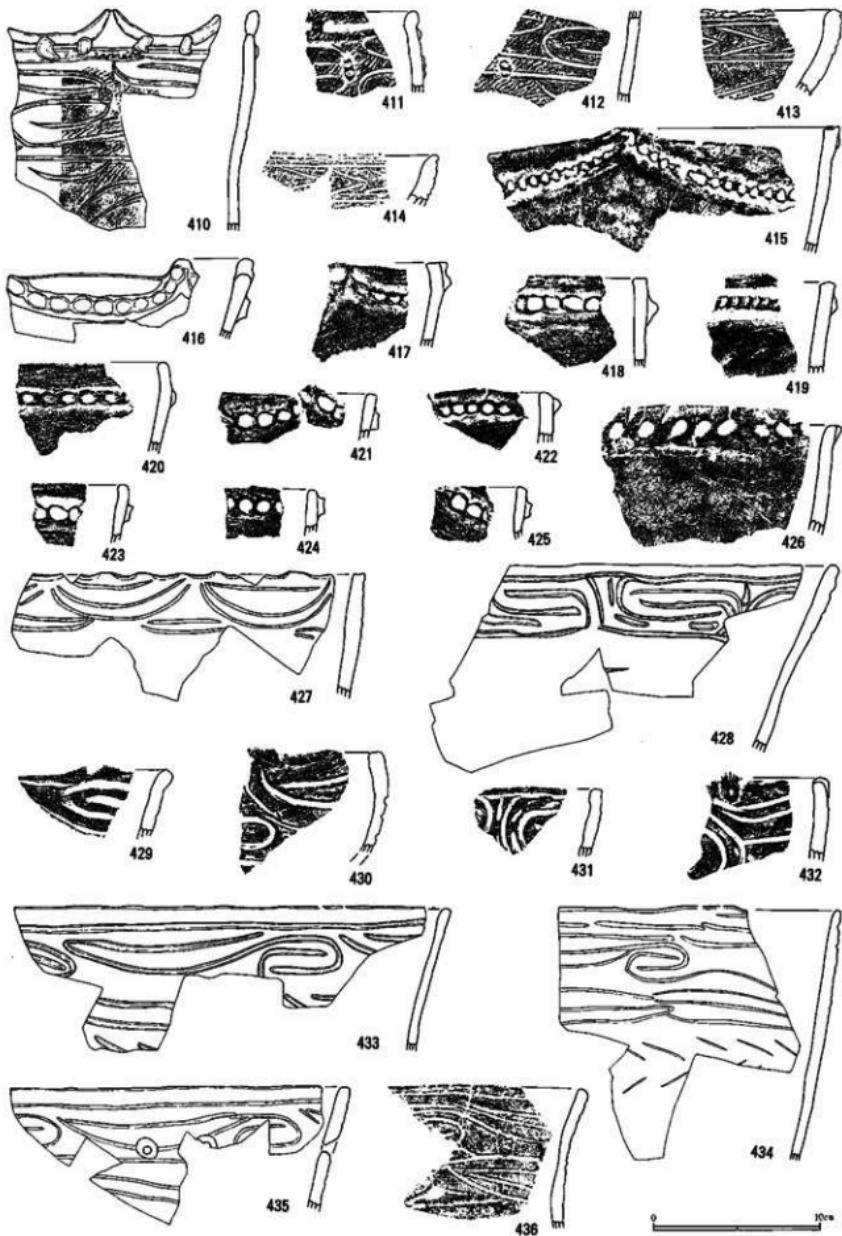
第72図 土器21



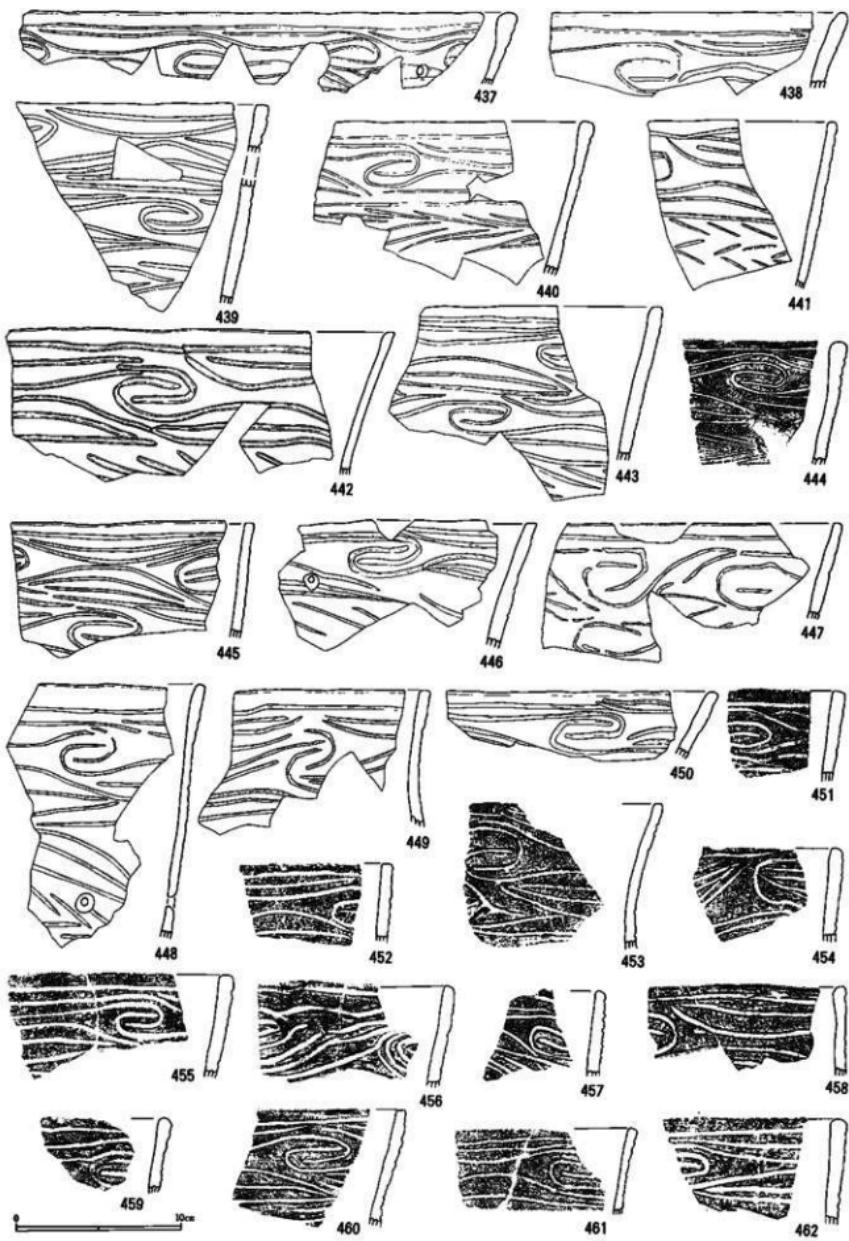
第73図 土器22



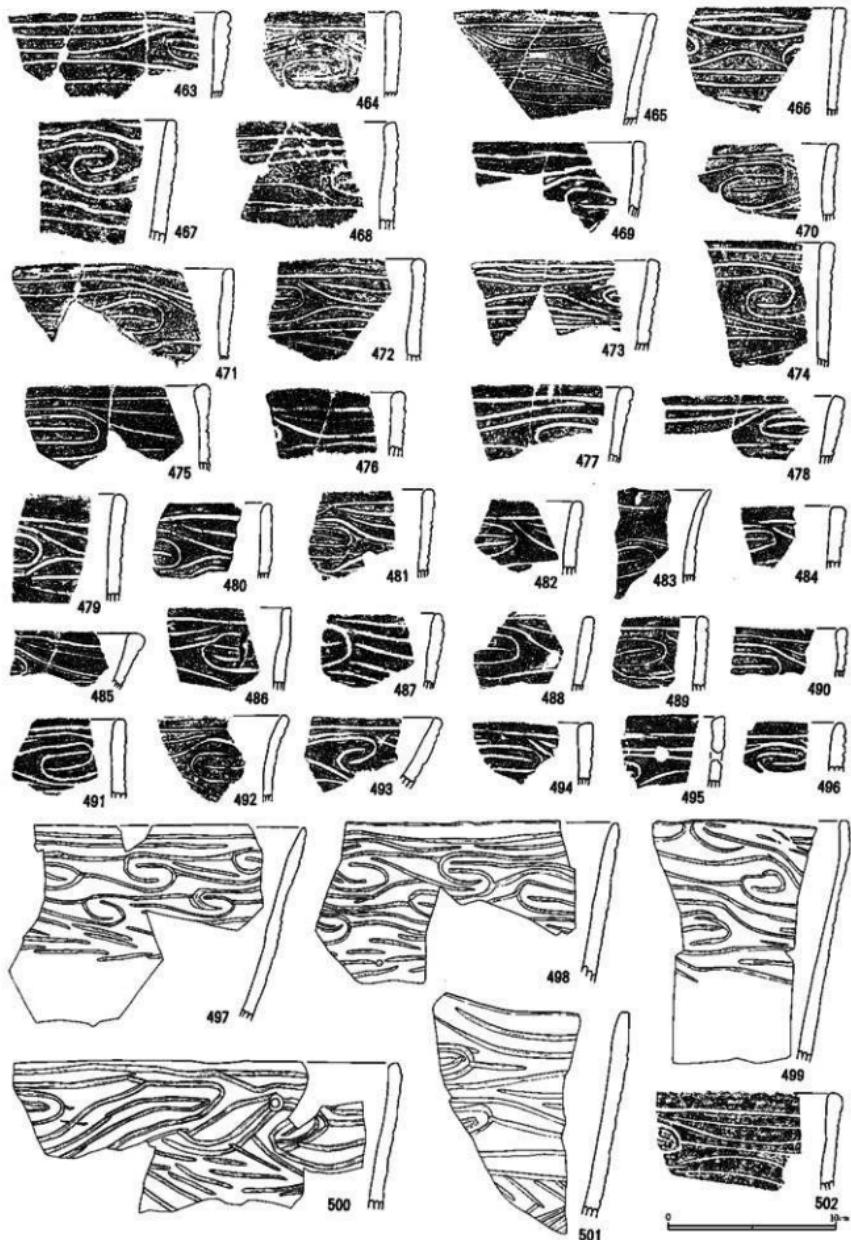
第74図 土器23



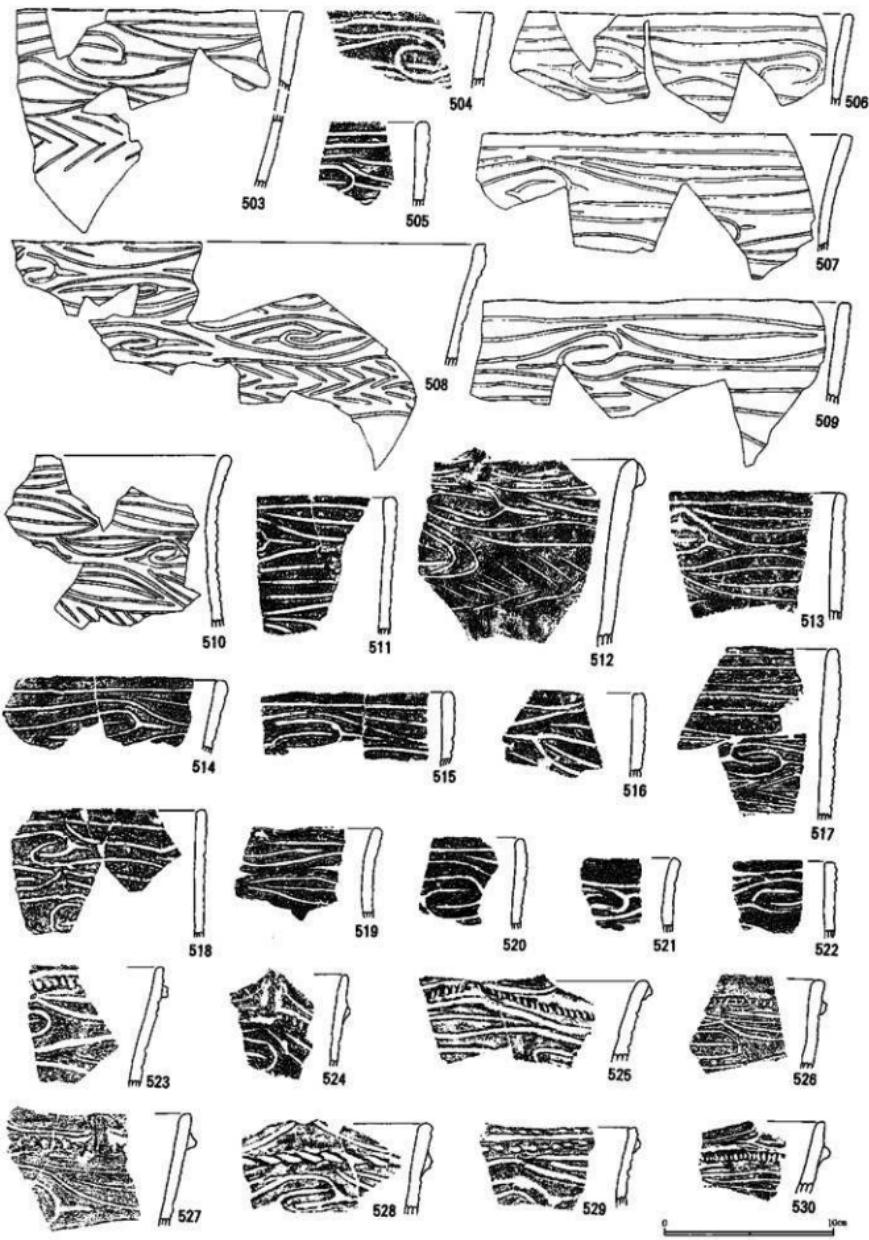
第75図 土器24



第76図 土器25



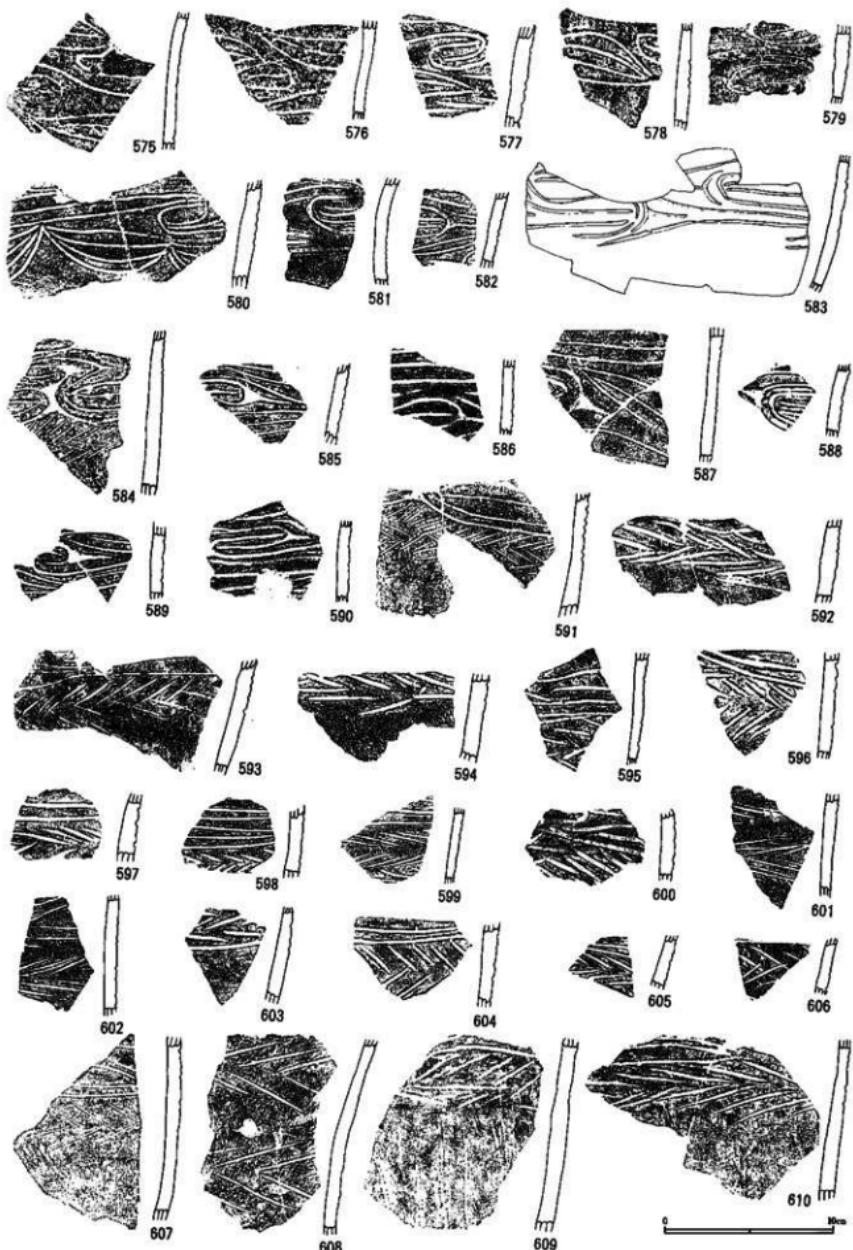
第77図 土器26



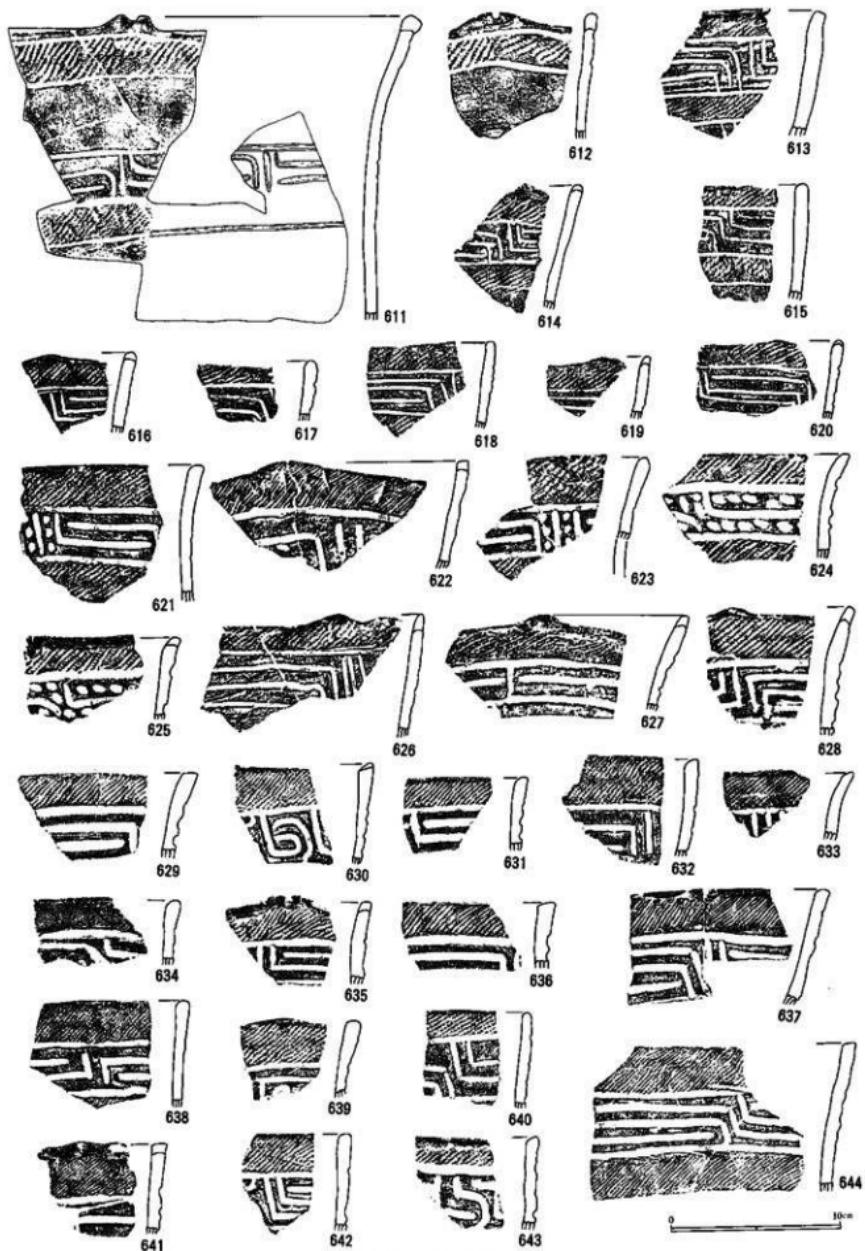
第78図 土器27



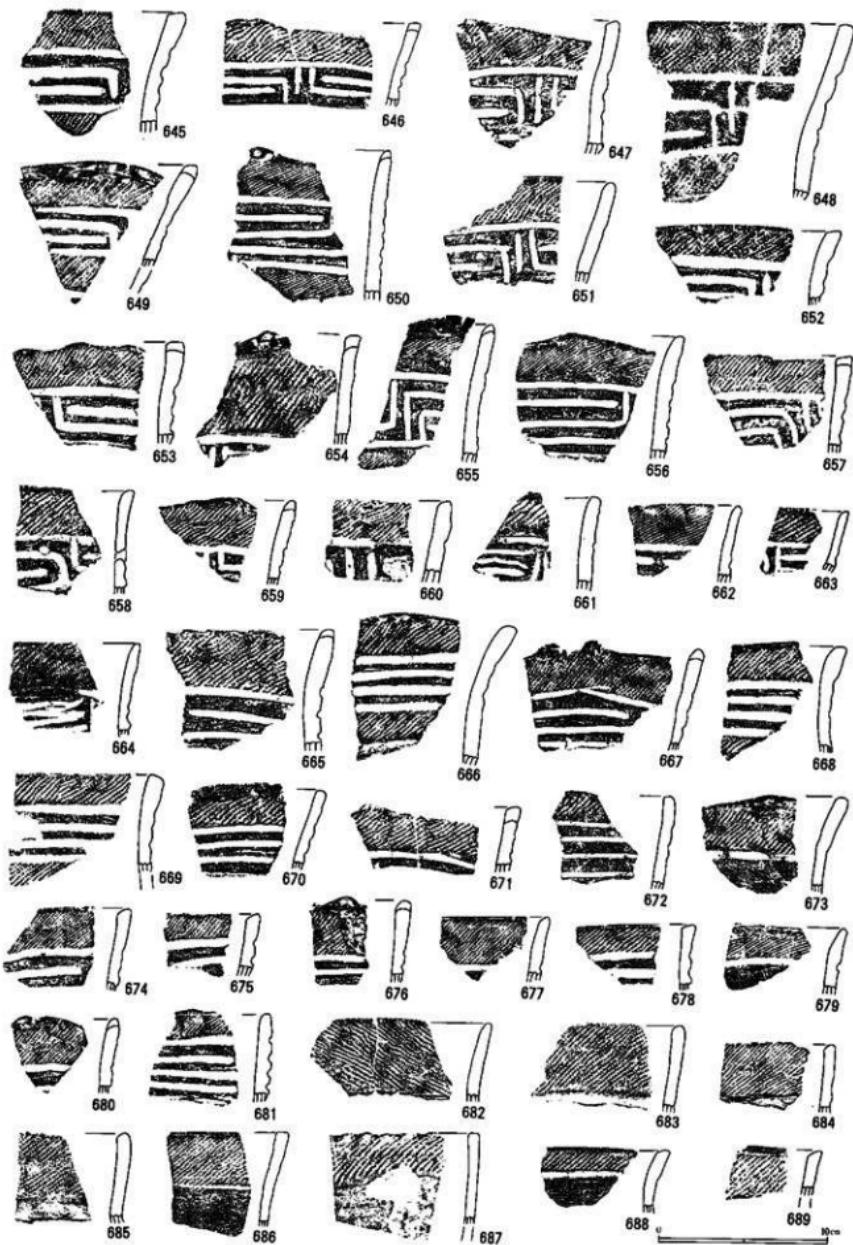
第79図 土器28



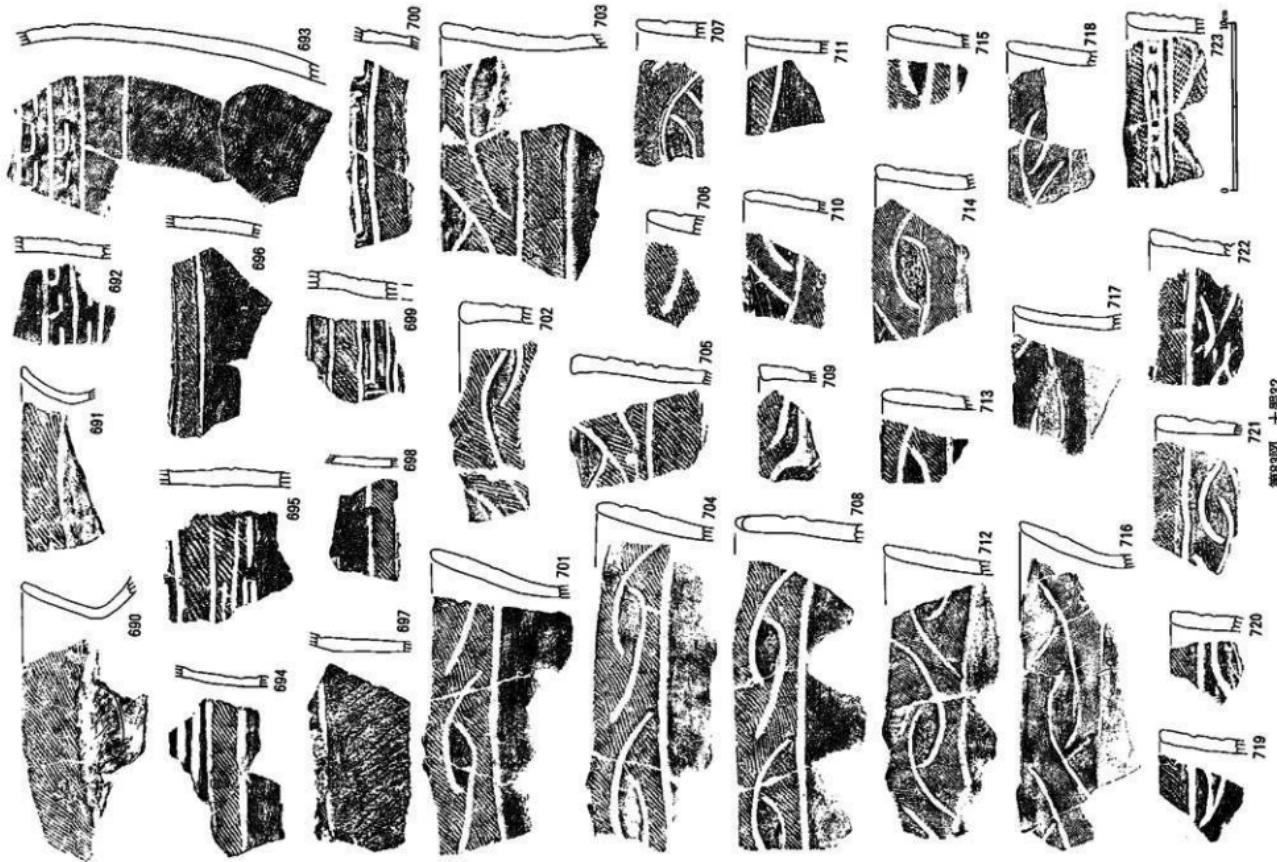
第80図 土器29



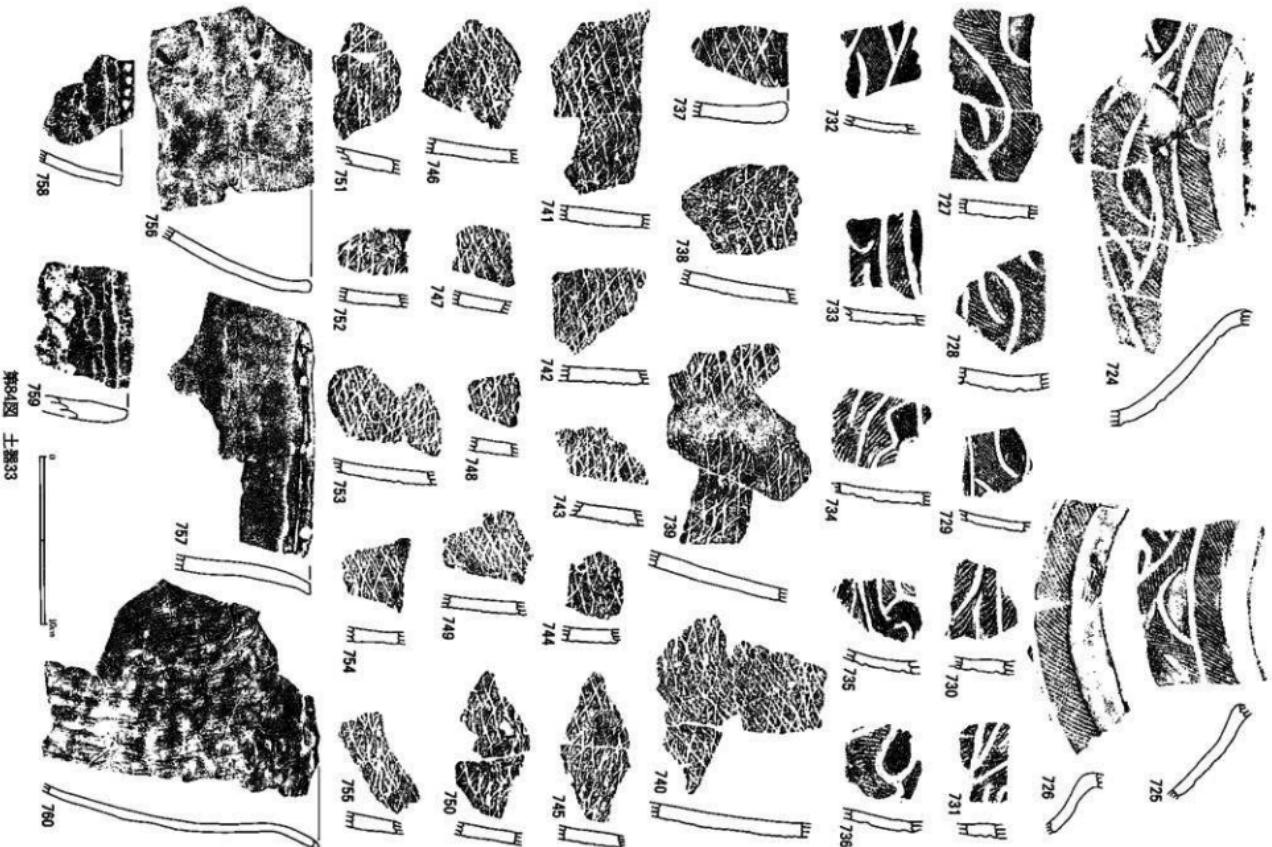
第81図 土器30



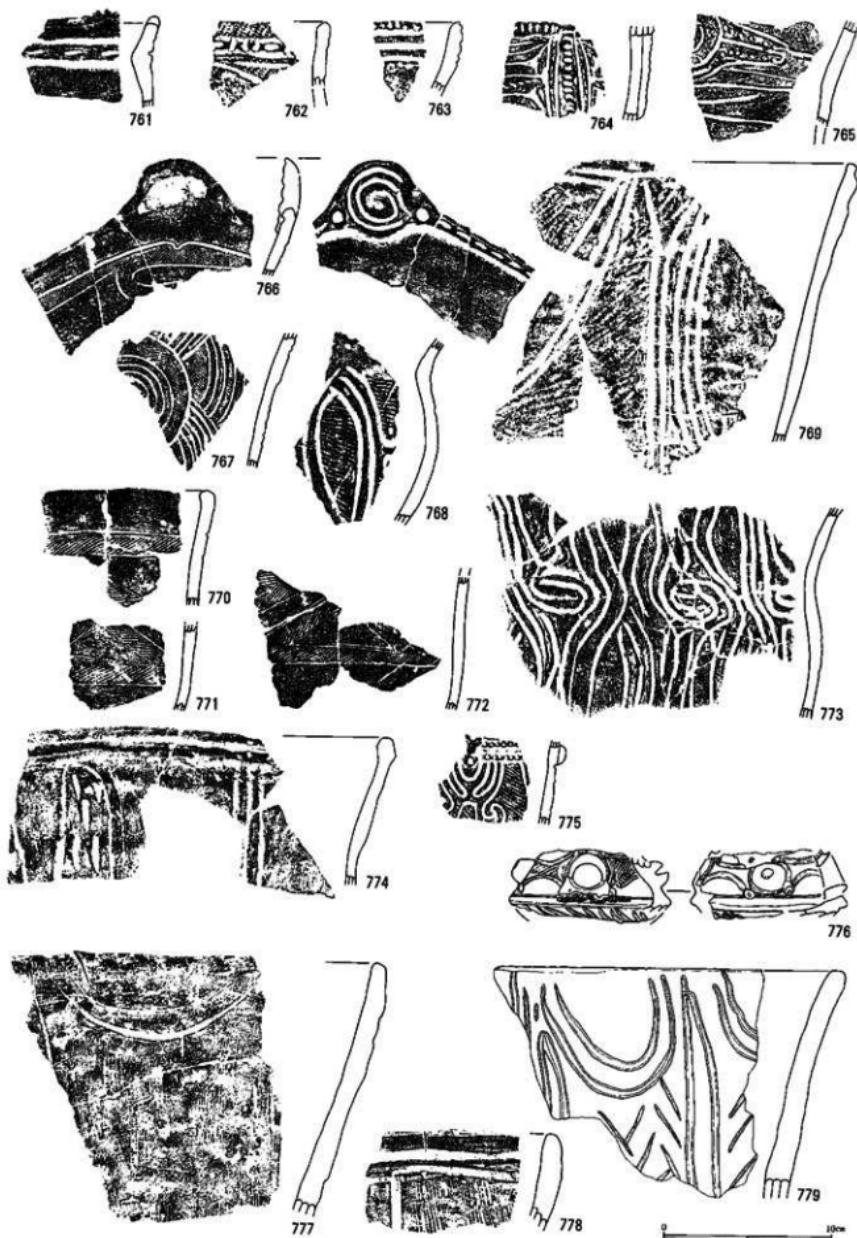
第82図 土器31.



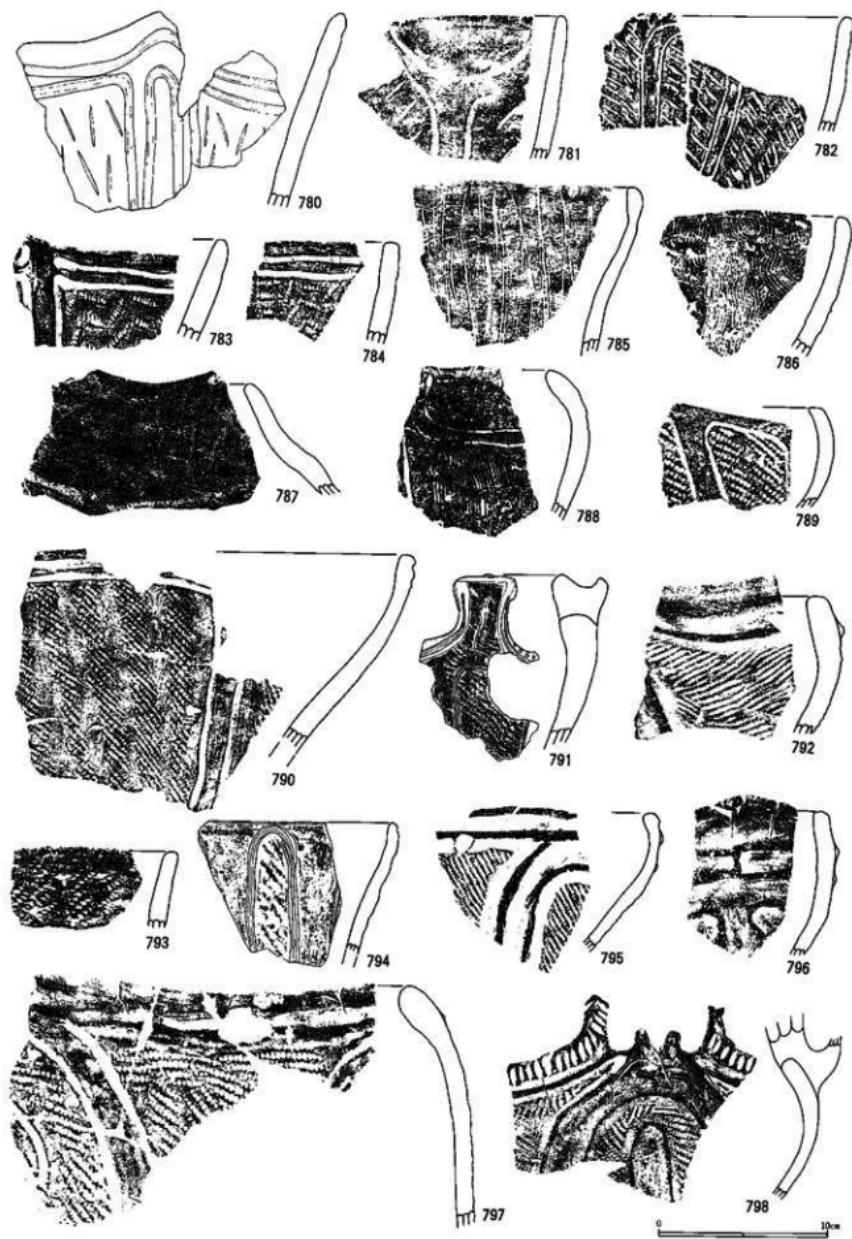
第63図 土器32



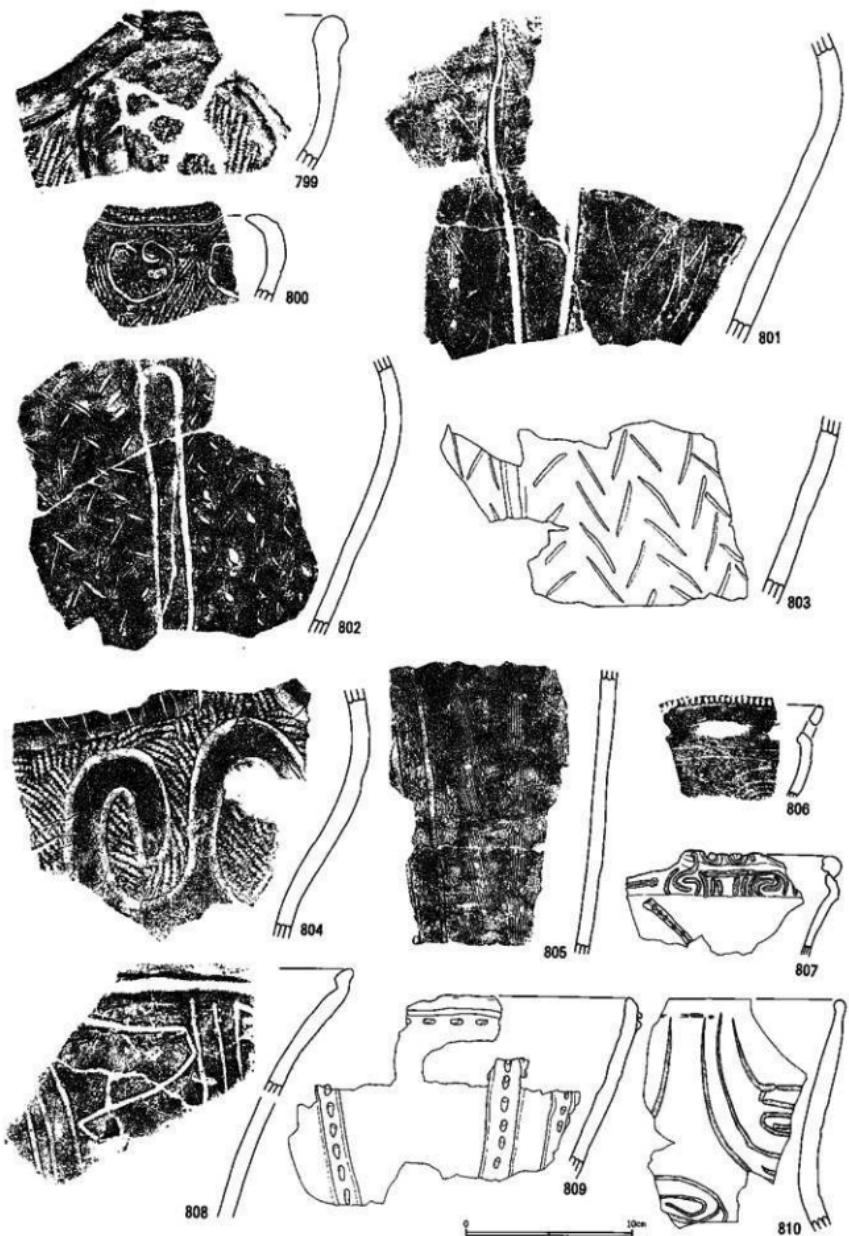
第84図 土器33



第85図 土器34

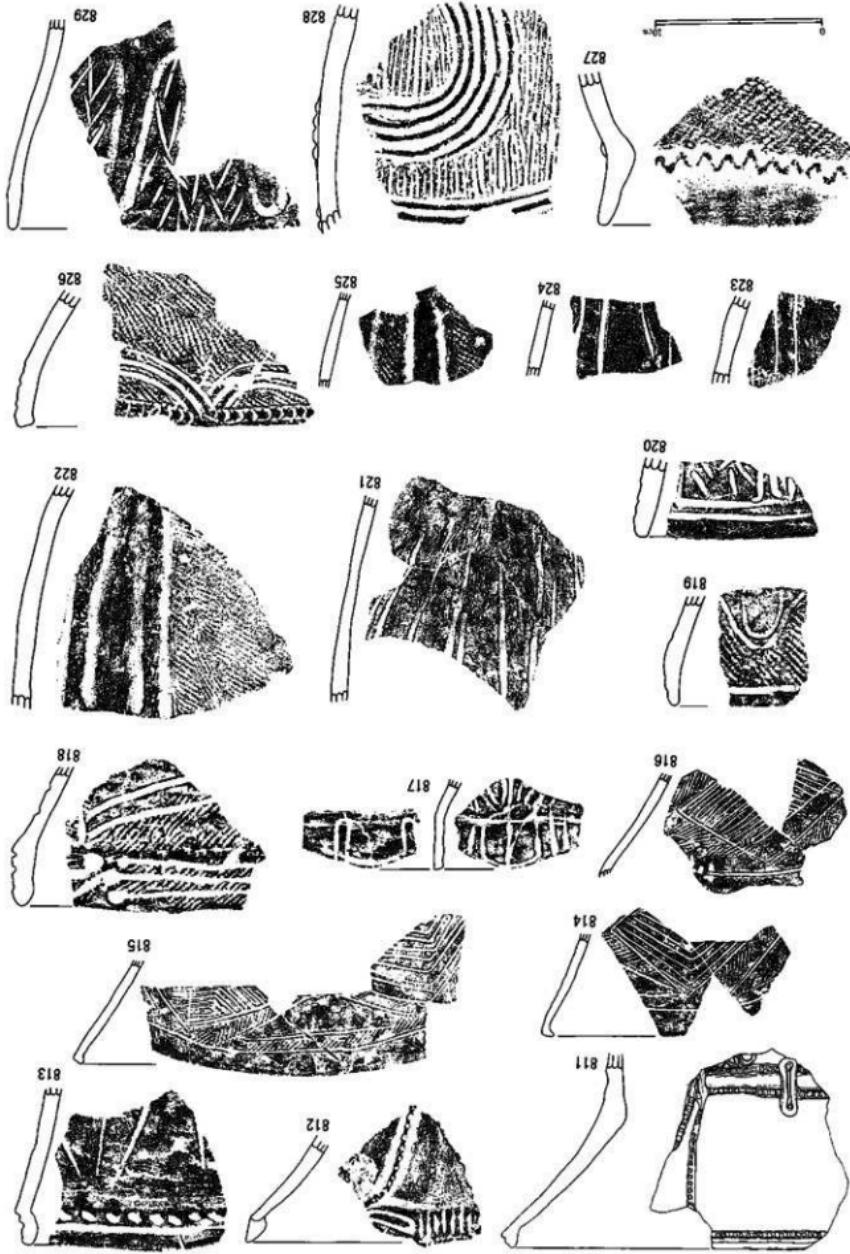


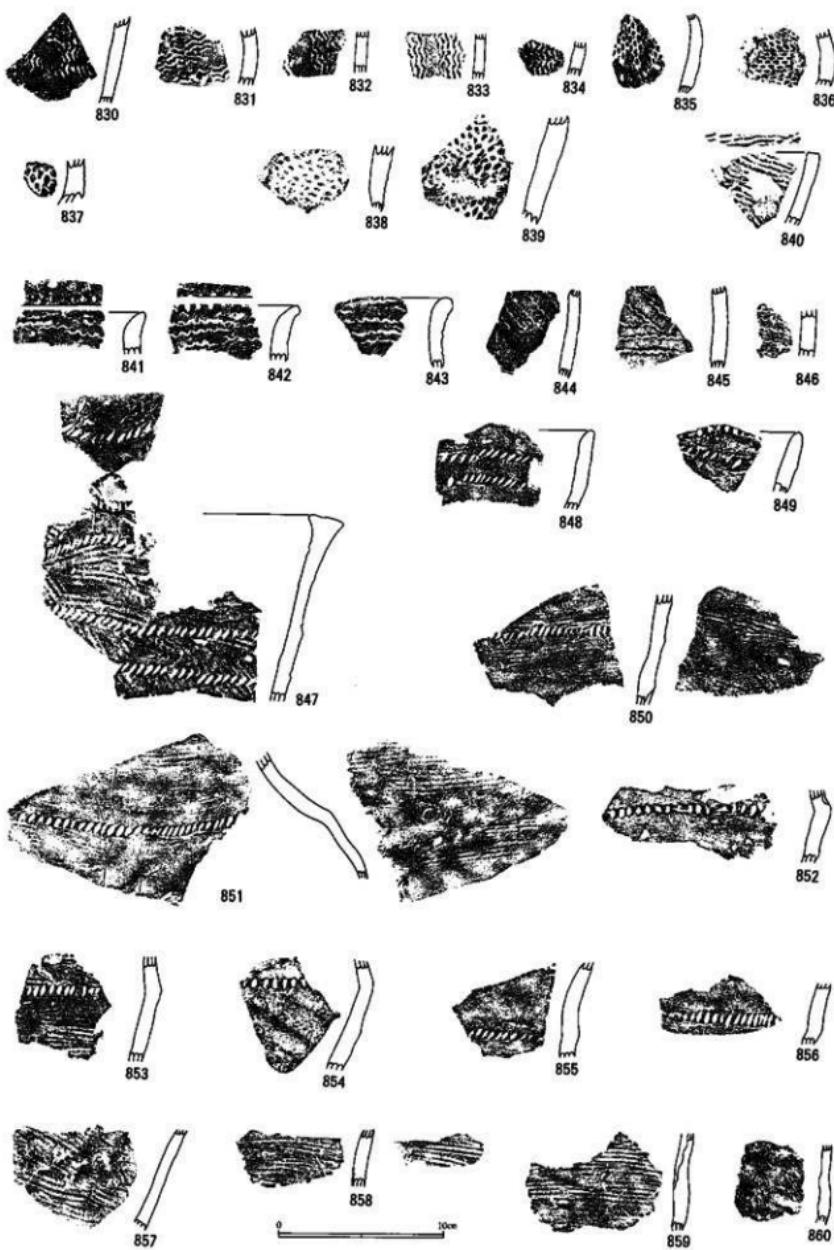
第36図 土器35



第87図 土器36

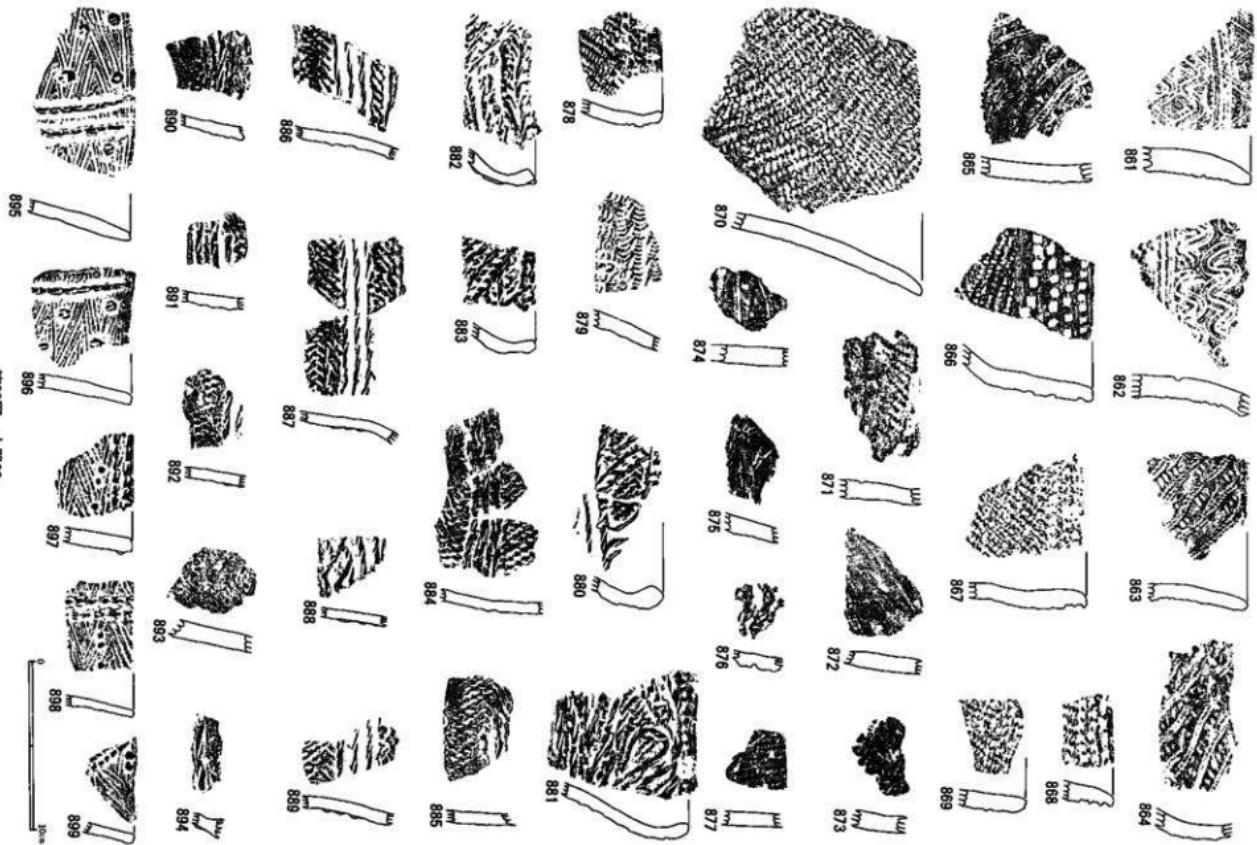
第88图 土器37



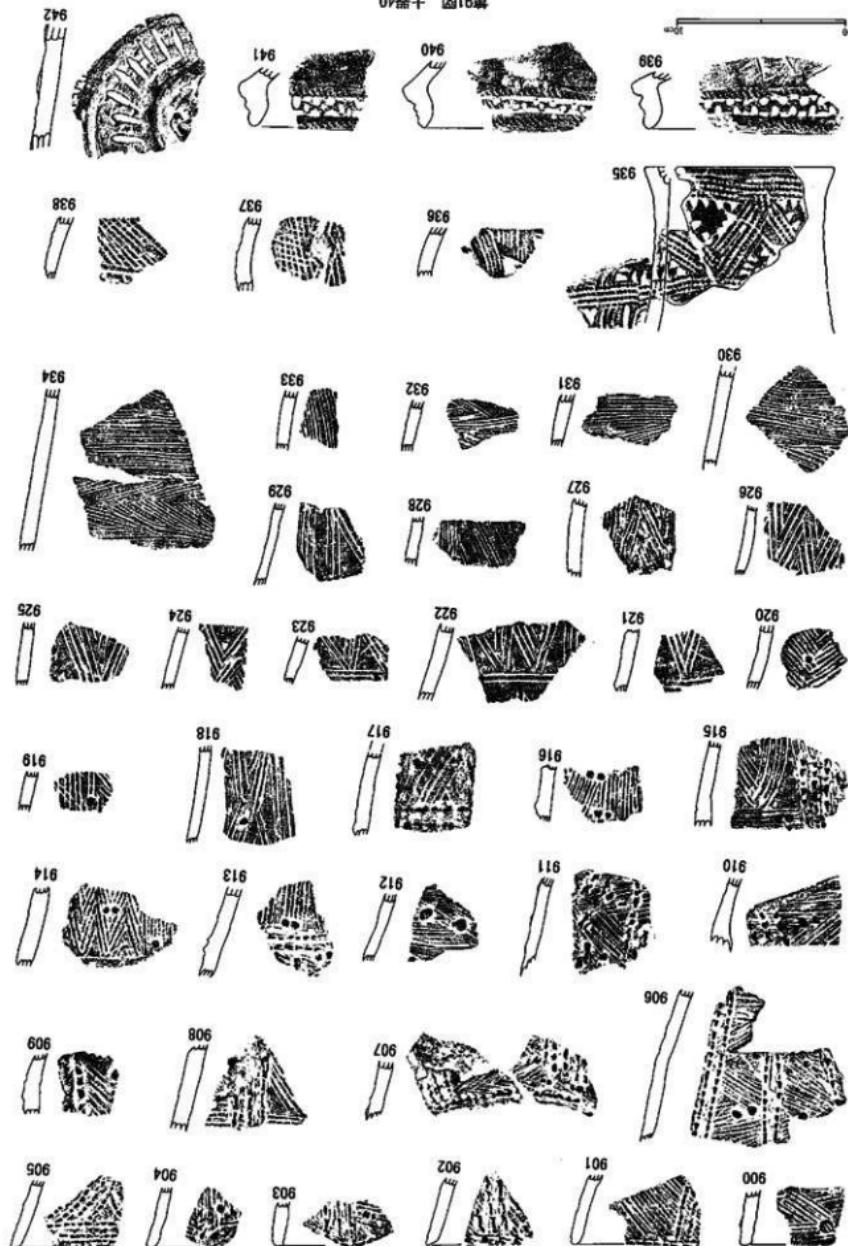


第89図 土器38

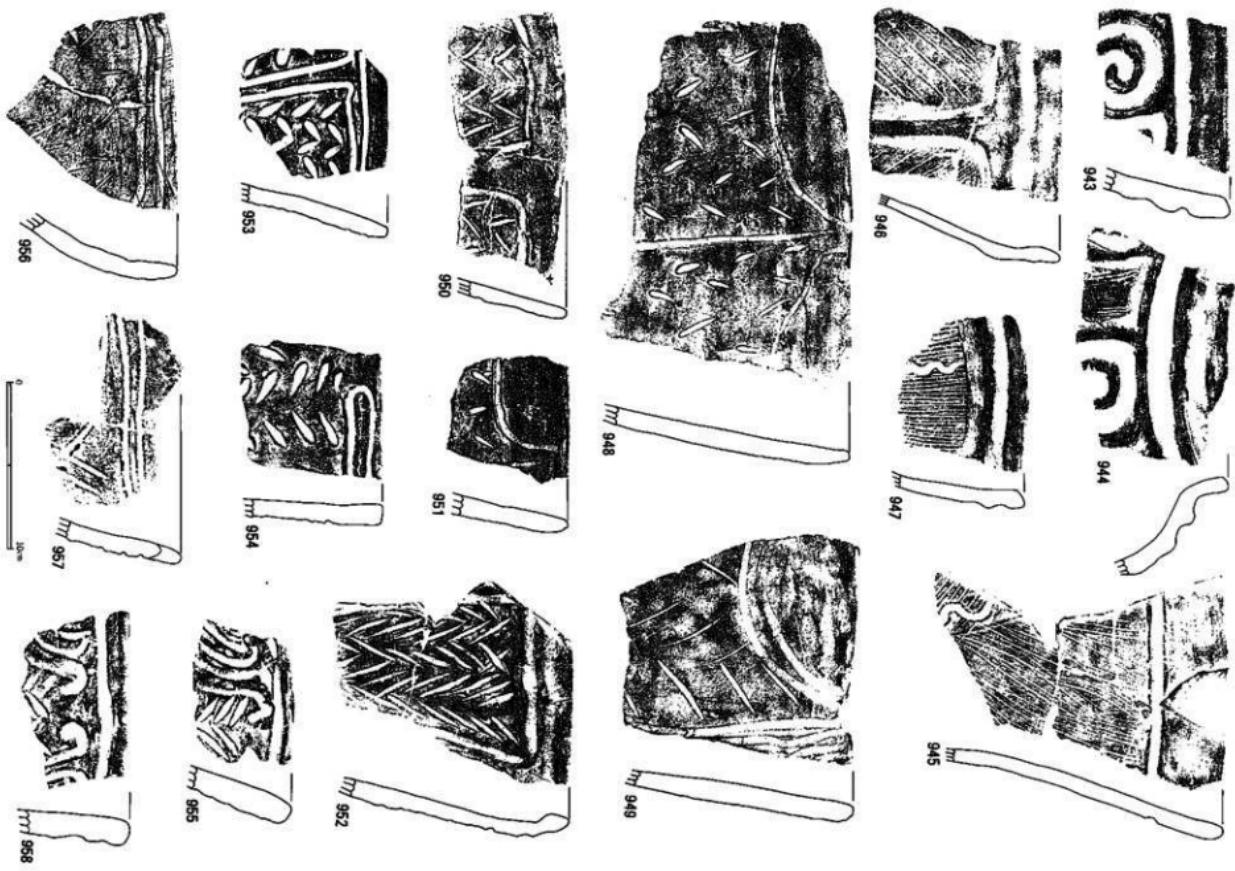
第90図 土器39

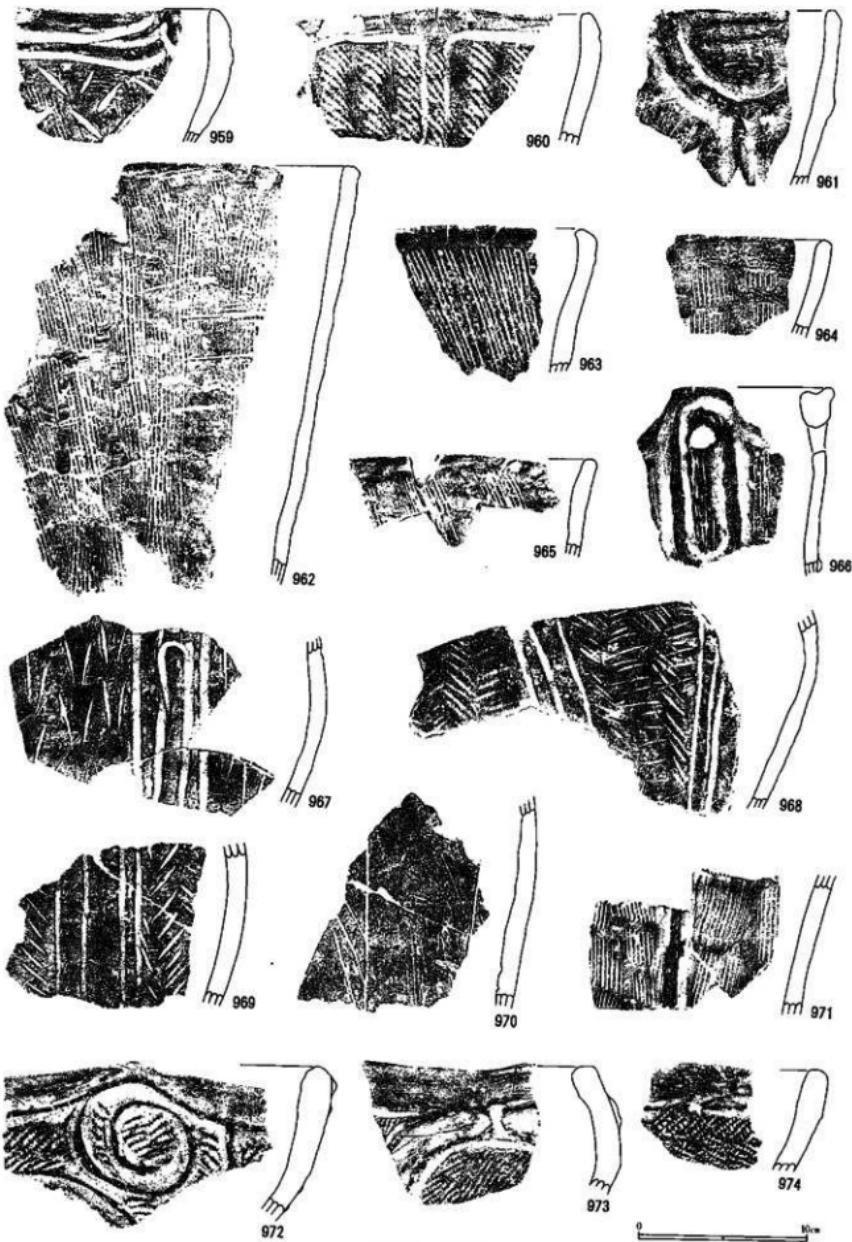


第91圖 土器40

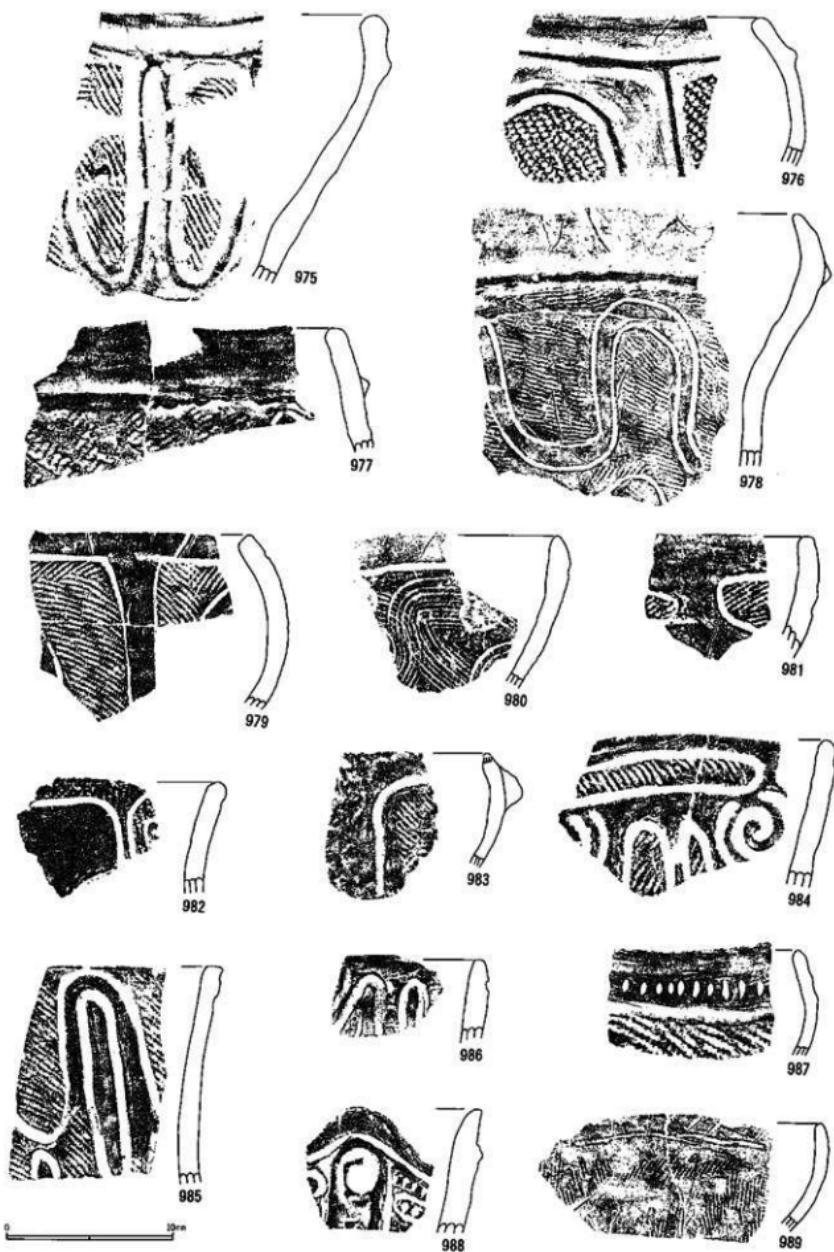


第22図 土器41

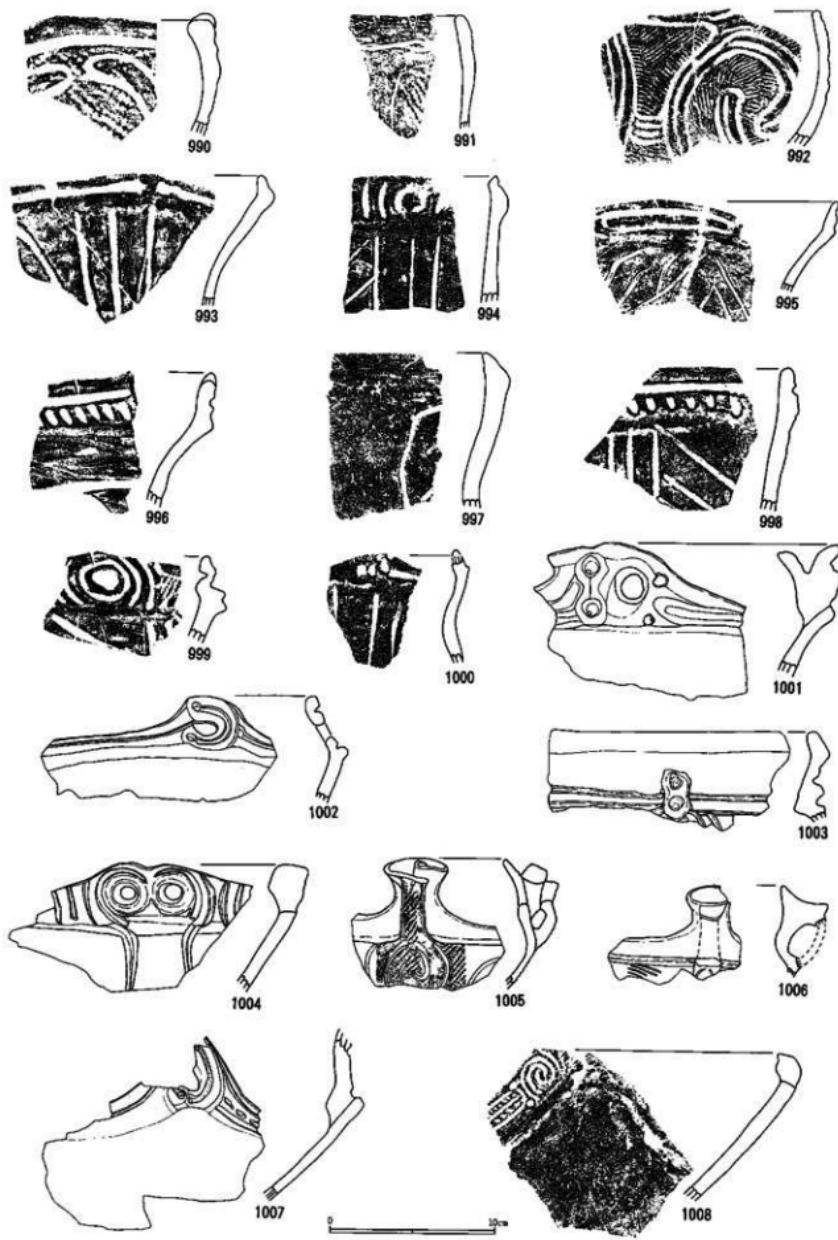




第93図 土器42

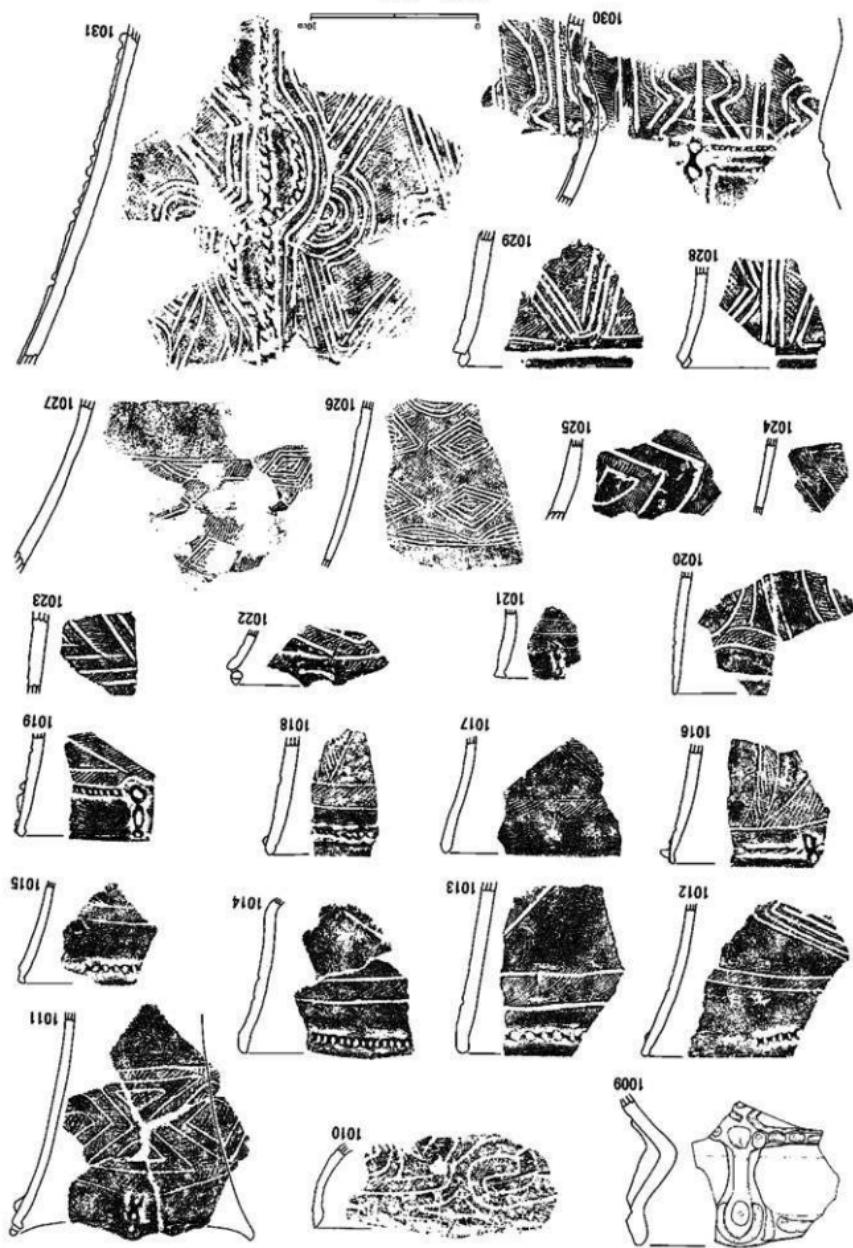


第94図 土器43

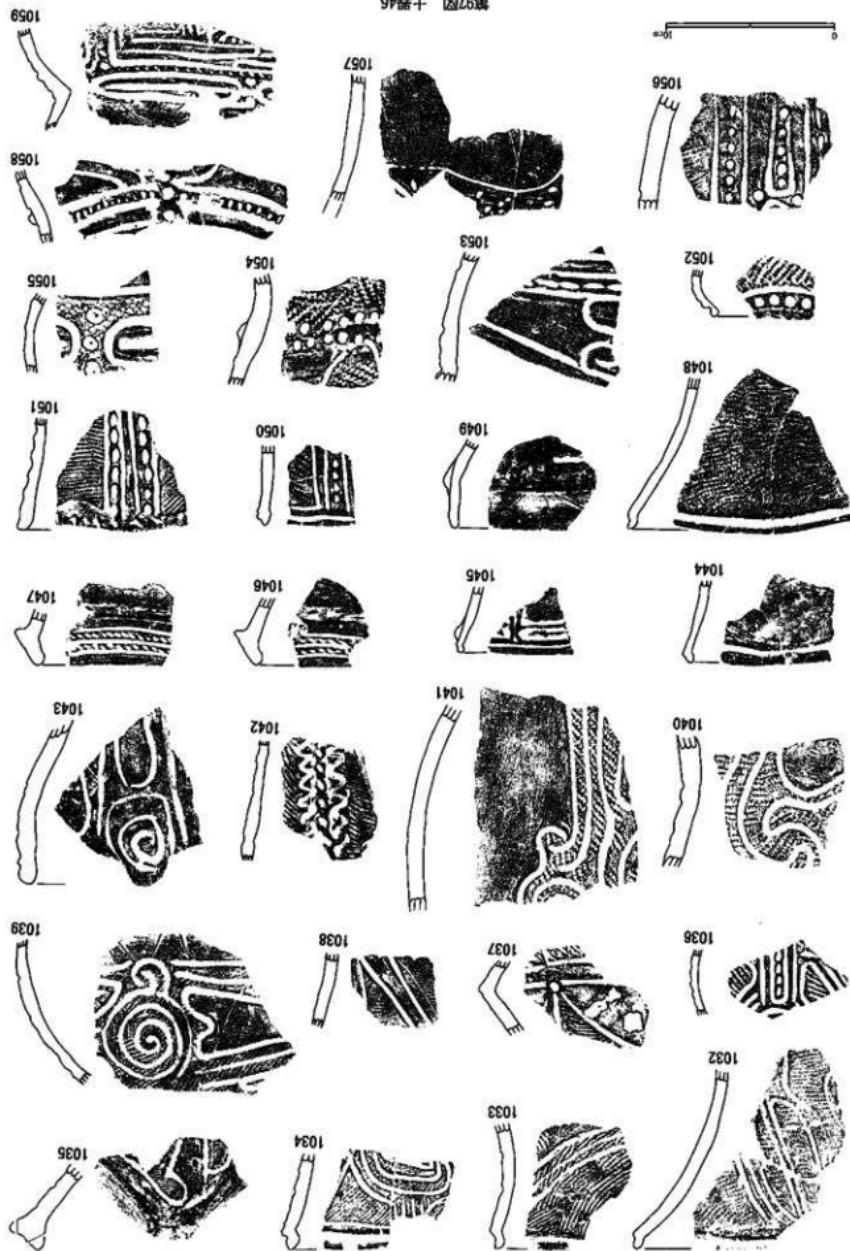


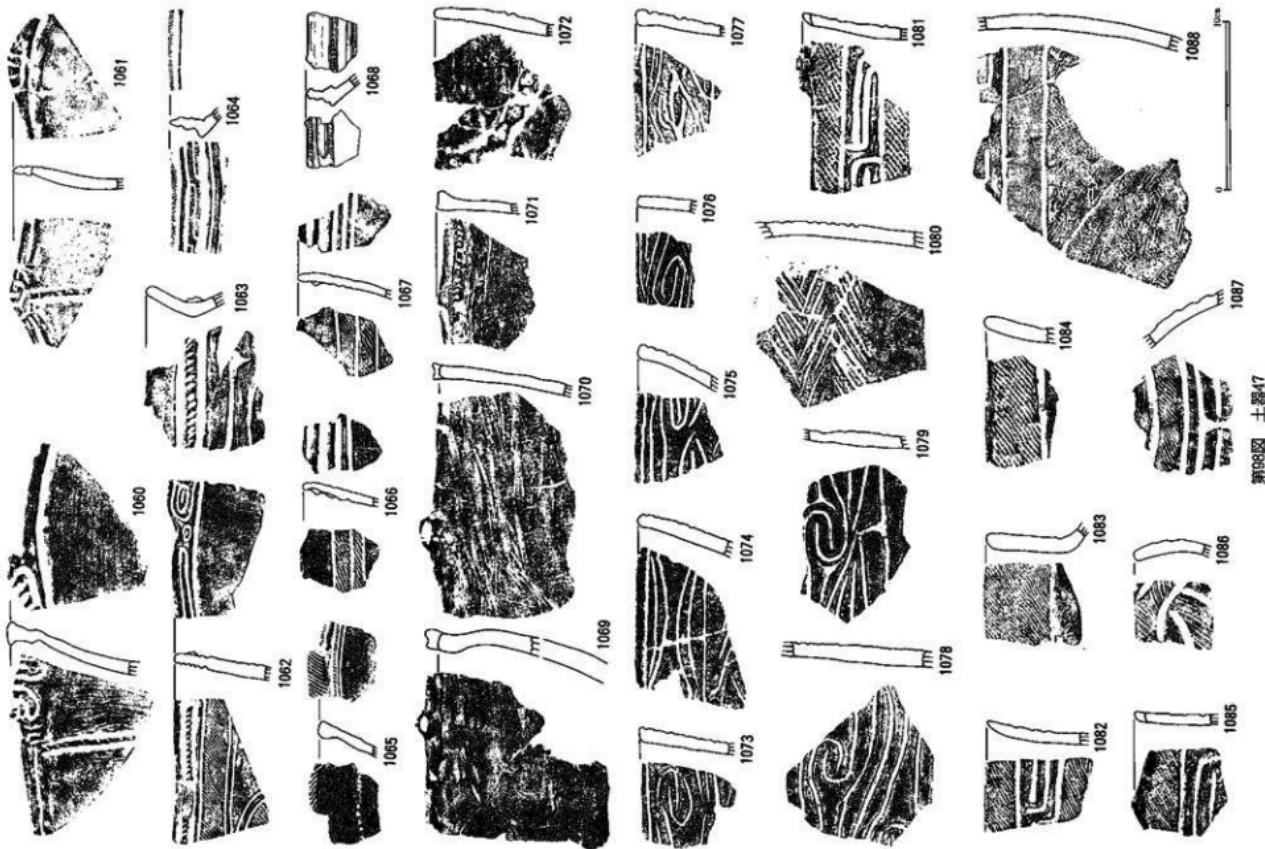
第95図 土器44

圖96 土器45

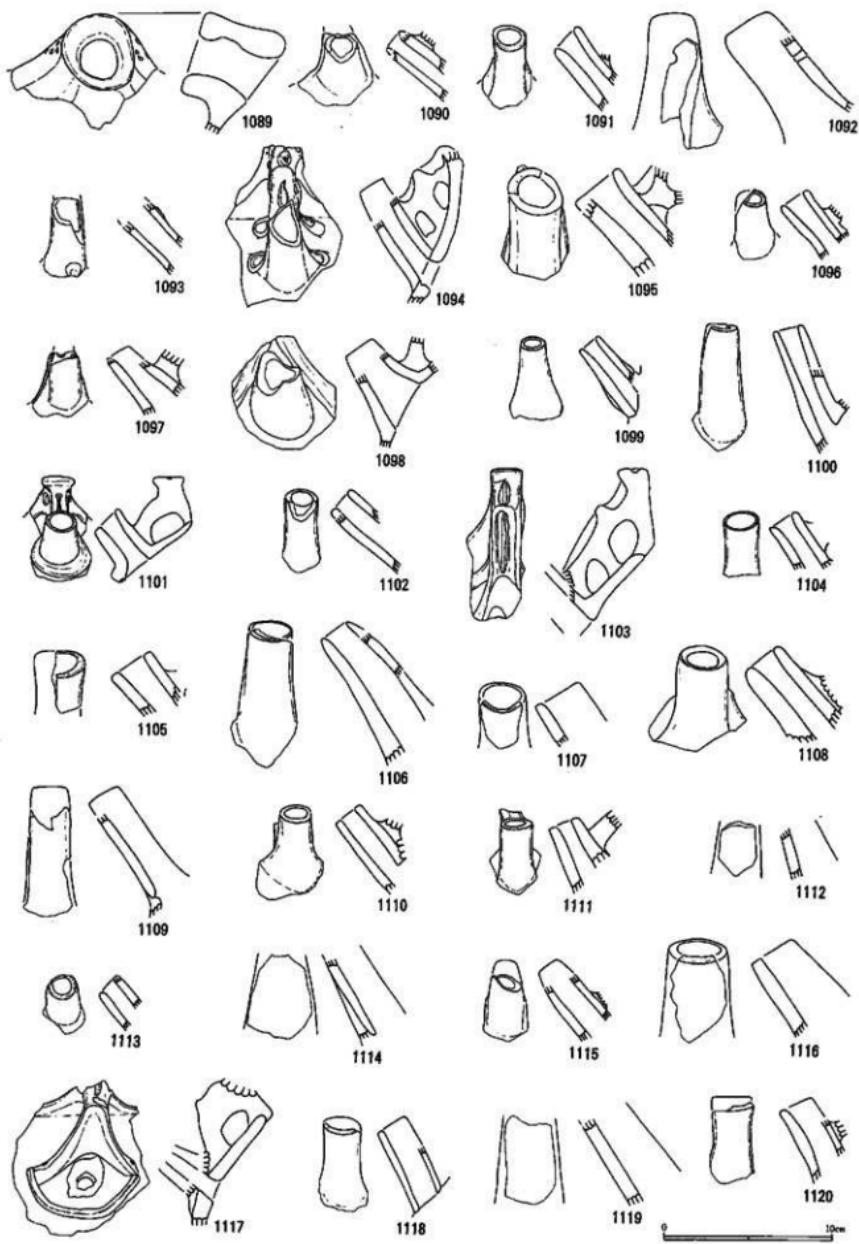


第97圖 土器46

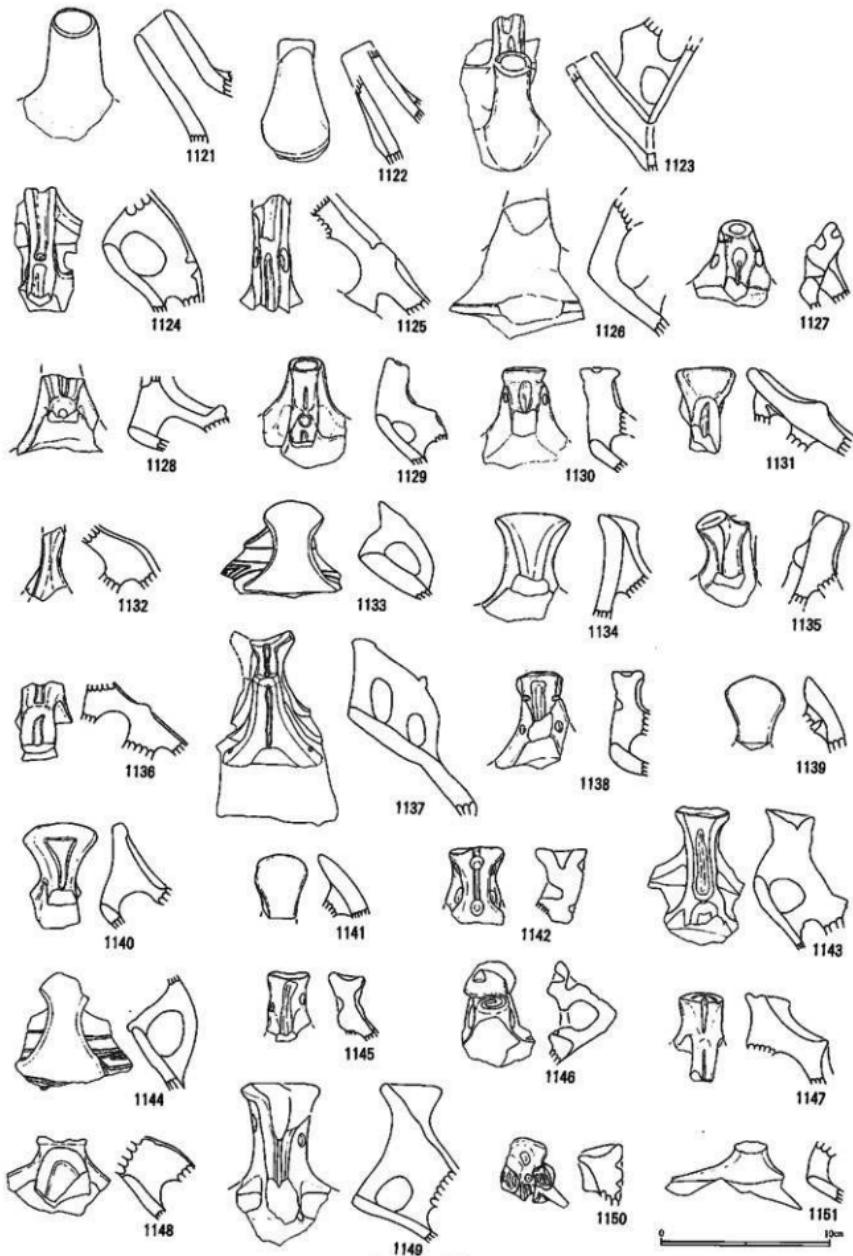




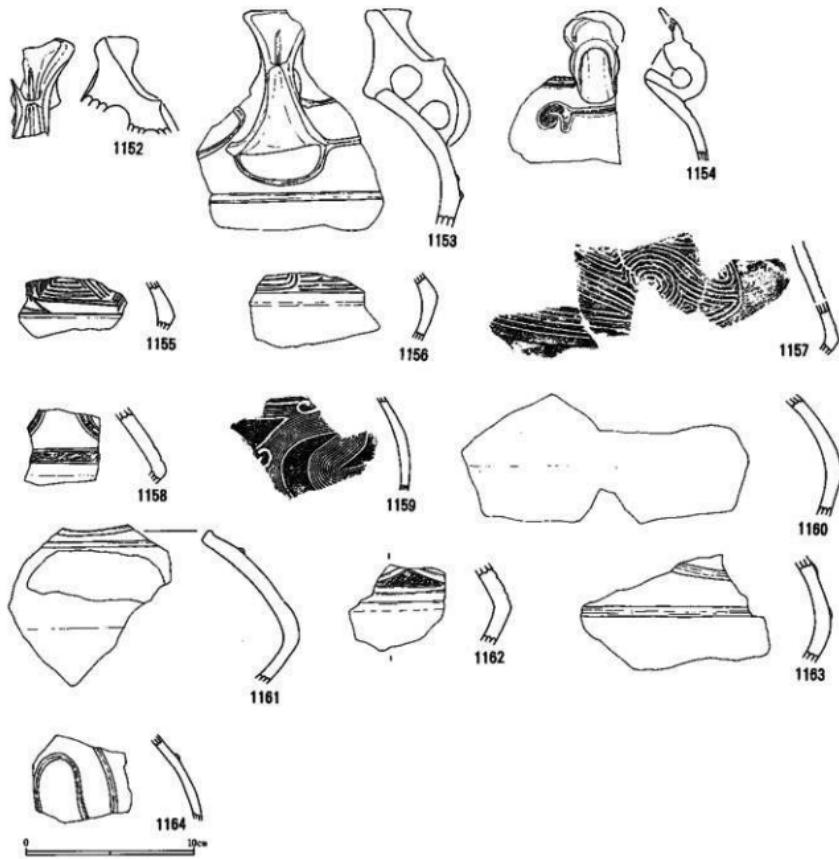
第88図 土器47



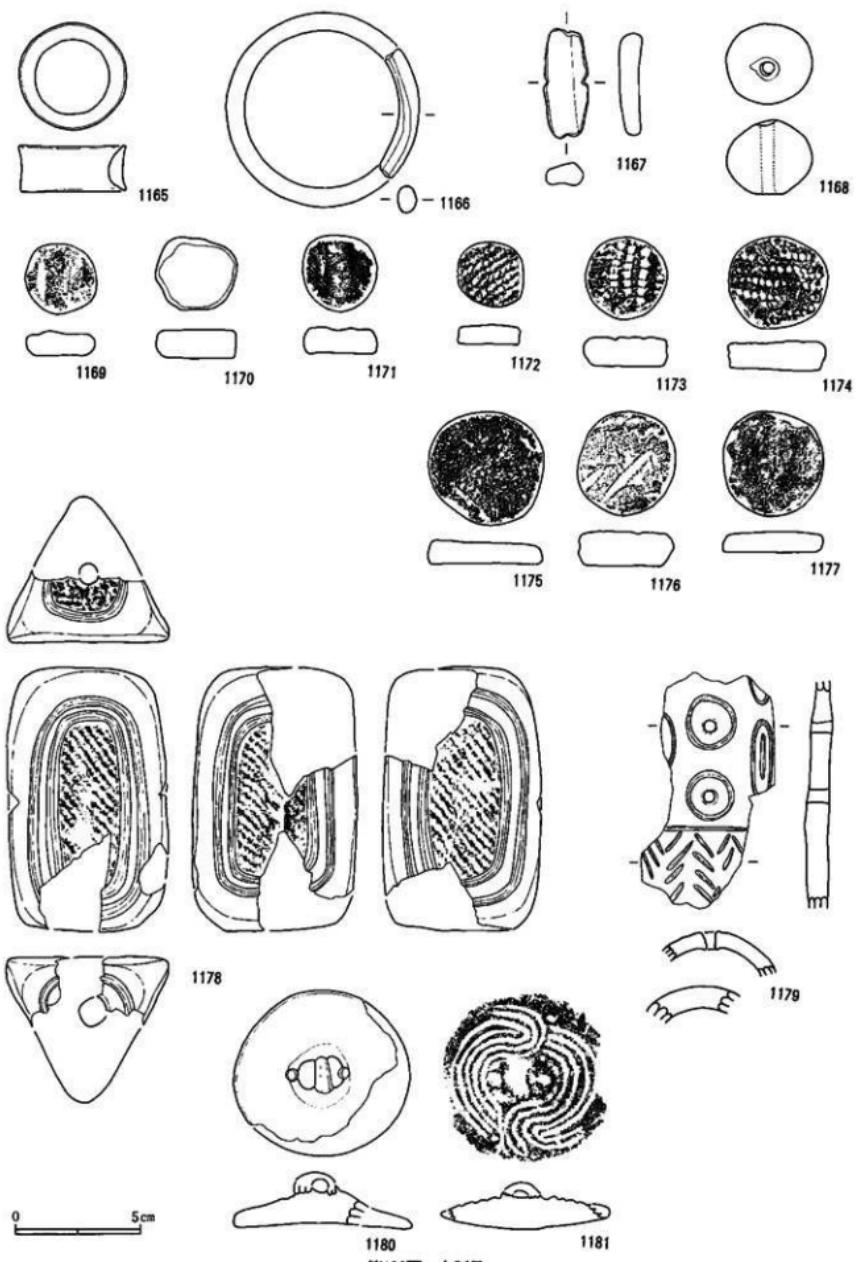
第99図 土器48



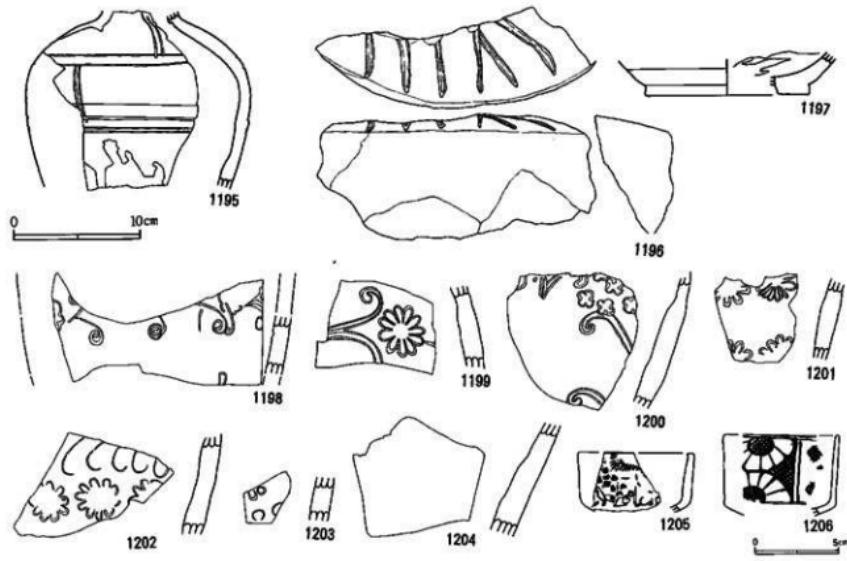
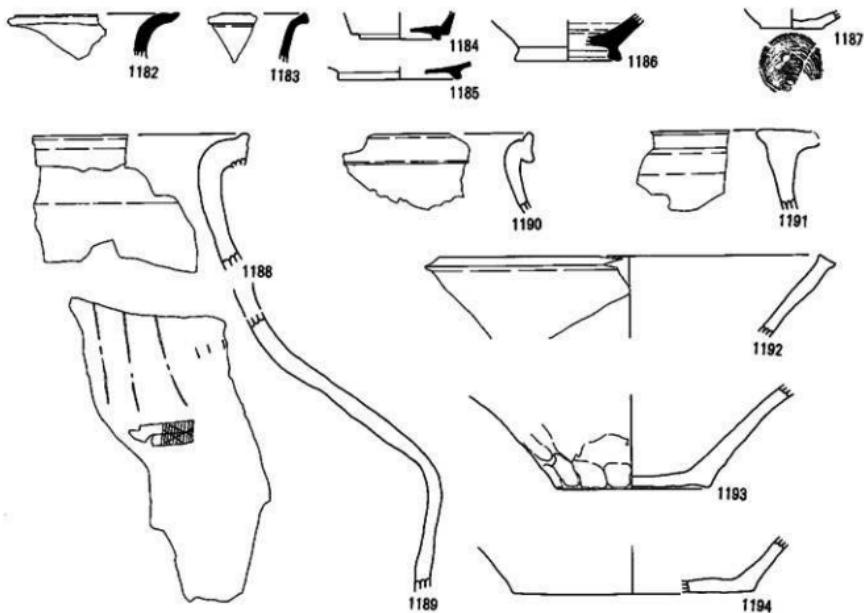
第100図 土器49



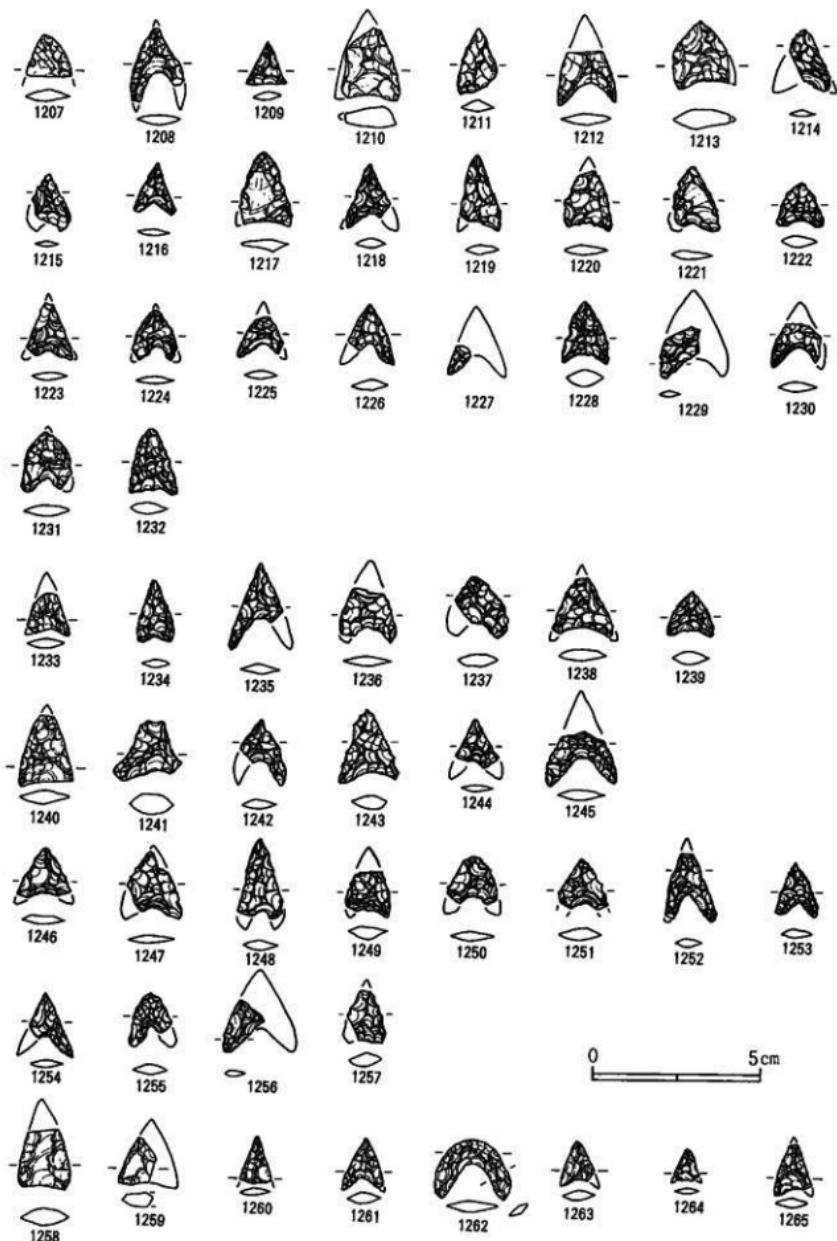
第101図 土器50



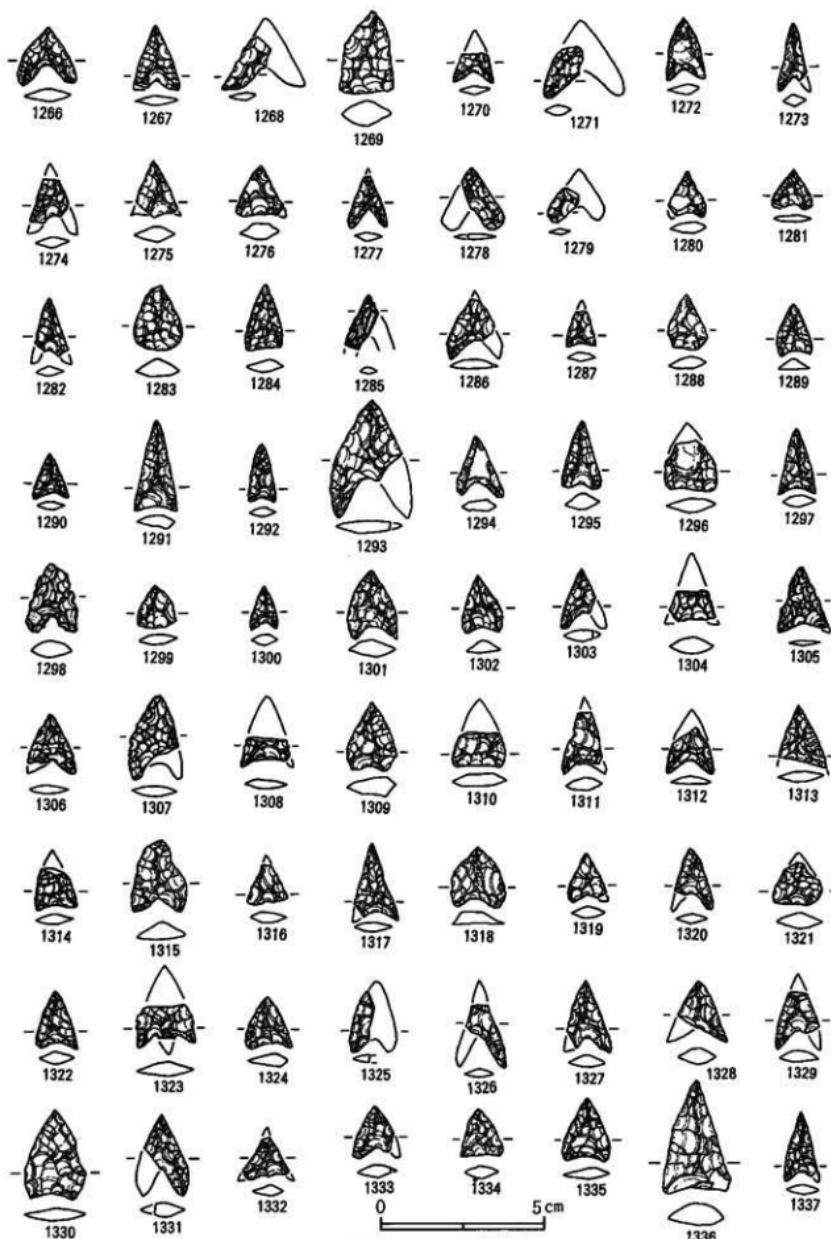
第102図 土製品



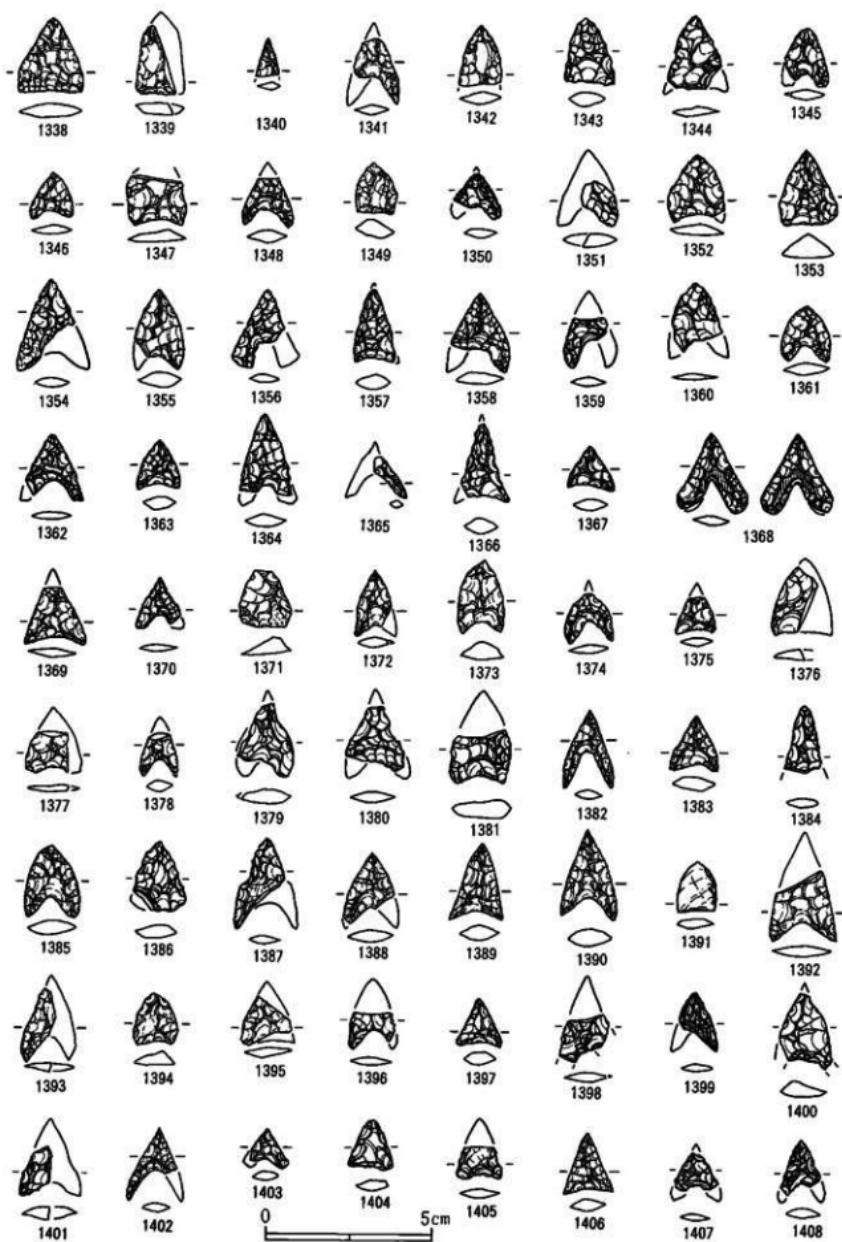
第103図 土器類・須恵器・中近世陶磁器類



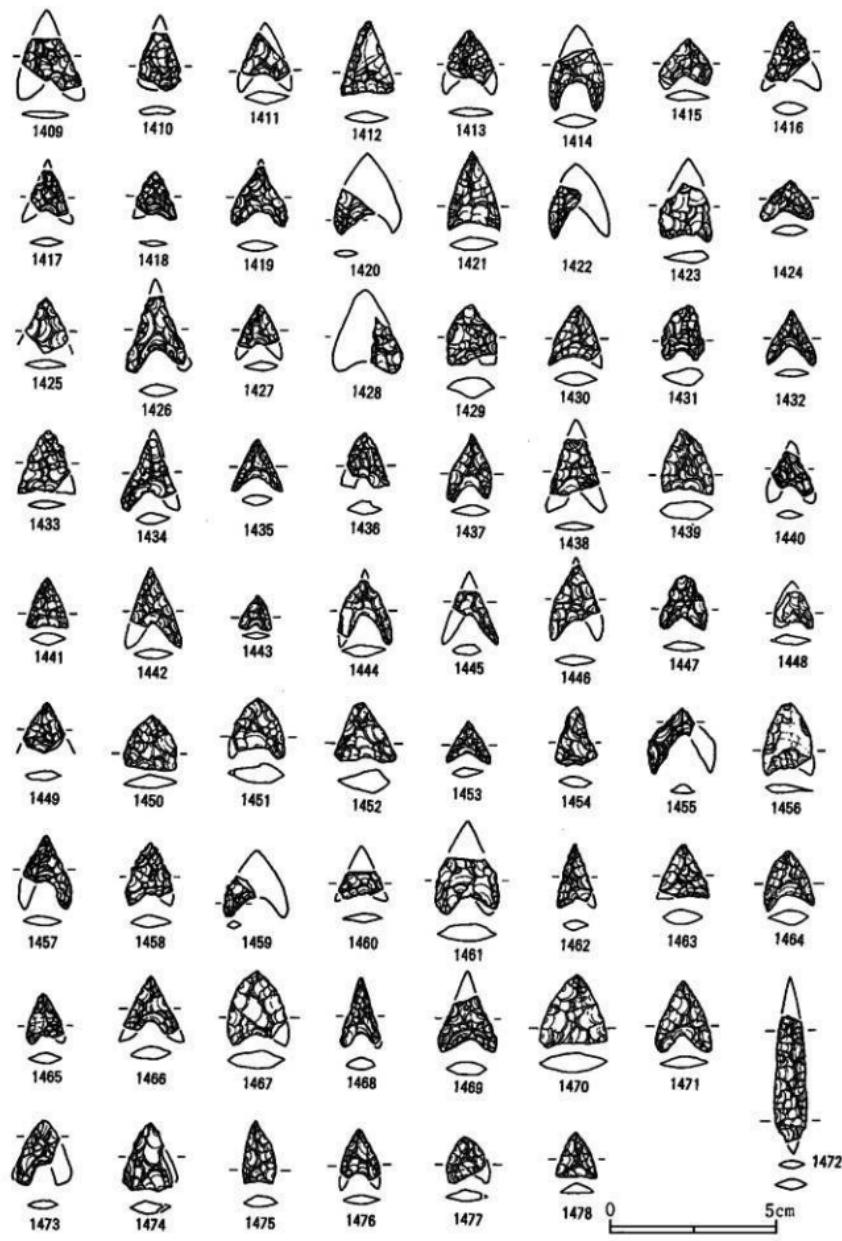
第104図 石器1(石縫)



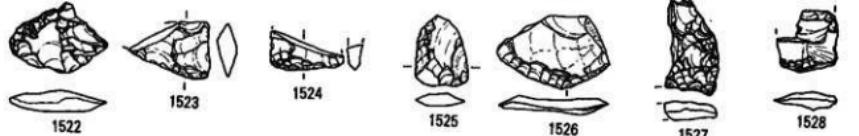
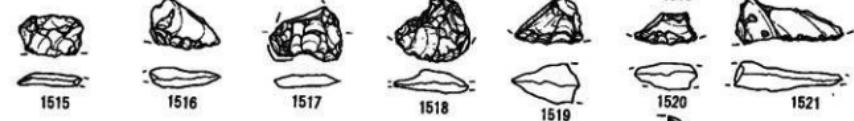
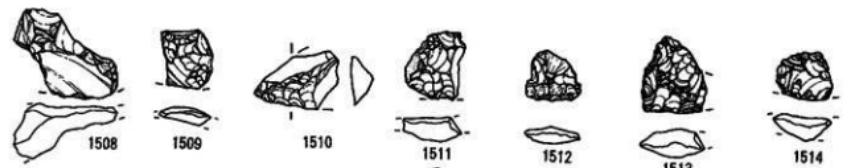
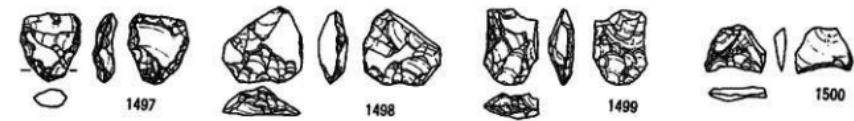
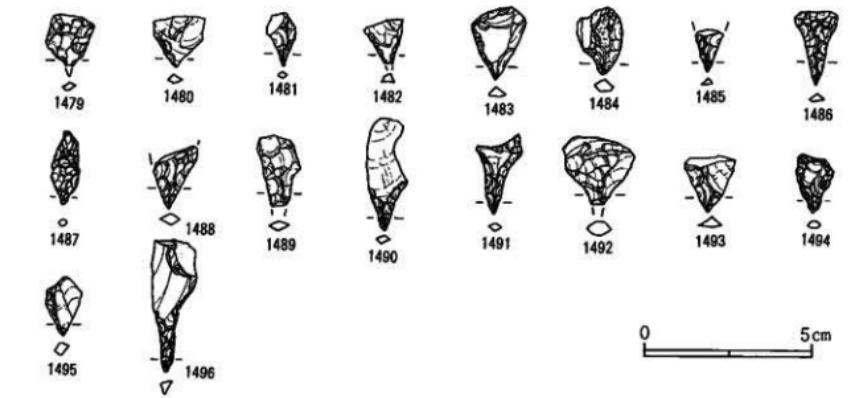
第105図 石器2(石鏃)



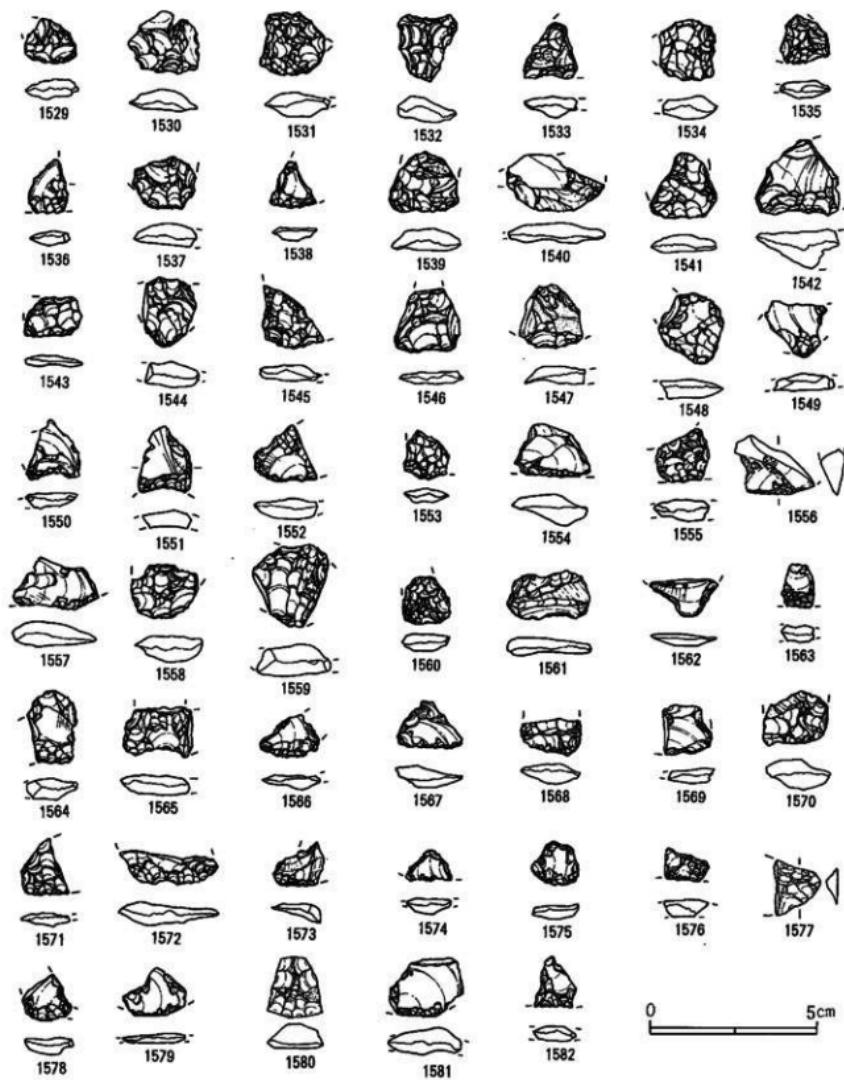
第106図 石器3(石鏃)



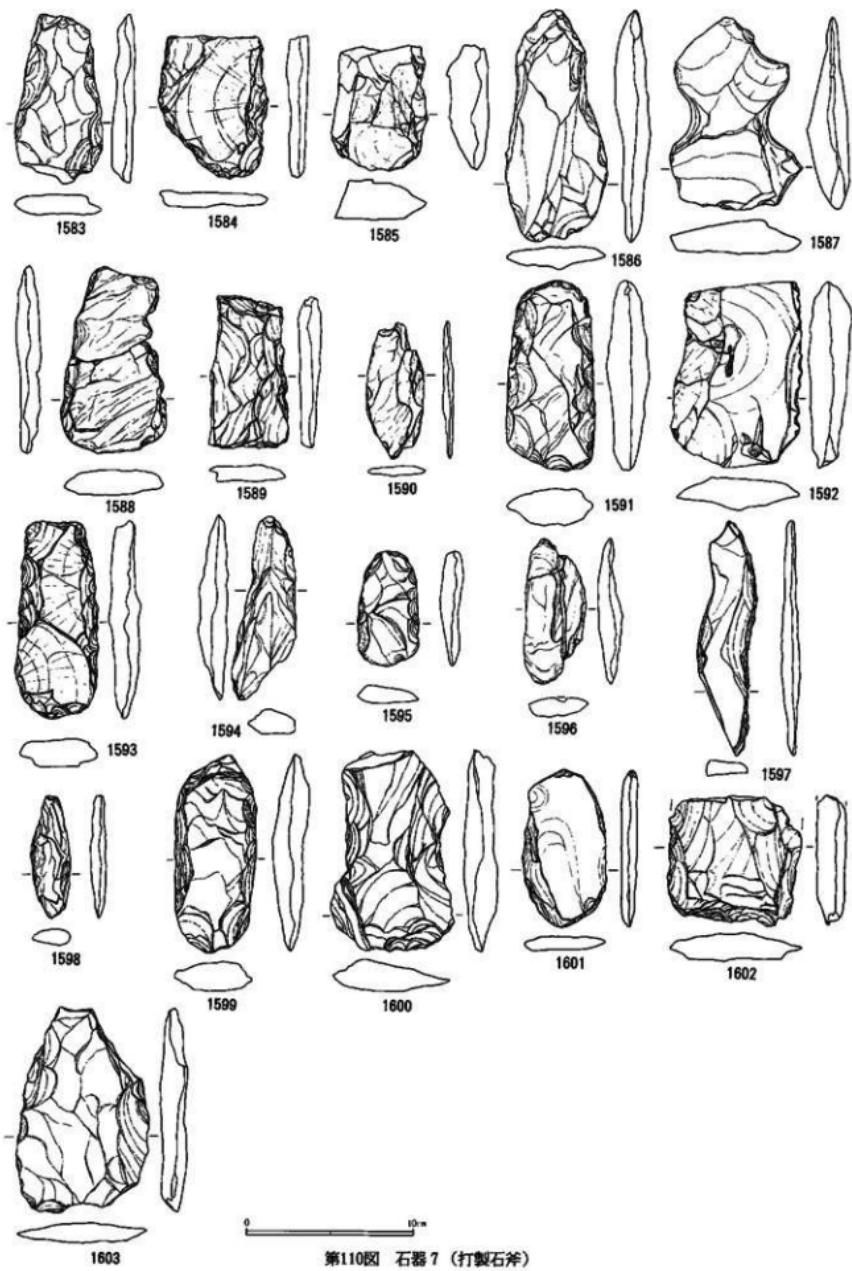
第107図 石器4（石鏃）



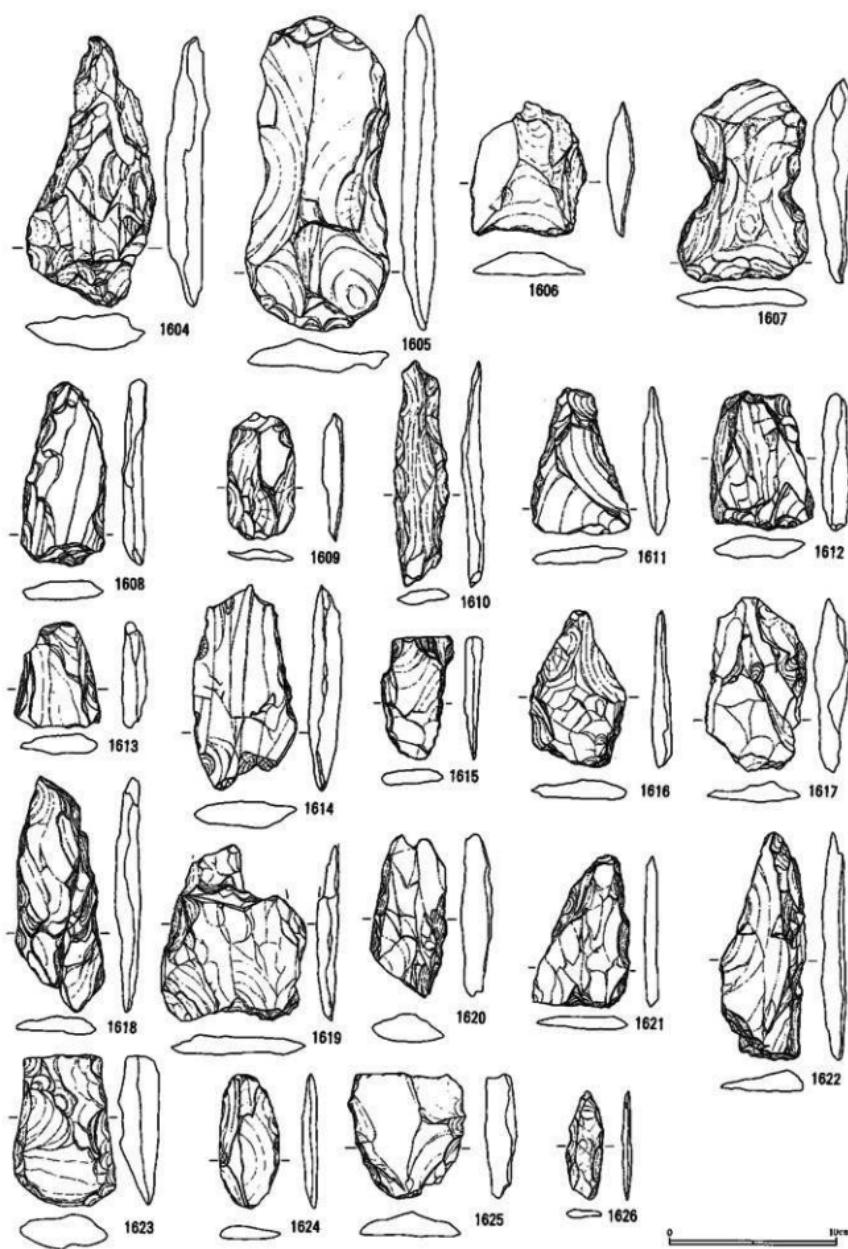
第108図 石器5（ドリル・搔器等）



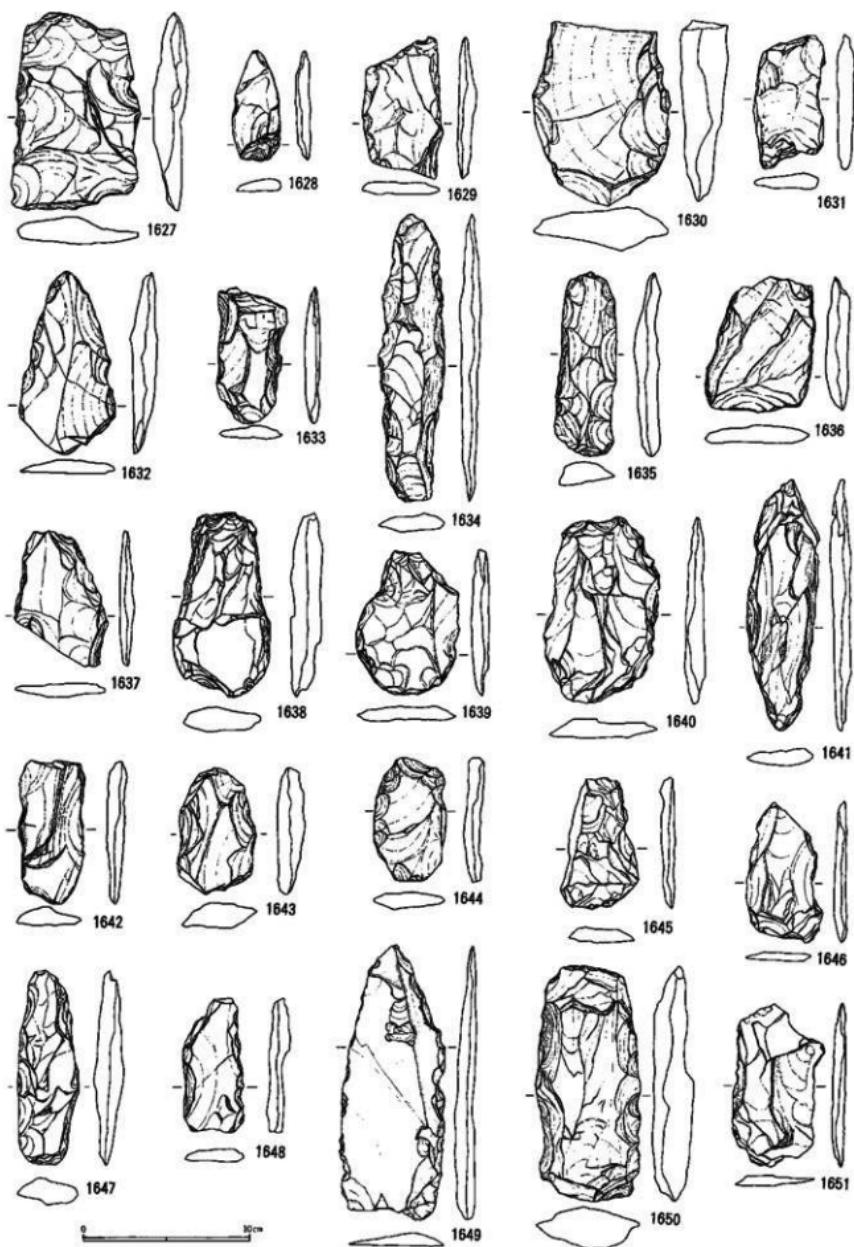
第109図 石器6（加工痕ある剥片）



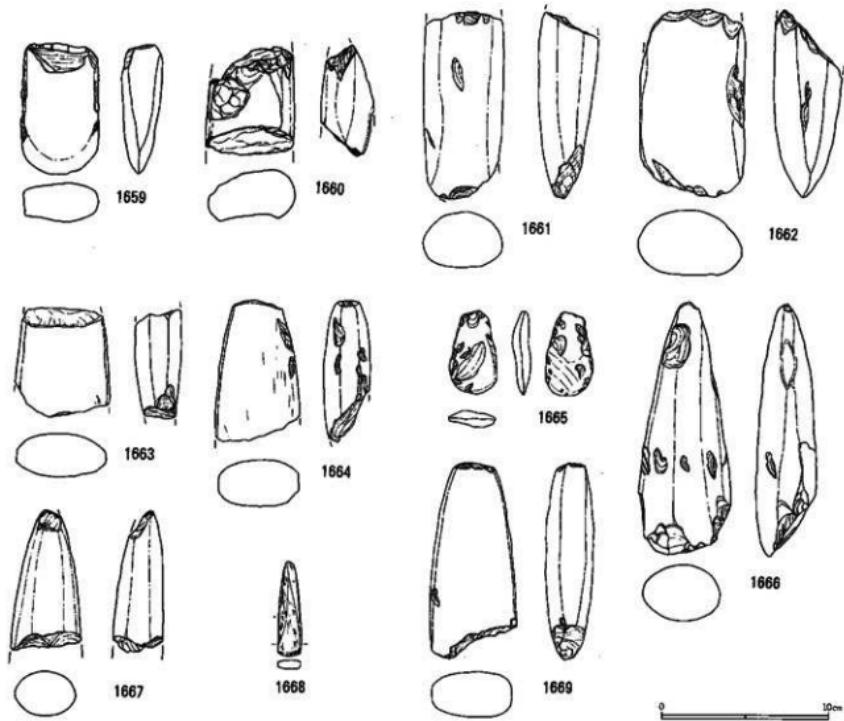
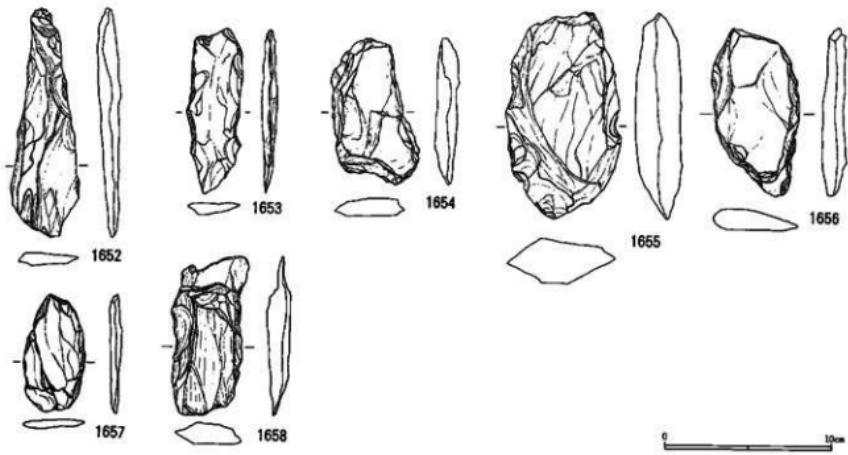
第110図 石器7（打製石斧）



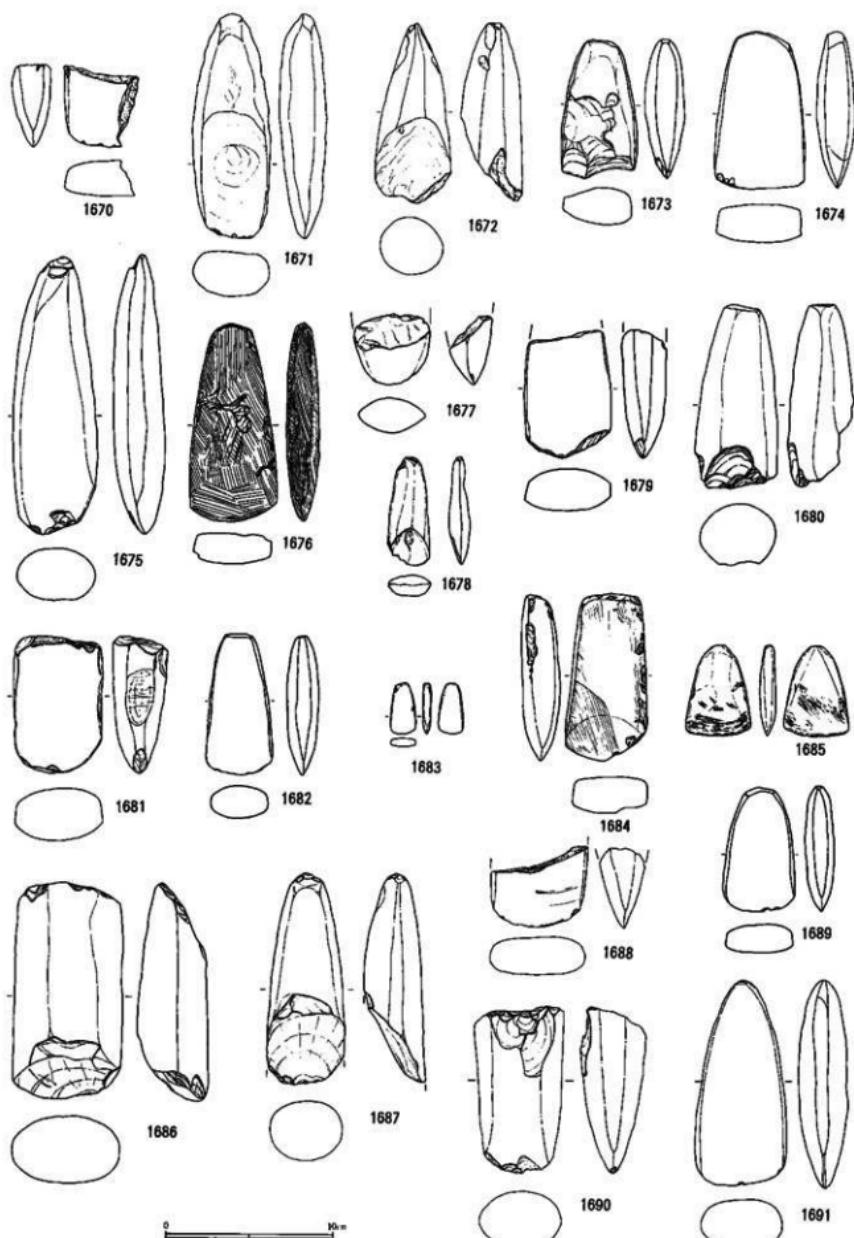
第111図 石器8（打製石斧）



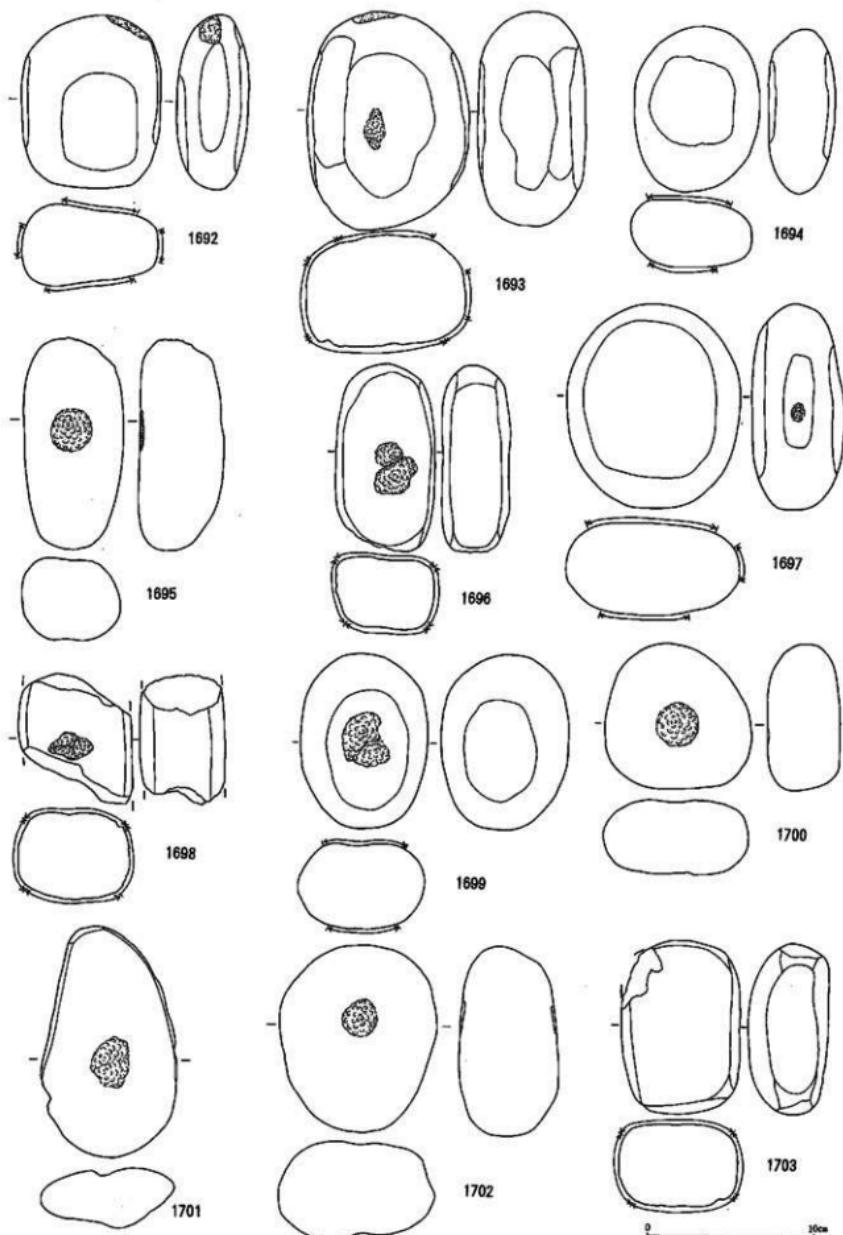
第112圖 石器9（打製石斧）



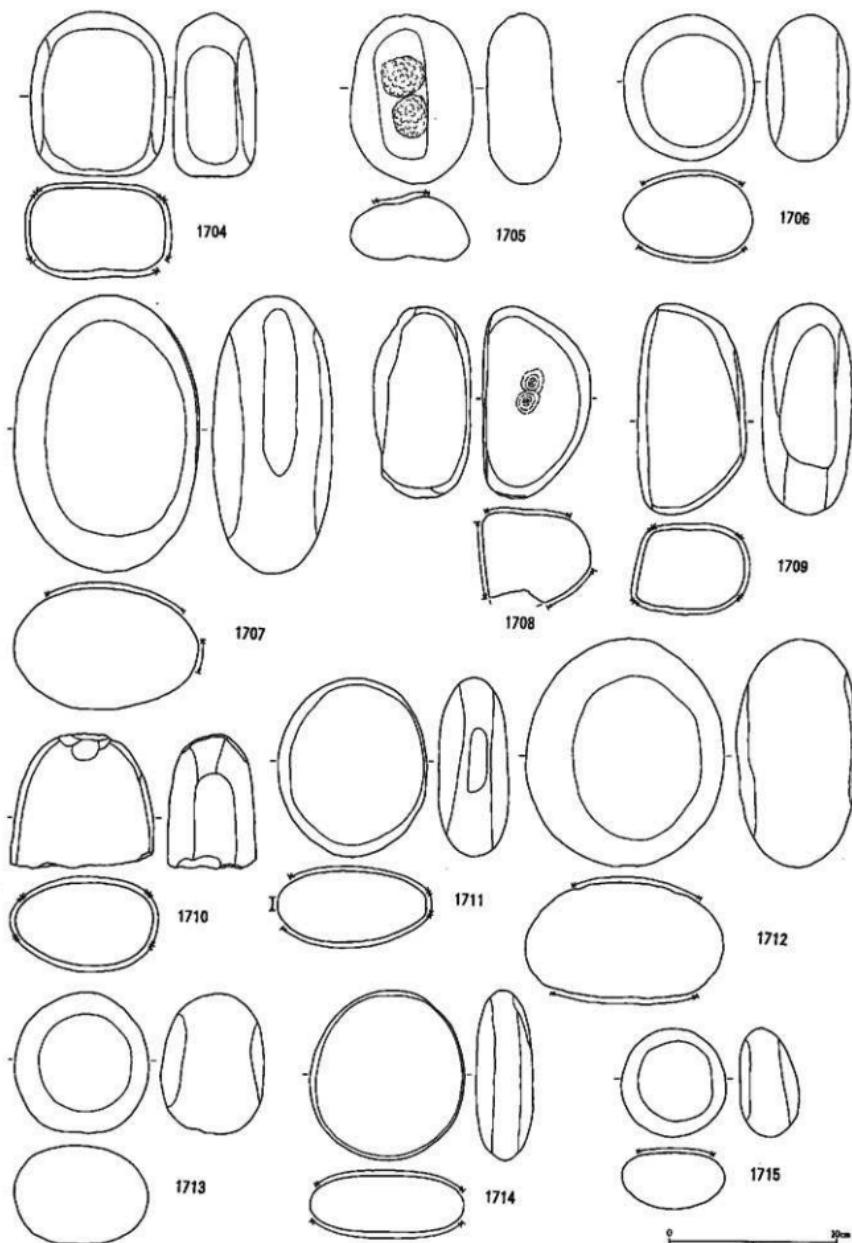
第113圖 石器10 (打製石斧・磨製石斧)



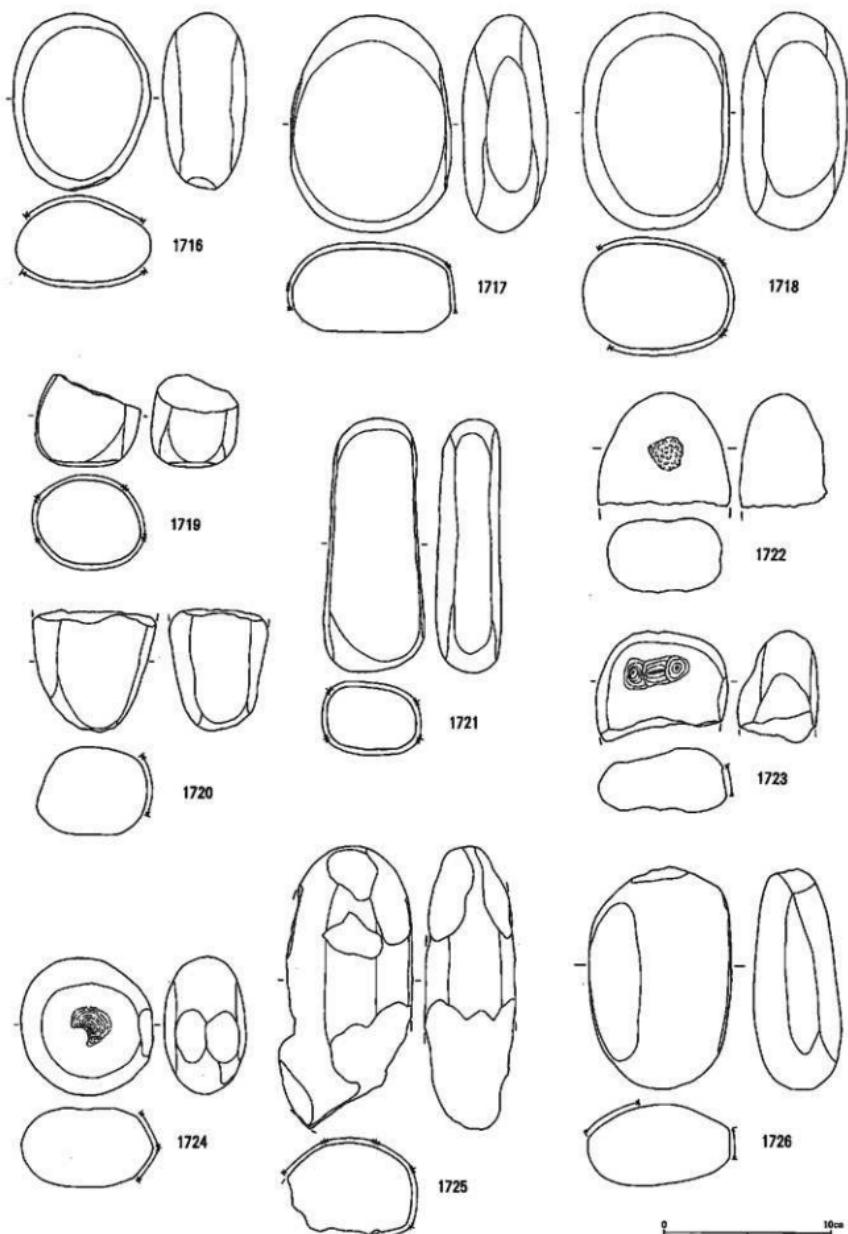
第114図 石器11(磨製石斧)



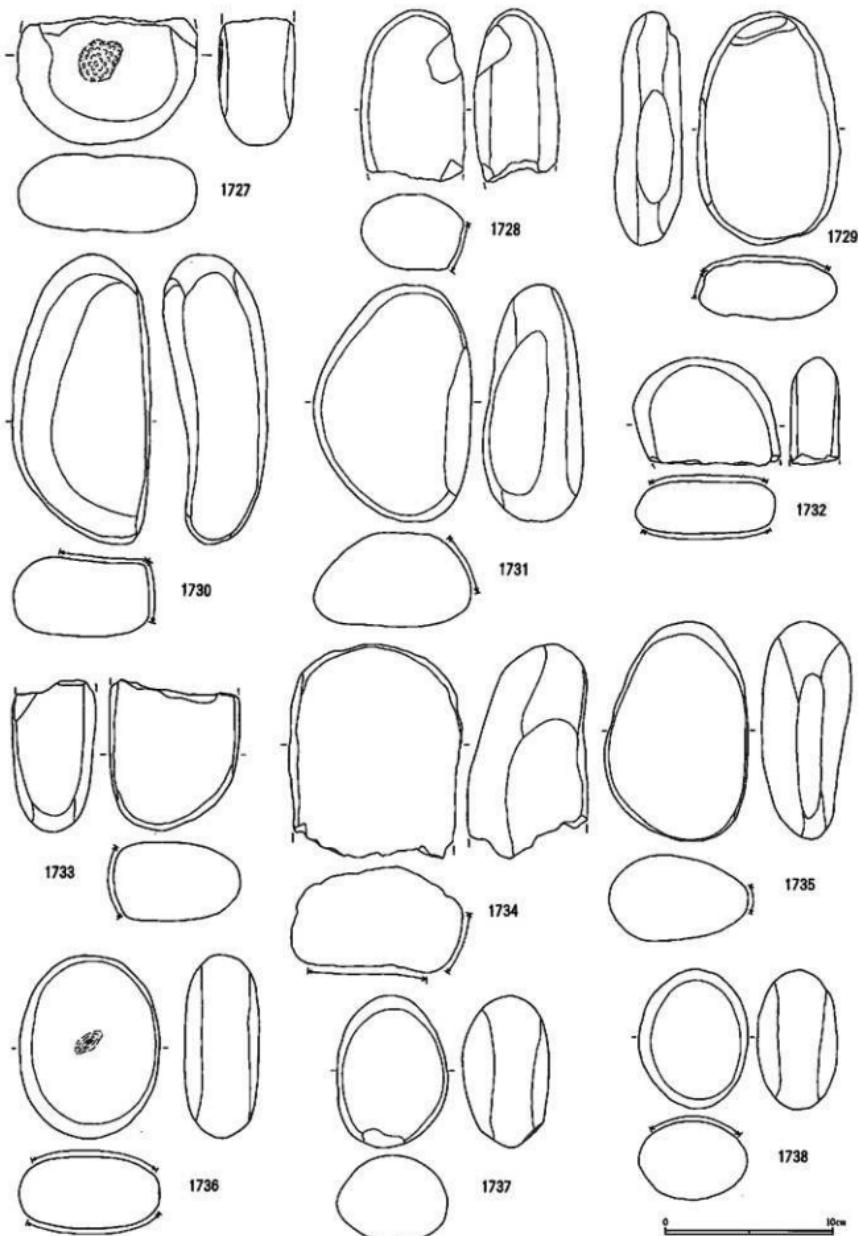
第115図 石器12(磨石)



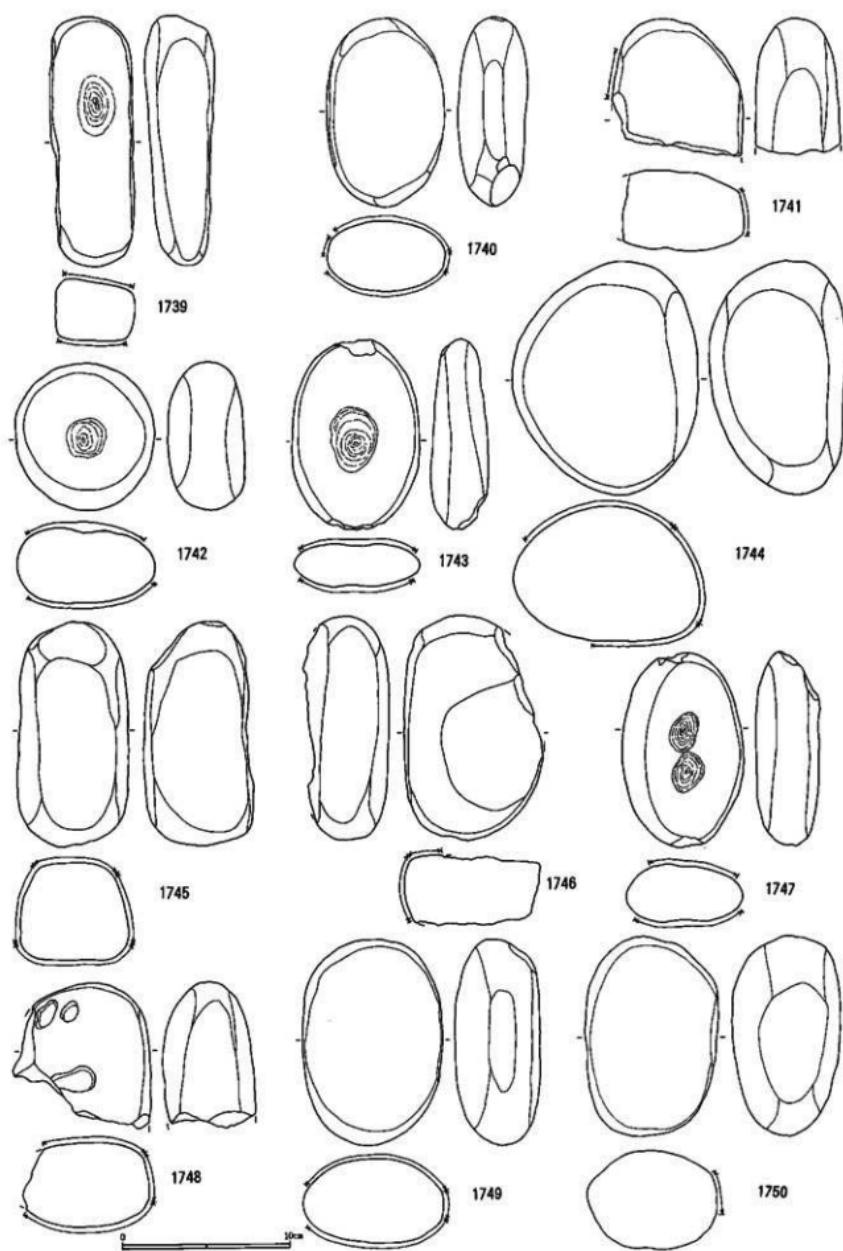
第116図 石器13(磨石)



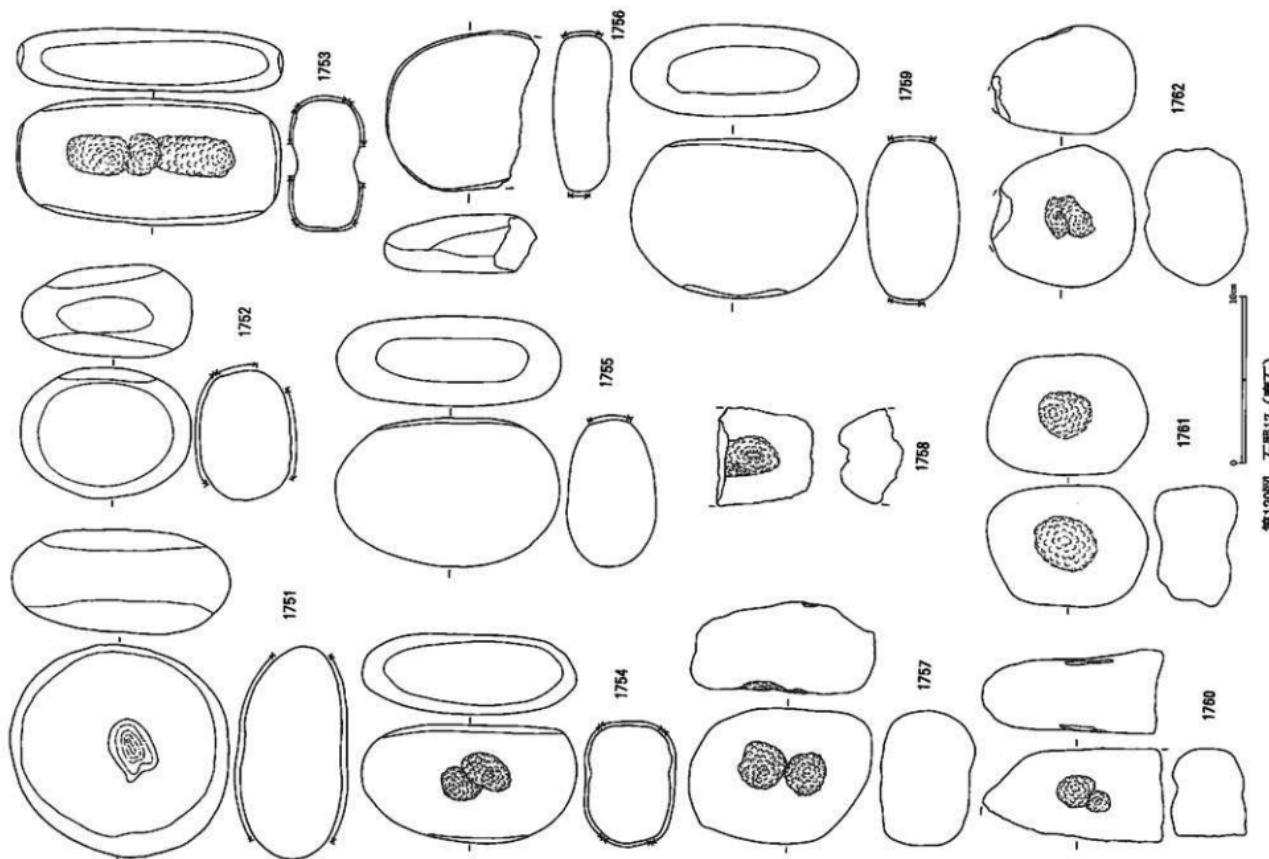
第117図 石器14(磨石)



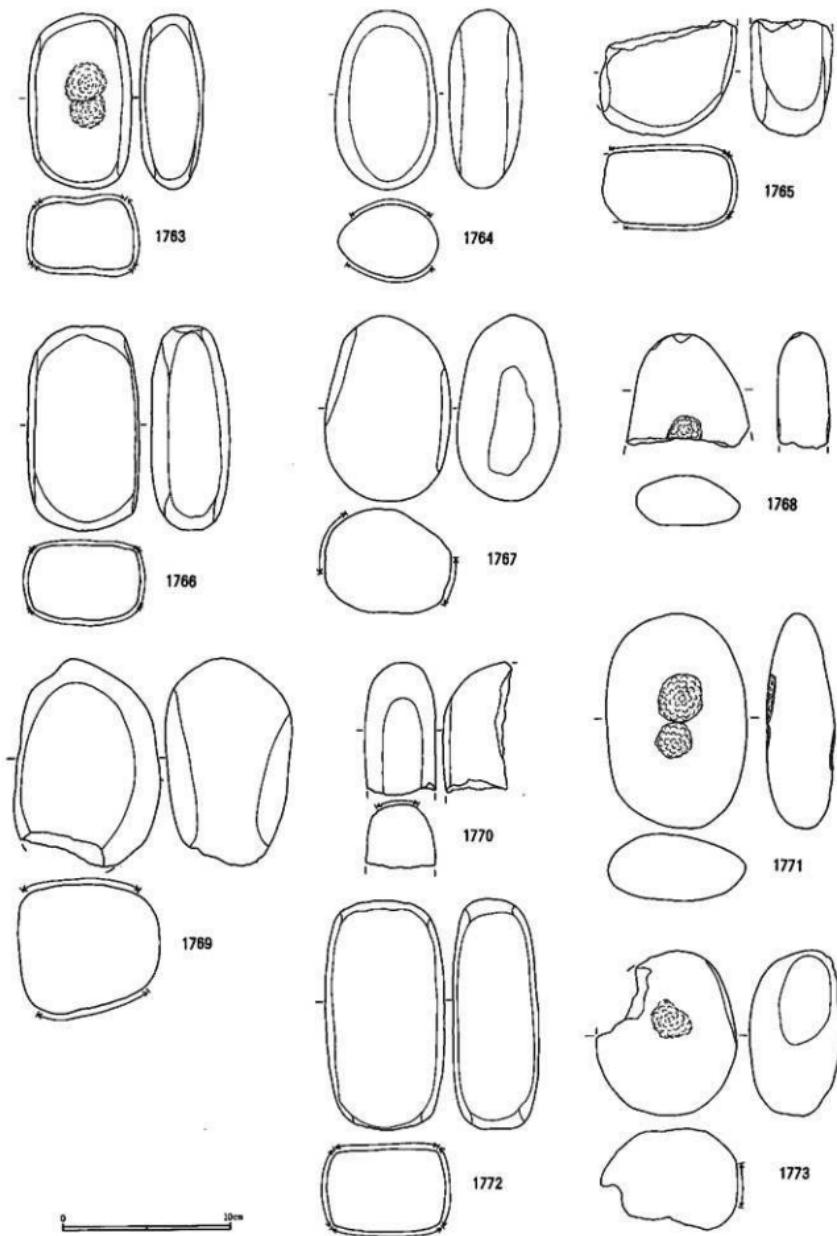
第118図 石器15(磨石)



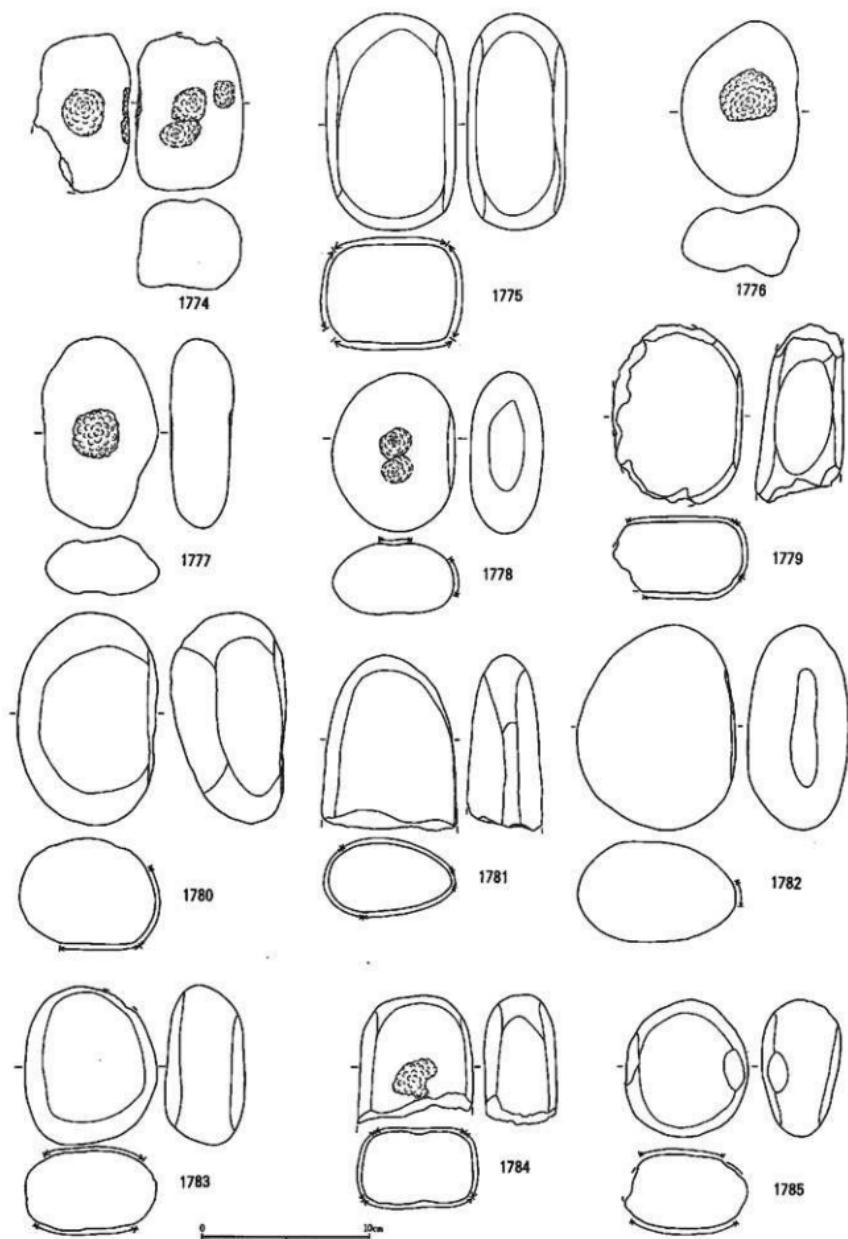
第119図 石器16(磨石)



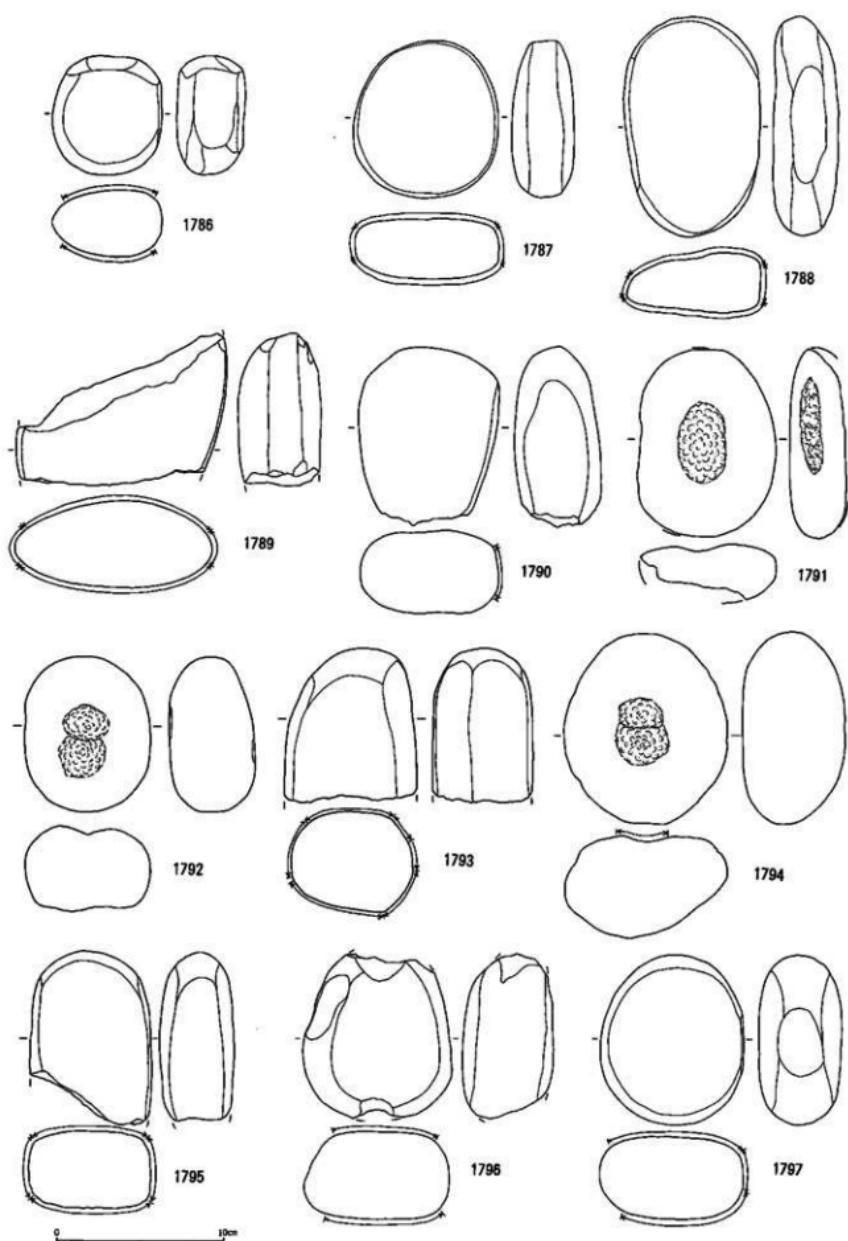
第120圖 石器17(磨石)



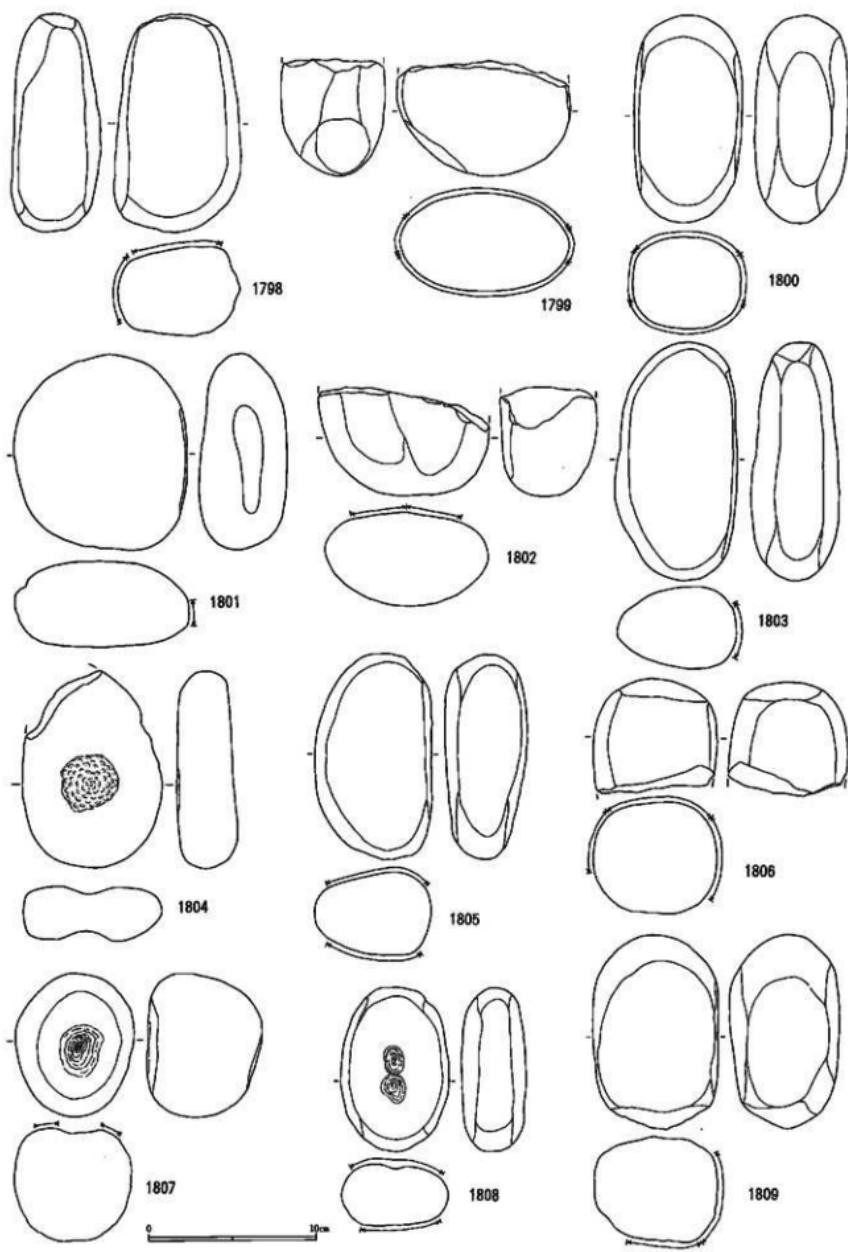
第121図 石器18(磨石)



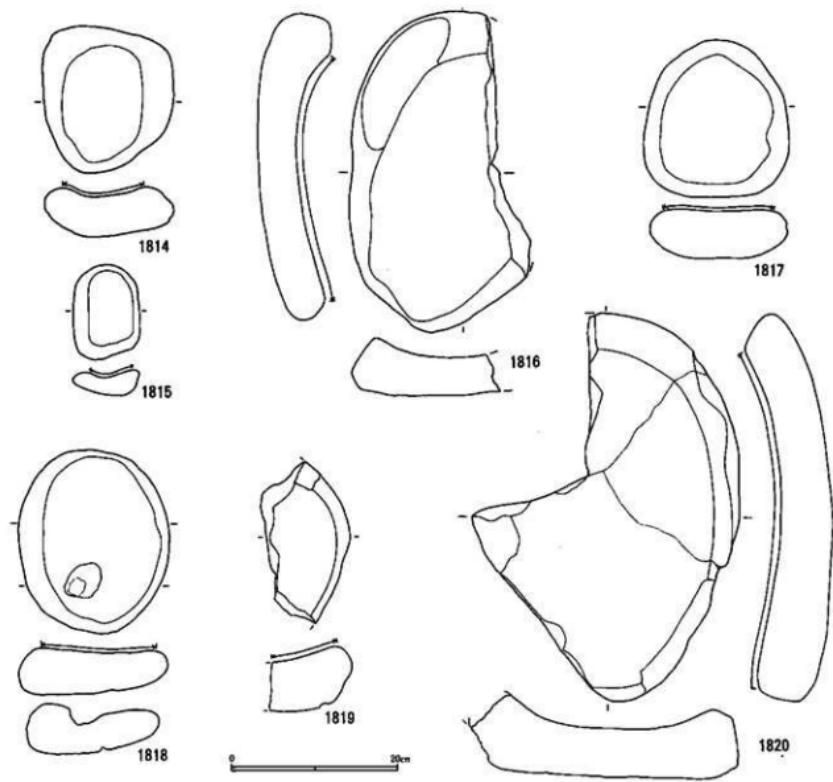
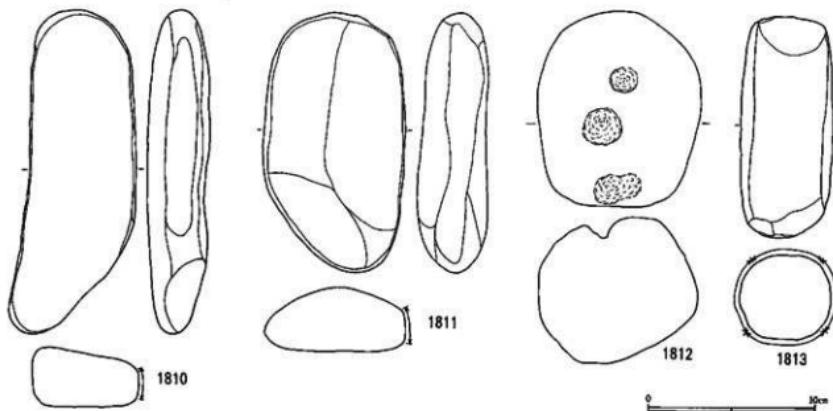
第122図 石器19(磨石)



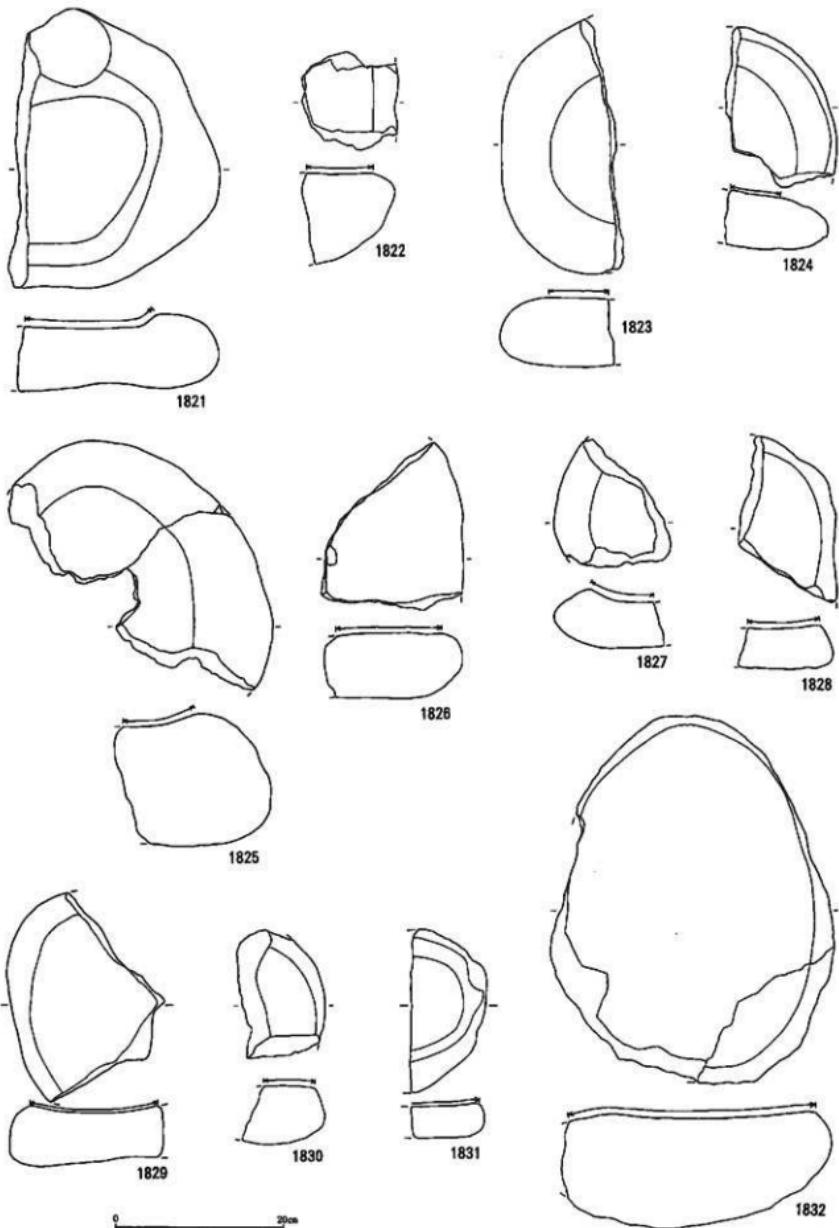
第123図 石器20(磨石)



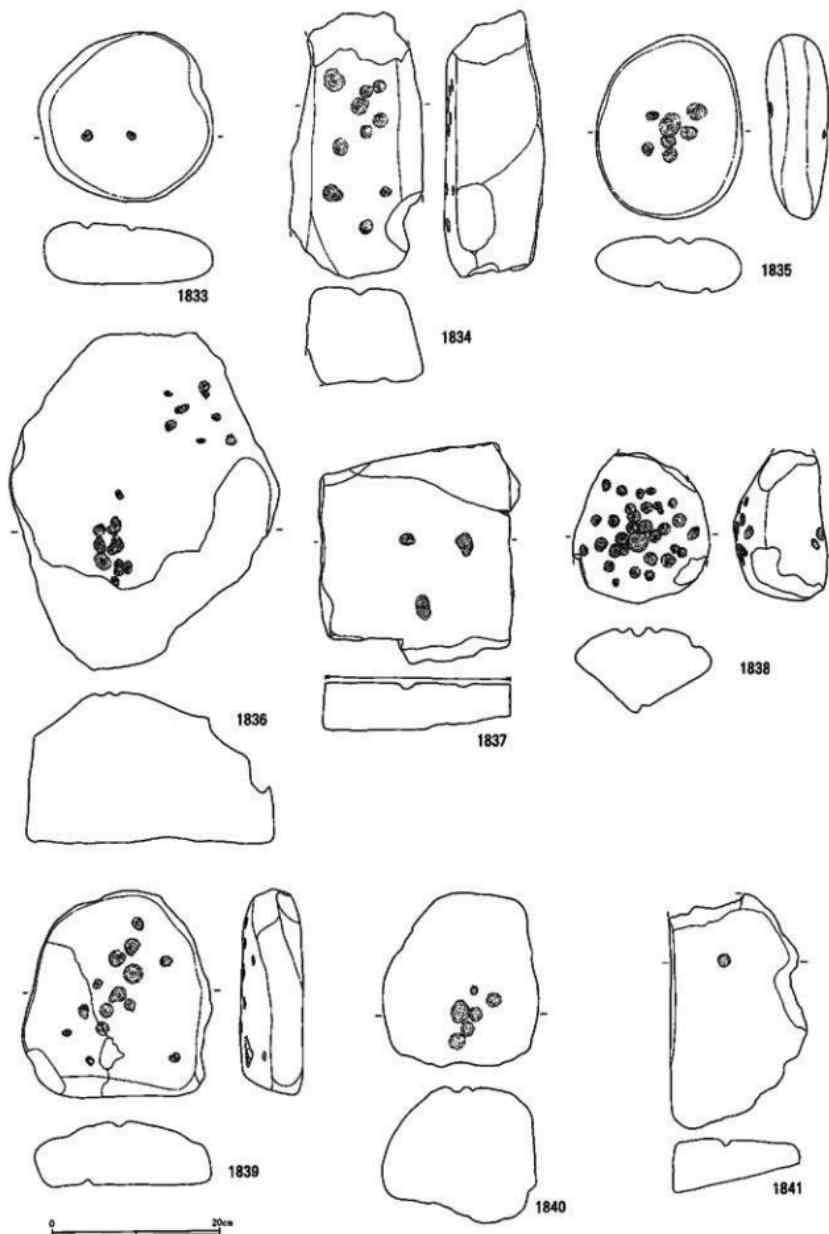
第124図 石器21(磨石)



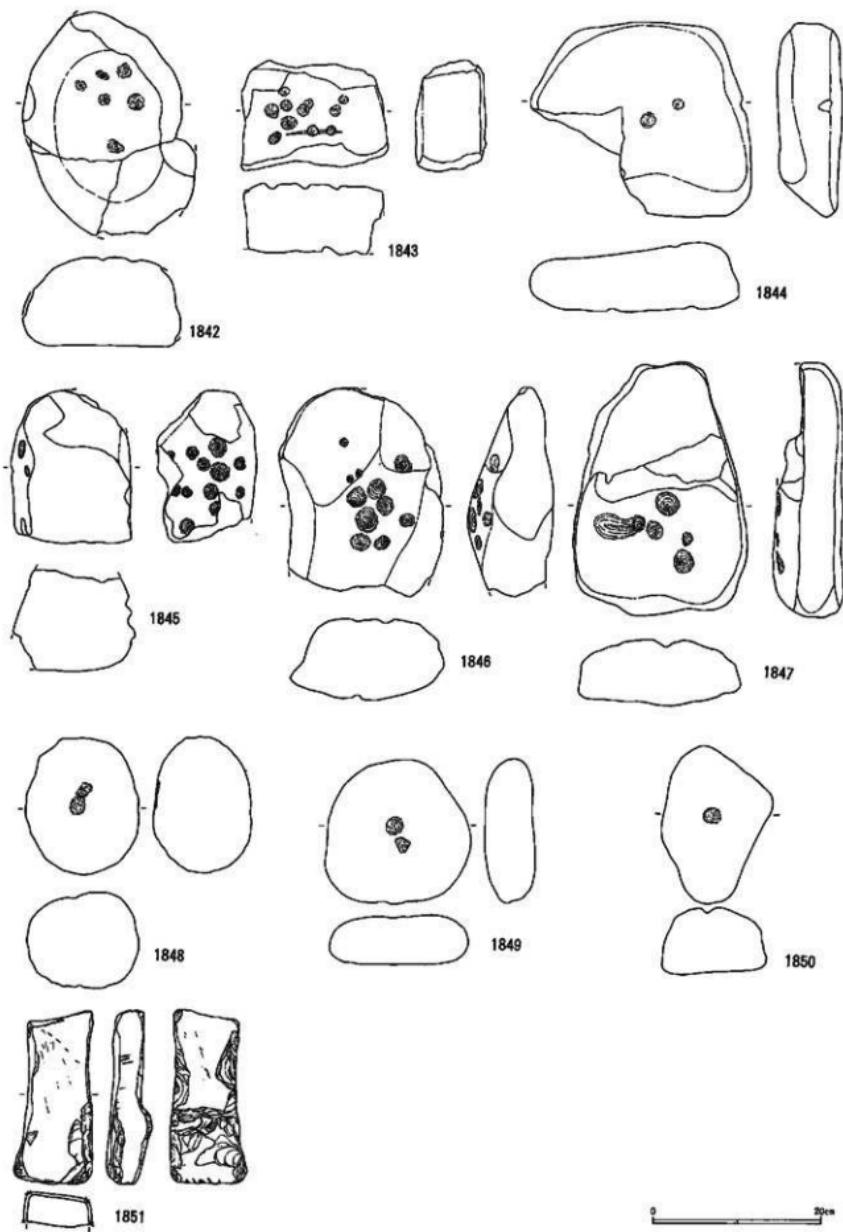
第125図 石器22(磨石・石皿)



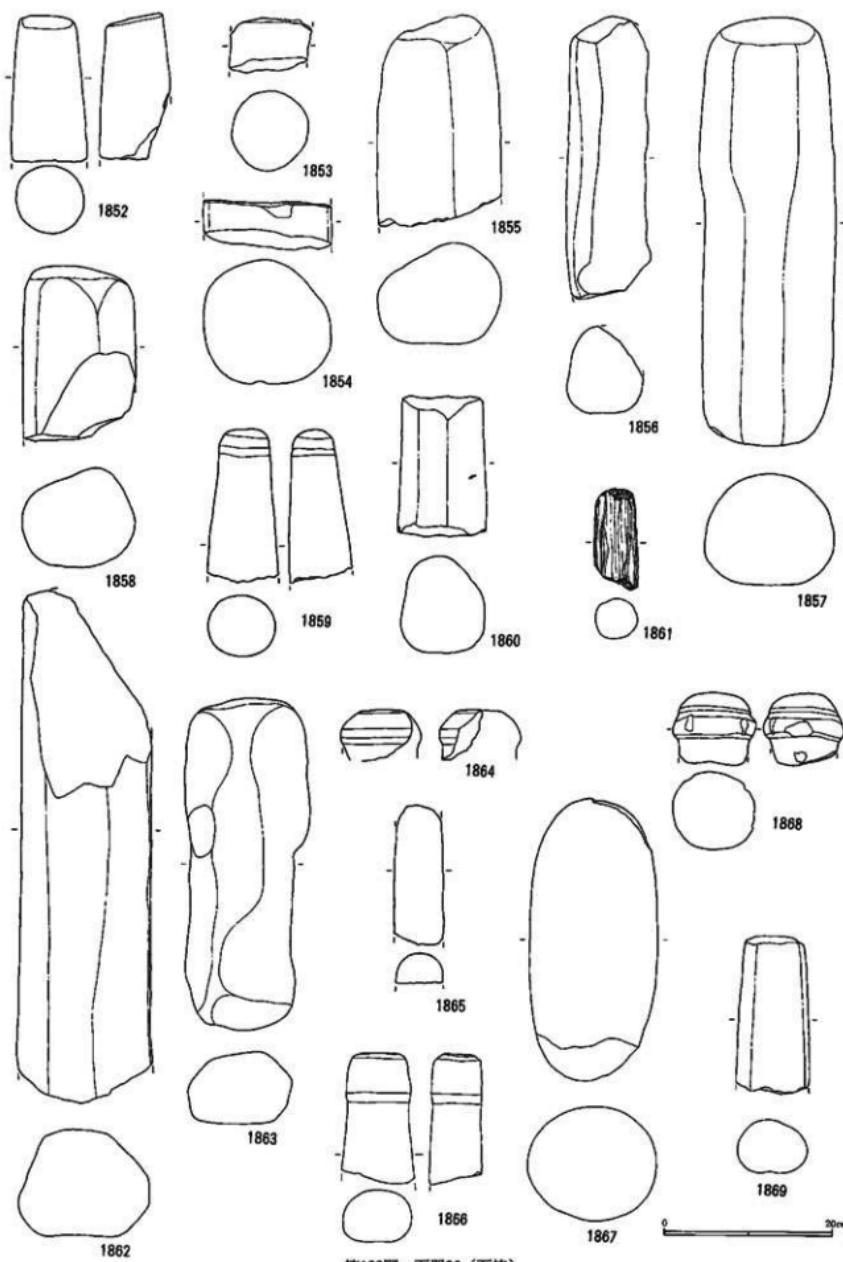
第126図 石器23(石皿)



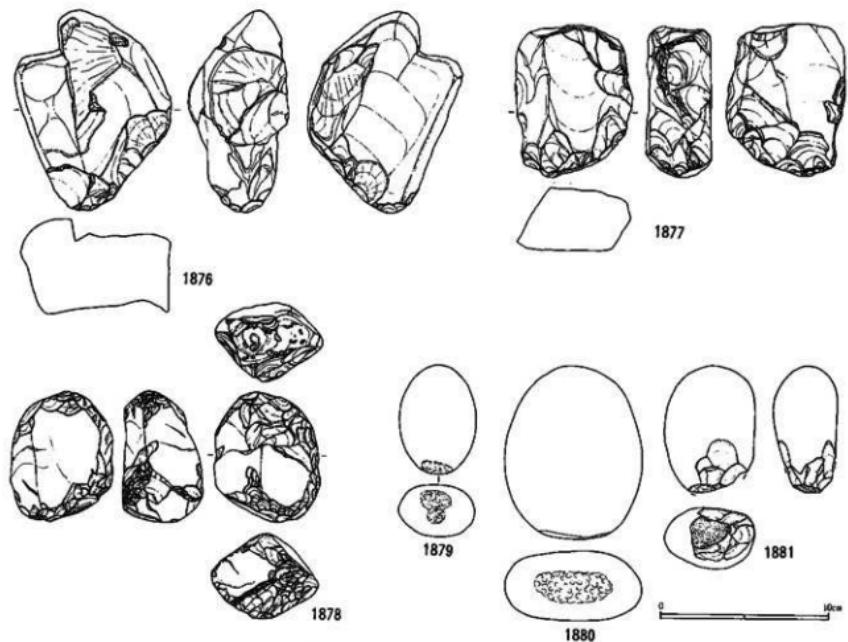
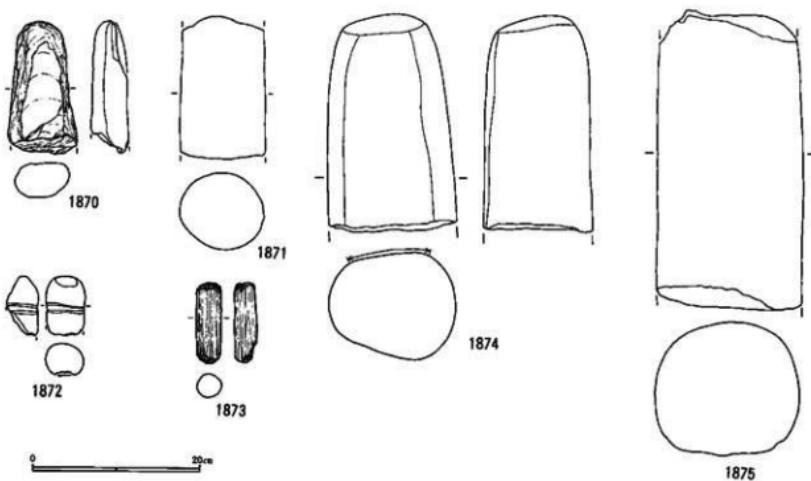
第127図 石器24（石皿・多孔石）



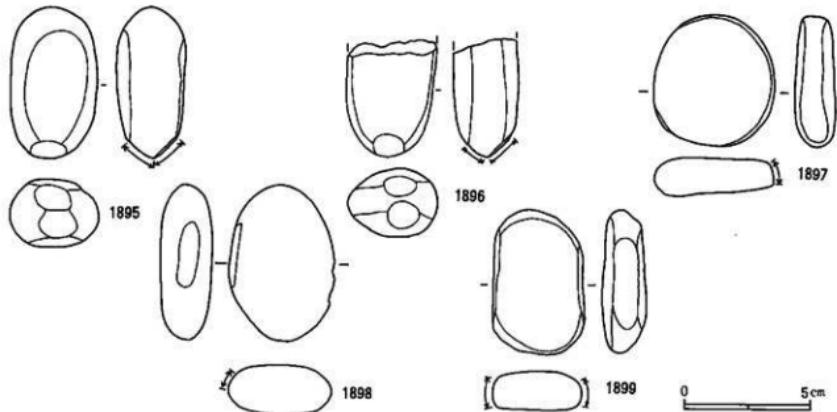
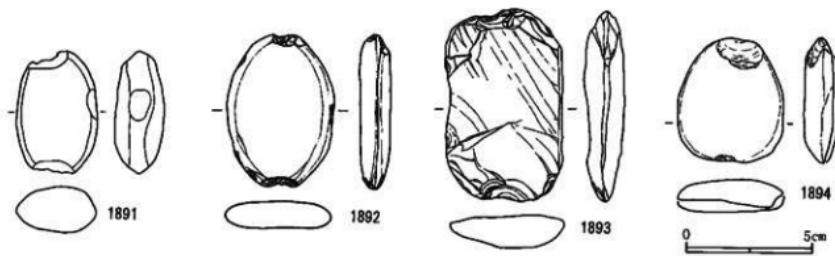
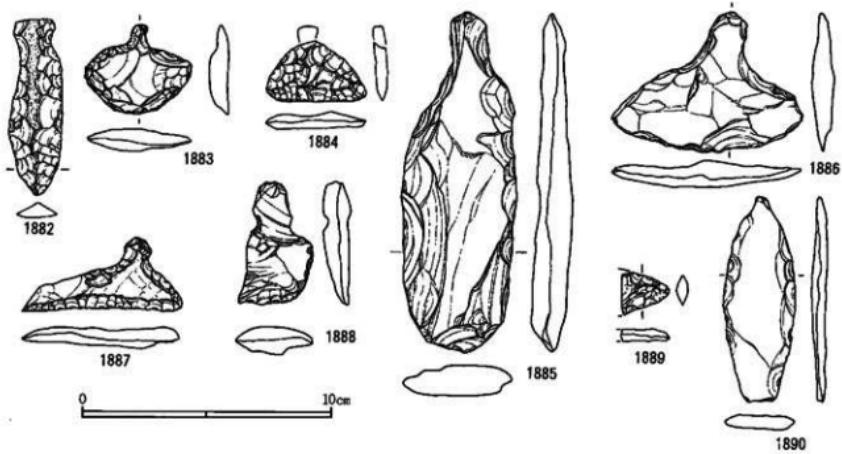
第128図 石器25(多孔石・延石)



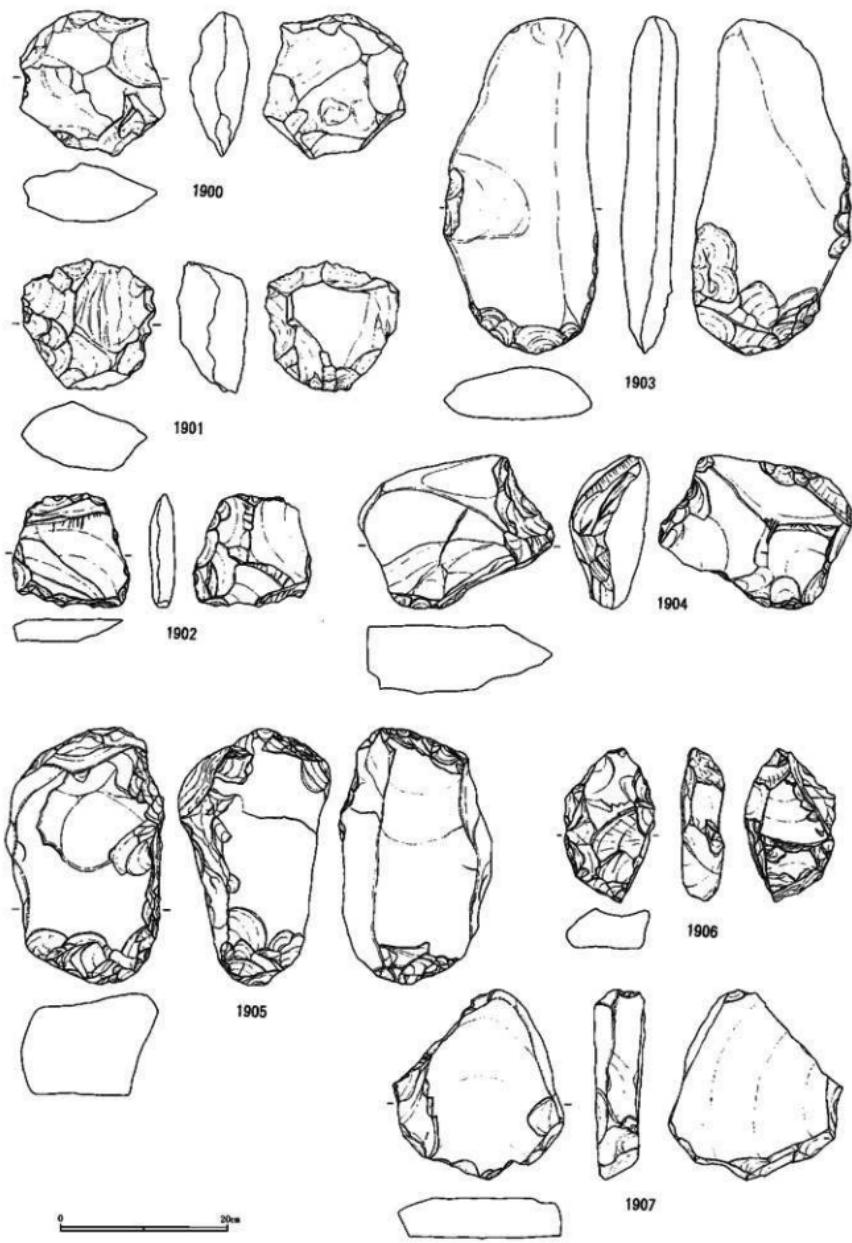
第129図 石器26(石斧)



第130図 石器27(石棒・たたき石)

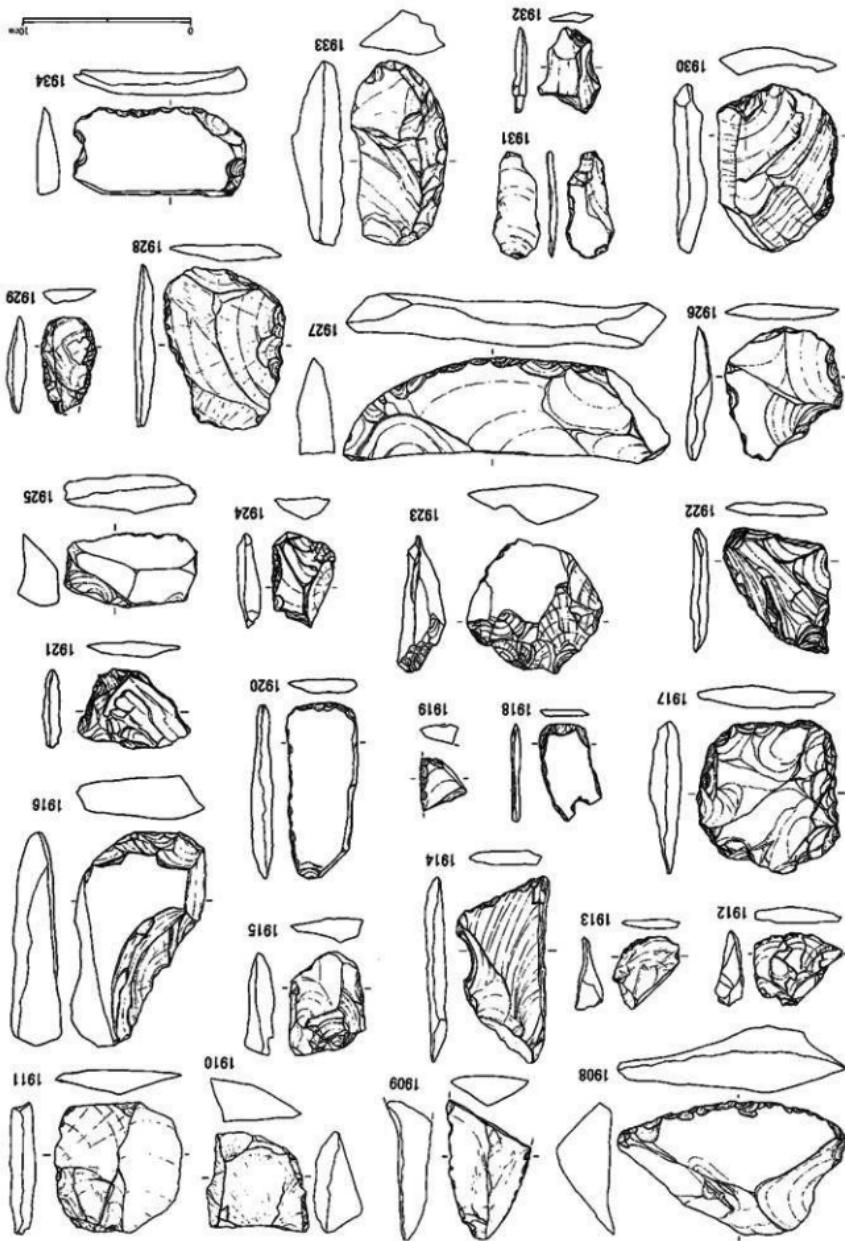


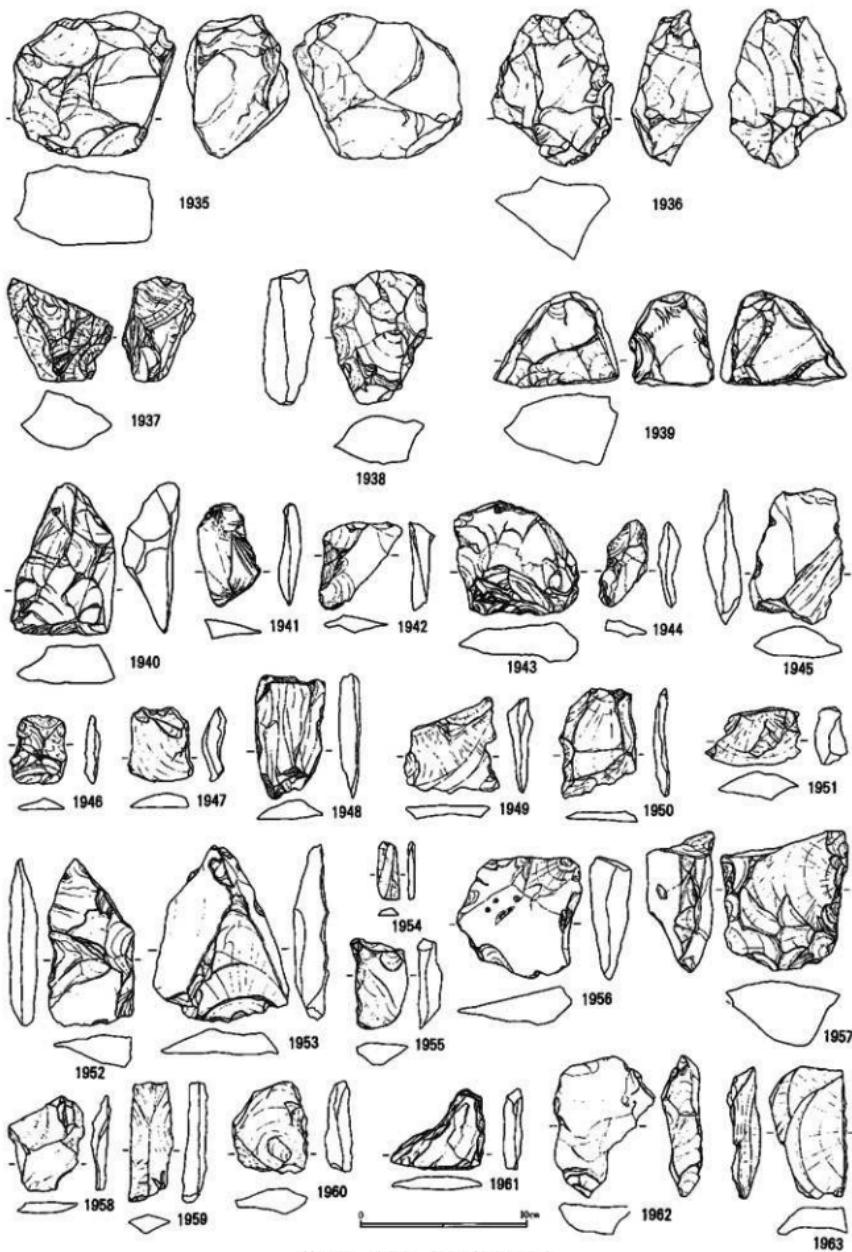
第131図 石器28(石匙・石鑊・特殊磨石)



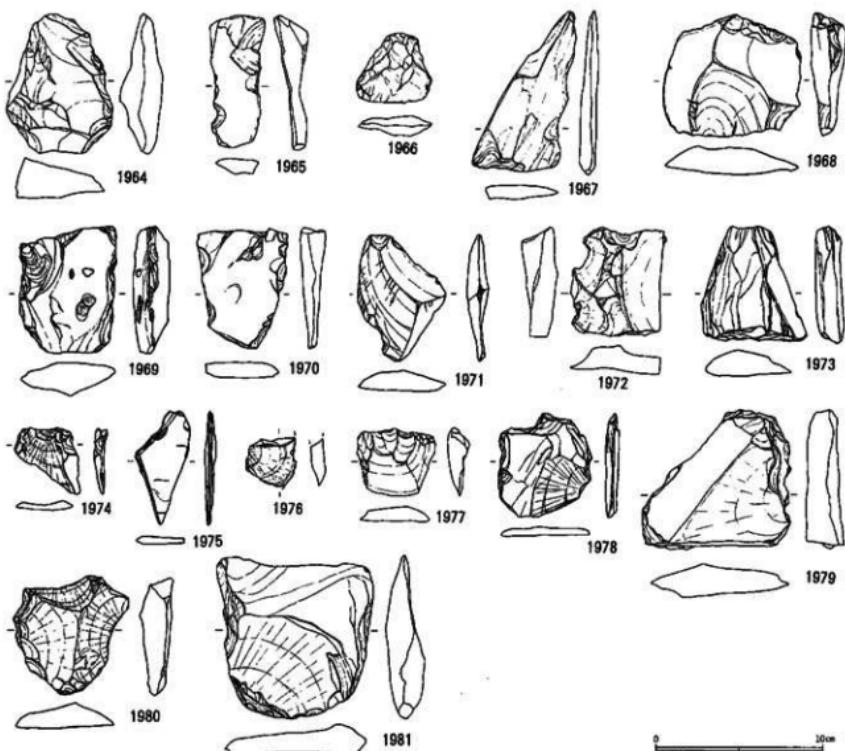
第132図 石器29（加工痕ある剥片）

第133图 石器30(加工痕迹之剥片)

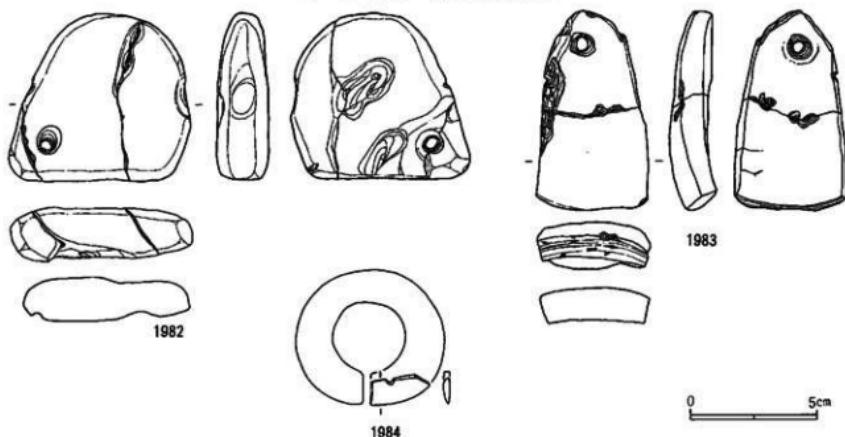




第134図 石器31（加工痕ある剥片）



第135図 石器32(加工痕ある剥片)



第136図 石製品

石器・石製品観察表

図面番号	器種	出土位置	石材	図面番号	器種	出土位置	石材
104-1207	石鎌	2住	黒	7	"	"	"
8	"	3住	"	8	"	グリッド	頁
9	"	"	"	9	"	"	黒
1210	"	4住	"	1260	"	"	"
1	"	"	"	1	"	"	"
2	"	"	"	2	"	"	"
3	"	"	"	3	"	"	"
4	"	10住	"	4	"	"	"
5	"	11住	"	5	"	"	"
6	"	"	"	105-	6	"	"
7	"	12住	"	7	"	"	"
8	"	"	"	8	"	"	"
9	"	"	"	9	"	"	手
1220	"	"	"	1270	"	"	黒
1	"	"	"	1	"	"	"
2	"	"	"	2	"	"	"
3	"	"	"	3	"	"	"
4	"	"	"	4	"	"	"
5	"	"	頁	5	"	"	"
6	"	"	黒	6	"	"	"
7	"	"	"	7	"	"	"
8	"	"	"	8	"	"	"
9	"	13住	"	9	"	"	"
1230	"	15住	"	1280	"	"	"
1	"	17住	"	1	"	"	"
2	"	"	"	2	"	"	"
3	"	7土	"	3	"	"	"
4	"	24土	"	4	"	"	"
5	"	27土	"	5	"	"	"
6	"	"	"	6	"	"	"
7	"	7集石	"	7	"	"	"
8	"	"	"	8	"	"	"
9	"	"	"	9	"	"	"
1240	"	6配	"	1290	"	"	"
1	"	10配	"	1	"	"	"
2	"	14+15配	"	2	"	"	"
3	"	"	"	3	"	"	"
4	"	"	"	4	"	"	"
5	"	"	"	5	"	"	泥
6	"	7集中	"	6	"	"	黒
7	"	"	"	7	"	"	"
8	"	"	"	8	"	"	"
9	"	"	"	9	"	"	"
1250	"	"	"	1300	"	"	"
1	"	"	"	1	"	"	"
2	"	"	"	2	"	"	"
3	"	"	"	3	"	"	"
4	"	"	"	4	"	"	"
5	"	"	"	5	"	"	"
6	"	"	"	6	"	"	"

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
	9	"	"	"		1	"	"	"
1310	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1370	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1320	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	泥		8	"	"	"
7	"	"	"	黑		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1380	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1330	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
106-	8	"	"	"		1390	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1340	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1400	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1350	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		107-	9	"	"
8	"	"	"	"		1410	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1360	"	"	"	"		2	"	"	"

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
	3	"	"	黒		5	"	"	"
	4	"	"	"		6	"	"	"
	5	"	"	"		7	"	"	"
	6	"	"	"		8	"	"	"
	7	"	"	"		9	"	"	"
	8	"	"	"		1470	"	"	"
	9	"	"	"		1	"	"	"
1420	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	黒
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"	108-	9	ドリル	1住	"
8	"	"	"	"		1480	"	6配	"
9	"	"	"	泥		1	"	グリッド	"
1430	"	"	黒	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1490	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1440	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	搔器	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1500	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1450	"	"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	虹吸5脚	3住	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1510	"	9住	"
9	"	"	"	"		1	"	11住	"
1460	"	"	"	"		2	"	12住	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		4	"	27土	"
3	"	"	"	"		5	"	35土	"
4	"	"	"	"		6	"	14・15窓下	"

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
	7	"	7集中	"		9	"	"	"
	8	"	"	"		1570	"	"	"
	9	"	"	"		1	"	"	"
1520		"	溝	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	グリッド	"	"		4	"	"	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	チ	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	黒	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1580	"	"	"
109-	9	"	"	"		1	"	"	"
1530		"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"	110-	3	打製石斧	1住	粘
2	"	"	"	"		4	"	3住	"
3	"	"	"	"		5	"	"	"
4	"	"	"	"		6	"	9住	千泥
5	"	"	"	"		7	"	"	千粘
6	"	"	"	"		8	"	12住	片
7	"	"	"	"		9	"	28土	千
8	"	"	"	"		1590	"	36土	粘
9	"	"	"	"		1	"	39土	片
1540		"	"	"		2	"	41土	千
1	"	"	"	"		3	"	5集石	粘
2	"	"	"	"		4	"	11配下	砂
3	"	"	"	"		5	"	14・15配下	粘
4	"	"	"	"		6	"	"	粘
5	"	"	"	"		7	"	7集中	片
6	"	"	"	"		8	"	溝	粘
7	"	"	"	"		9	"	グリッド	片
8	"	"	"	"		1600	"	"	千
9	"	"	"	"		1	"	"	粘
1550		"	"	"		2	"	"	"
1	"	"	"	"		3	"	"	"
2	"	"	"	"		111-	4	2集中	片
3	"	"	"	"		5	"	グリッド	粘
4	"	"	"	"		6	"	"	"
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1610	"	"	"
9	"	"	"	"		1	"	"	"
1560		"	"	"		2	"	"	千
1	"	"	"	"		3	"	"	粘
2	"	"	"	"		4	"	"	泥
3	"	"	"	"		5	"	"	片
4	"	"	"	"		6	"	"	粘
5	"	"	"	"		7	"	"	"
6	"	"	"	"		8	"	"	"
7	"	"	"	"		9	"	"	"
8	"	"	"	"		1620	"	"	"

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
112-	1	"	"	"	3	"	グリッド	蛇	
	2	"	"	片	4	"	"	蛇	
	3	"	"	粘	5	"	"	蛇	
	4	"	"	頁	6	"	"	蛇	
	5	"	"	粘	7	"	"	粘	"
	6	"	"	千	8	"	"	粘	"
	7	"	"	粘	9	"	"	粘	"
	8	"	"	千	1680	"	"		
	9	"	"	千	1	"	"		
1630	"	"	"	千	2	"	"	蛇	
	1	"	"	千	3	"	"	"	
	2	"	"	粘	4	"	"	"	
	3	"	"	千	5	"	"	"	
	4	"	"	粘	6	"	"	砂	
	5	"	"	砂	7	"	"		
	6	"	"	粘	8	"	"		
	7	"	"	千	9	"	"		
	8	"	"	粘・H	1690	"	"		
	9	"	"	千	1	"	"		
1640	"	"	"	"	115-	2	磨石	3住	
	1	"	"	"	3	磨石・凹石	"		
	2	"	"	"	4	磨石	"		
	3	"	"	粘・H	5	凹石	"		
	4	"	"	粘	6	磨石・凹石	"		
	5	"	"	"	7	磨石	"	花	
	6	"	"	千	8	磨石・凹石	4住		
	7	"	"	粘	9	"	"		
	8	"	"	千	1700	凹石	"		
	9	"	"	粘	1	"	"	砂	"
1650	"	"	"	千	2	"	"	"	
	1	"	"	粘	3	磨石	5住	花	
113-	2	"	"	千	4	"	6・7住	"	
	3	"	"	"	5	磨石・凹石	8配	砂	
	4	"	"	"	6	磨石	11住	凝	
	5	"	"	"	7	"	12住	安	
	6	"	"	千	8	"	"	砂	
	7	"	"	"	9	"	"	安	
	8	"	表採	粘	1710	"	"	安	"
	9	磨製石斧	3住	泥	1	"	"	砂	"
1660	"	"	9住	砂	2	"	"	凝	"
	1	"	11住		3	"	"	安	"
	2	"	12住	安	4	"	"	砂	"
	3	"	"	砂	5	"	"	凝	"
	4	"	15住		117-	6	"	安	"
	5	"	17住	蛇	7	"	"	砂	"
	6	"	4土	砂	8	"	13住	凝	"
	7	"	6配		9	"	15住	安	"
	8	"	9配		1720	"	"	花	"
	9	"	14・15配		1	"	17住	砂	
114-1670	"	"	"	蛇	2	凹石	15土	花	
	1	"	15配下		3	磨石・凹石	19土	砂	
	2	"	21配下	安	4	"	41土	砂	

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
	5	磨石	38土	安		7	"	"	
	6	"	5配			8	磨石・凹石	"	砂
118-	7	凹石	6配			9	磨石	"	花
	8	磨石	8配	安	1780	"	"	"	安
	9	"	10配	"		1	"	"	"
1730	"	"	14配	"		2	"	"	"
	1	"	"	"		3	"	"	"
	2	"	14・15配			4	磨石・凹石	"	"
	3	"	14・15配下			5	磨石	"	花
	4	"	"		123-	6	"	"	凝
	5	"	"			7	"	"	砂
	6	磨石・凹石	"	"		8	"	"	安
	7	磨石	"	"		9	"	"	貢
	8	"	"		1790	"	"	"	花
119-	9	磨石・凹石	"	砂		1	磨石・凹石	"	砂
1740	磨石	15配	凝			2	凹石	"	安
1	"	"	安			3	磨石	"	花
2	磨石・凹石	19配	羅			4	凹石	"	安
3	"	21配	安			5	磨石	"	花
4	磨石	"	"			6	"	"	安
5	"	"	"			7	"	"	安
6	"	"	"		124-	8	"	"	安
7	磨石・凹石	溝	花			9	"	"	砂
8	磨石	"	"		1800	"	"	"	安
9	"	"	"			1	"	"	玄
1750	"	"	"			2	"	"	砂
120-	1	磨石・凹石	7集中	砂		3	"	"	安
2	磨石	グリッド	安			4	凹石	"	花
3	磨石・凹石	"	砂			5	磨石	"	安
4	"	"	羅			6	"	"	花
5	磨石	"	安			7	磨石・凹石	"	凝
6	"	"	花			8	"	"	砾
7	凹石	"	"			9	磨石	"	砂
8	"	"	羅		125-1810	"	"	花	安
9	磨石	"	安			1	"	"	砂
1760	凹石	"	泥			2	凹石	"	花
1	"	"	花			3	磨石	"	安
2	"	"	安			4	石皿	1住	砂
121-	3	磨石・凹石	"	"		5	"	"	花
4	磨石	5集中	"			6	"	4住	安
5	"	"	花			7	"	5住	砂
6	"	グリッド	安			8	"	6・7住	安
7	"	"	"			9	"	12住	花
8	凹石	"	安		1820	"	"	"	凝
9	磨石	"	羅		126-	1	"	27土	砾
1770	"	"	砂			2	"	23配	砂
1	凹石	"	"			3	"	24配	安
2	磨石	"	安			4	"	14・15配石下	花
3	磨石・凹石	"	"			5	"	15配石	安
122-	4	凹石	"	"		6	"	21配石下	花
5	磨石	"	花			7	"	21配石	安
6	凹石	"	"			8	"	"	花

図面	番号	器種	出土位置	石材	図面	番号	器種	出土位置	石材
9	"	グリッド	"	"	1	"	"	"	"
1830	"	"	"	"	131-	2	石匙	1住	粘 頁
1	"	表採	砂	安	3	"	"	10配	"
2	"	7集中	砂	安	4	"	"	グリッド	粘・H
127-	3	多孔石	11住	"	5	"	"	"	粘 頁
4	"	12住	花	"	6	"	"	"	粘 頁
5	"	"	安	"	7	"	"	"	"
6	"	13住	砂	"	8	"	"	"	"
7	"	15住	安	"	9	"	"	"	"
8	"	17住	"	"	1890	"	"	"	粘 安
9	"	2配	花	"	1	石鍤	14・15配	粘	粘
1840	"	6配	"	"	2	"	グリッド	"	"
1	"	"	"	"	3	"	"	"	粘・H
128-	2	14・15配	"	"	4	"	"	"	粘
3	"	21配石	"	"	5	特殊磨石	12住	砂	安
4	"	"	"	"	6	"	"	砂	安
5	"	"	"	"	7	"	グリッド	安	砂
6	"	7集中	"	"	8	"	"	粘	安
7	"	"	"	"	9	"	"	粘	粘
8	"	グリッド	"	"	132-1900	加工痕ある剝片	12住	頁	粘
9	"	"	安	"	1	"	"	粘	"
1850	"	"	"	"	2	"	"	溝	"
1	磁石	"	砂	"	3	"	グリッド	砂	粘
129-	2	石棒	1住	安	4	"	"	粘	頁
3	"	11住	花	"	5	"	グリッド	粘	粘
4	"	"	"	"	6	"	"	粘	"
5	"	12住	"	"	7	"	"	粘	"
6	"	"	"	"	133-	8	"	12住	"
7	"	"	"	"	9	"	"	"	"
8	"	27土	"	"	1910	"	"	"	"
9	"	4配	片	"	1	"	"	17住	"
1860	"	配	花	"	2	"	"	41土	砂
1	"	溝	緑	"	3	"	"	15配	凝
2	"	21配	花	"	4	"	"	21配	粘
3	"	"	安	"	5	"	グリッド	凝	粘・H
4	"	4配	"	"	6	"	"	"	"
5	"	グリッド	"	"	7	"	"	"	粘
6	"	"	"	"	8	"	"	"	"
7	"	"	花	"	9	"	"	"	"
8	"	"	安	"	1920	"	"	"	粘
9	"	"	"	"	1	"	"	"	粘
130-1870	"	"	片	"	2	"	"	"	頁
1	"	"	安	"	3	"	"	"	"
2	"	"	"	"	4	"	"	"	"
3	"	"	片	"	5	"	"	"	"
4	"	"	安	"	6	"	"	"	"
5	"	"	"	"	7	"	"	"	"
6	たたき石	"	砂	"	8	"	"	"	"
7	"	"	粘	"	9	"	"	"	"
8	"	"	"	"	1930	"	"	"	"
9	"	"	砂	"	1	"	"	"	"
1880	"	"	凝	"	2	"	"	"	粘

図面	番号	器種	出土位置	石材	石材凡例	砂・砂岩	泥・泥岩	頁・頁岩	粘・粘板岩
	3	"	"	"		礫・礫岩	凝・凝灰岩	チ・チャート	緑・緑色岩
	4	"	表採			黒・黒曜石	玄・玄武岩	花・花崗岩	蛇・蛇紋岩
134-	5	"	12住	泥		安・安山岩	千・千枚岩	輕・輕石	
	6	"	13集石	凝泥		H・ホルンフェルス化			
	7	"	7集中	泥					
	8	"	グリッド	泥					
	9	"	"	頁泥					
1940	"		3住	頁泥					
1	"		"	粘					
2	"		"	頁					
3	"		"						
4	"		11住						
5	"	表採							
6	"		12住	頁					
7	"		"						
8	"		"						
9	"		"						
1950	"		"						
1	"		17住	泥					
2	"		27土	"					
3	"		41土	粘・H					
4	"		4住						
5	"		4配	チ					
6	"		6配	粘					
7	"		14・15配下	粘・H					
8	"		"	粘					
9	"		"	頁					
1960	"		21配下	"					
1	"		グリッド	粘砂					
2	"		5集中	粘					
3	"		グリッド	泥					
135-	4	"	"	頁					
5	"		"	千砂					
6	"		"	粘					
7	"		"	頁					
8	"		"	粘					
9	"		"	安					
1970	"		"	千砂					
1	"		"	粘					
2	"		"	頁					
3	"		"	粘					
4	"		"	粘					
5	"		"	安					
6	"		"	千砂					
7	"		"	粘					
8	"		"	頁					
9	"		"	粘					
1980	"		"	粘					
1	"		"	頁					
136-	2	軽石製品	"	粘					
3	"		"	軽					
4	块状耳飾り		"	頁					

第4章 考 察

第1節 中谷遺跡出土炭化種子について

松谷 晚子

1 試料（表・図版38）

縄文時代の住居址の炉と覆土から出土した炭化種子を主体とした炭化物26試料が対象で、内訳は、10号住戸からの出土物が2点、12号住出土物が17点（このうち覆土出土が13点）と最も多く、16号住出土物が4点、17号住出土物1点の他、第7遺物集中区と土坑からの出土物が各1点である。

2 方法

主に実体顕微鏡で外形を観察し、写真撮影を行ったが、一部のものはさらに走査型電子顕微鏡で微細構造の観察を行った。

3 観察結果

試料毎の同定結果は表1に記してある。ミズキのように破片でも特徴が残っているものは別として、一般に破片となったものは識別が困難であり、実体顕微鏡で表面に網目状の構造等が認められるものは、走査型電子顕微鏡で観察を試みたものもあるが、識別が不可能なものが多かった。結局、識別できたのは、マメ2点、ミズキ4点、ニワトコ1点、球根1点で、残りは不明である。

不明種とした中でも、外形が残っているものが二種類有り、不明A、不明Bとした。不明Aとしたものは、一試料だけであるが、径2.5ミリくらいで球形の果実の果皮と考えられるもので、表面模様などの特徴が観察されず、種名の判断が困難である（図版38写真6：以下図版番号は略す。）。不明Bの方は、外形が半月形で、硬い内果皮状をしており、表面には粗い網目構造が認められる。長辺は約4ミリ、短辺は2.5ミリくらいで、二枚貝のように合わせたものと、二分しているものがあった。12住覆土からは試料9、14の2点、12住セクションベルトからも試料17（写真7）、試料18の2点存在する他、試料23（16住戸）も同じものと考えられる。その他破片に別れてはいるが、外形が紡錘形で長さが約4ミリ、幅が1.5-2ミリの壊れやすいものがあり、不明Cとした（試料26、写真8）。試料16もこれに似ているところがある。

マメと同定した二点は、外形からの判断による。試料24の方は子葉が二枚合わされた状態であるが、識別に役立つへその部分は残っていない（写真1）。試料19の方は、子葉が一枚だけ残っていて、内側の様子からマメ類と判断した（写真2）。マメの種類の同定は困難であるが、両方とも外形は梢円形で、長さ2点とも4ミリ、幅は1つが3.5ミリ、もう一つは3ミリであり、ほぼ同じ大きさなので、同じ種類の可能性が高いが、あるいは別の種類かもしれない。

ミズキの内果皮核は、長さが3ミリ位で幅が4ミリ位の梢円形をしているが、表面は縦方向に7~8本の筋があり、裏面には隔壁が存在するという特徴がみられる。試料15（12住覆土出土、写真3）はよく外形を残しているが、同じ12住覆土から出土した試料12は破片であるといえ、特徴が良く残っていた（写真4）。やはり12号住覆土から出土した試料10の一部も裏面の特徴からミズキの内果皮の破片と考えられる。そのほか、16号住の炉から出土したものも破片ではあるが、ミズキの内果皮と判断できるものであった。

ニワトコの種子は、12号住覆土の試料から1点だけ長さ2ミリ、幅1ミリくらいの卵型をした小さな種子で、表面に横方向のわじ状構造が認められる（写真5）。

実体顕微鏡で球根かと考えられるものが存在し（写真9）、走査型電子顕微鏡で観察したところ、これまで繩

文時代の諸遺跡から出土してきた球根状の炭化物と類似の構造が観察された（写真10）。

この結果を遺構毎に記すと、次のようになる。

10号住戸：不明A（1）

12号住戸土：ニワトコ（1）、ミズキ（3）、不明B（2）。

12号住戸：不明種子C？破片

12号住セクションベルトBIV層：不明B（2）。

12号住：マメ

16号住戸I・II層：ミズキ（1）、不明B（1）。

17号住：マメ

第7遺物集中区：ユリ科ネギ属球根（1）。

39号土坑：不明種子Cの破片

4 考 察

縄文時代の遺跡からマメ類の子葉が出土する例が多くなっている。しかし、種類の同定ということになると、今の所はなかなか困難であるというのが実情であり、もう少し例を増やして検討してゆく必要があると考える。今回の出土物は、外形が橢円形で、大きさは、長さ約4ミリ、幅3ミリ～3.5ミリで、小型の部類である。

ミズキ科のミズキの内果皮（核ともいう）は、縄文時代の住居跡からよく出土するが、内果皮の外側を覆う果肉の部分が食用にされたのであろうか。都留市中溝遺跡の早期末～前期初頭の5号住居跡からは、破片も含めて37粒出土しているが、中谷遺跡では3粒であった。

スイカズラ科のニワトコの種子も、縄文時代の遺跡ではときどき見いだされる。筆者の経験した例では、縄文時代晩期の石川県米泉遺跡のトチ塚からの出土物の中に沢山見いだされた（松谷1992）。土器の中から見いだされた例もある（笠原・1986）。果実酒にした可能性が考えられるが、ミズキも同じように果実酒にしたのかもしれない。

山梨県の縄文時代の住居跡や土坑からは、しばしば球根状炭化物が出土している。水呑場北遺跡（松谷1989）、獅子之前遺跡（松谷1991）や中溝遺跡（松谷1996）などでは、同心円状の構造が認められ、ユリ科のネギ属の鱗茎と考えられる。中谷遺跡の試料25は、大小2個の炭化物で、大きい方は10ミリ×7ミリくらい、小さい方は、6×5ミリくらいである。同心円状ではないが、実体顕微鏡下で鱗片が重なった構造のように見えるので、小さい方を走査型電子顕微鏡で観察したところ、種名は同定できないにしても、これまでユリ科のネギ属の鱗茎と考えてきたものと似ており、同じようなものと考えても良いであろう。

引用文献

- 笠原安夫・藤沢浅 1986 米子市目久美遺跡の土器片の植物同定。「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」P 96-97
- 松谷曉子 1989 水呑場遺跡出土土器付着球根炭化物の識別について。「花鳥山・水呑場北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター、P 143-145。
- 松谷曉子 1989 米泉遺跡出土植物遺残。「金沢市米泉遺跡」石川県立埋蔵文化財センター、P 297-304。
- 松谷曉子 1991 獅子之前遺跡出土植物遺残について。「獅子之前遺跡発掘調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター、P 102-103、図版12。
- 松谷曉子 1996 中溝遺跡から出土した炭化植物について。「中溝遺跡・揚久保遺跡」山梨県埋蔵文化財センター、P 49-53、図版14-16。

炭化物試料一覧表

試料番号	出土遺構	同定結果	備考	写真
1	10号住炉出土	不明	径約2.5ミリ	
2	10号住炉	不明	破片 2	
3	12号住覆土	不明	3 × 2.5ミリ	
4	12号住覆土	不明破片		
5	12号住覆土	ニワトコ種子		
6	12号住覆土	不明破片		
7	12号住覆土	不明破片		
8	12号住覆土	不明 B ?		
9	12号住覆土	不明 B		
10	12号住覆土	カヤツリグサ科果実 1、破片 4 (うちミズキ 1 と昆虫の卵? 1)		
11	12号住覆土	不明破片		
12	12号住覆土	ミズキ破片		
13	12号住覆土	不明破片		
14	12号住覆土	不明種子 B		
15	12号住覆土	ミズキ核		
16	12号住炉 I 層	不明 C ?		
17	12号住セクションベルト B	IV層 不明 B		
18	12号住セクションベルト B	IV層 不明 B		
19	12号住 C - 1 (マメ)	マメ子葉 1 枚 (4 × 3.5ミリ)		
20	16号住 炉 I + II 層	不明破片		
21	16号住 炉 I + II 層	ミズキ破片?		
22	16号住 炉 I + II 層	不明破片		
23	16号住 炉 I + II 層	不明 B		
24	17号住 C - 1 (マメ)	マメ子葉 2 枚 (4 × 3ミリ)		
25	第 7 遺物集中区 C - 1	球根 (ユリ科ネギ属鱗茎)		
26	39号土坑	不明種子 C 破片		

遺構の時期

- 10号住：曾利V
 12号住：曾利V
 13号住：曾利II
 16号住：曾利III～IV
 17号住：曾利IV～V
 第7遺物集中区：曾利V（中期末）
 39号土坑：堀之内I

図版38写真説明：中谷遺跡出土炭化物の实体顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真

- 1 試料24：マメ子葉 2 枚が合わさった粒
- 2 試料19：マメ子葉 1 枚の内側
- 3 試料15：ミズキ内果皮
- 4 試料12：ミズキ内果皮破片
- 5 試料5：ニワトコ
- 6 試料1：不明 A
- 7 試料17：不明 B
- 8 試料26：不明 C
- 9 試料25：球根鱗茎
- 10 試料25：小さい方の SEM写真

第2節 中谷遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県ではこれまでにも多くの遺跡で自然科学分析が応用され、遺跡の古環境や遺物の素材、生業活動の検討等が行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994など）。しかし、縄文時代を対象とした調査例は、白州町上北田遺跡などわずかである。そのため、縄文時代の古環境などに関する情報は今のところ不足している。

中谷遺跡では、縄文時代中期～後期の住居跡や集石等に伴う遺物が検出されている。本報告では、集石の構築・使用年代を明らかにするために、出土した炭化物を利用して放射性炭素年代測定を行う。また、住居構築材と考えられる炭化材の樹種同定と、土坑覆土のリン分析から、当該期の生活の一端を明らかにする。

1. 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定

(1) 試料

試料は、11基の集石（1, 3～9, 11, 14, 16号集石）から採取された炭化物各1点（試料番号1～11）である。

(2) 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(3) 結果

測定結果を表1に示す。

中谷遺跡の放射性炭素年代測定結果一覧表

資料番号	遺構名	試料の質	年代（1950年よりの年数）	Code No.
1	1号集石	炭化物	4,710±100y.B.P. (2,760B.C.)	Gak-18804
2	3号集石	炭化物	4,630±100y.B.P. (2,680B.C.)	Gak-18805
3	4号集石	炭化物	5,120±110y.B.P. (3,170B.C.)	Gak-18806
4	5号集石	炭化物	4,780±110y.B.P. (2,830B.C.)	Gak-18807
5	6号集石	炭化物	4,950±90y.B.P. (3,000B.C.)	Gak-18808
6	7号集石	炭化物	4,470±100y.B.P. (2,520B.C.)	Gak-18809
7	8号集石	炭化物	4,670±100y.B.P. (2,720B.C.)	Gak-18810
8	9号集石	炭化物	4,920±100y.B.P. (2,970B.C.)	Gak-18811
9	11号集石	炭化物	4,830±110y.B.P. (2,880B.C.)	Gak-18812
10	14号集石	炭化物	4,990±90y.B.P. (3,040B.C.)	Gak-18813
11	16号集石	炭化物	4,560±90y.B.P. (2,610B.C.)	Gak-18814

・年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用した。

(4) 考察

各集石から出土した炭化材の年代測定値は、4,630±100y.B.P.～5,120±110y.B.P.であり、比較的近似した年代値が得られた。本地域では、縄文時代の年代測定を行った例が少ないが、隣接する関東地方では多くの資料が蓄積されており、土器様式とも比較的調和的とされている（キーリ・武藤、1982）。その結果と比較すると、今回の測定値は縄文時代前期～中期の測定結果に一致する。今のところ調査を行った集石は、いずれも共伴する土器の有無や時期は不明である。今後これらに情報を加え、既存資料との比較・検討を行いたい。

2. 炭化材の樹種

(1) 試料（図版39）

試料は、1号住居跡（堀之内Ⅰ式期）および13号住居跡（曾利Ⅱ式期）から出土した炭化材20点（1号住柱1, 2, 4～10, 13号住C-1～11）である。

(2) 方法

木口（横断面）・杼目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

炭化材は全てクリに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔眼部は1～4列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～梢円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は全てクリであった。山梨県内では、白州町上北田遺跡で縄文時代前期初頭の住居跡から出土した炭化材の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993a）。この結果では、構築材の多くはクリであり、今回の結果と調和的である。これらの結果から、クリが縄文時代に構築材として県内各地で利用されていたことが推定される。同様の結果は、長野県や関東地方でも数多くみられる（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993b；鈴木・能城、1993；高橋・植木、1994）。このことから、縄文時代においてクリが広範な地域で構築材として多用されていたことがうかがえる。

今回の分析対象とした1号住居跡は、いわゆる柄鏡形（敷石）住居跡であり、その柱穴配置や上屋構造については様々な議論がある（梅原、1995；秋田、1995など）。1号住居跡では住居主体部縁石の間隙部に半割の柱（？）とみられる炭化材が分布しており、その樹種が柱の配置とともに明らかになった貴重な事例である。今後も類例の調査を重ねたい。

なお、山梨県では、資料数は少ないが、弥生時代後期や平安時代の住居構築材についても樹種を明らかにした例がある（高橋、1987；パリノ・サーヴェイ株式会社、1994）。その結果ではクリが少なく、クヌギ節・コナラ節が多い傾向が認められる。このことから、時代によって構築材の用材が異なっていた可能性がある。今後県内において各時代の住居構築材の樹種に関する資料をさらに蓄積し、その実態を明らかにしたい。

3. リン分析

(1) 試料

試料は、縄文時代の3基の土坑（20号土坑・39号土坑・41号土坑）と21号配石埋甕から採取された13点である。20号土坑では、造構内部から1点、造構周囲から対照試料として造構確認面の土壤試料4点を採取した。39号土坑では覆土I層・IV層、41号土坑では覆土I層・III層・IV層から試料を採取した。21号配石埋甕からは、上層・中層・下層に分けて各層から試料を採取した。

(2) 方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸溜水で、100mLに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ過の一定量を

試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光度計によりリン酸濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) を求める。

(3) 結果

リン酸の分析結果を表2に示す。20号坑では、対照試料の4点 (SP-A, SP-A', SP-B, SP-B') に比較して土坑内部から採取した試料の方がややリン酸含量が高い。39号土坑では、I層・IV層ともに比較的高い値を示している。41号土坑および21号配石埋蔵では、20号土坑の対照試料と同様の値である。

(4) 考察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告 (Bowen, 1983; Bolt & Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991) によれば、上限は約3.0P₂O₅ mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P₂O₅ mg/g (黒ボク土の平均値) という報告例がある (川崎ほか, 1991)。これを著しく越える数値が得られた場合に、リン酸の富化を指摘できる。

今回の結果をみると、41号土坑では、I層のリン酸含量がやや高いものの、全て天然賦存量の範囲内である。また、20号土坑の対照試料と比較しても測定値に大きな違いが認められない。そのため、41号土坑ではリン酸の富化とは言えない。20号土坑と39号土坑は、天然賦存量や対照試料と比較しても高い値を示し、リン酸が富化していると言える。しかし、当社未公表試料では、骨片などが多少なりとも含まれている土壌の場合には50P₂O₅ mg/gを越えることを確認している。そのため、今回の結果から遺体埋納の可能性を積極的に支持するには至らない。21号配石埋蔵から採取した試料も、20号土坑の対照試料と同様の値であり、リン酸の富化は認められない。

今回の結果をみると、層位的に採取した土坑覆土では、上層ほどリン酸含量が高い様子が見られる。このことから、リン酸が耕作等の影響で上位から2次的に混入した可能性がある。

〈引用文献〉

- 秋田かな子 (1995) 柄鏡形住居の構造-張出部をめぐる空間処遇の理解-. 帝京大学山梨文化財研究報告第6集, p.69-95, 帝京大学山梨文化財研究所.
- 天野洋司・太田 健・草場・敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H.J.M. (1983) 環境無機化学-元素の循環と生化学-, 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [H.J.M. Bowen (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, H.G. & Bruggenwert, M.G.M. (1980) 土壌の化学. 岩田進午・三輪喜太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p., 学会出版センター [H.G. Bolt and M.G.M. Bruggenwert (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法. 440p., 養費堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52: 57-61, 地質調査所.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.: p.23-27.
- キーリ・C. T. & 武藤康弘 (1982) 織文時代の年代. 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「織文文化の研究」, 1

中谷遺跡のリン分析結果一覧表

遺構		リン酸含量 P2O5mg/g	土色	土性
20号土坑	SP-A	3.89	10YR2/3黒褐	L
	SP-A'	3.69	10YR2/3黒褐	L
	SP-B	4.09	10YR2/3黒褐	L
	SP-B'	3.69	10YR2/3黒褐	L
	内部	5.38	7.5YR2/3黒褐	L
39号土坑	I層	6.46	10YR2/3黒褐	L
	IV層	5.14	10YR2/3黒褐	L
41号土坑	I層	3.71	10YR2/3黒褐	L
	II層	2.73	7.5YR2/3黒暗褐	L
	IV層	2.61	7.5YR2/3黒暗褐	L
21号配石埋蔵	上層	4.42	10YR2/2黒褐	L
	中層	4.32	10YR2/2黒褐	L
	下層	3.96	10YR2/2黒褐	L-C

注) 土色: 新版標準土色名 (農林省農林水産技術会議, 1967) による。

□ 土性: 土壌調査レンドグラフ (ペロジット懇談会, 1984) の野外土性の判定による。

L-壤土 (砂と粘土が同じくらいに感じられる)

L-CL-壤土-粘土

CL- 粘土 (わずかに砂を感じるが、かなりねばる)

- 繩文人とその環境』, p.246-275,雄山閣出版。
- 柳原功一（1995）柄鏡形住居の柱穴配置. 帝京大学山梨文化財研究報告第6集, p.1-40.帝京大学山梨文化財研究所.
- 京都大学農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書第1巻. 411p..産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定. 「山梨県北巨摩郡白州町 上北田遺跡」 p.1-5.白州町教育委員会・峠北土地改良事務所.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）郷土遺跡出土炭化材の同定. 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土-長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書-」, p.52-57.小諸市教育委員会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告. 「山梨県北巨摩郡長坂町 健康村遺跡」 p.116-128.新宿区民健康村遺跡調査団.
- ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」 156p.
- 鈴木三男・能城脩一（1993）長野県北村遺跡出土炭化材の樹種. (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡 本文編」 p.167-168,日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター.
- 高橋利彦（1987）炭化材について. 「山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡」 p.56-58.韮崎教育委員会・峠北土地改良事務所.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p. 5-18.

第3節 中谷遺跡出土の漆関係試料

成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）

岡田文男（京都造形芸術大学）

山梨県中谷遺跡出土の櫛文中中期葉の漆関連土器資料5点について、塗膜断面の顕微鏡観察と、用いられた赤色顔料の種類を明らかにするためX線分析（蛍光X線分析、X線回折）を実施した。

試料（表）

1は土器の内面に最大の厚さ1.5mmほどの漆塗膜が付着している。塗膜には漆特有の縮みじわが見られ、また赤色顔料がところどころに見える（図版40：写真1）。2も1同様内面に赤色顔料をところどころに含む漆膜が付着する。この漆塗膜は最も厚いところで約3mmある。3、4は赤彩土器で、3は外面のみに赤色顔料が塗られ、また4は内外両面に赤色顔料が塗られている。5は外面に黒い塗料が矢羽根状に付着している。

1、2は土器器面から剥離した塗膜を、3、4、5は土器そのものを器面が2mm角ほど含まれるよう割り取り、それぞれ供試料とし、これをエボキシ樹脂に包埋して研磨し、落射光および透過光下で顕微鏡観察した。なおX線分析では土器片をそのまま試料として用いた。

X線分析結果

蛍光X線分析およびX線回折（注1）の結果とそれによって明かとなった顔料の種類を表に掲げる。

赤色顔料分析結果一覧表

試料番号	蛍光X線分析		X線回折		顔料の種類	型式	備考
	鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	+	-	+	-	ベンガラ	加曾利E IV	M23グリッド
2	+	-	+	-	ベンガラ	加曾利E IV	P28
3	+	-	+	-	ベンガラ	加曾利E IV	F25グリッド
4	+	-	+	-	ベンガラ	加曾利E IV	12号住
5						加曾利E IV	表探

*+は検出されたもの、-は検出されなかったものを表す

塗膜断面の顕微鏡観察結果（図版40）

1（写真2～写真4）

漆塗膜は層状に塗り重ねられているのではなく、不均一、不均質であり、漆塗膜全体が櫛曲している部分もある。色も鈴色を主体とするが、一部は黒褐色を呈する。漆は密な部分もあるが、円形の細かい空隙（径100～5μm）が集中する部分もある。赤色顔料も不均一に混ざっている。

2（写真5～写真6）

やはり漆塗膜は層状に塗り重ねているのではなく、不均一である。非常に大きな空隙が見られ、またこれとは別の円形の細かい空隙（20μm以下）が密集している。赤色顔料も不均一に混ざっている。

3

赤色顔料層は100～20μmほどであるが、塗膜は認められなかった。

4（写真7）

赤色顔料層は100~20μほどであるが、塗膜は認められなかった。

5(写真8)

土器の表面の一部に厚さ20μmほどの黒色塗膜層が認められる。この塗膜は漆とは考えられない。

考察

1から4に用いられた赤色顔料はすべてベンガラであることが明らかになった。

縄文時代に利用される赤色顔料は朱とベンガラの2種類であるが、縄文中期まではベンガラのみが利用されており、本遺跡例も例外ではない。

1、2は塗膜層が厚く、またベンガラも不均一に混ざっている。この中で漆を加熱し（クロメ）、また赤色顔料を混合した可能性も考えられる。漆調製関連の用具であり、漆塗土器ではない。写真2に見える小さい円形の空隙はあるいはゴム質由来するものかも知れない。

3、4は現在表面に薄い顔料層しか認められないが、埼玉県寿能遺跡の縄文中期の赤彩土器の塗膜分析の結果例（注2）などからすれば、本来焼成後の土器表面に顔料を混ぜた漆層を一層塗って彩色したものと考えられる。またこの顔料塗層と土器器面の間には透明漆層が一層塗られていた可能性もある。

5は漆以外の塗料であると考えられる。縄文時代の塗料については、タールやアスファルト等の使用の可能性も視野に入れる必要がある。

調査にあたっては山梨県埋蔵文化財センター長沢宏昌氏にお世話をになりました。記して感謝致します。

(注1)

蛍光X線分析 赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業（株）製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10~65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

X線回折 赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機（株）製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30~70°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

(注2) 成瀬正和・岡田文男 1995 寿能遺跡出土縄文漆器の研究(3) -漆塗土器- 第12回日本文化財科学大会要旨

第4節 中谷遺跡出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館・西本豊弘
国学院大学大学院生・伊藤良枝

中谷遺跡の発掘では、小さな骨まで丁寧に採集された。その多くは焼けており、原型を止めないものであった。また、一方では、シカ・イノシシの歯が出土したが、それらは火を受けていなかった。シカ・イノシシの歯と焼骨は縄文時代のものであろう。ウマの歯も出土したが、それらは古墳時代以降のものと推測される。これらの試料を出土地点ごとに示し、その内容を簡単に説明する。

まず、最も多く出土した焼骨では、種が確認されたのはシカ・イノシシの2種類であった。シカは19号配石で中手骨または中足骨の破片が見られ、イノシシでは94年度グリッド取上資料の中に成獣の右側脛骨遠位部が1点確認されただけである。しかし、小さな焼骨の大部分はシカ・イノシシの骨であろう。非常に良く焼かれているので、粉状になっているものもある。鹿角で火を受けたものもあるので、オスジカの頭蓋骨が焼かれた可能性もあるが、角だけが焼かれたこともあったかもしれない。鳥類の骨も少量含まれていたが、種と部位は同定できなかった。また、ウサギ程度の小型獸も見られたが種は不明である。シカ・イノシシの歯の破片も比較的多く出土した。これらは歯冠部分のみであり、焼けていなかった歯が火を受けると、歯冠のエナメル質の方が、内部の象牙質の歯根のセメント質よりも早く焼失する。一方、火を受けない歯の場合、象牙質やセメント質よりもエナメル質の方が残りやすい。従って、歯冠のみが出土することは、本来、歯根を伴っていたことを示すだけではなく、頸の骨も伴ったこと、さらに頸以外の四肢骨も伴った可能性を示唆している。灰や焼けた骨が土壤に含まれていたために、普通の土壤では消滅してしまったであろう歯冠部がかろうじて残っていたと推測される。ただし、本来、どれくらいの量のシカ・イノシシが含まれていたかは不明である。ウマの歯も3ヶ所でまとめて出土している。これらの歯も焼けておらず、頸骨と伴っていたのである。場合によっては、全体が埋葬されていたかもしれない。P-14455のウマでは、歯の磨耗面の長を記載したが、小型の壯年のウマであろう。古墳時代以降のどの時期のものかは分からぬ。

動物遺体の内容	19配	シカ手骨・中足骨片 1 (焼骨)	NO.11642 (I-10) 小型駆逐骨片 5 (焼骨)
(遺跡内出土骨片)			
1住 鹿角破片 30 (焼かれている)	7土	鹿歯骨片 38 (焼骨)	NO.11921 (I-10) 小型駆逐骨片 5 (焼骨)
シカ上 (M12)		骨片 15	NO.11932 (J-11) 小型駆逐手骨・中足骨 2 (焼骨)
イノシシ臼歯破片 10	9土	シカ上臼歯骨片 20	NO.12682 (K-11) 小型駆逐骨・中足骨 1 (焼骨)
駆逐歯骨片 20 (焼骨)		鹿歯骨片 10 (焼骨)	NO.14455 (L-14) ウマ 上 L 1123P24M123
駆逐歯骨片 32 (焼骨 3)	11土	鹿歯骨片 10 (焼骨)	R P24M123
骨片 22	12土	鹿歯骨片 12 (焼骨)	頭蓋骨を伴っていたが歯のみが残存していた
骨片 2	20土	鹿歯骨片 3 (焼骨)	小型・壮年 性別不明 左臼齒の長さ (mm)
2住 鹿歯骨片 24 (焼骨)	21土	鹿歯骨片 25 (焼骨)	P23.6 P23.6 P42.48
骨片 2	27土	鹿歯骨片 17 (焼骨)	M1-22.3 M22.21 M32.78
3住近内 鹿歯骨片 5 (焼骨)		骨片 15 (焼骨)	94年度グリッド 鹿歯骨片 60 (焼骨30)
4住 鹿角近片 41 (焼かれている)	30土	骨片 10	B-1 イノシシ頭骨 R 下 成 (焼骨)
シカ上頭骨破片 3	37土	鹿歯骨片 19 (焼骨)	K-22 鹿角頭骨 1 (焼かれている)
駆逐歯骨片 19 (焼骨)		骨片 25 (焼骨)	元骨 鹿歯骨片 1108 (焼骨102)
骨片 9	39土	鹿歯骨片 31 (焼骨)	94年度グリッド 鹿歯骨片 309 (焼骨260)
8住 鹿歯骨片 1 (焼骨)		骨片 3 (焼骨)	NO.132 (L-24) シカ下臼歯骨片 6
9住 イノシシ臼歯破片 10	39土	追物集中区 イノシシ臼歯破片 17	NO.528 (N-15) シカorイノシシ前甲骨片 1 (焼土)
駆逐歯骨片 11 (焼骨)		イノシシ下顎切歯破片 1	NO.770 (L-23) イノシシ臼歯破片 10
骨片 8	40土	鹿歯骨片 102 (焼骨79)	NO.864 (M-24) イノシシ中足骨 1 (焼骨)
12住 イノシシ尺骨 L 滑車部分のみ		骨片 82 (焼骨 4)	NO.1830 (N-26) シカ中手骨・中足骨 1 (焼骨)
(焼骨)		トリ骨片 5	NO.2888 (O-25) イノシシ足骨 1 (焼骨)
イノシシ臼歯破片 56	93年度グリッド	鹿歯骨片 107 (焼骨64)	注 上: 骨と頭骨の場合は上部 四肢骨は近位部
駆逐歯骨片 2	F-7	シカ臼歯骨片 20	下: 骨と頭骨の場合は下部 四肢骨は遠位部
駆逐歯骨片 533 (焼骨617)	H-11	シカ上 (M12)	L: 左側
骨片187 (焼骨152)		光波	R: 右側
トリ骨片 1		鹿歯骨片 1106 (焼骨1012)	I: 前面
4配 駆逐歯骨片 300 (焼骨)		シカ上臼歯骨片 26	P: 後面
5配 ウマ臼歯破片 22 破片のために上		シカ上臼歯骨片 76	M: 後臼歯
下左右不明		シカ臼歯骨片 210	歯の数字は残存している歯の順位を示す。
6配 骨片 5		イノシシ臼歯破片 250	()は頭骨が伴うことを示す。
10配 鹿角破片 17 (焼かれている)	NO.4727 (G-9)	イノシシ 上M3R 成	
駆逐歯骨片 7 (焼骨)	NO.10752 (I-10)	鹿歯骨片 2 (焼骨)	
骨片 1	NO.11367 (I-10)	小型駆逐骨片 1 (焼骨)	
15配 駆逐歯骨片 10 (焼骨)	NO.11641	ウマ臼歯破片 7	

第5節 都留市小形山中谷遺跡のテフラ層序

都留文科大学 上杉 陽

I はじめに

1994年8月、都留市小形山中谷遺跡（第137図）の火山灰層序学的土層調査を山梨県埋蔵文化財センターに依頼され、同遺跡東側壁面（図版41-1）および北側露頭（図版41-2）の土層柱状図を作成し、試料を採集した。また、両断面を併せて、標準土層断面を作成した（第138図）。水田鋪床層を第1層として第20層（14500年前）までを記載した。同図最左欄には各土層が富士系標準テフラ柱状図（第139-1～5図）のどれに対応するのか推定層位・推定年代が記入されている。推定年代中の例えば11700年前とあるのは、正確には西暦1950年から遡った放射性炭素年代で、本来はyears B.Pと書くべきものである。年輪年代ではない。

富士山東方の山梨県、静岡県、神奈川県、東京都、千葉県～埼玉県の一次堆積テフラが大半を占める遺跡土層では、肉眼観察だけで富士系降下火山灰層物層（以下テフラ層と略す）の標準柱状図のどの層位に当たるかを概略推定することが出来る。詳しくは、日本第四紀学会40周年企画刊行物「第四紀露頭集—日本のテフラ」を参照されたい。

当遺跡の各土層構成粒子も大半がテフラ起源であったが、残念ながら、二次堆積テフラや混入物が多く、確実な肉眼鑑定ができたのは数層分に過ぎなかった。

各土層中には一度降下堆積し固定されたテフラ粒子が流水や霜柱・震動などの重力作用で二次的に流動・転動・滑動して上位の土層に混入するいわゆる二次堆積テフラや背後の基盤岩急斜面からの崩落堆積物、高川山水系一帯からの洪水堆積物、考古遺物、土壤生成物～腐植物質、周辺地域から飛来する風塵堆積物（岩粉）や二次～三次～四次～……堆積のテフラ起源風成塵（tephric loessという）が含まれていた。

そこで、まず実体顕微鏡（7倍～40倍）で一次堆積と判断される噴出当時の表面皮膜を残した新鮮な円磨されていない直径2ミリ以上のテフラ粒子のみを抽出し、その仮比重・ガラスの形態分類、特に気孔形態による分類を行った。また、対比のために富士系テフラ標準試料の模式地での再採集と分析を行った。

なお、抽出できた確実な粗粒一次堆積テフラ粒子は僅かであったから、テフラ粒の斑晶鉱物組成や斑晶率、重鉱物含有率データは誤差が大きく、参考程度にしか利用できなかった。対比精度を上げるために、土層充填物中の他火山起源と思われる屈折率の低いガラスやこれらのガラスが付着した斑晶鉱物（石英、斜長石、角閃石、黒雲母など）を抽出し、ガラス形態分類、斑晶鉱物組成から、対応する遠来～広域テフラを推定した。結果は第138図の右欄に表示されている。

II 遺跡の立地環境

1) 遺跡をめぐる地形環境

この遺跡は富士山頂から北36度東方向、距離30kmの位置にある。延長線上には大月市大月遺跡～埼玉県北部がある。

富士山から噴出したテフラは上空の偏西風に乗って真東（酒匂川～横浜方向）あるいは東北東（道志川～東京方向）に運搬される例が多い。当遺跡を含む桂川一帯は富士山から北東方向に当たり、上記のテフラ降灰中心軸からはずれている。そのため、富士山に近いわりには1枚1枚のテフラ層が薄い。但し、富士山上空には何層もの風層が発生する例が多く、最も空に舞い上がったテフラは偏西風に乗って東側～東北東側に堆積するが、下層の風層で運ばれたものの一部は桂川に沿って下流に向かい、比較的厚く降下堆積している。従って、雪が吹き溜まる地点では厚く堆積するように、テフラも場所により予想外に厚く堆積し、1枚1枚のテフラ層を肉眼で識別できる事がある。当遺跡でも一部テフラは予想通り、充分に厚い純層で肉眼で識別対比が可能であった。

この遺跡は標高975.9mの高川山から流下する山地内急流河川「高川」が桂川本流を1.76万年前に埋め尽くした

古富士泥流台地と接する位置にある（第137図参照）。ここには急峻な山地斜面の南縁に上下2段の緩斜面がある。高位緩斜面は高度425m前後で、桂川本流から支流高川に逆流してきた古富士泥流堆積面上に背後の山地斜面から転落崩壊した物質が堆積したいわゆる崖錐斜面である。

本遺跡が立地する低位緩斜面は標高410～420m前後で狭いうえに、下流側を塞ぐ古富士泥流台地よりも10m前後低いから、洪水の際には、この地点で滞水しやすい。本遺跡の一部土層中には洪水堆積物が挟在する。

また、当地域は山梨県東部地震帶にあり、今日でも数年に一度はマグニチュード5～6程度の地震が生ずる。さらに当遺跡直近に桂川断層など多数の断層網があるため崩落が生じやすく、遺跡背後の谷壁斜面からは基盤岩石が崩落し、各土層中には大量の崩落物質が挟在する。

以上のような状況なので、当遺跡は突然の自然災害を受けやすく、地形環境だけを取り上げれば居住条件が良いとは言えない。但し、いつどのような自然災害があったのか、それぞれの地域社会はどう対応したのかを知ることは必要であり、居住条件の良い遺跡だけ調査すればよいわけではない。

2) 遺跡をめぐる気象環境

桂川一帯では、冬季に地面が凍結し表土部分では霜柱が立ち、土砂が持ち上げられる。日の当たる南面斜面、つまり北側斜面では、晴天時～昼間には最表層が融解するため、これらの土砂は傾斜下方、即ち、南側に僅かに移動する。夜間は再び凍結し、霜柱が立つ。これの繰り返しで、北側からの土砂の供給が南側からの土砂の供給にまさり、これらの土砂に押されて川は南側の縁に押しつけられる。現在、高川が南側山地のへりに沿って流れ、当遺跡部分で河谷「高川」の南側河谷壁が絶壁になっているのはこのためであろう。このようにして、本遺跡周辺の北側の緩斜面（南側緩斜面）が形成されたものと考えられる。南面斜面であるから日当たりも良く、西側からの強風さえしのげれば住み易い地点と言うことになる。高位緩斜面は前述の如く、耐震性も高い古富士泥流が基盤であるし、高い位置にあるから洪水時に冠水しにくい。従って、人家や遺跡の多くは高位緩斜面上にある。当遺跡が立地する低位緩斜面はやや日当たりはよいが、耐震地盤が地下にあるわけではなく冠水もしやすいのであるから立地条件がよいとは言えない。

なお、縄文時代前半は一般に気候は温暖であり、洪水が少ない。植物が繁茂し腐植土が発達しやすい。当遺跡でも縄文時代中期の遺物は多いし、遺構も目立つ。縄文後期後半～晩期は冷涼温潤であり、火山活動・地殻変動も激しく、洪水も多かったため、桂川一帯でも遺物が急減する。弥生時代以降は気候の変動が細かく激しく、古墳時代や鎌倉時代以降の中世・近世は冷涼であった。冬季が長かったから、土層中の腐植含量が低く、一般に土層が黄褐色となっている。これに対して、奈良・平安時代は温暖であり、土層中の腐植含量が高く、土層は黒色～暗褐色である。

3) 遺跡周辺の地質環境－主として石材について－

当遺跡の各土層中には遺物ないしは遺物の可能性がある石片や土器に混ぜ込んだと思われる直径数ミリの斜長石結晶片・塗料として用いた可能性がある富士系の赤褐色円磨スコリア礫、炭化木片が挟在する。

当遺跡土層区分柱状図（第138図）の右脇に遺物の可能性があるものを表示した。第18層最上部（概略13500年前）から非黒曜石製の石片や炭化木片が出現し始め、第9層（概略4500～3300年前頃：縄文時代中期～後期前半）からは、当地域周辺では得られない黒曜石片が出現し始める。

なお、前述したように本遺跡の多くの土層にはとりあえず“二次堆積”とした赤褐色円磨軽石礫が多数挟在する。多くはY-137～141-3起源である。この“二次堆積”スコリア礫には、異常なところがある。それは、自然状態で遠隔地や下位層から運び出された場合は円磨もされるが気孔中には泥がつまり、表面が風化変色するはずなのに、そうはないっておらず、表面に露出した気孔が非常に新鮮だったのである。これは、これらの“二次堆積”スコリア礫が自然のものではなく、人によって地層中から掘り出され、例えば、赤色塗料粉を探るために用いられたためかもしれない。

以下に、石材として利用可能な岩石や鉱物を含む周辺地域の地層について、古い方から略述する。

<四万十層群系の細粒砂岩・チャート>

当遺跡北方～西方の大月市小仏山地一帯に四万十（しまんと）層群が分布する。1.2億年前～2700万年前の白亜紀～古第三紀に太平洋はるか沖合に堆積した外洋遠海性～深海性の泥岩、細粒砂岩を主体とし、生物化学的沈殿岩起源の硬くて緻密なチャート (SiO_2 主体) や柔らかい石灰岩 (CaCO_3) も少量ではあるが産する。

このうち、打撃に対して等方性が高くて加工しやすく、鋭い貝殻状の断口を生ずる硬くて緻密なチャートはしばしば鋭い刃を必要とする石材として使われる。但し、四万十層群中には小仏山地北側の秩父山地のさらに古い秩父層群ほどにはチャートを産しない。

<丹沢層群系の溶岩、凝灰質砂岩、細粒ガラス質凝灰岩など>

前述の小仏層群の南側には2700万年前以降に今日の伊豆七島辺りにあったと思われる海底火山噴出物地帯に噴出～堆積した岩体がある。砂岩や泥岩部もあるが、多くは海底火山起源の火山礫、火山灰、溶岩である。丹沢層群、御坂層群などと呼ばれる。現在では北に押しつけられてきつて褶曲傾動し、巨摩山地、御坂山地、丹沢山地を形成している（天野、1986；上杉、1992c）。その一部は扁平～板状に割れやすいため敷石として使われている。

丹沢層群・御坂層群は下からあがってきた大規模～小規模なマグマで熱せられて热水変質が激しく、一部はぼろぼろに変質し、石材にはなり得ない。しかし、マグマ近辺～周辺では热水鉱床～交代鉱床を作り、金銀銅などの貴重な鉱物を産する。

これらの岩体は北に押しつけられ褶曲する際に多数の断層で切られた。断層沿いには断層粘土带（ガウジ帶）が數10m～数百mにわたって形成され、一部は鉱泉を伴う。本遺跡周辺にも札金温泉、法能温泉、近の坂鉱泉がある。これらは當時どのように利用されたのであろうか？

なお、丹沢層群中には、局部的に非常に硬く、かつ加工しやすい岩石がある。その多くは細粒の SiO_2 に富む細粒ガラス質海底火山灰起源の凝灰岩体である。これらはチャートに化学組成が近く、同様に均質滑らかであるので、“チャート”として扱われてきた可能性がある。本遺跡の各土層から発見された灰白色の緻密な片岩はチャートではなく、大半は丹沢層群産のこうしたガラス質凝灰岩であった。

<御正体山凝灰岩層（T3）中の黄緑色～青緑色ガラス質凝灰岩>

本遺跡の南方8kmに位置する菅野川大野以南には御正体山凝灰岩層（T3）が露出する。層厚800～1300mの細粒緻密な黒色～緑色凝灰岩層（火山灰で出来ている岩体を凝灰岩という）である。菅野川最上流部の道志川との境界部には花崗岩質マグマ（菅野川岩体：丹沢団体研究グループ、1973）に熱せられて、非常に堅くなりフォルンフェルスと呼ばれる接触変成岩を形成する箇所がある。本遺跡の南東20km、菅野川上流道沢と県道都留線が交わる一帯には熱せられて硬化した SiO_2 に富む細粒ガラス質凝灰岩層がある。多くは青緑色～黄緑色を呈する。チャートと同様の化学組成で打撃に対して同様に均質で貝殻状の鋭い断口を生ずる。これは3万年前以前から旧石器人に利用してきた（小林ほか、1982）。この黄緑色～青緑色ガラス質凝灰岩疊は菅野川を流下し、本遺跡東方の桂川にも流出するから、河原でこれを採集することも可能である。

<小篠凝灰岩層（T5c）中の濃緑色ガラス質凝灰岩>

本遺跡直近南側の山地には桂川断層を挟んで小篠凝灰岩層（T5c）が分布する（第137図参照）。なお、第140図は、丹沢団体研究グループ（1973）、小松（1984）、真野・小松・藤田（1977）などの基盤岩に関する研究成果に都留文科大学地学ゼミナールなどの第四紀層に関する研究成果を併せて上杉（1986）が作成した。

小篠凝灰岩層（T5c）は層厚1500mで安山岩質の細粒凝灰岩と粗粒凝灰岩の互層である。都留市城山から生出山にかけて石英閃綠岩質マグマの貫入が確認されている。これを生出山岩体といふ（丹沢団体研究グループ、1973）。こうした貫入岩が多かったためか、本層中には热水変質して濃緑色となり、非常に硬くなったガラス質凝灰岩がある。猿橋町小沢川上流の朝日小沢から本遺跡南東3kmの九鬼山（標高970.3m）にかけて分布する。

細工しやすいとは言いがたいが、旧石器時代から人々は緑色の石に強い関心があるようと思われる。静岡県～神奈川県にかけてのほぼ4万年前前後のテフラ層中からは“いもいし”と称される小円礫が多数発見されるが、これらの円礫の少なくとも一部は流水性とは到底考えられず、人為的に運搬された可能性がある。その一部は緑色系の円礫である。

III 遺跡土層のテフラ層序

1) 考古学土層、土壤学土層、テフラ層の関係について

考古研究者は土層区分をする際に、色調、腐殖含量の多少、土層の継まり具合などの土壤学的な相区分と遺物包含相による区分の両方を併用している。両方も「相」区分であって、「層」区分ではない。だから、考古学土層とテフラ層との完全対比は理屈の上ではありえない。

吹きさらしの稜線部の土層と水際の湿地性土層では、水分条件、植生条件が違いすぎるから、同じテフラ層でも、色調は異なり、継まり具合も異なり、母材テフラの層厚や風化度も違う。従って、同一のテフラ層でも、同一の考古学土層（相）・土壤層（相）にはならない事が多い。「封建時代」という人類社会学的区分と絶対年代による人類社会の年代区分が地域毎にずれてしまうのと同じである。正確な地域間対比を行う際には絶対年代と斜交する土壤相区分～遺物包含相を用いるのは誤りである。それでは循環論に陥ってしまう。

第138図はあくまでもテフラ層区分で作られた柱状図である。テフラ層の認定はある噴火が始まって当初は大噴火で粗粒物質が次々と降下堆積するが、やがて爆発的噴火から溶岩流出などの静穏な噴火に移行し、火砕流や岩屑流の流下が始まり、最後には火道からの細粒物質の細々とした噴出期が続く。いつのまにかマグマ物質の噴出が終了し、火山ガスなどの噴煙が昇るのみとなり、ついにはそれもなくなり、1テフラ層の最上部には風塵堆積物～二次堆積物が積載し、植生が回復し、土壤生成が本格化する。その時期が長ければ長いほど、腐植土が厚く、色調も濃くなる。やがて、次の噴火が始まるとこのテフラ層は固定され、新しいテフラ層の形成に向かう。要するに1テフラ層の認定には、各火山活動の終焉期に対応する細かい風化帯～土壤帯の識別。認定が必要である。現在、各地域で考古学者により設定されている暗色帶（その多くは埋没土壤帯）は大土壤相であって、中小規模の亜間水期に対応するもので、火山活動の終焉期を示すものではない。

2) 富士系テフラの標準柱状図

第139-1図はテフラを記載する際の凡例を示した図である。第139-2～5図は富士山東北東～東方の道志川～酒匂川方向の富士系テフラ標準柱状図である。かながわ考古学財団調査報告5に掲載したものに、その後の1996年度神奈川県活断層調査（伊勢原断層・北武断層）の際に得られたデータや国府津松田断層の遺跡調査などの際に得られたデータを加えてある。この柱状図を作成するに際して必要とした細かい文献は上杉ほか（1995b）を参照されたい。

概略1万年前以降の新富士火山系テフラは静岡県駿東郡駿河小山町の須走一帯を模式地として区分対比されたため、「S」という番号がふられている。10500年前頃の細粒テフラ層がS-0-1番、AD1707年噴出の宝永スコリア以降がS-25番である。その下位の古富士火山系テフラは南関東の新期ローム層にあたることで、「Y」という番号がふられている。木曾御岳第一軽石（10万年前頃？）がY-1番、11200年前噴出の古期富士黒土層中の赤色スコリアがY-141-3番である。

第138図最右欄の推定テフラ番号は、この標準柱状図のテフラ層のどれに対比可能かを示したものである。なお、古墳時代以降の詳細なテフラ標準柱状図は上杉ほか（1995a）を参照して欲しい。

新富士系テフラは概略1万年間で59層あるから、平均170年毎に1テフラ層となる。古富士系テフラは10500～14000年前間で10枚であるから350年毎に1テフラ層となる。地質学的～自然環境論的時代区分点の大小はテフラ岩体中の斜交関係の規模を基準に設定されている。大区分点はY-137-1基底（概略1.4万年前）、S-0-1基底（10500年前）、S-10基底（3250年前）、S-25基底（AD1707年）に設定されている。中小規模の時代区分点がY-138基底（13500年前頃）、Y-141-3基底（11700年前）、S-1基底（6200年前）、S-5基底（5000年前）、S-15-1基底（2700年前頃）、S-22基底（2250年前）、S-24-1基底（2000年前頃）、S-24-3基底（1700年前）、S-24-6基底（1200年前）に設定されている。これらの区分点は人類社会史上的区分点に近い例が多いように思われる。

3) 分析項目について

本遺跡の東側壁面では第138図の第1層から第13層までの完新世テフラが第19層以下を切って北から南に緩く

傾いて堆積するのを観察できる。一方、北側の壁面では第11層～第19層を観察できる。第10層以上は道路建設の際に剥ぎ取られたらしく、消失している。以下、本遺跡の各土層に関する調査項目について述べる。

<柱状図部分>

まず、各土層の構成物質を下位から凡例（第139図-1）に従って記載する。ついで、各テフラ層の上位の風化帯～土壤帶の諸特徴を凡例に従って記載する。腐食含量が多く、黒みが強い土壤帶は狭い間隔で斜線を引いて表現する。腐食含量が少なく淡い土壤帶は間隔の広い斜線で表現する。腐食含量がさらに少なく、褐色～黄褐色の風化帯になつてれば、実線ではなく破線で斜線を引いて表現する。粘土化が激しく、乾燥するとひび割れを生ずる場合はクラック帯として別途表現する。

<遺物>

第138図の柱状図右脇には、各土層中に見られた遺物ないしは遺物の可能性があるものを図示してある。土器、非黒曜石石材、黒曜石石材、炭化木片の4種類がある。前述の赤褐色円磨スコリア礫は、遺物としては表示していない。

<肉眼的諸特徴部分>

第138図の柱状図右側には、図だけでは表現できなかった肉眼的諸特徴を記載している。例えば、スコリア礫の一般的色調、最大粒径と平均粒径がミリ単位で記載されている。例えば、or.sco (10.5±) とあれば、最大粒径10ミリ、平均5ミリ前後のオレンジ色スコリア礫という意味である。野外で観察した際のスコリア礫の気孔径が2ミリ以上と大きい場合はsp. 1ミリ以下が多ければfp. 肉眼で気孔が確認できないほど細かければnpという記号を付加する。相模野L1H（相模野ハードローム）などの考古学土層の概略の位置も示してある。

<スコリア礫の諸特徴>

各土層から採集した試料は1mm径のふるいで、これ以上を粗粒部分とし、それ以下を充填物とした。礫部分の中から、肉眼及び実体顕微鏡の観察で、円磨されたスコリア礫（二次堆積である可能性が高い）と円磨されていない表面皮膜が残るスコリア礫（一次堆積である可能性が高い）、富士火山起源の岩片、周辺地域から混入した基盤岩片、人為的に持ち込まれたと判断した石片、炭化木片、土器片を分別した。一次堆積と判断したスコリア礫については仮比重を求め、残りのスコリア礫で偏光顕微鏡用、実体顕微鏡用のプレパラートを作成した。また、部分的に対比のためにスコリア礫、スコリア礫内部の気孔形態を撮影した。1mm以下の充填物については、1mm (1000μ) ~125μ、125~63μ、63μ以下にふるい分け。125~63μ部分については偏光顕微鏡用にプレパラートを作成した。63μ以下には広域風成塵（黄土起源を含む）や周辺山地からの岩粉、tephric loess（テフラ起源風成塵）、土壤物質、超高域～広域テフラ、生物珪酸体などの微化石を含むはずであるが、まだ標準試料を作成していないので今回は分析していない。

第138図の中央部には各土層中の1次堆積と判定した本質物質、特にスコリア礫の実体顕微鏡～偏光顕微鏡下の諸特徴の記載がある。実体顕微鏡は7倍から40倍で観察した。偏光顕微鏡は100倍から400倍で観察した。今回は資料片が少なかったため、屈折率の測定は行っていない。

<スコリア礫の外形>

長柱状(a)、ねじれ柱状(b)、鐘乳石～土器片状(c)、短柱状～立方体(d)、球形～橢円体型(e)、牛糞状～扁平型(f)、凹曲面体状(g)、そのほか(h)の8種に分類した。富士系のテフラ中には、ハワイ火山のような極めて粘性が低い火山で見られる髪の毛状～涙状～ダンベル状の火山ガラスは稀に出現する。しかし、今回は発見できなかつたので分類項目はない。

スコリア礫は以下の4種類から構成されている。第1はマグマ溜まりの中でゆっくりと熟成し元素が規則正しい配列をとつて大きな結晶となつたいわゆる班晶である。第2は時間不足などの様々な理由で大きな結晶とはなりえなかつた微結晶である。第3は各元素が選択的に移動配列し結晶を形成する時間的余裕がなく、元素が均等に混じりあつた状態のまま、つまり液体状態のまま固化してしまつたガラス部分である。第4が火山ガラスがあつた気孔部分である。

<スコリアガラス形態>

2段階で表示されている。①とあるのは肉眼ないし実体鏡7倍程度で観察した時に気孔形態が球形に近いものである。實際には球形～短柱円体型、葉片状～流線型に細区分が可能である。②とあるのは柱状気孔である。細かくは円柱状～長柱円体型のもの、角柱状のものに細分できる。これ以外に③として、実体鏡下でほとんど気孔が見えなかつたものがある。しかし、本遺跡各土層中には③はなかった。

本遺跡の場合、ほとんどのスコリア礫は広楕の球形気孔であったが、第16層、第10層、第14～16層、第19層中に柱状気孔部分がある。①ないし②という表示の右側のガラス形態は偏光顕微鏡100倍で観察した際にスコリアガラスがどのように見えたかを表示したものである。まず、Sとあるのは気孔が層をなして複数にも積み重なっているいわゆるスponジ状のものである。Jというのは気孔がほとんどなく板状のものである。ゼリー状に見えるのでJという記号を用いた。富士系のスコリアガラスは屈折率が高く、1.54前後であるため、薄くしても透明にはならず、鏡下で淡緑色～ワカメ色～コーヒー色～ゼリー状である。高温酸化したものは赤色を呈するのでRという副記号がつけられる。

気孔形態が卵状～球状であればo、柱状であればcという副記号がつけられる。例えば、soとあれば、球形気孔が多いスponジ状のスコリアガラスである。本遺跡各土層中のスコリア礫のガラス形態は、多くはスponジ状のsoとなってしまったが、これはスコリア礫表面ないしは内部の汚れが充分に落とせず、本当のガラス表面を見ていなかつたためもあると思われる。標準サンプルではゼリー状のものも多い。この点は再検討が必要である。

<仮比重>

スコリア礫には気孔部分が多く、水に浮いてしまうものと気孔部分が少なく沈んでしまうものがある。そこで、スコリア礫中の気孔径や気孔形態だけではなく、気孔の堆積率をも知る必要がある。それを表示したのが仮比重である。スコリア礫の重量を体積で割って得る。ビーズ法を用いて求めた。抽出し得た1次堆積スコリア礫がありにも少なかったため、誤差が大きくなり、一部データは表示し得なかった。概略の傾向として言えるのは、第11層以上の新富士火山系テフラでは仮比重が大であり、第14層以下の古富士火山系テフラでは仮比重が小であった。新富士火山テフラ中では、仮比重が小さく水に浮くことが多い弥生時代初期（2200年前）の湯舟第2スコリア（S-22）は発見できなかつた。

<非富士系鉱物・ガラスの諸特徴>

第138図の最右欄には各土層充填物中の他火山起源と思われる屈折率の低い透明～淡桃色ガラスやこれらのガラスが付着した斑晶鉱物がある。これらを偏光顕微鏡で観察した。plgは斜長石、qzは石英、kfはカリ長石、oxpは斜方輝石、cpxは短斜輝石、hornは角閃石、cumはカミントン閃石、biは黒雲母である。

また、これらのガラスは大きく、板状H、中間C、スponジ状Tの3種に大別し、さらに泡壁状～薄板状bw、剥片状fl、柱状気孔c、球形気孔o、柱球状coの副記号を付して細分した。

他地域の遠来テフラとして有名なものの標準サンプルとの比較から、第3層中の他火山ガラス・鉱物はAD838年の神津島天上山の噴出物起源、第9～10層中のそれが概略3000年前に天城火山カワゴ平火口から噴出したカワゴ平軽石（KGP）、第12層上部のそれが概略6400年前に南西諸島鬼界が島噴出の鬼界アカホヤテフラK-Ahと推定された。以下、本遺跡の各テフラ層について記載する。

4) 本遺跡のテフラ層序

第1層

シルト質～細砂質の水田銀床層である。現代のものと思われる。

第2層

層厚5cmの黄褐色スコリア質風化帶。一般に1万年前以降の富士系テフラは間氷期の噴出物である。この期間は夏季が長く、冬季が短い。そのため植被が厚く、土壤中の腐植含量が多い。各テフラ層は、全層にわたって暗褐色～黒色腐植質となっていることも珍しくない。その中でも、氷期から間がない縄文初期やテフラの降灰スピードが速い縄文後期後半～晩期（S-10～21）、小氷期といわれるほど寒冷であった中世～近世の土層は植被が薄

く、腐植含量が少ないため、上下の地層に比して、より淡い色～黄褐色を呈する例が多い。この点は丹沢山地の北側でも南側でも変わりがない。中近世の土層は平安時代後期以降に降下堆積したS-24-9～10テフラ層を母材とする例が多い。S-24-9～10は富士山体の小富士林道沿いでは仮比重が1を超える丸くて微細気孔からなるスコリア礫である。本遺跡ではこれを確認できなかった。遠米テフラとしてはAD1108年の浅間火山B軽石やAD1200～1112年頃の大島火山N1テフラ最上部のガラス質火山灰が挟在する可能性があるが、今回は試料不足で判定できなかった。また、本遺跡では常滑式陶器を含む中世の敷石が発見されているが、それが筆者の第2層と連続するかどうかは残念ながら確認できなかった。

第3層

層厚は25cm。上下の土層に比べて腐植含量が多く黒褐色腐植質である。オレンジ色の発泡の良いスコリア礫を含む。その最大径は13ミリ、平均5ミリである。肉眼では球形気孔が多く、気孔径は最大2ミリ、平均0.4ミリと大きい。スコリア礫の外形は牛糞状～扁平型が多かった。鏡下では富士系ガラスは球形気孔集合体（So型）が多く、ついで赤色～緑褐色ゼリー状ガラスが多かった。図版42-11はそのうちの赤色ゼリー状ガラスである。

なお、富士北麓では、S-24-8～10では球形気孔集合体（So型）のガラスが過半数を占め、斑晶重鉱物としては橄欖石が過半数となる。S-24-5～7ではゼリー状ガラス（J, Jc, Jo, Jco型）が過半数となる。斑晶重鉱物はS-24-7は橄欖石が過半数となるが、S-24-3～6では橄欖石が過半数に達しない（上杉ほか、1995a）。したがって、一次堆積と断定できるスコリア礫が大量にあれば、これらを判別することは可能である。今回は一次堆積と判断できるスコリア礫が少なく、仮比重も斑晶鉱物組成も求められなかった。

充填物中には平板状で直徑150μ以上の屈折率が1.54より低い透明～うすいピンク色ガラスが多量含まれる。泡巣状～薄板状ガラス（Hbw型）、平板状柱状気孔付きガラス（Hc型）、平板状球形気孔付きガラス（Ho型）が多い。平板状柱状気孔付きガラス（Hc型）の中にねじれた柱状気孔を持つものが目立つ。これらのガラスが付着した斜長石（150μ±）、富士系テフラにはない黒雲母（100μ±）、石英（300μ±）も多い。

本層の最下部には直徑8cm程度の灰白色扁平礫や牛糞状の猿橋溶岩礫がある。その上方には炭化木片が散在する。猿橋溶岩はここから1500m東方の桂川本流沿いに露出するが、本遺跡の上流にはない。これらの岩石は人為的に持ち込まれたものであろう。

以上のような証拠から、本層はAD500～550年頃に本遺跡北方120kmに位置する榛名山二ツ岳から噴出した榛名二ツ岳火山灰（Hr-FA）とAD838年に本遺跡南方155kmの神津島天上山から噴出した流紋岩質火山灰（Lz-Kt）とを含み、温暖期に土壤生成が進んだ古代（飛鳥・奈良・平安期）の土層（S-24-6～8）と推定した。

第4層

層厚15cm。暗褐色で粘土分に富む。オレンジ色に風化し、最大径8mm、平均3～5mm程度の肉眼で微細な球形気孔からなる固いスコリア礫が多い。気孔径は最大0.5mm、平均0.2mmで外形は牛糞状～凹曲面状で気孔部の面積が20%と少ない。赤紫色岩片（2mm）が上部に多いのが目立つ。鏡下では球形気孔集合体（So型）が最も多く、ついでゼリー状ガラス（J, Jc, Jo, Jco型）が目立つ。赤褐色の高溫酸化型スコリアも目立つ。

充填物中には微量ではあるが厚板～剥片状ガラス（Hf型）、平板状柱状気孔付きガラス（Hc型）、平板状球形気孔付きガラス（Ho型）、斜長石、カリ長石、黒雲母、石英斑晶を含む。本層中には斜長石斑晶を多量に含む土器片があった。本層は富士系スコリア礫の詰特徴や赤紫色岩片が多いことなどから、古墳時代に降下堆積したS-24-3～5期のものと推定した。

第5層

層厚は25cm。黄橙色～黄褐色～褐色（標準度色帳で10YR 4/4～6/4）の風化体である。最上部が泥質分が多いためか、踏み固めたためか、かなり固結している。混入円磨礫が多く、同定が難しかった。一次堆積と思われるスコリア礫は少ない。上部にオレンジ色～橙桃色の球形微細気孔からなる最大径10mm、平均5mmのスコリア礫がある。外形は球形～牛糞型～凹曲面型である。下部に気孔径がより大きいオレンジ色スコリア礫（平均径3mm）がある。スコリアガラスは大半が顯微鏡下では気孔径1μ程度の球形気孔集合体（So型）～黄緑色ゼリー

状ガラス (J,Jc,Jo,Joo型) である。一部に赤色高温酸化型ゼリー状ガラス (J型) がある。

充填物中に微量の平板中に球形気孔があるガラス (Co型)、平板状に柱状気孔が付くガラス (Hc型)、厚板～剥片状ガラス (Hf型) を含む。

本層最下部には灰白色の石英安山岩質らしき扁平溶岩礫や赤色頁岩製石片がある。赤色頁岩は周辺山地にはないので持ち込まれたものと思われる。なお、二次堆積の円磨礫としたものは、その色彩などから古富士火山最末期のY-137～141期の赤褐色スコリア礫起源と考えられる。円磨の程度が普通ではなく、赤色塗料材として表面をこすり取ったかのようであった。

本層が標準テフラ柱状図のどの層準に当たるかは不明確である。直近下位に比較的目立つ土壤帯があること、櫻桃色のスコリアが多いことから、弥生時代最初期に降下堆積した湯舟第2スコリア (S-22) 以降のものと推定した。確実度が劣る。本来なら広域に分布し、弥生初期の指標層となるはずの軽くて水に浮くS-22 (湯舟第2スコリア層) の礫を発見できなかった。また、甲府盆地西縁部の大師東丹保遺跡で発見された弥生時代中期のスコリア質火山砂 (S-24-2下部か? : 新津・田口、1994) も発見が期待されたが残念ながら発見できなかつた。

第6層

層厚は25cm。上半が暗黄褐色腐植帶で下半が黄褐色である。最下部に黒色～褐色でねじれた柱状のスコリア礫がある。最大径10mm、平均径5mmで、気孔径が最大3mm、平均0.4～0.1mmと大きい。実体鏡下で球形気孔ばかりではなく、柱状気孔も目立つ。また、赤色高温酸化型スコリア礫が30%をしめる。仮比重は0.9で水に浮く軽さである。スコリア礫中には菱形薄板状の斜長石斑晶が多い。こうした特徴を持つスコリア礫が多いのはS-15～17、特にS-16 (概略2550年前) である。本層は広くとればS-15～21期 (概略2750～2250年前) のものである。

なお、充填物中には多量とは言えないが、直径220μ以下の平板状柱状気孔付きガラス (Hc型)、平板中に柱状気孔が入るガラス (Cco型)、泡壁状～薄板状ガラス (Hbw型)、厚板～剥片状ガラス (Hf型)、ガラス付き斜長石斑晶がある。

1996年度の科学技術庁の予算で神奈川県活断層調査委員会が実施したトレンチ発掘調査で露出した伊勢原断層の伊勢原市日向地区の断面では、S-15上半に直径2～1ミリの軽石が発見されている。また、平塚市金目地区の断面ではS-15～22間に灰白色軽石質火山灰が挟在した。また、小田原市千代台地 (国府津松田断層による閉塞丘) 西縁部の南原遺跡ではS-14を切る層厚120センチの海浸堆積物があり、その中部に白色軽石が挟在する。もしこれらが同一のものであれば、本遺跡南方に給源を持つ軽石質テフラがあり、南関東一帯の晩期健層となる可能性がある。本層最下部には灰白色凝灰岩質扁平礫が挟在する。また、木片、炭化木片、石材片も挟在する。

第7層

層厚は15cm。全体に暗赤褐色である。露頭において容易に最下部にS-12' (大室ラビリ)、最上部にS-14を確認できる。前者は黒砂糖状の固い火山砂で気孔が比較的少なく、風化が上下層より遅れるため、純層として残りやすい。後者は黒色～赤紫色スコリアの重いスコリア礫 (最大径7mm、平均3mm) で、外形は長柱状～牛糞状～錐乳石状である。内部に大きな気孔がある。鏡下ではガラス部分が球状気孔集合体 (Sc型) >柱状気孔集合体 (Sc型) であり、赤色高温酸化ガラスも目立つ。一部に、柱状気孔層が斜交して何層か積み重なるものもある。

充填物中には汚れがひどいねじれファイバー状ガラス (平板状柱状気孔付きガラス) などが散量含まれる。

また、本層中には後期無紋土器片、炭化木片がある。本層は挟在するテフラから2900～2750年前頃 (縄文後期後半) の土層と判断する。本遺跡12号住居跡 (曾利V式期) を覆うスコリア礫は当初S-10～11と思われたが、室内での細かい観測から、S-14と判明した。縄文後期後半最終期の指標テフラである。

第8層

層厚は15cm。全体の色調は極暗赤褐色である。本層中のスコリア礫はごろごろした感じの重いもので、最大径は7mmである。気孔部が少なく、気孔は球形である。気孔間の隔壁が頑丈である。上部のスコリア礫は多少気孔が増える。また、本層中には最大径3mm程度の溶岩片を多く含む。こうした特徴から、これらのスコリア礫は縄

文後期後半初期（概略3000年前）の指標層であるS-11（湯舟第一スコリア上部）とS-12（大沢スコリア）と判断した。充填物中には250μ以下の厚板～剥片状ガラス（Hfl型）、150μ以下の泡壁状～薄板状ガラス（Hbw型）、250μ程度の黒雲母、長さ250～300μの角閃石などが含まれる。これは前後の状況から天城山カワゴ平火口から噴出したカワゴ平軽石（KGP）であろう。

本層中には炭化木片、黒曜石片、白色細粒凝灰岩質石片、直径5mm前後の斜長石斑晶、後期無紋土器などが挟在する。また、本層最下部～第9層最上部辺りには後期掘之内式、中期曾利V式土器が含まれる。

第9層

層厚は25cm、全層、黒色腐植土化している。上中下の3層に区分できる。上部層には重いクリンカー状の溶岩石と見間違えそうな頑丈なスコリア礫が多い。斜長石の大晶を含む特徴的なスコリアである。これは湯舟第1スコリアの下半部S-10である。気孔部の面積比は25%である。サイクロ状の溶岩石も多い。

上部層中の充填物には角閃石（200μ±）、黒雲母（400～150μ）、斜方輝石、石英（120～60μ）、斜長石の斑晶や平板状球形気孔付きガラス（Ho型：220μ以下）、平板状ねじれ柱状気孔付きガラス（Hc型：150μ）が含まれる。これらは上述のカワゴ平軽石（KGP）であろう。

なお、13号住居跡の曾利II式期の竪穴を覆う覆土B断面では4層が識別された。上位より、第I層（B I）、第II層（B II）、第III層（B III）、第IV層（B IV）とし分析した。B IIスコリアは繩文後期後半初期のS-10・11であった。重いスコリア礫で熱水岩片を含む。これはS-10・11の大きな特徴である。

第9層中部層には粒の揃ったスコリア礫が含まれる。最大径6mm、平均5～4mmで、外形がねじれ柱状型が多く、ついで、牛糞状が多い。気孔は肉眼では球形である。偏光顕微鏡下ではスコリアガラスは球形気孔集合体（So型）>ゼリー状ガラス中に柱状気孔（Jc型）がある。また、中部層には緑白色の短柱状火山岩片がある。こうした岩片は珍しく、S-7期のものと断定できる。中部層中には曾利II式土器、黒曜石片が含まれる。13号住居跡のB断面の第III層（B IIIスコリア）もS-7に当たる可能性が高い。

第9層下部層には橙桃色スコリア礫（最大径10mm、平均7～4mm）、灰黑色岩片（5mm前後）が含まれる。全体の色調が暗赤褐色である。充填物中には黒曜石様墨りガラス（100μ）、石英（100μ）、黒雲母（125μ：図版13参照）、厚板～剥片状ガラス（Hfl型：150μ）、泡壁状～薄板状ガラス（Hbw型：70μ）が含まれる。

なお、1996年度の科学技術庁の予算で神奈川県環境部・県活断層調査委員会が実施したトレント発掘調査で露出した伊勢原断層の伊勢原市日向地区の断面では、S-6-1上半に白色粗粒軽石質火山灰が発見されている。また、平塚市金目地区の断面でも同じ層準に灰白色軽石質火山灰が挟在した。これらには、平板上に柱状気孔が付くガラス（Hc型）、平板上にねじれた柱状気孔が入るガラス（Cc型）、黒曜石様墨りガラス、厚板～剥片状ガラス（Hfl型）や石英、角閃石、黒雲母斑晶が含まれる。もしこれらが同一のものであれば、本遺跡南方に給源を持つ火山から南関東一帯に繩文中期に白色軽石質チフラが降下堆積したこととなり、有力な鍵層となる。こうした状況証拠から下部層をS-6層と判定した。

第10層

層厚は12cm。全体の色調はにぶい黄褐色である。大半は3枚のフォールユニット（降下単層）からなる黒色～橙桃色の非常に目立つスコリア礫の純層である。富士山に近い地点では4枚のフォールユニットを識別できる。上部に微細気孔で固いスコリア礫があり、最大径13mm、平均7～5mm、外形は凹曲面状である。最大径3mm、平均0.3mmの大きな角柱状～葉片状～球形気孔がある（図版41-3）。気孔間隔壁がガラス質で頑丈で、この部分に斜長石の小班晶が多數分布する。偏光顕微鏡ではオレンジ色～淡褐色の球形気孔集合体（So型）、ゼリー状ガラス板中に球形気孔（Jc型）が多い。これらの諸特徴は模式地のS-5に最も近い。上位のS-6はより気孔が多く磨耗しやすいし、下位のS-4より気孔が小さく磨耗しにくい。

本層の充填物からは微量ではあるが厚板～剥片状ガラス（Hfl型）、泡壁状～剥板状ガラス（Hbw型）が発見されている。

なお、桂川流域の考古研究者により、繩文中期の指標層として「曾利のスコリア層」と呼ばれてきたものがあ

る。これが筆者の標準テフラ柱状図のどれに当たるかは判然としないが、S-5、S-6のどちらかが純層として識別された場合に、「曾利のスコリア」と表現されるのであろう。本遺跡の「曾利のスコリア」はS-6であり、曾利II式期の竪穴を直接覆う。

第11層

層厚は10cm。全体の色調は褐色(7.5YR 4/3~4/4)である。皮膜の厚い黒色球形のスコリア礫が多く、ついで、高温酸化して赤色になったスコリア礫も目立つ。鏡下では赤焼けした球形気孔集合体(So型)やゼリースタッズ(J,Jc,Jo,Jco型)が目立つ。本層から第13層にかけて、充填物中に黄粉色の火山灰が増加する。これは縄文前期～草創期後半のフジクロ(新期富士黒土層)の特徴である。

本層の充填物中には多量の速来テフラ系の厚板～剥片状ガラス(Hf型: 300μ以下: 図版42-14)や石英、斜方輝石、斜長石がある。これらの諸特徴を備えているテフラ層は模式地ではS-4～1である。

本層中からは、炭化木片、ガラス質凝灰岩の片石が発見されている。

第12層

層厚は15cm。全体に細粒火山灰が多く、淡い黒色腐植質である。本遺跡の東側断面では本層はやや湿地性であった。北壁では風送陸上堆積型降下火山碎屑物層であった。下位層からの円磨赤褐色礫を含むが、一次堆積のスコリア礫は発見できない。充填物中の富士系の火山灰のガラス形態は赤褐色の球形気孔集合体(So型)である。充填物中には大量の透明ガラスが含まれている。最も多いのは泡壁状～薄板状ガラス(Hbw型)であり、淡褐色～半透明の特徴的なガラスが含まれていた。これは南九州鬼界ガ島起源の鬼界アカホヤテフラK-Ahである。竜坂峰南方の模式地、すぎな沢ではS-0-5中部に密集する。これ以外に厚板～剥片状ガラス(Hf型)も多い。その大部分はすぎな沢でS-0-3中上部に挟在する箱根火山中央火口丘神山火砕流(CCP-18)起源と思われる(上杉ほか、1992)。以上のような証拠から、本層はS-0-3～6期(6100～9200年前)のものと推定した。

なお、本層中には厚手の土器片や炭化木片が含まれる。

第13層

層厚は北壁で10cm。東壁では層厚40cmで、下半が風化した白色凝灰岩質角礫の無方向性堆積物で充填物は泥質であるので、この部分は崩落堆積物ないしは土石流堆積物であろう。上半はそれによって発生した湖成シルト層である。

北壁では一次堆積のスコリア礫は全くなく、黄粉色の火山砂に薄墨をかけたかのようなふかふかした淡黒色の腐植層である。これはS-0期の新期富士黒土層の特徴そのものである。充填物中には平板柱状球気孔付きガラス(Hco型)、泡壁状～薄板状ガラス(Hbw型)、平板柱状球気孔付きガラス(Hc型)が目立つ。こうした諸特徴と前後関係から、本層をS-0-1～2期(10500～9200年前)のものと推定した。

この時期の大規模なテフラとしては大島火山Osb55-2中の白色輕石質火山灰[石英入り、平板柱状球気孔付きガラス(Hc型) > 厚板～剥片状ガラス(Hf型) > 泡壁状～薄板状ガラス(Hbw型) > 平板中に柱球気孔が入るガラス(Cco型)、黒曜石入り、10400年前: 上杉ほか、1994]がある。この時期は日本中で火山活動が激しく、ほとんど連続的に活動しており、富士山も三島溶岩を流出している。この時期の最初期の崩落堆積物は丹沢山地周辺一帯で発見されており、ほぼ同時期に箱根火山を南北に分断する平山断層が動いている(上杉・米澤、1987)。なお、本層中には灰白色細粒凝灰岩製の片石が含まれる。

第14層

層厚は25cm。全層黒色腐植質で締まっている。スコップで削ると、“てかてか”した光沢がある。本層中には、斜長石の最大5mm前後の大きな遊離結晶がある。集斑状組織(glomeroporphylitic: 班晶が多數結合)を示すものもある。また、斜長石班晶を多數含む黒色溶岩片(20～10mm)もある。スコリア礫は特徴的な赤褐色を示すねじれ柱状型が多い(図版41-4)。最大径は20mm、通常径が10～3mmである。やはり、最大径5mm前後の斜長石班晶を含む。一部は集斑状である。このスコリア礫には肉眼で大きな気孔を確認できる。最大気孔径2mm、通常径が1～0.5mmで、気孔面積比が高い。仮比重は0.7で大変に軽いスコリア礫であることがわかる。気孔間の隔壁

にはガラス光沢がある（図版41-4・41-5）。実体顕微鏡下では気孔の大半が柱状気孔であり、偏光顕微鏡下では球形気孔集合体（So型）である。こうした諸特徴を備えるテフラ層は模式地ではY-141-3である。その概略の腐植土年代は11700～11200yr.BPであった。（上杉・木越、1986）。本層は相模野考古研究者がフジクロと称する黒色土壤層の下半に当たる。繩文草創期前半の土器が含まれる。

なお、14000～8000年前には富士火山から大量の溶岩が流出し、津屋（1971）により旧期溶岩類と命名されている。例えば、Y-137期に流出した梨が原溶岩（ONE0：上杉、1992a）、三島溶岩（OSE1）、猿橋溶岩（S-0-3期、ONE1）などである。これらの溶岩類の多くは大きな斜長石斑晶を多数含んでいる。集斑状斜長石を含むものもある。特にY-137期の梨が原溶岩は多い。

なお、本層中の充填物中には微量ではあるが、石英、黒雲母斑晶、大きな気孔が特徴的な平板状球形気孔付きガラス（Ho型）、泡壁状～薄板状ガラス（図版42-15）、厚板～剥片状ガラス（Hfl型）や斜長石・石英・角閃石斑晶を含む。この時期知られている他火山テフラとしては大島火山Osb58中に挟在する南南西神津島～新島起源の白色軽石質火山灰【11600年前、斜長石・石英・黒雲母・角閃石斑晶入り、平板状柱状気孔付きガラス（Hc型）、厚板～剥片状ガラス（Hfl型）：上杉ほか、（1994）】や浅間火山総社軽石【11240年前より新しい、As-Si=MK-16、：竹本・久保（1995）中村ほか（1992）】が挙げられる。

第15層

層厚は10cm。暗黄褐色風化帯である。3mm径の斜長石斑晶を含むねじれた特徴的な赤褐色を呈するスコリア礫が目立つ（図版41-6・42-7）。肉眼で柱状気孔が目立ち、最大気孔径が1mm、平均が0.3mmであった。実体鏡下では同じく柱状気孔が多いが、球形気孔も第14層よりは増える。偏光顕微鏡下では球形気孔集合体（So型）である。屈折率が1.54以下であるものも多い。仮比重は0.7で、第14層のスコリア礫同様で大変に軽く、水に浮く。充填物中には50μ程度の厚板～剥片状ガラス（Hfl型）がある。

以上のような特徴を示すテフラは模式地ではY-141-1～2（11700～12500yr.BP？）で、相模野で漸移層と呼ばれる層準の中心的な層位である。模式地ではY-141-2上部にピンク色溶岩片、下部に熱水岩片が含まれ、Y-141-1にはピンク色溶岩片や緻密な黒色溶岩片が含まれる。道志川筋では良い鍵層となる。

なお、充填物中には厚板～剥片状ガラス（Hfl型）～泡壁状～薄板状ガラス（Hbw型）がある。この時期の他火山ガラスとしては、推定12000年前の大島火山のOsb60テフラ（上杉ほか、1994）の中上部に挟在する淡紫色平板状柱状気孔付きガラス（Hc型）～泡壁状～薄板状ガラス（Hbw型）や浅間火山の仏岩期の軽石流を伴う軽石質火山灰互層（AH-11：竹本・久保、1995）が給源候補となる。

第16層

層厚は10cm。全体に暗黄褐色～黄褐色の色調を呈する。ねじれ柱状型、牛糞状～扁平型、凹曲面型の黄褐色スコリア礫（図版8：最大径15mm、通常径10～5mm）を含む。第15層中のスコリア礫とは異なり、実体鏡下では気孔が球形である場合が多い。偏光顕微鏡下では球形気孔集合体（So型）が多くいた。気孔径が大きく、面積比も60%と大きい。仮比重も0.5と極めて軽い。気孔の多い最大径5mmの溶岩片もある。

本層は下位の17層とセットで確認される2枚組スコリア層の上位のものである。これらの諸特徴から、本層を模式地の2枚組スコリア層Y-138層・Y-139層（13500～12400年前？）のうちのY-139層に対比した。模式地（駿河小山町須走すぎな沢）ではY-139b～c間に泡壁状～薄板状ガラス（Hbw型）や角閃石斑晶が挟在する。Y-139最上部には平板状ガラスが少量挟在する。本層の充填物中には微量の角閃石・石英・黒雲母斑晶、泡壁～薄片Hbw、厚板～剥片状ガラス（Hfl型）が含まれる。給源候補としては北方系の浅間火山仏岩期の軽石流を伴う軽石質火山灰互層（AH-11：竹本・久保、1995）中の特に下位のものが給源候補となると思われる。

第17層

層厚は10cm。全体に暗黄褐色～黄褐色の色調を呈する。オレンジ色の牛糞状～扁平型スコリア礫（最大径20mm、通常径10～5mm）を含む。やや丸い重いものと軽い扁平なものがある。実体鏡下では大半が球形気孔で、最大気孔は1mm、平均径が0.3mmである。仮比重は0.8であった。偏光顕微鏡下では球形気孔集合体（So型）である。ス

コリア疊中には輝石の大きな斑晶がある(図版42-9)。また、屈折率は1.54以下のものが多い。本層を模式地の2枚組スコリア層Y-138層・Y-139層(13500~12400年前??)のうちのY-139層に対比した。模式地のY-138層に相当する。模式地(駿河小山町須走すぎな沢)では充填物中に20μ程度の微少な厚板~剥片状ガラス(Hf型)が僅かに認められる。本層にはやや多めの斜長石・石英・角閃石・黒雲母・カミントン閃石?、200μ以下の平板状柱状気孔付きガラス(Ho型)、厚板~剥片状ガラス(Hf型:図版42-16)がある。これらの給源候補としては、前述の給源候補としては北方系の浅間火山仮岩期の軽石流を伴う軽石質火山灰互層(AH-11:竹本・久保、1995)中の特に下位のものや南方系では大島火山Osb62チフラ(13400~13100年前?)中の厚板ガラス(Hf型)に対比可能かもしれない。

第16・17層は相模野L1S(ソフトローム)と呼ばれるものの中心的層位である。

第18層

層厚は20cm。上部に暗褐色の風化帯がある。下部には下半が黒色微細気孔のスコリア疊(最大径13mm、通常径7~4ミリ)、上半が赤褐色に風化した特徴的な球形スコリア疊(5mm)がある。これには輝石の3~1mmの斑晶が含まれる。これは肉眼的に明らかに模式地のY-137-3~4(13900~13500年前?)に当たる。ねじれ柱状スコリア疊と牛糞状扁平型スコリア疊が半々の割合で含まれる。気孔最大径は2mm、平均が0.5mmである。仮比重は0.8である。実体鏡下では球形が目立つスコリアで、偏光顯微鏡下では球形気孔集合体(So型)で、屈折率は1.54以下である。

本層の充填物中には斜長石・石英・黒雲母・カミントン閃石、200μ以下の泡壁状~薄板状ガラス(Hbw型)、厚板~剥片状ガラス(Hf型)が含まれる。模式地では黒雲母斑晶、厚板~剥片状ガラス(Hf型)、泡壁状~薄板状ガラス(Hbw型)、平板中に柱状気孔が入るガラス(Cc型)が少量はある。東京都下ではこの層単に白色軽石が挟在することがある。これは浅間火山の板鼻黄色軽石[AH-9=YP:13500年前:竹本・久保、1994;中村ほか、1992]に当たる可能性が高い。模式地では泡壁状~薄板状ガラス(Hbw型)、厚板~剥片状ガラス(Hf型)や角閃石が挟在する。

本層最上部には炭化木片、径3mmの細粒凝灰質石材片が含まれる。この層準は相模野考古学者によって相模野Bo暗色帶と呼ばれる層準である。

第19層

層厚は55cm。最大径50mmに達する黒色~赤褐色のねじれ柱状型、牛糞~扁平型の大きなスコリア疊から構成されている(図版42-10)。但し、最下部10~5センチは最大径10mm、通常径5~1mmの小スコリアである。前者がY-137-2、後者がY-137-1である。ほぼ14300年前以降のチフラである。スコリア疊中に斜長石・輝石の大斑晶がある。充填物中には斜長石・角閃石・黒雲母・カミントン閃石?・斜方輝石斑晶、厚板~剥片状ガラス(Hf型)>平板状球形気孔付きガラス(Ho型)~球状気孔集合体To、平板状柱状気孔付きガラス(Hc型)平板中に柱状気孔が入るガラス(Cc型)が含まれる。模式地では厚板~剥片状ガラス(Hf型)、平板中に柱状気孔が入るガラス(Cc型)、平板状柱状気孔付きガラス(Hc型)が僅かに含まれる。

模式地をはじめとする関東各地ではY-137-1の直下に大きな非調和型上方浸食型斜交層準(Hd+u型)が形成される。

第20層

層厚は不明である。顕著な暗褐色~灰白色の漂白帶・風化帶である。これは層相からY-133~136の埋没土壤層【相模野B1暗色帶】である。この風化帶の形成期から長期にわたる氷河期が終焉に向かい、いわゆる“晩氷期”と呼ばれる急速海侵期に向かう。急速海侵は繩文海侵を含めて2段飛びであるが、その間のY-137-1~141-3までとS-0-1~6の両期は地殻変動・火山活動の大変に活発な時期であった(上杉、1992b)。こうした自然環境の激動期を乗り切って、人類社会は新石器時代、繩文時代に移行した。

本遺跡は残念ながら、二次堆積テフラや基盤山地からの転石、洪水堆積物が多く、テフラの対比が不安定で確定度が劣ると言わざるを得ない。今後、混入堆積物が少ない模式的なテフラ断面を周辺地域に設定し、これを保存露頭とし、多くの研究者が自由に観察～試料採取が出来る状態にする必要があるようと思われる。

謝 評

本調査に当たって、埋蔵文化財センターの長沢宏昌、笠原みゆき両氏には周辺地域の遺跡についての情報提供を受け、また、遺跡現場での観察に当たって、種々、ご教示いただいた。神奈川県環境部・県活断層調査委員会からは伊勢原断層・北武断層調査の際の多数のボーリングコア、伊勢原断層日向地区、金目地区的トレンチ断面からの試料提供を受けた。盤古堂考古学研究所からは小田原市千代台地南原遺跡の資料提供を受けた。

また、上杉典子さん、都留文科大学初等教育学科地学ゼミの入江俊光・田路良光の両君には試料の採集処理分析をお願いした。これらの方々、関係諸機関に感謝の意を表します。

文 献

- 天野一男（1986）多重衝突帶としての南部フォッサ・マグナ、月刊地球、8、581-585。
神奈川県環境部（印刷中）神奈川県活断層（伊勢原断層）調査事業報告書。神奈川県。
神奈川県環境部（印刷中）神奈川県活断層（北武断層）調査事業報告書。神奈川県。
小林広和・上杉 陽・里村晃一（1982）桂川支流菅野川杯窪で発見された旧石器とその火山灰層序。日本第四紀学会1982年度一般研究発表会講演要旨、12、112-113。
小松宏昭（1984）丹沢山地と御坂山地の境界部の地質構造—山梨県三ツ峠付近における中新世の陥没の意義—。地球科学、38、182-196。
新津 健・田口明子（1994）1区から発見された遺構と遺物。山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第86集〔大師東丹保遺跡〕、2-8。
真野 彰・小松宏昭・藤田至則（1977）いわゆる桂川断層の検討—山梨県三ツ峠付近の後期中新世の陥没。地球科学、31、139-148。
竹本弘幸・久保誠二（1995）群馬の火山灰。180頁。みやま文庫。
丹沢団体研究グループ（1973）丹沢山地のグリーンタフに関する研究（その1）北部地域の層序と構造。地質学論集、9、55-68。
中村俊夫・辻誠一郎・竹本弘幸・池田晃子（1992）南軽井沢周辺のテフラ層序と加速器¹⁴C年代。日本第四紀学会講演要旨集、22、58-59。
上杉 陽（1986）都留市の地史。都留市史、資料編「地誌・考古編」、1-97。
上杉 陽（1992a）富士吉田市周辺地域第四紀地質図及び説明書。富士吉田市史編纂事務局
上杉 陽（1992b）南関東テフラから見た天変地異。月刊地球、1992年号外No.5、102-106。
上杉 陽（1992c）桂川水系の成立過程。論集郡内研究、1-20。都留市郷土研究会。
上杉 陽・土井由美子・佐藤仁美・伊藤ひろみ・宮地直道（1996）富士山東麓すぎな沢の更新世末期～完新世テフラ群－特に富士黒土層について－。第四紀露頭集－日本のテフラ、241頁。
上杉 陽・飛田正美・上本進二・白根義久・建石 徹・青沼道文・松田隆夫・武田宗久・遺跡層序研究会（1996）千葉市稻毛区、牛尾外遺跡のテフラ層位。第四紀露頭集－日本のテフラ、213頁。
上杉 陽・池田京子・須田明子・柳沢唯佳・岡本真砂夫・鈴木 悟（1995a）富士火山北東麓の鷹丸尾溶岩類。関東の四紀、19、3-21。
上杉 陽・池谷信之・由井将雄・高尾好之・瀬川裕市郎（1996）静岡県愛鷹山麓、三明寺遺跡のテフラ層位。第四紀露頭集－日本のテフラ、245頁。
上杉 陽・御堂島 正・上本進二・木村吉行・阿部友寿・柏木善治（1996）神奈川県丹沢山地南東縁、神戸・上宿遺跡のテフラ層位。第四紀露頭集－日本のテフラ、198頁。

- 上杉 陽・長沢宏昌・高橋みゆき（1996）相模川に流入した大規模古富士泥流のテフラ層位－大月市大月遺跡－。第四紀露頭集－日本のテフラ、219頁。
- 上杉 陽・新川和範・木越邦彦（1994）伊豆大島火山千波崎地層切断面露頭群のテフラ・標準柱状図。第四紀研究、33 (3), 165-187.
- 上杉 陽・白石浩之・上本進二・砂田佳弘・米澤 宏・由井将雄（1996）神奈川県綾瀬市蟹ヶ谷、吉岡遺跡群のテフラ層位。第四紀露頭集－日本のテフラ、199頁。
- 上杉 陽・上本進二・伊藤ひろみ・佐藤仁美・土肥由美子（1993）いわゆる立川期のテフラ年代。関東の四紀、18,1-16.
- 上杉 陽・米澤 宏（1987）伊豆半島北縁平山断層の活動期。地震、40,122-124.
- 上杉 陽・米澤 宏・宮地直道・千葉達郎・肥田木 守・細田一仁・米澤まさか・由井将雄（1992）富士系火山泥流のテフラ層位。関東の四紀、(17), 1-19.
- 上杉 陽・米澤 宏・上本進二・都留文科大学地学ゼミ火山灰グループ（1995b）道志川中下流青野原バイパス遺跡群の降下火山碎屑物層位について。かながわ考古学財団報告5, [青野原バイパス関連遺跡、付録自然化学分析], 8-24.
- 上杉 陽・吉田千香子・寺門卓也・齊藤睦雄・小柳美文・片岡義順・関東第四紀研究会（1996）富士山東麓上柴怒田の立川期テフラ群と始良丹沢火山灰AT。第四紀露頭集－日本のテフラ、240頁。

図面及び図版説明

第137図 遺跡周辺の地層分布（上杉, 1986） ■地点が当遺跡

第138図 中谷遺跡標準土層柱状図

第139図 富士山東方地域のテフラ標準柱状図（上杉ほか, 1995b加筆）

図版41-1 東壁断面（図中の番号は第2図の地層番号）

図版41-2 北壁断面（図中の番号は第2図の地層番号）

図版41-3 第10層の曾利のスコリア（S-5）。方眼は1 mm単位。

図版41-4 第14層最下部のスコリア礫。短径が8 mm。

図版41-5 第14層最下部のスコリア礫の内部構造。

図版41-6 第15層のねじれ柱状型スコリア礫。方眼は1 mm単位。

図版42-7 第15層のねじれ柱状型スコリア礫。短径は8 mm。

図版42-8 第16層の牛糞状～ねじれ柱状スコリア礫。方眼は1 mm単位。

図版42-9 第17層の輝石の大きな結晶。方眼は1 mm単位。

図版42-10 第19層中の牛糞状スコリア礫。方眼は1 mm単位。

図版42-11 第5層中の富士系赤色ゼリー状ガラス（長径250 μ）

図版42-12 第9層中の富士系赤色ゼリー状柱状気孔付きガラス（長径125 μ）

図版42-13 第9層下部充填物中の黒雲母斑晶（長径125 μ）

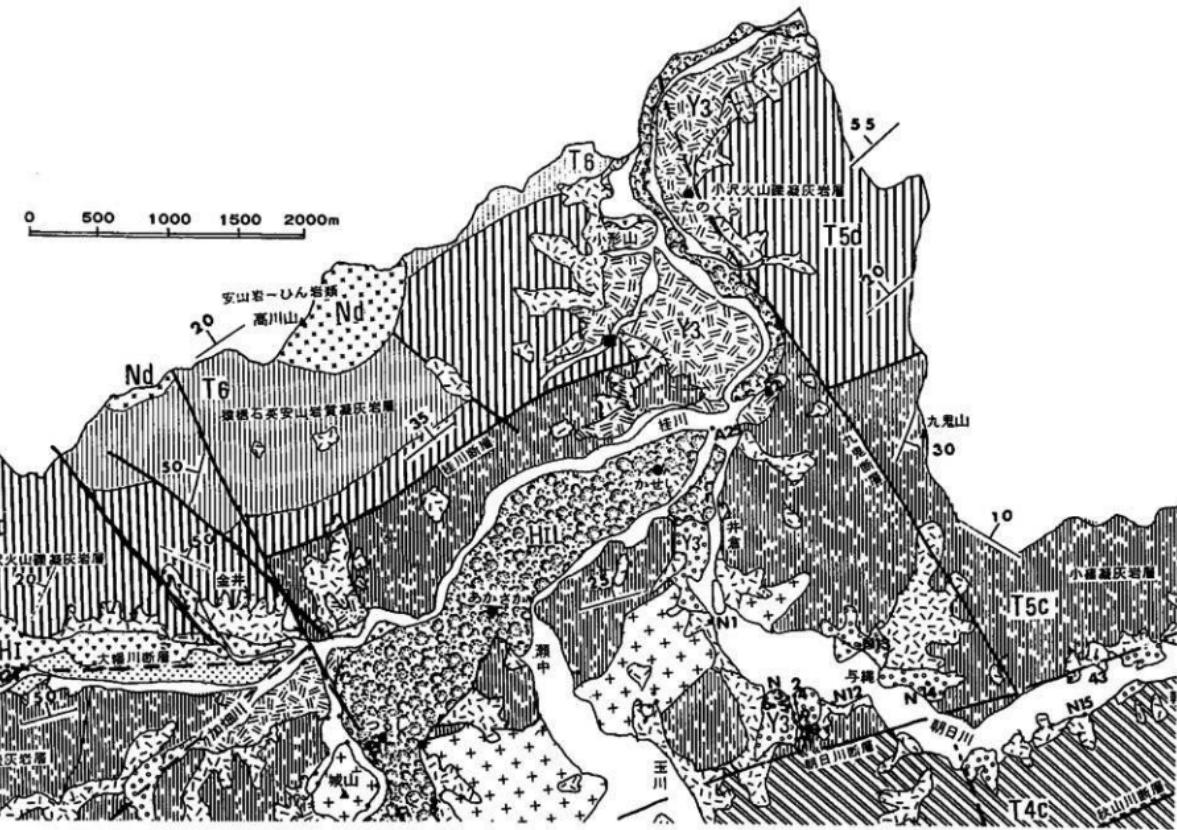
図版42-14 第11層充填物中の厚板～剥片状ガラス（長径150 μ）

図版42-15 第14層充填物中の泡壁状～薄板状ガラス（長径35 μ）

図版42-16 第17層充填物中の厚板～剥片状ガラス（長径125 μ）

第137図 道跡周辺の地質分布図

— 201 —

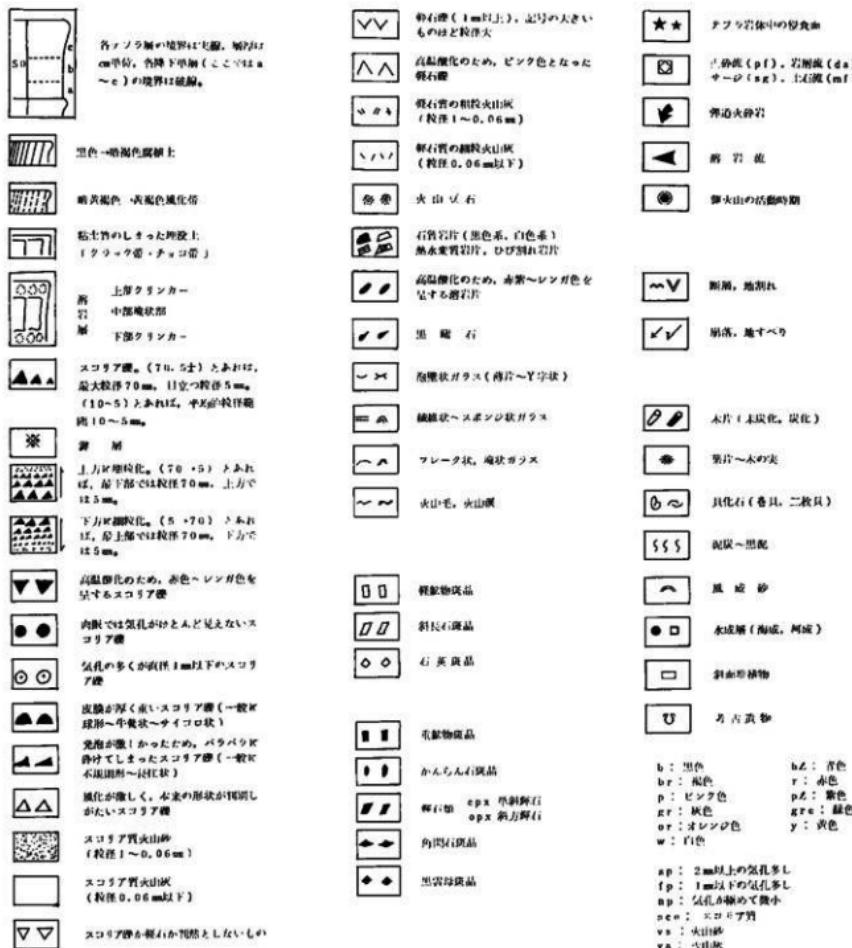




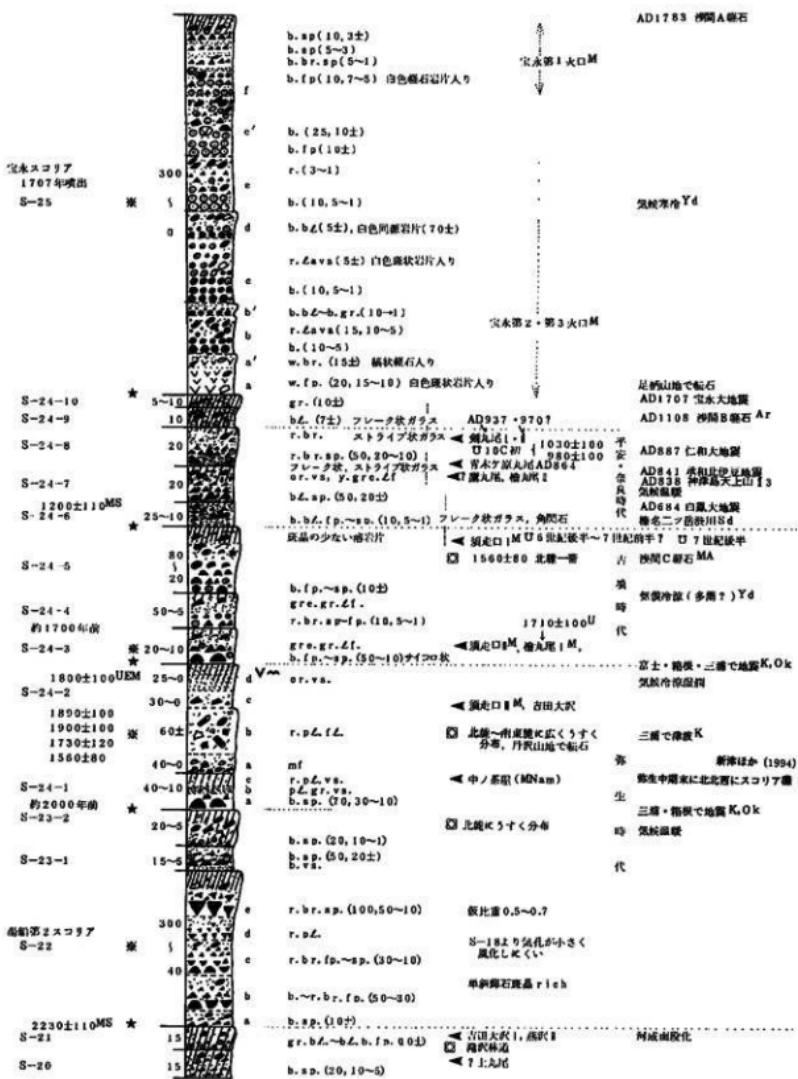
第138図 中谷遺跡標準土層柱状図

富士系テフラ標準柱状図

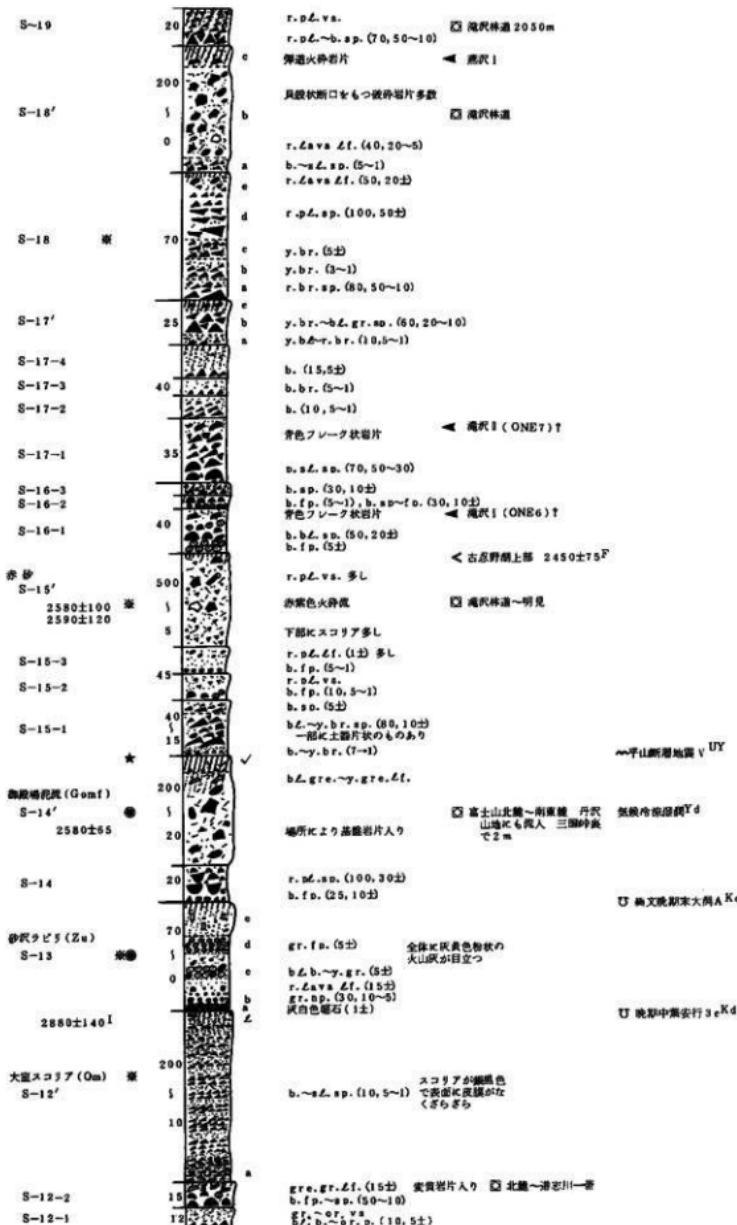
上林(1990)、上林ほか(1987, 1992, 1995)に加筆修正



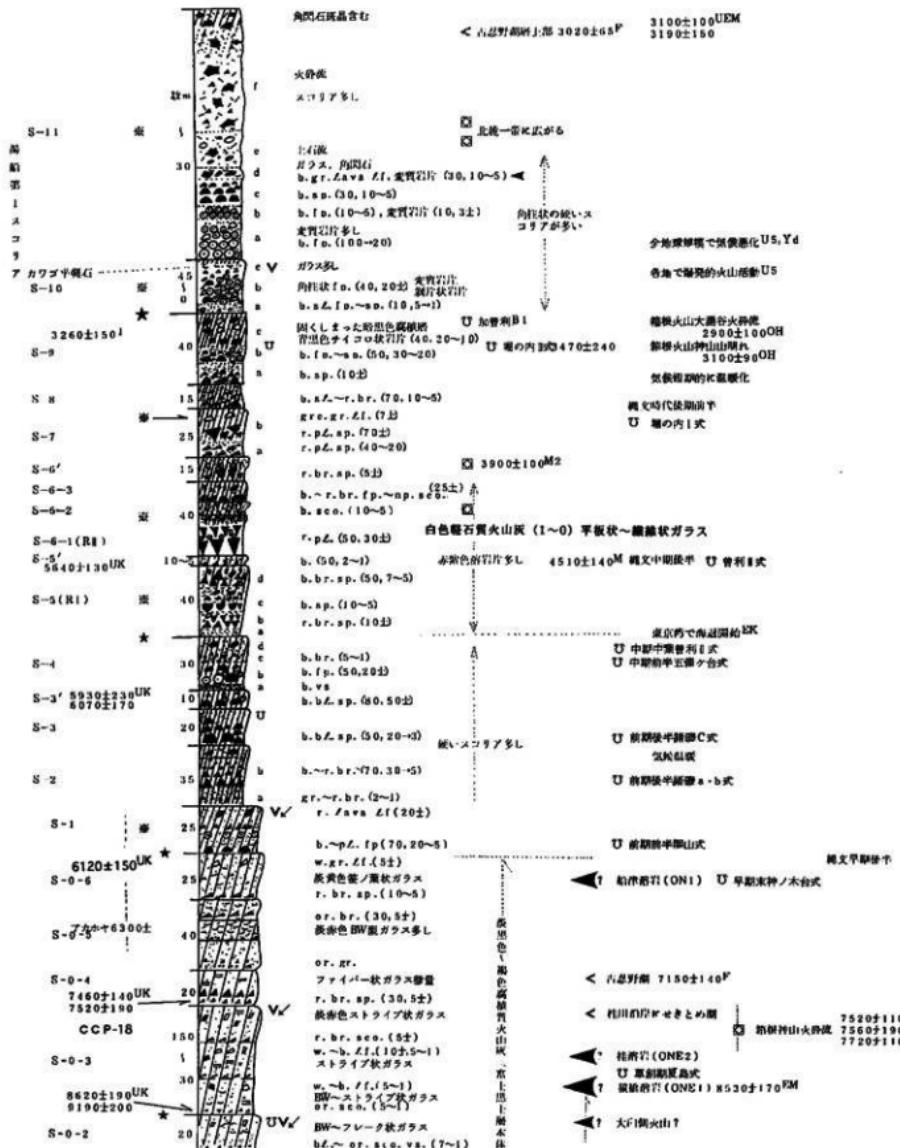
第139-1図 富士山東方地域のテフラ標準柱状図

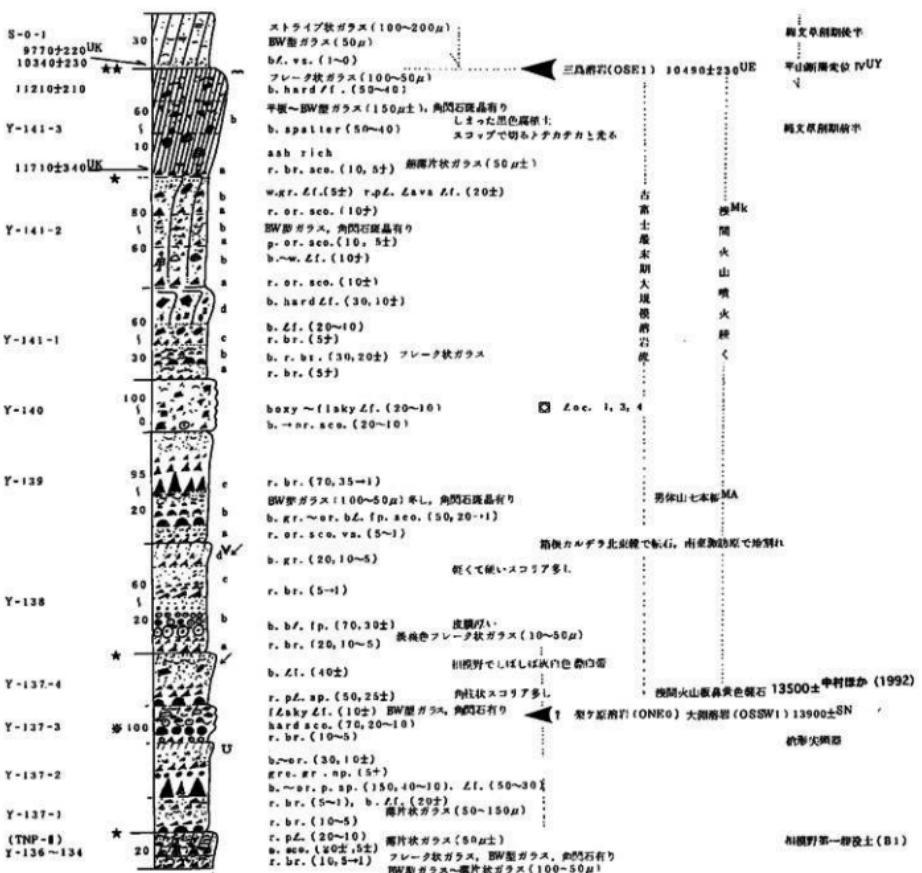


第139-2図



第139-3図





主たる文献

- | | | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|----------------------|-----------------|
| Ar: 新井 (1970) | EK: 渡辺・小杉 (1990) | ZM: 渡辺・村井 (1978) | F: 藤山 (1982) | I3: 一色 (1987) |
| I4: 一色 (1984) | I: 京ほか (1977) | K: 神沢 (1973) | MA: 町田・新井 (1992) | M: 宮地 (1988) |
| M2: 宮地 (1993) | Nk: 中村ほか (1992) | MS: 宮地・鈴木 (1986) | OH: 大木・鈴木 (1975) | Ok: 大木ほか (1985) |
| SN: 板木・中村 (1993) | Sn1: 新川ほか (1992a) | Sn2: 新川ほか (1992b) | Sd: 町田 (1989) | S: 大木ほか (1987) |
| T1: 田沢 (1980) | UE: 上杉・木澤 (1986) | UY: 上杉・木澤 (1987) | UEY: 上杉・上木・由井 (1993) | |
| Yd: 安田 (1990) | U5: 上杉 (1992) | Kd: 近藤 (1993) | | |

第6節 県内における敷石住居跡の分布について

敷石住居跡は、人間が集団で家を造り始めた歴史のなかで、ある時期にのみなされる住居形態で、居住部分や入口部分に平石を配置するというものである。現在、この時期について様々な方向からの論議がなされているが、その要因の一つには、開発などによる発掘件数の増加があげられ、敷石住居跡の調査例や資料が蓄積され、さらに拍車をかけているようである。山梨県内も例外ではなく、ここ数年の調査成果は、北巨摩郡や大月・都留市を中心とする地域にめざましい。今回調査された都留市中谷遺跡は後者に含まれ、10軒の敷石住居が検出されている。発掘調査は2年次にわたり行われ、この2年次目と同年には、大月市大月遺跡でやはり6軒の敷石住居跡が調査されている。この2遺跡の住居跡は時期的に近く、地域的にも八ヶ岳山麓と関東地方との文化圏の接点を論ずるうえで、以前から重要視されていた場所であった。この事を念頭に置きながら、県内確認の敷石住居跡の分布を把握し、時期的な差や地域的特徴がどのように見られるのかなどを示し、中谷遺跡で確認された敷石住居跡について考えてみたいと思う。

現在、県内で敷石住居跡が検出された遺跡は第140図に示したとおりで、33カ所を数える¹⁾。その内訳は、北巨摩地域で13、東山梨地域で2、東八代地域で6、北都留地域で6、南都留地域では6カ所となる。この分布は、発掘が行われた件数の差を考慮に入れても、発見される地域に多少の偏りがみられ、特にそれは、北巨摩地域の高根町から須玉町・明野村にかけてと、南北都留地域での都留市・大月市にかけての範囲に広がると思われる。一覧表に示したとおり、県内全域からみて、一般的な敷石住居跡の存在時期である縄文時代中期末から後期頃までつくられている。しかし、地域によっては継続制が欠けている、例えば、東山梨地域では古宿道の上遺跡で、中期終末の敷石住居跡が確認されて以降、周辺からそれらしい遺構が全く確認されていないし、東八代・西八代地域においても縄文時代後期半ばから後半にいたる間に限定されている。敷石住居跡の発生については、八ヶ岳山麓から次第に関東地域に波及していく事が以前から指摘されているが、山梨県内においては、この分布を見ていく限りそうとも言い切れない。それは、敷石住居跡が発生する縄文時代中期末に八ヶ岳南麓の北巨摩地域ではこれに該当する遺跡が、須玉町郷戸遺跡・明野村屋敷添遺跡と極めて少ない。また、最も古く位置づけられる住居跡には、曾利式土器に伴って加曾利E式土器が出土していることなどが挙げられ、これらが出土する遺跡を見ると、先にあげた牧丘町の古宿道の上遺跡や、東八代地域・都留市や大月市周辺など県東部に集中している事がわかる。このことから、少なくとも、県内における敷石住居跡の発生は、北巨摩地域ではなく南北都留地域にあるのではないかと考える。

以上の県内の傾向から言えば、中谷遺跡の資料は敷石住居跡の発生時を検証するためにも大切なものである。調査の結果、検出された敷石住居跡のうち10軒中8軒までが柄鏡形で、あと2軒は円形である。時期的には曾利V式に属するもの7軒(2. 3. 4. 5. 9. 10. 12)・堀之内I式に属するもの3軒(1. 11. 15)となる。敷石の形態は一律でなく、殆どの住居跡において居住部の壁際に縁石が運らされている。この縁石に沿って奥壁側に敷石を敷きつめるものと、ほぼ前面に敷きつめるものに大別される。全面に敷石を施すものは2軒で、居住部と柄の連結部から炉に向かって放射状に石を配置している。住居跡の柄は、長方形に石を組むものが主体であるが、居住部に比べて柄が小さいものが目立つ。柄鏡形というより帆立貝に近いものもあり、柄の内側やその周辺にも一部に敷石が施される。柱穴は、消失家屋であった1号住居跡と4号・5号・10号住居跡から確認されている。1号住居跡は縁石の間に柱を設置するタイプで、4号住居跡は居住部に主柱穴が5本配置される。5号住居跡は、居住部の外側に柱穴を持つタイプで、10号住居跡は居住部内の壁際に柱穴を持つタイプである。1号住居跡以外は住居跡であるが、柱穴の配置は一様ではなく、多少の時期の差があるのだろうか。住居内施設の埋甕は、山本暉久(1976ほか)によれば、柄の部分の敷石が、埋甕という信仰対象の住居内祭祀として拡大されたものと解釈され、埋甕の存在を重要視しているようであるが、本遺跡で確認された埋甕は2号と9号住居跡の2軒に過ぎない。2号住の埋甕は、柄内側の敷石がない部分からの検出で、9号住は居住部と柄部の連結部に近い場所から見つかっている。炉は、殆どが正方形の石圓いで、熱伝導の良い溶岩を使用している。溶岩は、近くを流

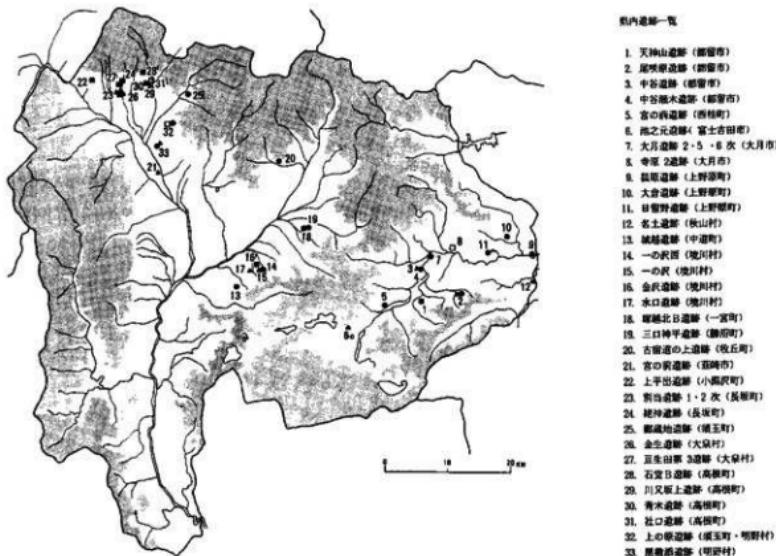
れる桂川の河岸段丘の断崖から容易に採取できたものとおもわれるが、10号住居跡だけは、炉全体に平らな川原石を敷きつめたものであった。以上、様々な形態がみられる内容であるが、更に重要なのは、これらの住居跡から加曾利E IV式に属する土器が曾利V式と一緒に出土していることである¹⁾。今回の調査によって八ヶ岳山麓を中心とする曾利式土器の文化圏と関東地域の加曾利E式土器文化圏が共存することから、以前から問題とされた土器編年による資料を提供することができた。また、2つの文化圏の接点としての地理的な性格を明らかにする必要性もあり、今後、更に周辺の遺跡を再検討する課題が残された。

注1　ここでは、文献で確認できたものと、未報告だが担当者に許可を頂いた遺跡のみを掲載している。

注2　これについては、第4章第7節に詳しいため、そちらを参照。

参考文献

- 村田文夫「柄鏡形住居址考－その後－」『古代文化』11、Vol27、1975 古代学協会
 山本輝久「敷石住居出現のもつ意味」(上・下)『古代文化』2～3、Vol28、1976 古代学協会
 山本輝久「敷石住居」『縄文文化の研究－社会・文化－』8 1982 雄山閣
 山本輝久「敷石住居終焉のもつ意味」(1～4)『古代文化』1～4、Vol39、1987 古代学協会
 赤城高志「縄文時代柄鏡形敷石住居の徹底的分析」「人間・遺跡・遺物－われが考古学論集2－」1992 発掘考古談話会
 石井 寛「縄文後期聚落の後世に関する一試論－関東地方西部域を中心に－」『縄文時代』第5号 1994 縄文時代文化研究会
 横原功一「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告－特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題』第6集 1995 帝京大学山梨文化財研究所
 本橋恵美子「縄文時代の柄鏡形敷石住居の発生について」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告－特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題』第6集 1995 帝京大学山梨文化財研究所
 山本輝久「柄鏡形(敷石)住居成立期の再検討」『古代探査IV－滝口宏先生追悼考古学論集－』1995 早稲田大学出版部



第140図 敷石住居跡検出遺跡位置図

山梨県内敷石住居跡一覧表

番号	追跡名	所在地	遺構番号	形 状	敷石部分	屋内施設			時 期	
						柱穴	炉	埋甕 溝		
1	天神山	都留市法能	1軒	円形	全面	×	石囲い	×	×	
2	尾咲原	旭小学校第2地点	12住	柄輪形	ほぼ全面		石囲い	×	×	加曾利E IV式
		旭小学校第1地点	13住	円形	壁際	×	○	×	×	掘之内I式
		旭小学校第1地点	15住	柄輪形	炉～張り出し部、奥壁	○	石囲い	×	×	"
3	中谷	都留市小形山	1軒		炉周辺		石囲い			中期末？
4	中谷	都留市小形山瀬木	1住	柄輪形	縁石辺と柄部	○	焼土	×	×	掘之内I式
			2住	"	奥壁側と柄部	×	○	○	×	曾利V式
			3住	"	奥壁側と柄部	×	石囲い	×		"
			4住		ほぼ全面	○	石囲い	×		"
			5住	"	柄部	○	石囲い	×		"
			9住	"	炉の南側	×		○		"
			10住	円形	縁石	○	石囲い	×		"
			11住	"	全面	×	石囲い	×		掘之内I式
			12住	柄輪形	ほぼ全面	×	石囲い	×		曾利V式
			15住	柄輪形	部分	×		×		
5	宮の前	西桂町下地	1住	円形	ほぼ全面	×	石囲い	○		曾利IV式
6	池之元	富士吉田市新倉	1軒	柄輪形	炉～柄部	○	石囲い	×		掘之内II式
7	大月(2次)	大月市大月2丁目	1軒		部分	×	石囲い	×		
	大月(5次)	大月市大月2丁目	1住	円形?	部分	×		×		後期
	大月(6次)	大月市大月2丁目	1住	五角形	全面	×	石囲い	○		加曾利E IV式
			2住	柄輪形	ほぼ全面	×	石囲い	○		"
			6住	"	全面	×	石囲い	×		
			10住	"	炉周辺と柄部	×	石囲い	×		
			11住	円形	全面	×	石囲い	○		曾利V
			13住	柄輪形	全面	×	石囲い	×		
8	寺原2	大月市塙町下和田	1軒		部分	×		×		後期掘之内
9	狐原	北都留郡上野原町	1軒	柄輪形	ほぼ全面	×	○	×		中期末
10	大倉	北都留郡上野原町大倉	1住	柄輪形	柄部	×		○		曾利V式+曾利Eの終末
11	日留野	北都留郡上野原町	1軒	円形?	部分					加曾利E IV式
12	名士(旧富岡)	南都留郡秋山村富岡	1軒	柄輪形	全面	×	石囲い	×		掘之内式
13	城越	東八代郡中道町右左口	1軒	円形又は梢円形	部分	×	石囲い	×		加曾利E II式?
14	一の沢西	東八代郡境川村小黒坂	2住	柄輪形	ほぼ全面	×	石囲い	×		掘之内式
15	一の沢	東八代郡境川村小黒坂	1住	柄輪形	奥壁側と柄部	×	石囲い	×		加曾利E IV式
16	金沢	東八代郡境川村小黒坂	2住	"	炉～柄部	○	石囲い	×		掘之内II式
			6住	柄輪?	部分					掘之内II式～加曾利E式
17	水口	東八代郡境川村藤佐	1住	柄輪形	ほぼ全面	×	石囲い	×		掘之内I式
			3住	円形?	部分	×		×		"
18	塙越北B、S-II区	東八代郡一宮町塙越	SB-09	柄円形	中央部	×		×		掘之内式
			SB-10	柄輪形	ほぼ全面	×	○	×		称名寺式
19	三口神平S-II、N-II、N-IV	東山梨郡勝沼町三口神平	SB-55	柄輪形	縁石周辺と柄部	×	石囲い	×		曾利IV
			SB-85	柄輪形	縁石周辺と柄部	×	石囲い	×		曾利IV
			SB-86	部分	部分	×	×	×		中期末

20	古宿道の上	東山梨郡牧丘町西保	1住	円形?		×	石囲い	○?	曾利V式
			2住	柄鏡形	炉 北側と炉～柄部	×	石囲い	×	曾利IV～V式
21	宮の前	甲斐市藤井町	408住	円形	壁際	○			掘之内式
			417住	円形	入り口部	×	方形石囲い	×	掘之内式
			422住	柄鏡形?	部分	○	○	×	掘之内式?
22	上平出	北巨摩郡小瀬沢町	7 J	円形?	炉北側	○	方形石囲い	×	掘之内式～加曾利B式
23	別当（1次）	北巨摩郡長坂町大八田	2住	柄鏡形	炉周辺～柄部	×	方形石囲い	×	掘之内式
			3住	部分	○	○	○	×	
			1住	柄鏡形	炉から柄部	×	石囲い	×	掘之内I式
24	姫神	北巨摩郡大泉村西井出	2住	柄鏡形	ほぼ全面	×	円形石囲い	×	掘之内I式
			1住	円形	ほぼ全面	×	方形石囲い	×	掘之内I式
25	郷聚地	北巨摩郡須玉町比志	5住	円形	部分	○	方形石囲い	×	掘之内I～II
			6住	隅丸方形	入り口部	○	円形石囲い	×	加曾利B I式
26	金生	北巨摩郡大泉村谷戸	7住	隅丸方形	入り口部	○	方形石囲い	×	掘之内II式～加曾利B I式
			8住	隅丸方形	入り口部	○	方形石囲い	×	掘之内II式～加曾利B I式
27	豆生田第3	北巨摩郡大泉村谷戸	9住	柄鏡形	炉前方	○	方形石囲い	×	加曾利B I～II式
			10住	隅丸方形	入り口部	○	方形石囲い	×	掘之内II式
28	石堂B	北巨摩郡高根町東井出	15住	隅丸方形	入り口部	○	○	×	加曾利B I～II式
			1住	柄鏡形	壇割周辺と柄部	○	方形石囲い	×	中期後半～終末
29	川又板上	北巨摩郡高根町箕輪 北巨摩郡高根町村山北割	12住	五角形又は六角形	ほぼ全面	×	方形石囲い	×	後期前半
			32住	円形?	炉周辺	×	長方形石囲い	×	掘之内II式
30	青木		7住	円形?	北半分	○			掘之内II式
			1住	円形?	部分	×	石囲い	×	後期中葉
31	屋敷添	北巨摩郡明野村	7住	円形?	部分	×	石囲い	×	後期中葉
			6住	柄鏡形	部分	○	○	×	後期中葉
32	社口（第3次）	北巨摩郡明野村	1住	長方形	部分敷石	×	円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
			2住			×	円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
33	屋敷添	北巨摩郡明野村	8住	方形	敷石一部残存	×	円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
			9住	方形	部分敷石	×	円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
34	上ノ原	北巨摩郡須玉町明野村	12住	柄鏡形	住居部から柄	×	方形石囲い	×	掘之内式～加曾利B式
			13住	方形?	炉周辺	×	円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
35	7軒		14住	方形		×	希円形石囲い	×	縄文後期中葉～後葉
			1住		柄から住居中央部にかけて	○	石囲い	×	掘之内式?
36	上ノ原	北巨摩郡須玉町明野村	2住			×	石囲い	×	掘之内II式
			3住			×	石囲い	×	後期初頭
37	11住		11住		炉部から張り出し部にかけて	×	石囲い	×	後期初頭～中葉（掘之内式～加曾利B式）
			34住	円形	環状に敷石	×	石囲い	○	中期末（曾利IV～V式）

第7節 曽利V式土器と加曾利E IV式土器について

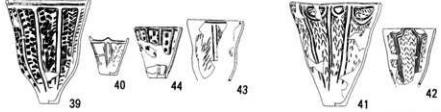
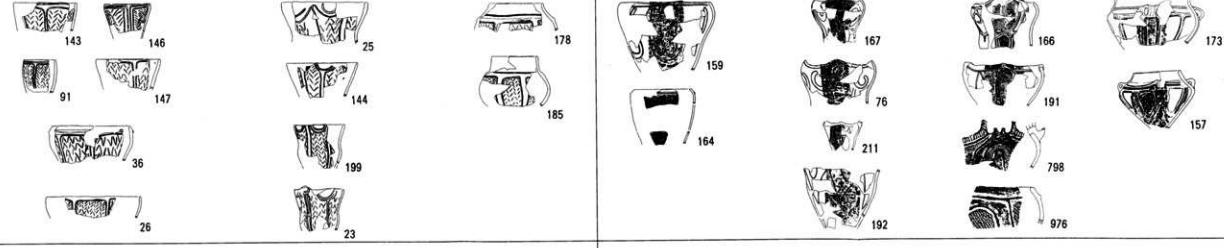
今回の調査では、中期末の土器も多量に出土している。とくに12号住居跡では床面直上及び覆土から非常に多くの土器がまとまって出土した。地理的な状況もあるが、そこでは曾利V式土器が主体でありつつも加曾利E IV式土器も混ざっており、共伴関係を再確認するうえで非常に都合のよい資料となった。また、床面直上と覆土の土器との時間差はなく、住居は極めて短期間に埋没したものと推定され、土器の変遷やバリエーションでの良好な一括資料となり得るものとも考えられる。このような状況はまた、12号土坑や30号土坑でも確認され、それらと遺構外から出土した土器とを比較することによって、さらに資料を豊富なものとすることができる事になる。ここではこのような目的で資料を再度整理することとする。

12号住居跡資料を中心に曾利V式土器と加曾利E IV式土器を対比したものが第141図である。図では左に曾利V式土器、右に加曾利E IV式土器を掲載した。今回出土した資料では曾利V式土器を時期的にさらに細分する資料が多いとは言えないが、これまで確認されている資料を基に変遷について概観する。なお、加曾利E IV式土器を中心とした前後関係については、いまだに混乱がみられ、今回は変遷が概観できるほどの豊富な資料を得てない訳でもない状況から、ここでは古段階および新段階については詳しくは触れない。

曾利V式土器を特徴付ける施文は言うまでもなくハの字である。古段階としたものは4単位の波状口縁であり、通常この時期には平縁となって波状口縁はほとんど見られない。前段階の口縁部文様帶を有する一群には4単位の突起がつくものがしばしばあり、それらの名残として波状口縁となったものと考える。また、もう1点はX字状把手を有する深鉢である。この種の土器は井戸尻Ⅲ式期以降出現し、曾利V式期まで存在するが、これまで確認されたもので曾利V式後半段階に位置付けられるものではなく、一連の流れからも古段階への位置付けが妥当であろう。なお、他遺跡の例では区画内にさらに蛇行する懸垂文が施文されるものがあるが、今回の調査ではその一群は全く確認されていない。

中段階は、12号住居跡の資料のほとんどがこれに属する。12号住居跡は前述したように床面直上と覆土出土との時間差はない。覆土資料中に明らかに時期的違うものも確認されてはいるが、その量はごくわずかである。本図に用いた曾利V式・加曾利E IV式はすべて同時期の所産と考えられるものである。曾利V式土器は、深鉢では区画系と口縁部弧線系があり、壺も存在する。加曾利E IV式土器では微隆起線系と弧状沈線（平縁）系および鉢が存在する。12号土坑からは曾利V式の区画系に伴い、加曾利E IV式土器の弧状沈線（平縁）系と鉢、さらに12号住居跡には確認されなかった弧状沈線（波状口縁）系が出土した。30号土坑からは、やはり曾利V式区画系に伴って加曾利E IV式土器の弧状沈線（平縁）系と鉢が出土した。このうちの弧状沈線（平縁）系の1点は弧線ではなく円形区画となり区画内には縦方向の沈線が施文されるもので加曾利E IVの範疇には入らないかも知れないが、文様の類似性からここへの位置付けとしておく。その他とした資料は、他の遺構及びグリッドから出土したもので伴出資料はないものの、系統毎に同一施文の土器を挙げたものである。曾利V式の壺・鉢のうち、12号住居跡のものは炉内からの出土であり、時期的には問題ない。しかし体部の文様はハの字ではなく平行沈線である。これまでの他の例からは、一段階古く位置付けられるものと考えていたが、今回の確認により曾利V式中段階への位置付けがはっきりした。もちろん、体部にハの字を有する鉢や壺の存在も確認されたが、これらはこれまでも確認例の少ないものである。加曾利E IV式は施文が弧線や渦巻きとなるが、その表出方法は陸帯と沈線とに分かれ、沈線系統はさらに口縁部の形状が平縁と波状口縁とで明確に分かれる。平縁のモチーフはU字状や渦巻きが単独の単位として表現されるものが多く、波状ではそれらの連続や別のモチーフを加えての連結が生となるようである。なお、弧線ではなく山形施文や木の葉状施文なども後者の主要モチーフとなっている。

新段階の資料は非常に少ない。曾利V式土器の流れからすれば、区画系・口縁部弧線系とともに、その特徴が崩れることやハの字そのものの崩れなどが最終的な位置付けとして予想されるが、これに相当する資料は2点のみであった。区画系では区画線そのものが略され、ハの字も崩れ条線となっている。口縁部弧線系は、もともと口縁部の半円形の区画であったものが崩れ、下部の懸垂文と連結してY字状になったものである。ハの字も細線化

		曾利V式			加曾利E IV式			
		区画系	口縁部弧線系	壺・鉢	弧状沈線(平縁)系	弧状沈線(波状口縁)系	微隆起線系	
古					140			
12号住居跡	床直						53	
	覆土							54
	12号土坑							301
30号土坑								338
	その他							
新								

第141図 曾利V式・加曾利E VI式 対比図

し崩れている。ただ、この資料が最終末段階に位置付けられるか、さらに崩れが進行しY字もなくなり条線化するのかは定かではない。

以上、今回出土した中期末資料を曾利V式と加曾利E IV式それぞれの系統毎に整理してみた。今回の確認では遺構からの出土土器の主体は曾利式であるが、加曾利E IV式土器の出土量が予想以上に多く、感覚としては五分五分ではないかと思われるほどである。山梨県は、言うまでもなく曾利式土器分布圏の中心地域であるが、本遺跡の所在する東部地域と八ヶ岳山麓～甲府盆地とでは状況が明らかに違い、あらためて当地域が曾利式文化圏と加曾利E式文化圏との接点であることを実感することとなった。

参考文献

- 末木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4 P 84～P 92 雄山閣
末木 健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』3 P 271～278 小学館
米田明訓 1986 「中期後半の土器の諸問題」『柳坪遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集
P 147～P 152 山梨県教育委員会
鈴木保彦・山本暉久 1988 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観』2 P 325～P 329 小学館

第8節 堀之内I式土器について

今回の調査では1号住居跡、5号住居跡、第2遺物集中区、土坑などから非常に多くの堀之内式土器が出土し、しかもその多くが堀之内I式土器であった。これまで山梨県内でこの時期の資料がこれ程まとまって出土した事例はなく、また、時期的な変遷についても触れられることもなかった。遺構内出土の資料を中心に、今回出土した資料を整理してみたい。

1号住居跡は最もまとまった堀之内I式土器を出土している。その上部に形成された第2遺物集中区もまた資料が豊富である。器種では、深鉢・浅鉢・注口土器の3種類が出土しているが、浅鉢はいずれも破片であり、また変遷が確認できるほどの量もないことから割愛する。

堀之内I式土器の変遷は、我孫子昭二・石井寛をはじめとする諸氏によって編年案が示され、活発な論議が成されてきた。そんな中で、中部地方でもありまた関東地方西部ともいえる本県ではまとまった資料がなかったために、堀之内式土器については全く不明なままであった。

今回の資料提示に当たっては、本遺跡とは地理的にも近いこともあり、神奈川県を含む関東地方西部という状況で資料の系列化や変遷を明らかにしてきた石井の変遷線を参考に変遷図を作成することとする。石井は、1982年の「シンボジウム堀之内式土器」以降堀之内II式の変遷を追い、一方で称名寺式土器の分類・変遷を行うことにより、その間に存在する堀之内I式土器の範囲を限定してきている。そして、1993年に神奈川県華蔵台南遺跡と牛ヶ谷遺跡から豊富に出土した堀之内I式土器を中心に細分を行った。そこでは関東地方西部を中心とする称名寺式系統の「下北原式」を主眼において編年が示されており、隣接地である山梨県東部地域に所在する本遺跡の分類には好都合である。

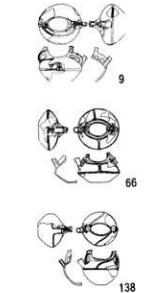
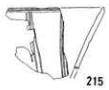
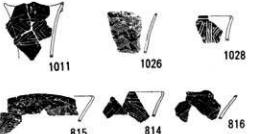
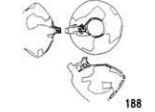
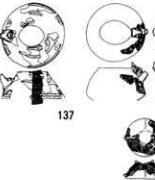
さて、本遺跡出土の深鉢は、器形及び文様により6分類でき、第142図にその変遷を示した。A類（下北原系列）、B類（懸垂文とそれを連結する斜行文系列）、C類（列点文系列）、D類（脣部文様帶系列）、E類（横帯文系列）、F類（朝顔形系列）である。注口土器は一括する。これらの中でも今回確認された資料ではA類・D類・F類が豊富である。

A類は称名寺式以来の伝統を残すもので器形もキャリバー形を保持し続ける。沈線によるモチーフが古段階ほどJ字状にちかく、それが簡略化され懸垂文化していく傾向がみられる。今回復元できた古段階資料は、1点だけであるが、沈線間に列点が施文されている。なお、モチーフははっきりしないものの同様の施文が行われているものを同時期と見なした。中段階ではJ字モチーフは崩れ、懸垂文と流水文からなる。この流水文は上下二段に施文される。上段は逆N字形に左上から右下に描かれ、下段は逆U字状のモチーフとなる。なお、これが一層簡略化され、U字と逆U字及び両側の懸垂文の組み合わせにより全体としてH字のモチーフとなるものも存在するが、今回の調査では確認されていない。新段階は懸垂文の間隔が広くなったり、懸垂文間の流水文が省略されるなどの傾向があるが、それらも今回の調査では確認されなかった。

B類はA類に極めてちかいもので流水文を斜行文に置き換えたものである。今回の調査では破片ばかりであり、全体の文様構成等ははっきりしない部分もあるが、全体の流れでみると、文様に列点を用いるものや沈線のモチーフがJ字にちかいものなどが古く、中段階では口縁部の列点はなくなり懸垂文と斜行文のみの組み合わせとなる。新段階では斜行文が省略され懸垂文のみとなるため、A類と見分けがつかない。

C類は石井の分類には存在しなかったが、平行沈線と列点の土器が存在したため、これだけを分類した。A類・B類の状況からもこの土器は古く位置付けられ、傾向とすればやがて列点が消失し、懸垂文となっていくことが予想される。

D類は口縁部は無文帶となり主文様は脣部に集中するものである。この一群は器形にも特徴があり、キャリバーにちかいものから下膨れの鉢にちかいものまで変化が大きい。しかし、典型的ということになれば187や194などの丸い脣部の器形を挙げることになろう。さて、その変遷であるが、古段階資料は称名寺式からの連続のなかで、J字やその変形である単純な渦巻きなどが施文されることになるが、その典型的な資料は今回確認できなかった。

	A類（下北原系列）	B類（斜行文系列）	C類（列点文系列）	D類（胸部文様帶系列）	E類（横帶文系列）	F類（朝顔形系列）	注口・蓋
古	 78	 122	 294	 809			 175 174
堀之内 I	 214	 216	 808		 1 7	 80	 2 133 134 9 66 138
新		 215		 205		 1011 1026 1028 815 814 816	 188
堀之内 II				 130		 1017 1018 1013 770 1019 771 772	 137 15 136

第142図 堀之内 I式土器変遷図

中段階として、文様の起点に弧線や渦巻きを置き、その両側に懸垂文や斜行文を配するものを挙げておく。なお、187の位置付けは類例が少なく難しいが、起点から左右対称形に弧線や渦巻きを配し、その外側には斜行文、渦巻き、三角文などを施している。特に斜行文は先端がカーブしており、J字の変形と考えられなくもない。そうなると古い様相と言えないこともないが、起点部分の8の字貼付の状況は他の中段階資料と同じであり、ここへの位置付けとしておきたい。213もこれと同様のモチーフであるが、全体に文様が簡略化され、人体モチーフを見なすことができる。新段階は、起点部分の弧線や渦巻きの崩れを基準としたい。また、この種類は、段階が新しくなるにつれ、施文される沈線が細くなる傾向もあるようであるが、資料が少なく定かではない。さらに、これらは口縁部の開きが強く、口径に対し器高も低くなり鉢形がはっきりしてくる。

E類は1点だけの確認である。伴出資料にも愈まれないため位置付けは難しいが、中段階としておきたい。

F類は、古段階資料はごく稀だとされており、今回確認されたものも中段階以降へ位置付ける。中段階では胸部を縦方向の隆帯で区画し、胸部下半に一周させた同様の隆帯で下限を決定する。その区画内を、さらに弧線や斜線で区分けし繩文を施文したものである。これらの一組は1号住居跡内で中段階のA類と伴出していることから、ここへの位置付けとした。新段階では隆帯による区画はなされなくなる。また、多段の三角や菱形モチーフが施文され、区画帯は繩文や沈線で充填される。これらが簡略化され、II式へと統一していくのであろう。

注口土器は、今回7点が復元でき、蓋も時期の判断できるもの2点が確認された。古段階に位置付けられるものは1点だけで、紐掛け用の溝を有する下膨れの蓋形注口土器である。文様構成は正面と裏側の2単位からなる。注口部直下には弧線に連なってJ字の崩れと思われる渦巻きが施文されている。それを中心として渦巻きや斜線を配置したもので、裏側も同様の施文となる。これに密着して出土した蓋も同時期となる。中段階は1号住居跡の資料を含む一群で、口縁部から直もしくは斜行垂下する隆帯が胸部を一周する隆帯と連結し胸部下半分は無文帯となるものである。これはF群の中段階資料と同様の構成である。なお、この一群は口縁部が正円でなく、極端な椭円形となる。新段階には、上記の中段階との関連から隆帯の消失したものを位置付けたい。帯繩文や多重沈線による施文のもの（蓋を含む）をここではII式としておくが、口縁部の把手と注口部は連結されており、やや古い様相を示すものかもしれない。

以上、今回確認された堀之内I式土器を中心に、分類・変遷を追ってみた。前述したように、これらは中部高地というより関東地方西部地域というエリアで資料をまとめた石井の視点に沿ったものである。本県でこの時期の資料がまとめて提示できたのは初めてのことであり、甲府盆地や八ヶ岳山麓の資料との比較は全くできていない状況である。今後、これらの地域の資料化が進み、比較ができる初めて関東と中部を結ぶ地域的特色を明らかにできるものと考えられる。曲がりなりにも一応の資料提示ができたことで、その足掛かりとなれば幸いである。

参考文献

- 我孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『繩文土器大成3-後期』 P 144~152 講談社
石井 寛 1993 「堀之内I式土器群に関する問題」「牛ケ谷遺跡・華藏台南遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIV P 271~P 289 横浜市ふるさと歴史財団
1995 「原出口遺跡20号住居跡出土土器群をめぐって」「川和向原遺跡・原出口遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIV P 327~P 364 横浜市ふるさと歴史財団
西田 泰民 1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『繩文土器大観』4 P 281~P 286 小学館

第9節 清水天王山式土器について

第3章第7節で述べたように、第1遺物集中区を中心に非常に多くの清水天王山式土器及びそれに併行する土器が出土した。ここではそれらの資料を検討し、清水天王山式土器の変遷や時間的位置づけなどについて触れてみることとする。

これまで清水天王山式土器については小野正文¹⁰、戸田哲也¹¹、奈良泰史¹²らにより、その変遷や編年的位置づけなどが論じられてきた。そして資料として中核になったものの一つが1964年・1972年・1979年と3回にわたって調査されてきた本遺跡の資料であった。とくに1979年の調査では県内でも初めてこの時期の住居跡が発掘され、それまでの基準となっていた清水市天王山遺跡の層位学的・形式学的資料に加え、確実に伴出した一括資料が提示できたことが進展の大きな要因であったと考えられる。

さて、小野、奈良等は具体的な編年案を提示しつつ変遷や時間的位置付けについて何處かの考察を行い詳細に検討している。これまでに提示された具体的な事例では3ないし4段階の変遷となっている。この変遷とは対弧状沈線・入組文・三叉文・胸部綾杉文などの所要素の移り変わりを意味する。小野は数度の考察の結果、最終的に4段階の設定を行い、第1段階は対弧状沈線とその間隙に施される平行線・円文・巴文などと綾杉文からなるとした。この段階は大洞B式に併行する。第2段階は間隙の巴文が入組文となり、文様が重疊化する段階とする。小野はこの段階の入組文化に鍵の手文土器との関連性を考えている。第3段階はその入組文が三叉文化した段階をいい、第2段階と併せて大洞BC式に併行させる。そしてこの時期に中腹式や鍵の手文（雷文）が伴うとする。第4段階は入組三叉文の間隙にさらに三叉文が加わる段階で、大洞C式に併行させている。戸田は当初の小野の編年案に批判を加え大きく2段階の変遷があるとした。奈良は土器の形態と文様帶の構成から7型式を設定した。それらは刻み目凸帯の有無による二つの系列に分かれ、おおきく3段階の変遷を示すとした。奈良は、入組文の系譜を東北地方の入組帶状文に求めた。第1段階は口縁部文様帶に横円文や左下がり入組文が施される段階とし、安行3a式に併行させた。第2段階は入組文が三叉化する段階で、この段階では入組文は右下がりで施文された。この段階を安行3b式期に併行させている。第3段階は入組文や入組三叉文が2段に施文され、それも山形に配置される段階とし、安行3c式期に併行させている。

以上のように各の段階設定の内容にはズレが生じている。例えば入組文の形成について、中部地方や北陸地方の影響なのか、あるいは東北地方の影響なのか、第1段階に入組文の存在を認めるかどうか、さらには三叉文化をどの段階とするか、などの点である。しかし、時期的な位置づけでは安行3a式～安行3c式・大洞B式～大洞C式に位置付けられることは共通認識としてあり、それぞれの第1段階が安行3a式・大洞B式に、小野第4段階および奈良第3段階が安行3c式・大洞C式に対比されている。その中間を安行3b式・大洞BC式としている。

今回の調査では1万点以上の破片が集中して出土したが、それらは層位的に分けられる状況ではなく、一括資料として極めて短期間に廃棄された状況を示している。ただし、廃棄の時期については土器破片の「乗合関係」を検討すれば、より詳細な廃棄時の状況も明らかになるだろうが、すべてを微細図化した訳ではなく、また十分な時間もないため、機会をみて再度検討することとし、今回はその方法は用いない。ここではあくまで入組文や三叉文の発達状況を主眼に資料分類を行ってみる。分類は以下の注意点に基づいて行うこととする。

第1点として、普遍的にみられる資料では、小野の第1段階とした対弧状沈線とその間隙に施される平行線・円文・巴文などの資料がほとんどないことから、これをどのように考えるか、という点である。

第2点は、対弧状沈線の崩れる状況と入組文の二段化、さらには胸部の主文様である綾杉文の簡略化などを大きな流れとして認識することである。

第3点は、入組文が三叉文化する前に、その萌芽的段階ともいいうべき一群が存在するのかどうか、その抽出の問題である。

以上の3点を主眼に作成したものが第143図である。刻み目凸帯の有無により二系統に分かれるのは、奈良の

指摘どおりである。今回の提示資料では刻み目凸帯を有する「中層a類系列」には変遷を十分検討できる資料が少ないので、凸帯のない「下層b類系列」は3段階すべてが存在するため、これを中心に時期区分を行う。

I期 弧線文段階。

II期 対弧状沈線とその間隙に施される入組文段階。

入組文は1段だけの施文であり、この主文様下は綾杉文となるが、今回の資料では入組文はすべて右下りである。503についてはIV期と一緒に説明する。

III期 対弧状沈線が崩れ、入組文の施文も二段化していく段階。

対弧状沈線は前段階のようなはっきりした形にならざり、入組文は二段施文される。この段階では入組文には左下がり、右下がりの両方がある。

IV期 三叉文直前段階。

入組文または弧線の一端が隣の入組の巴部分に接した一群がある。これらはその部分だけをみれば三叉文と見間違えるものであり、三叉文形成の直前段階とすることができる。この群は、II期に示した入組文が1段で対弧状沈線が崩れていない段階に既に存在するが、資料が多くなるのはこの段階である。入組文は2段にわたって施文され、入組自体はやはり左下がり、右下りの両者が認められる。

V期 入組文が三叉化する段階。

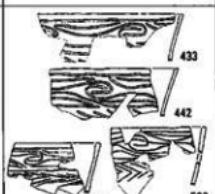
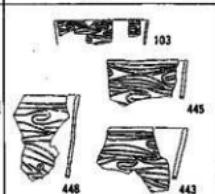
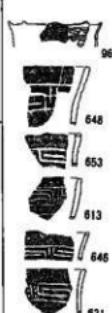
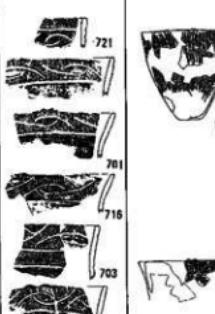
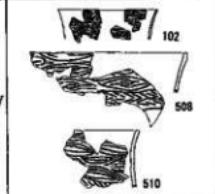
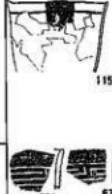
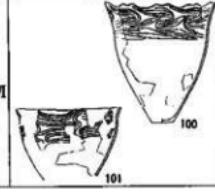
入組文は2段施文され、綾杉は施文されるものとされないものとがある。

VI期 入組文消失段階。

復元された2点は入組文ではなく、弧線の間隙に流水状沈線が施されている。胸部の綾杉も省略されており、新しい要素と判断した。

以上6期に分類したが、前述したように今回の資料は層位的あるいは住居内資料とは違うため、独自に併行關係を提示できない弱点がある。したがって、これまでに提示された資料に対比させるよりほかに時期的位置付けができない。I期としたものは、これまでの小野・奈良の編年の第1段階に相当し、安行3a式・大洞B式併行に位置付けられよう。しかし、内容は極めて貧弱でわずか1点が提示できただけに過ぎない。II期は小野・奈良の編年に従えば第2段階に相当されることになり、安行3b式・大洞BC式併行という時間的・位置付けとなろう。III期は小野の第2段階、奈良においては第3段階となる。IV期は、これまでの小野・奈良編年では段階設定の対象にすらなっていない。V期は小野・奈良の第3段階に相当する。VI期は小野・奈良の編年段階ではまだはっきりした資料がなかったものと思われ両者ともに触れていない。

小野・奈良の編年に対比されれば以上になるが、ここで問題となるのが、II期の位置付けである。これを安行3b式・大洞BC式併行とすると、1万点を過かに超える数の破片が出土しているながら、今回の調査資料中に清水天王山式の古い部分が全くといってよいほど存在しないということになる。第3章第7節で述べたように、第1遺物集中区は後期の遺物も若干みられ、その中には奈良が重要視している新地式類似の資料も交ざっており、遺物集中区の形成は後期にまで遡る可能性もあり、清水天王山の各時期を通じて形成され続けたと考えられる。また、奈良の調査地点と今回の調査地点とは近接しており、しかも清水天王山式の集落構成員による祭祀地点が第1遺物集中区であると考えられることなどから、古段階資料がこのなかでただ1点だけという状況は不自然と考えざるを得ない。その意味からは、今回提示した資料中に古段階資料の存在を認めたのである。その考え方から、対弧状沈線が崩れていない状況を重視して、II期も安行3a式・大洞B式併行期に位置付けることとした。奈良の指摘するような左下がり入組文から右下りへの転換が大きな意味をもつという考え方の前提は、古い入組三叉文が右下りであるものがほとんどで、入組三叉文登場と同じ時期に右下りに転化したというものであるが、なぜ、入組三叉文と同時に転化されなければならないのであろうか。言い換れば入組三叉文出現以前に右下り入組文は存在しないと断言できるのであろうか。今回の提示資料中にも、明らかに新しい要素である二段化した入組文段階(III期)にも、右下がり左下がりの両者が存在する。一方でこのことは奈良の指摘した古段階資料にも様々なバリエーションが存在するという考え方を一層拡大することになる。ただ、現状では対弧状沈

	清水天王山式		置の手	佐野	中里	その他
	下層b類	中層a類				
I 安行 3a ・大洞 B						
II						
III 安行 3b ・大洞 Bc						
IV						
V 安行 3c ・大洞 C						
VI						

第143図 清水天王山式土器変遷図

線の存在をそこまで重視する根拠がないこともまた事実である。小野・奈良ともに今回のII期を安行3b式・大洞BC式併行としてきた訳であるが、上述したような不自然さに基にした“問い合わせ”の意味を含めて安行3a式・大洞B式併行期への位置付けを提起したい。

Ⅲ期は入組文の二段構成化期、そしてⅣ期は入組文の三叉文化直前段階であり、ここを安行3b式・大洞BC式併行とした。奈良によれば、清水天王山式土器の三叉文は入組文に三角形の陰刻を連結させて形成されたとするが、今回の提示資料で、まさに入組文の変化により生じたものであることが明らかにされたといえよう。V期は一連の変遷の中で最大の画期である三叉文化段階であり、VI期の入組文や綾杉文消失段階までも含めて安行3c式・大洞C式併行期に位置付けたい。この三叉文段階では入組文の一部が三叉化するものと、独立した三叉文が入組文の脇あるいは無文部分に施されるものの二種類がみられるが、今回の調査資料では圧倒的に前者が多い。前述したように、層位的な裏付けがあるわけではなく、あくまで文様の変遷からみた位置付けであり、とんでもない思い違いだと叱責されるかもしれないが、今回出土した大量の資料を整理し、感ずるところを述べてみた。

さて、清水天王山式土器に伴い出土した資料も非常に多い。

なかでも鍵の手文（雷文）土器は量が多い。これらの一派は磨きや胎土など清水天王山式土器と同じであり、文様からは明らかに全く別種であるが、量的な部分からは清水天王山式土器の製作・使用集団と極めて友好あるいは近縁な集団がこれをもたらしたと想定できる。極端な言い方をすれば清水天王山式土器製作集団がこれらも製作していたのでは、とさえ思われるほどの量である。文様は口縁部文様帯のみで、口縁部直下から縄文帯→鍵の手文帯→縄文帯の構成が一般的であるが、鍵の手文帯下の縄文帯が略されたり、さらに鍵の手文帯さえも略されるものもある。鍵の手文にも様々なバリエーションがある。鍵の手が左下がりに入り組むものと右下がりに入り組むもの、二条の沈線がクランクとなって入り組まないものの3種類が認められる。入り組むものでは左下がりが多いようである。さらにこれらは列点の有無、沈線の太さなどでの細分も可能であろう。しかし、これらのバリエーションが時間差を示すかどうかについての検討材料はない。図では時期に関係なく左下がり・クランク・右下がりの順で配置した。

佐野I式の破片も數点確認されている。これらは大洞BC式～大洞C式にかけての時期に位置付けが一般的であることからそこへの配置とした。また、中屋式類似資料も意外に多い。これも北陸地方の編年では大洞BC式～大洞C式にかけての時期におかれている。なお、網目状撚糸文や条痕文は編年的位置付けが明確でなく、120は安行3式系統ではあろうが、晩期のどの時期におくのがよいのか不明であり、これらは一括して時期を限定する事なく配置した。

合計で1万点をはるかに超える資料が出土しているながら、今回の提示した第1遺物集中区には、はっきりした安行、大洞等の諸型式が存在しないことが特徴である。一方で清水天王山式土器の後半段階には、長野・北陸方面の土器が目に付くようになる。清水天王山式土器は周辺地域からの影響を受けつつ変化していくのであるが、入組文・入組三叉文・弧線文・綾杉文などの、見事なまでの規則性は非常に強い意志のもとに保持し続けられ、晩期前半の一つのエリアまで作っていたものと理解される。そしてその中心地域のひとつが、山梨県東部地域であったことをあらためて認識させられる。

註

- (1) 小野 正文 1977 「清水天王山式土器について」『丘陵』1-3.4 P13～P23 甲斐丘陵考古学研究会
1986 「再び清水天王山式土器について」『山梨考古学論集Ⅰ』 P165～P177 山梨県考古学協会
- (2) 戸田 哲也 1980 「清水天王山式土器と晩期縄文土器の形成」『丘陵』8 P1～P13 甲斐丘陵考古学研究会
- (3) 奈良 泰史 1981 『中谷・宮脇遺跡』 都留市教育委員会
1986 「清水天王山式土器の基礎的研究」『山梨考古学論集Ⅰ』 P139～P163 山梨考古

学協会

1989 「清水天王山式土器形成期の様相」『山梨考古学論集Ⅱ』 P 223～P 243 山梨考古
学協会

参考文献

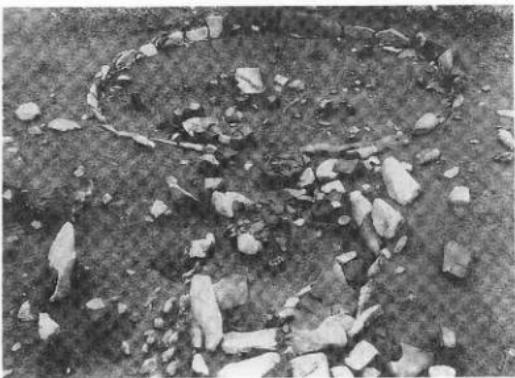
- 市原 寿文他 1960 「清水天王山遺跡」 清水市郷土研究会
- 小野正文・奈良泰史 1989 「清水天王山式土器様式」『縄文土器大観』4 P 334～P 337 小学館
- 能登 健 1989 「晚期安行・前浦式土器様式」『縄文土器大観』4 P 329～P 333 小学館
- 南 和久 1989 「北陸晚期土器様式」『縄文土器大観』4 P 334～P 337 小学館
- 永峯 光一 1981 「中部・北陸地方」『縄文土器大成 4 晚期』 P 150～P 154 講談社

図 版

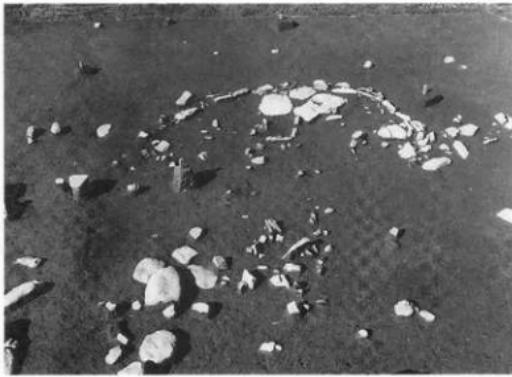
図版 1 上・下 調査前遺跡近景 下 1号住居跡



図版 2
1号住居跡



圖版 3 上・中 2号住居跡 下 3号住居跡



図版4 上 3号住居跡 中・下 4号住居跡



図版5
4号住居跡



図版 6 上・中 5号住居跡 下 6号・7号住居跡



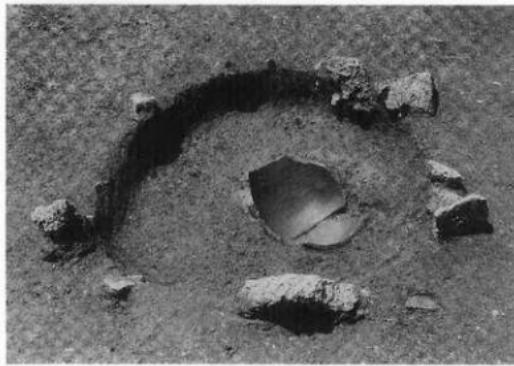
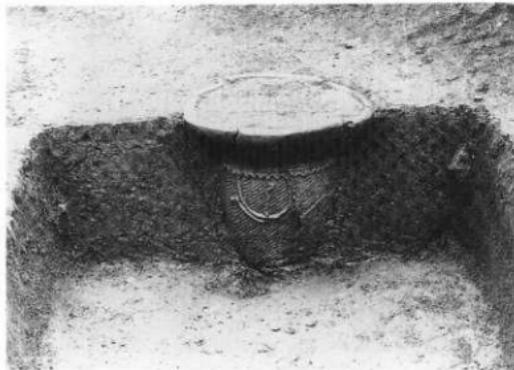
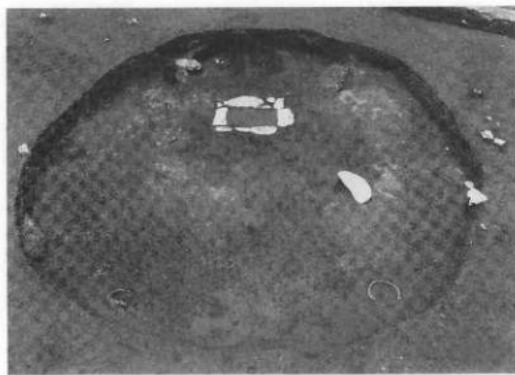
図版 7 上 6号・7号住居跡 中・下 10号住居跡



図版 8
上・中 11号住居跡 下 12号住居跡







圖版 11
上 24・26號土坑 中・下 1號集石土坑



圖版 12
上 2號集石土坑 中 3號集石土坑 下 5號集石土坑



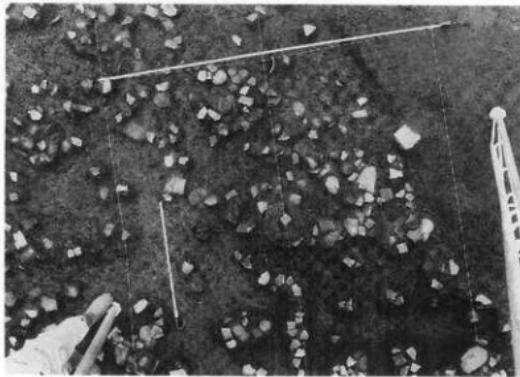
図版 13 上 7号・8号集石土坑 中 9号集石土坑 下 1号・2号配石と背景の自然礫



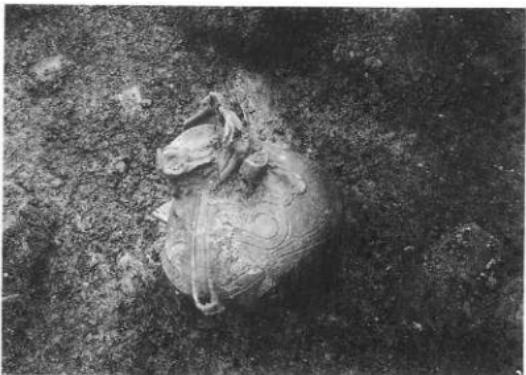
図版 14
4号門(右)

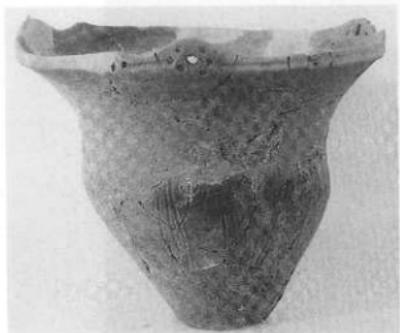


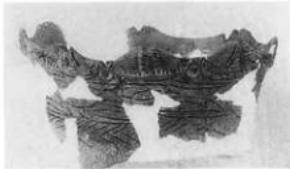


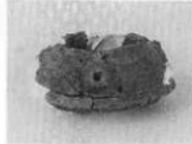
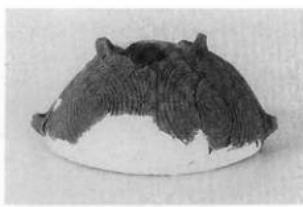
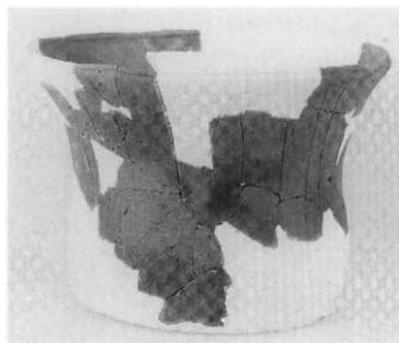
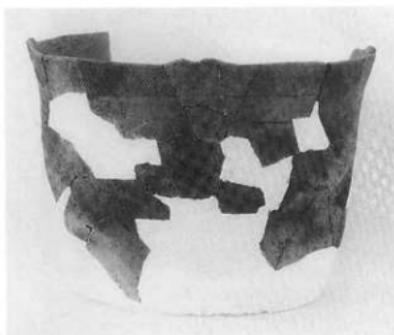


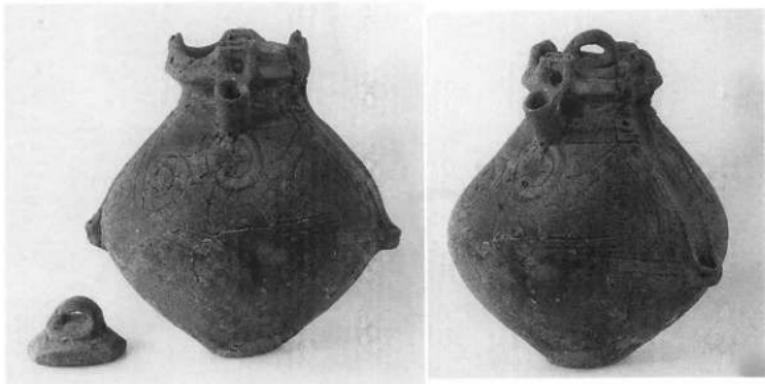
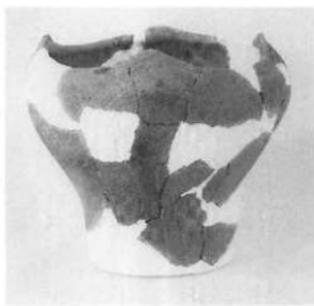
圖版 17
第3遺物集中区注口土器出土状况



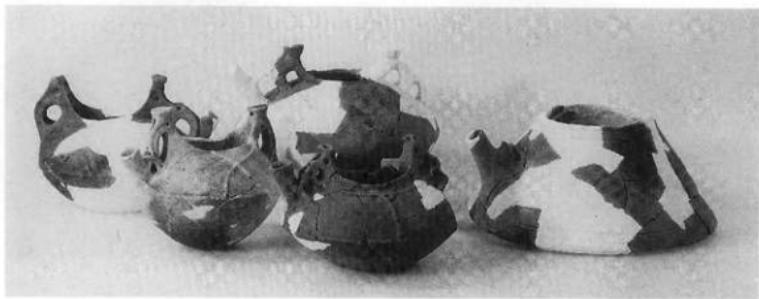
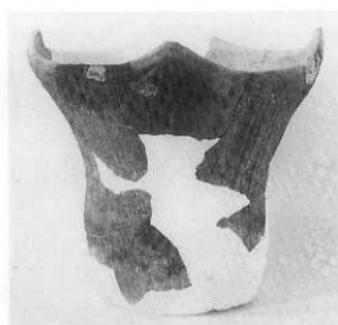


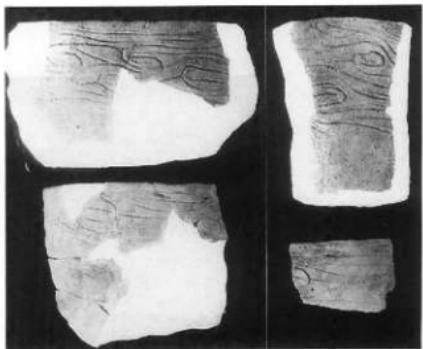
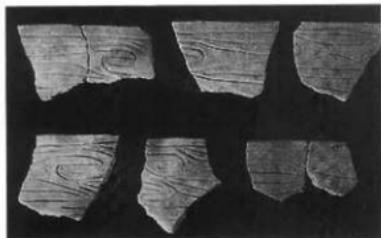
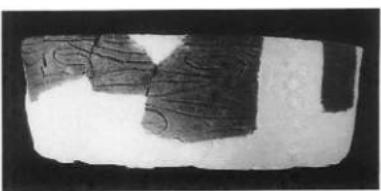




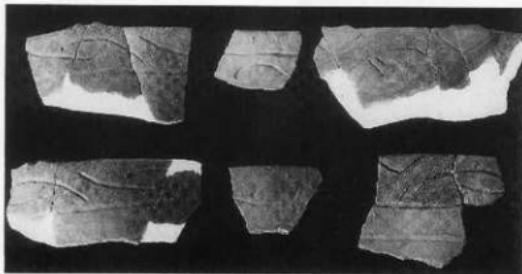
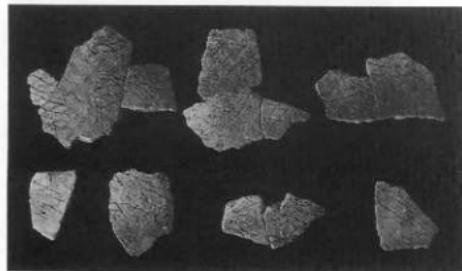
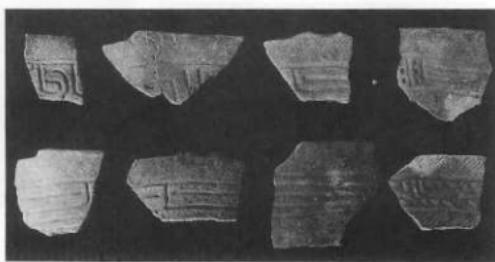
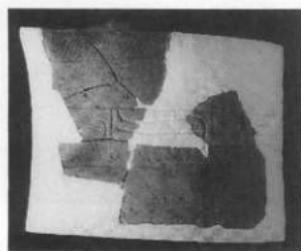
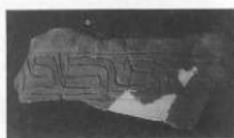
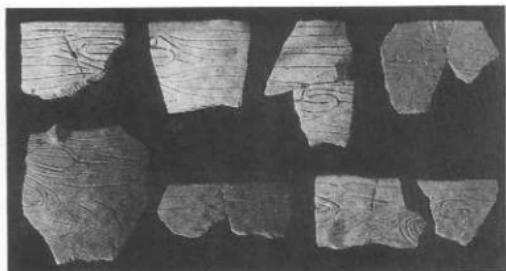


図版22
土器（4集中・グリッド・注口土器集合）

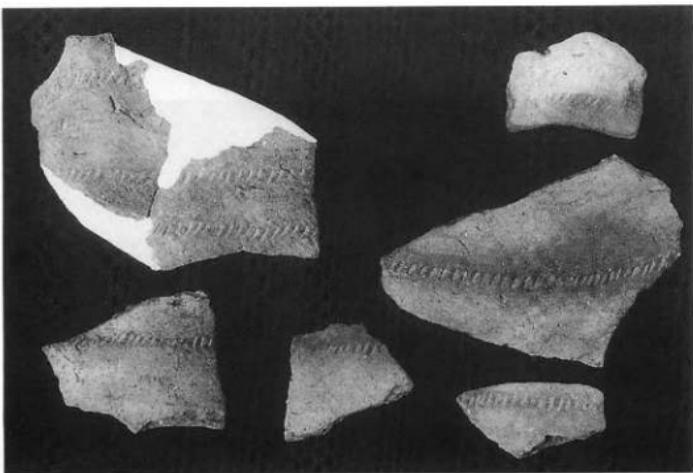
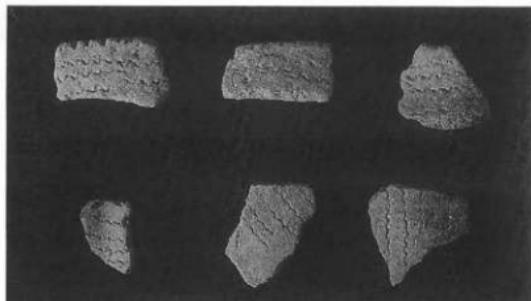
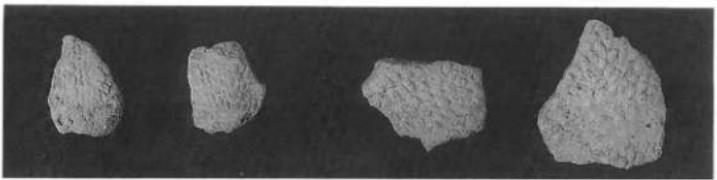
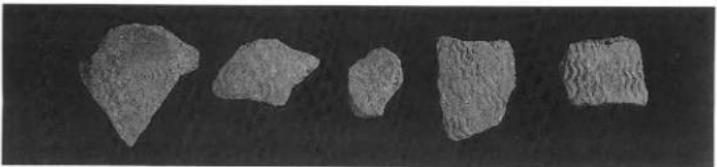


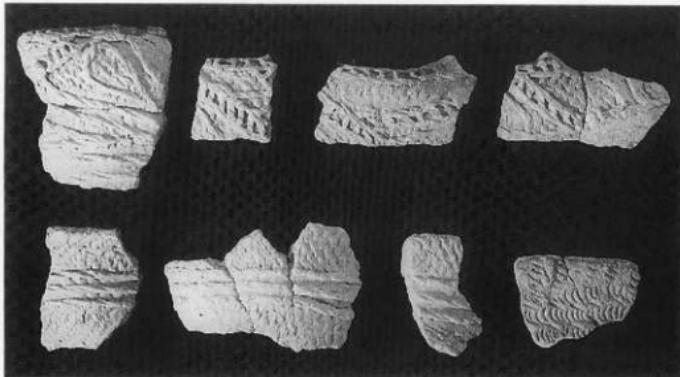


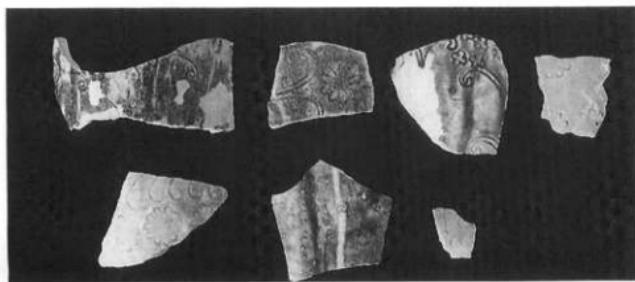
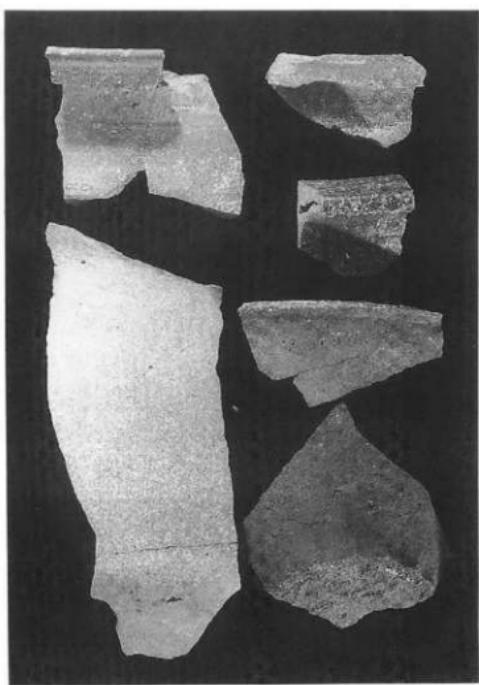
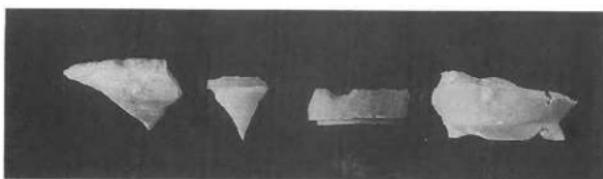
図版 24
土器（1集中）

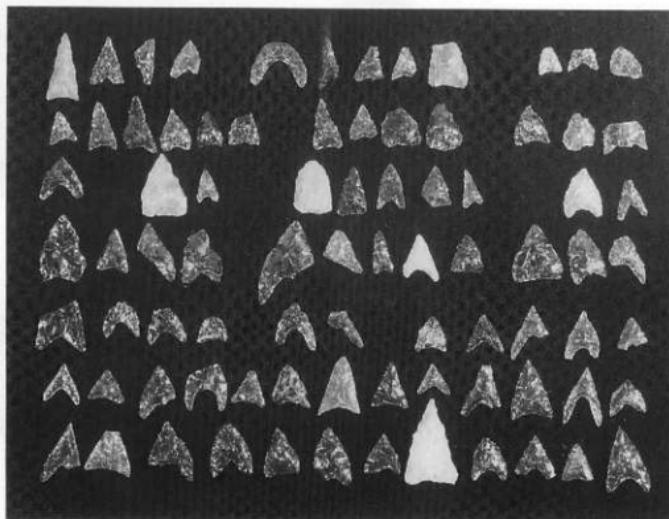
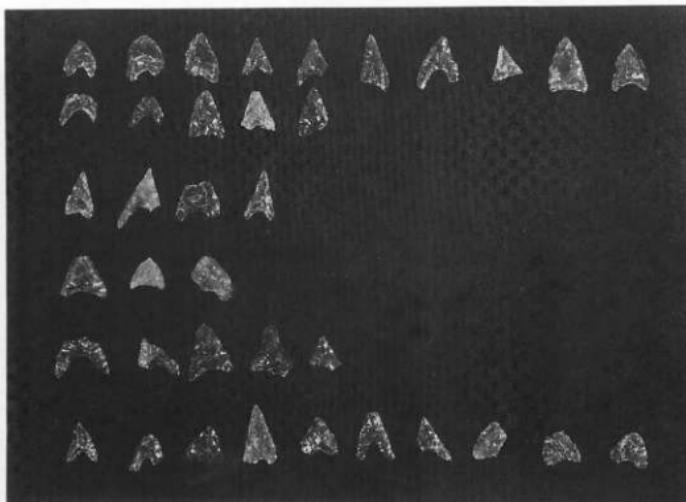


図版25 土器（グリッド・早期）

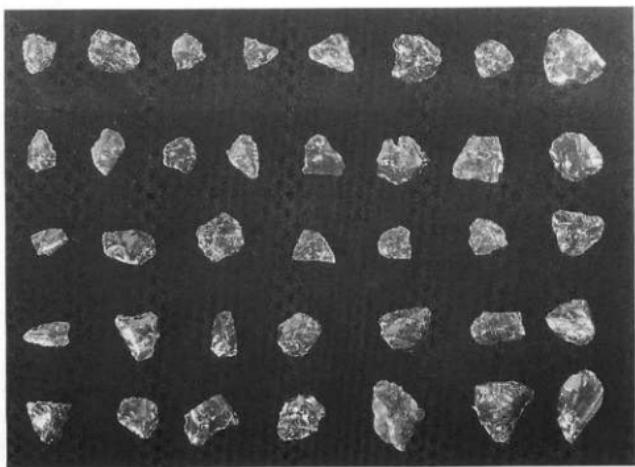
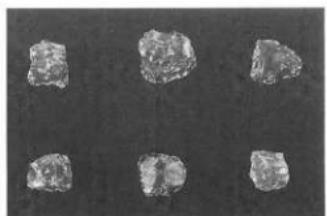
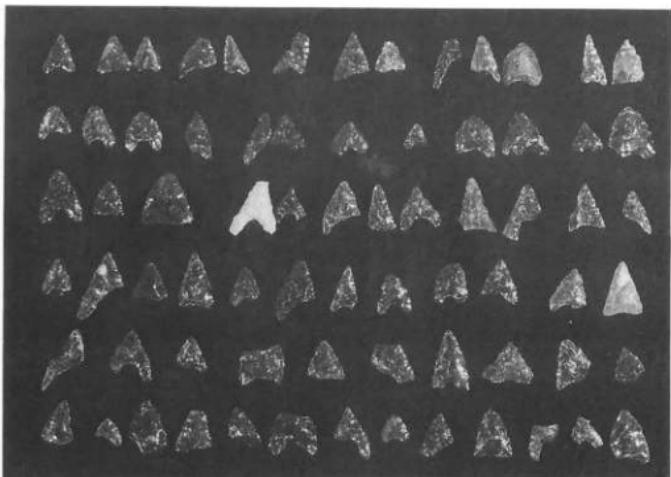


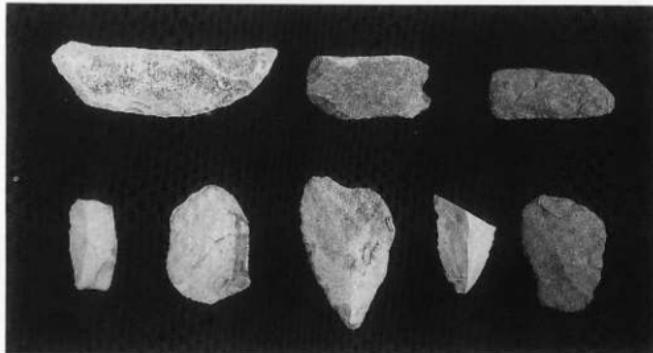
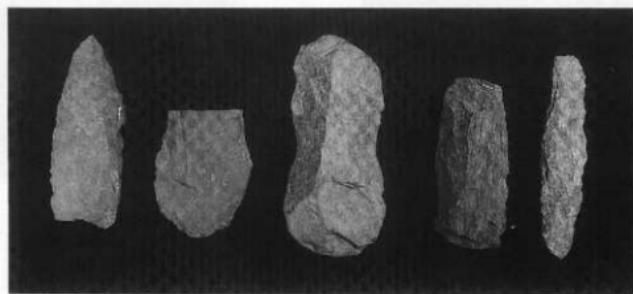
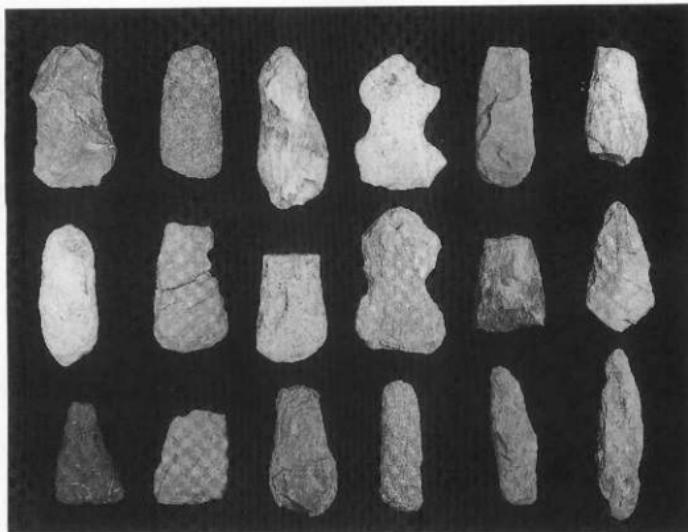




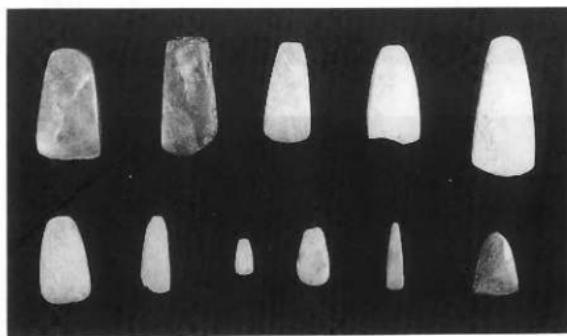
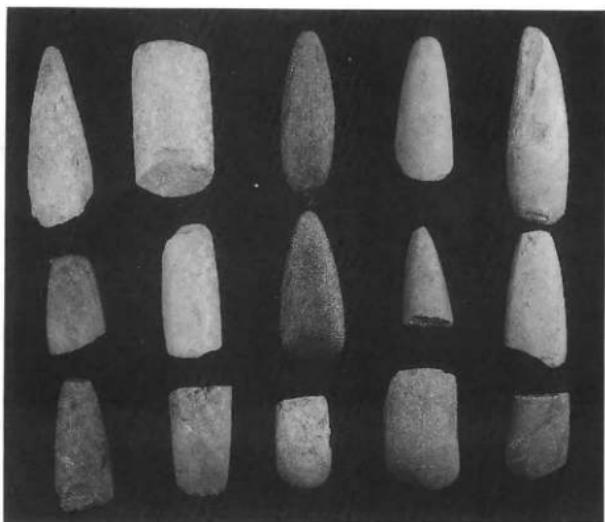


図版29 石器（石鏃・ドリル・スクレイバー他）

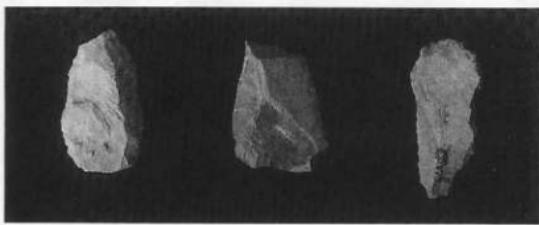
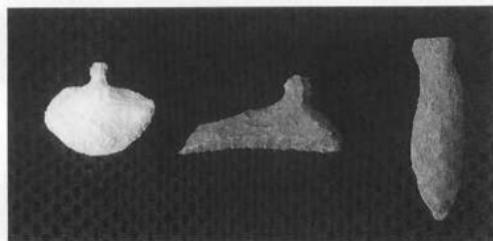
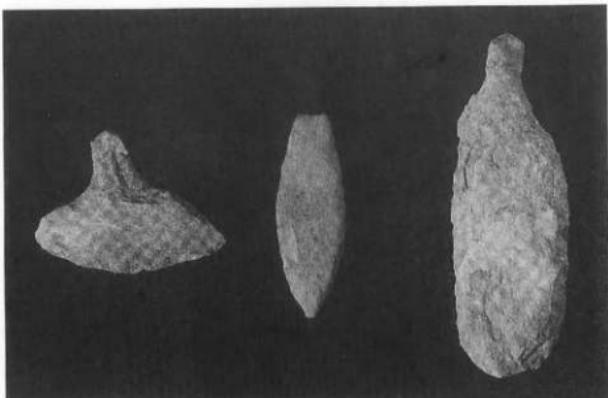


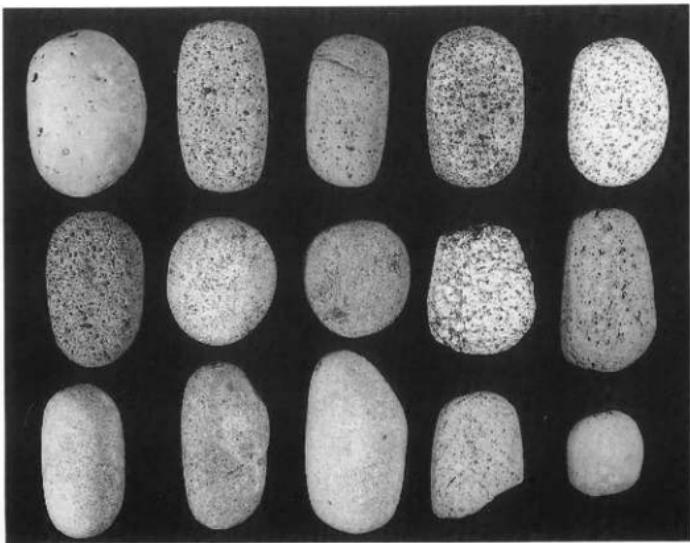
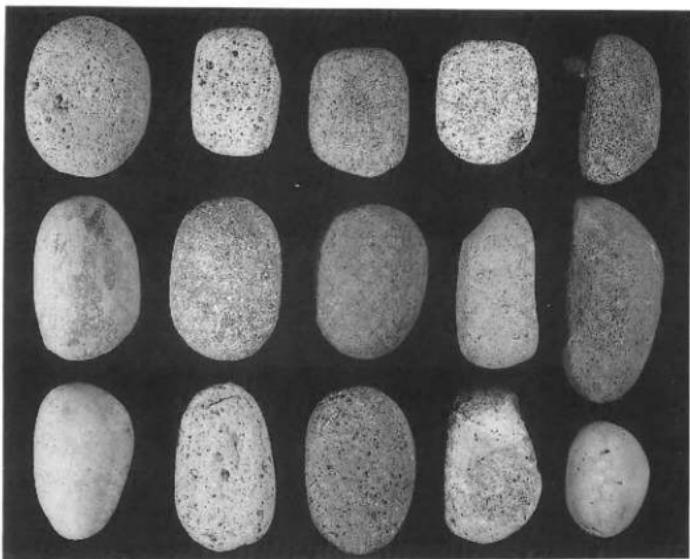


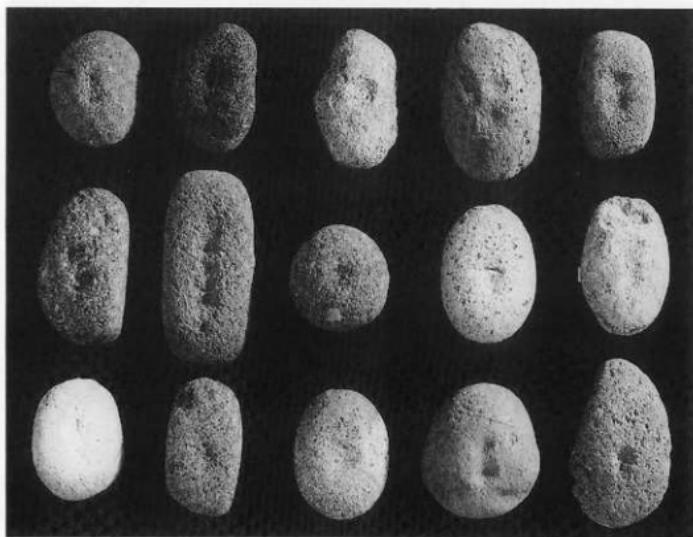
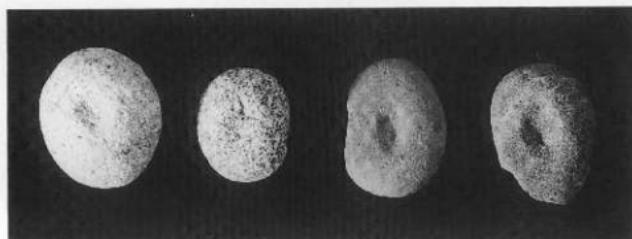
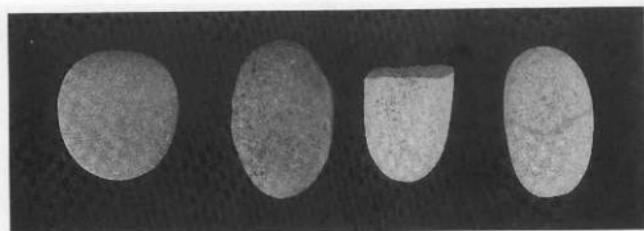
図版 31 石器（磨製石斧・たたき石）

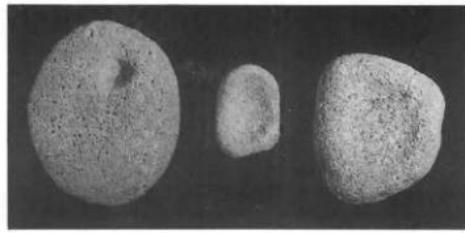
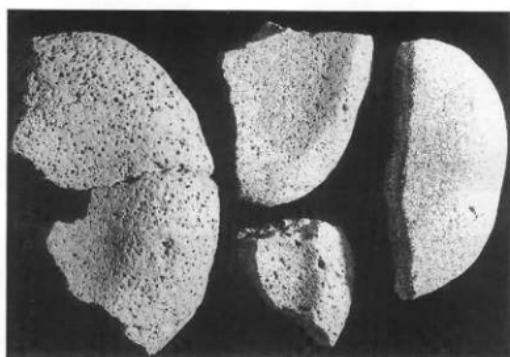
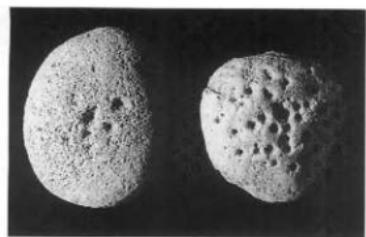


図版32 石器（石匙・加工痕ある剥片・石錐）

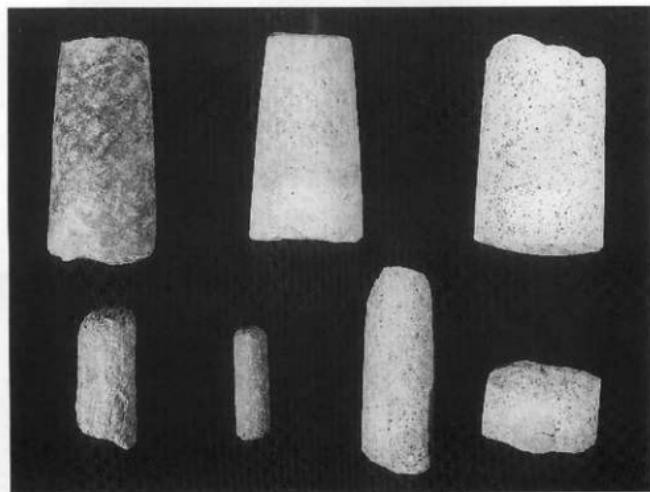
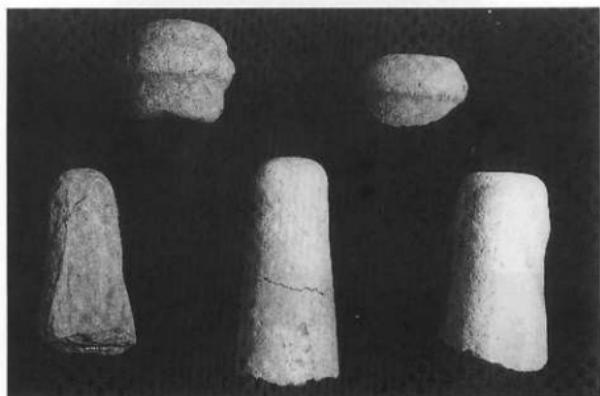
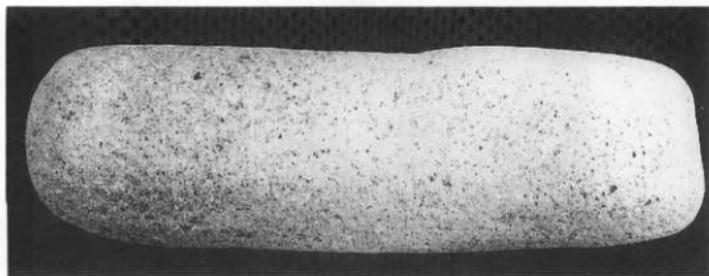


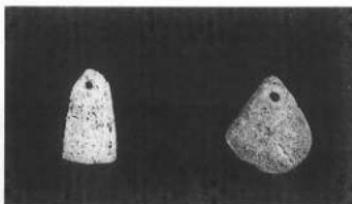


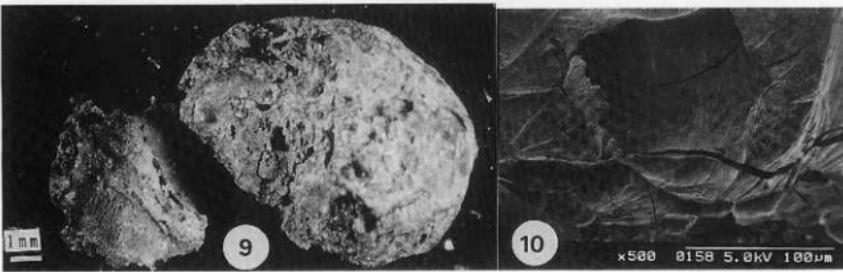
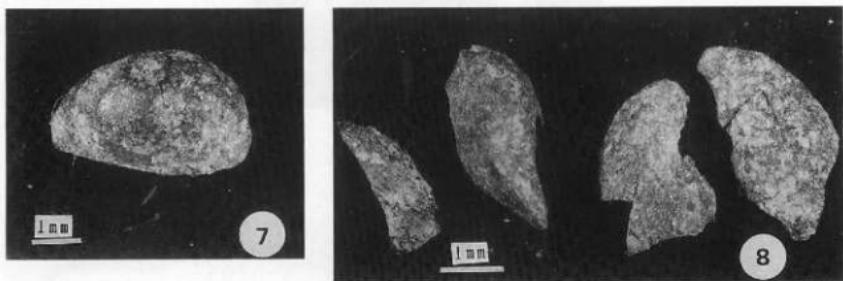
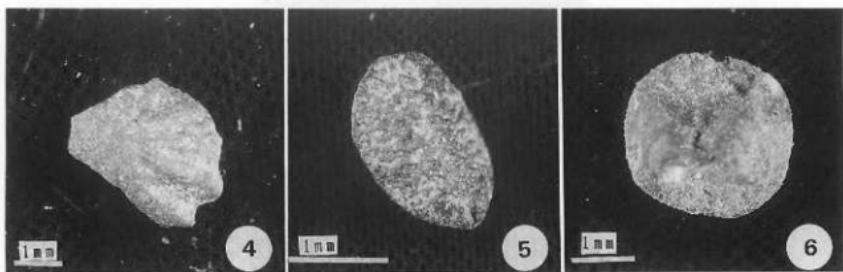
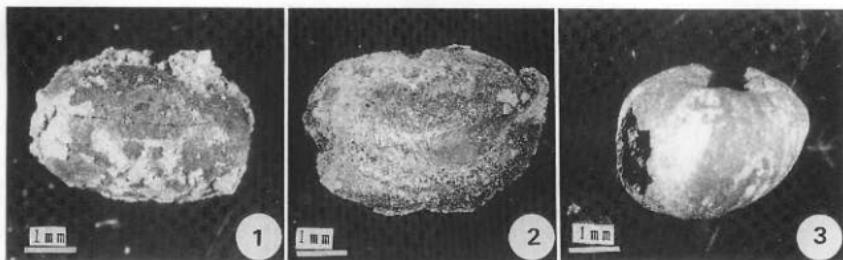


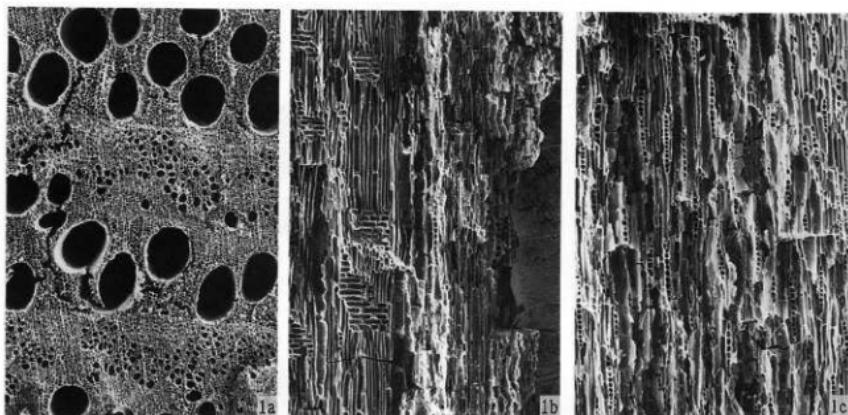


図版 36
石器（石棒）



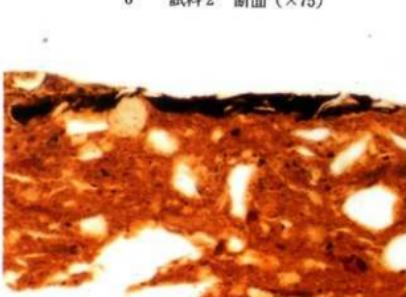
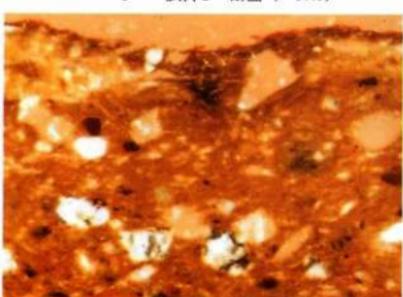
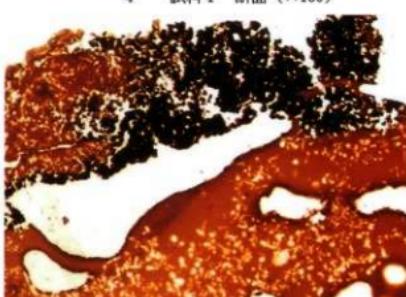
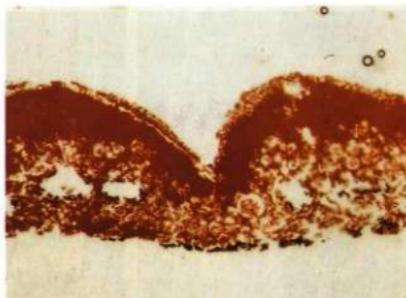






1.クリ (1号柱 柱10) a:木口, b:柾目, c:板目

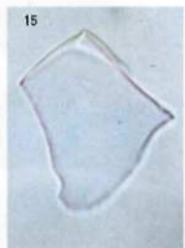
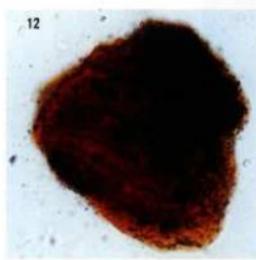
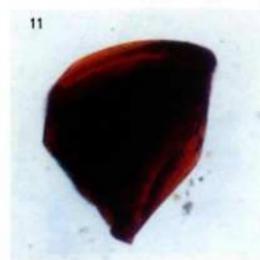
— 200 μm : a
— 200 μm : b, c



図版 41 メコリア モ①



図版 42
スコリア その 2



報告書概要

フリガナ	ナカヤイセキ
書名	中谷遺跡
副題	山梨リニア実験線建設に伴う事前調査
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
著者名	長沢宏昌・笠原みゆき
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3881
印刷所	(株) 峠南堂印刷所
発行日	1996年3月31日
遺跡所在地	山梨県都留市小形山瀬木
25,000分の1地図名・位置・標高	都留 東経138° 55' 40" 北緯35° 34' 50" 420m
主な時代	縄文時代早期～晚期
概要	中期・後期住居跡13軒 中期土坑・集石土坑 中期配石 後期環状配石 晩期配石 中・後期土器捨て場 晩期遺物集中区
主な遺物	中期～晩期の大量の土器と石器(晩期初頭清水天王山式土器多量) 炭化物・骨片
特殊遺構・遺物	三角柱形土製品 斜面に置かれたままの蓋付注口土器
調査期間	1993年4月20日～12月27日および1994年4月26日～8月24日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集

中谷遺跡

印刷日	平成8年3月25日
発行日	平成8年3月31日
編集	山梨県埋蔵文化財センター
発行	山梨県教育委員会
印刷所	株峠南堂印刷所

